

一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告 第 1 集

延永ヤヨミ園遺跡

－Ⅲ区Ⅰ－

福岡県行橋市大字吉国・延永所在遺跡の調査

2013

九州歴史資料館

延永ヤヨミ園遺跡－Ⅲ区Ⅰ－

国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第1集

二〇一三

九州歴史資料館

一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告 第 1 集

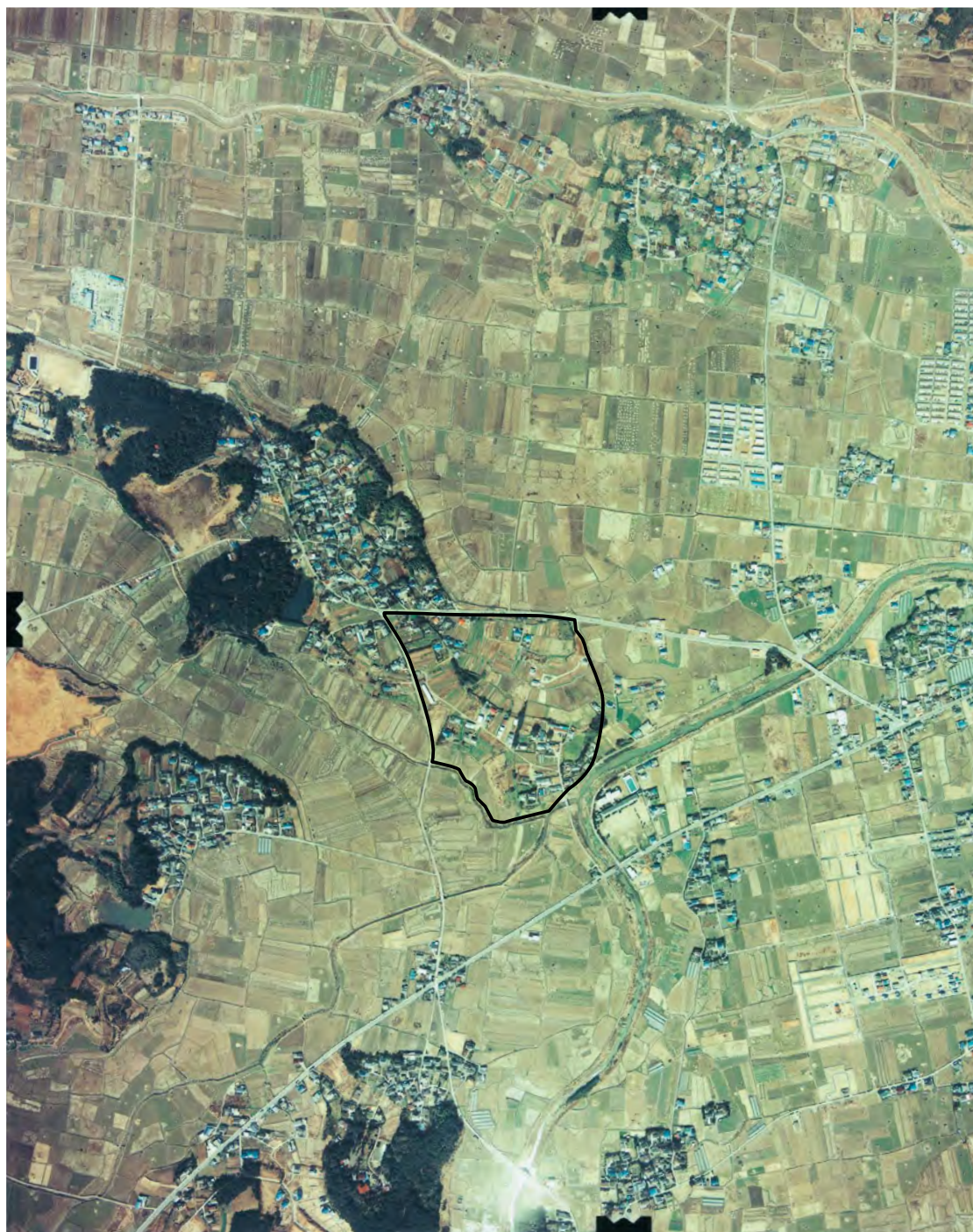
延永ヤヨミ園遺跡

－Ⅲ区Ⅰ－

福岡県行橋市大字吉国・延永所在遺跡の調査



延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - C区 1号井戸出土「京都大」墨書土器



延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真①
(約 1/8,000、昭和 49 年国土地理院撮影、黒枠で囲んだ範囲が延永ヤヨミ園遺跡)

序

福岡県では、平成 20 年度から国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、一般国道 201 号行橋インター関連建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成 20～24 年度にかけて行った福岡県行橋市吉国・延永に所在する延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査の記録で、一般国道国道 201 号行橋インター関連に伴う本遺跡の調査報告書の第 1 冊目となります。

本遺跡は、京都平野に突き出す低丘陵上～斜面及び谷部に立地し、近隣には県指定史跡ビワノクマ古墳などが位置しています。

今回の調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡と古代～中世の遺構・遺物を確認しました。中でも古代の井戸から出土した墨書土器や周辺の調査状況から、本遺跡は古代において官衙的な性格を有していたと考えられることなど、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 25 年 3 月 29 日

九州歴史資料館
館長 西谷 正

例 言

1. 本書は、一般国道 201 号行橋インター関連建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市吉国・延永に所在する延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区の記録で、一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告の第 1 集にあたる。
2. 発掘調査は国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び九州歴史資料館が実施し、整理報告は同所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は進村真之・城門義廣が、遺物写真の撮影は九州歴史資料館が行った。空中写真については、九州航空株式会社・東亜航空技研株式会社に委託し、撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は、進村・城門が行い、発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲の指導の下に実施した。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「行橋」、1/50,000 地形図「行橋・蓑島・中津・田川」を改変したものである。また、巻頭図版 2 及び図版 1～4 は、国土地理院所有の空中写真を掲載した。
8. 本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。
9. 本書は進村・大庭孝夫が分担執筆した。編集は大庭が行った。

目次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

文中写真目次

I はじめに

- 1 調査に至る経緯（進村・大庭）…………… 1
- 2 調査の経過
 - (1) 国道 201 号行橋インター関連埋蔵文化財調査の概要（大庭）…………… 2
 - (2) 延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区の調査の経過（進村）…………… 9
- 3 調査・整理の組織（大庭）…………… 10

II 位置と環境

- 1 地理的環境（大庭）…………… 12
- 2 歴史的環境（旧石器～古墳時代）（大庭）…………… 12

III 発掘調査の記録

- 1 遺跡の概要（大庭）…………… 22
- 2 Ⅲ-C 区の遺構と遺物（進村）…………… 24
 - (1) 竪穴住居跡…………… 24
 - (2) 掘立柱建物跡…………… 48
 - (3) 土坑…………… 50
 - (4) 地下式土坑…………… 81
 - (5) 井戸…………… 82
 - (6) 溝…………… 90
 - (7) 土坑墓…………… 104
 - (8) ピット出土土器…………… 105
 - (9) 包含層出土土器…………… 110
 - (10) その他の遺物…………… 118
 - (11) 小結…………… 124

- IV おわりに（大庭）…………… 124

図版目次

巻頭図版 1	延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - C区1号井戸出土「京都大」墨書土器	
巻頭図版 2	延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真①（約 1/8,000、昭和 49 年国土地理院撮影）	
図版 1	京都平野付近空中写真（約 1/40,000、昭和 44 年国土地理院撮影）	
図版 2	延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真②（約 1/10,000、昭和 22 年米軍撮影）	
図版 3	延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真③（約 1/5,000、昭和 22 年米軍撮影）	
図版 4	延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真④（約 1/10,000、昭和 36 年国土地理院撮影）	
図版 5	1 延永ヤヨミ園遺跡遠景（東から）	2 延永ヤヨミ園遺跡遠景（西から）
図版 6	1 延永ヤヨミ園遺跡遠景（北東から）	2 延永ヤヨミ園遺跡遠景（南西から）
図版 7	1 延永ヤヨミ園遺跡遠景（北から）	2 Ⅲ - C区北側下段（空中写真）
図版 8	1 Ⅲ - C区北側下段（空中写真）	2 Ⅲ - C区南側（空中写真）
図版 9	1 1号竪穴住居跡（南から）	2 1号竪穴住居跡土層（東から）
	3 2号竪穴住居跡（南から）	
図版 10	1 3・4号竪穴住居跡（南から）	2 5号竪穴住居跡（南から）
	3 6号竪穴住居跡（南から）	
図版 11	1 7号竪穴住居跡（南から）	2 14号竪穴住居跡（北から）
	3 14号竪穴住居跡土層（南から）	
図版 12	1 14号竪穴住居跡土層（東から）	2 15号竪穴住居跡（北から）
	3 16号竪穴住居跡（東から）	
図版 13	1 16号竪穴住居跡カマド（東から）	2 17号竪穴住居跡（南から）
	3 1号掘立柱建物跡（北から）	
図版 14	1 2号掘立柱建物跡（南から）	2 1号土坑（南から）
	3 2号土坑（南から）	
図版 15	1 3号土坑（東から）	2 4号土坑（南から）
	3 5号土坑（西から）	
図版 16	1 6号土坑（南から）	2 7号土坑（南から）
	3 8号土坑（東から）	
図版 17	1 10号土坑（南から）	2 11号土坑（北から）
	3 12号土坑（南から）	
図版 18	1 12号土坑土層（東から）	2 13号土坑（北から）
	3 14号土坑（北から）	
図版 19	1 15号土坑（東から）	2 16号土坑（西から）
	3 17号土坑（西から）	
図版 20	1 17号土坑土層（東から）	2 18号土坑（西から）
	3 19号土坑（南から）	
図版 21	1 20号土坑（西から）	2 22号土坑（南から）
	3 24号土坑（南から）	

図版 22	1 25号土坑（西から） 3 32号土坑（西から）	2 26号土坑（北から）
図版 23	1 32号土坑土層（西から） 3 41号土坑（北西から）	2 40号土坑（南から）
図版 24	1 1号地下式土坑（東から） 3 2号井戸（北から）	2 1号井戸（南から）
図版 25	1 3号井戸（西から） 3 5号井戸（北から）	2 4号井戸（北から）
図版 26	1 6号井戸（北から） 3 6号溝土層（南から）	2 7号井戸（東から）
図版 27	1 7号溝土層（南から） 3 11号溝土層（西から）	2 10号溝土層（西から）
図版 28	1 14号溝連続土坑検出時（南から） 3 14号溝（北から）	2 14号溝（北から）
図版 29	1 14号溝連続土坑土層（南から） 3 21・22号溝土層（北から）	2 20号溝土層（北から）
図版 30	1 23・24号溝土層（北から） 3 29号溝土層（西から）	2 29号溝（北西から）
図版 31	1 1号土坑墓（東から） 3 Ⅲ-C区北側下段部分東壁土層（西から）	2 2号土坑墓（西から）
図版 32	出土遺物①（竪穴住居跡出土）	
図版 33	出土遺物②（竪穴住居跡出土）	
図版 34	出土遺物③（土坑出土）	
図版 35	出土遺物④（土坑出土）	
図版 36	出土遺物⑤（土坑出土）	
図版 37	出土遺物⑥（土坑出土）	
図版 38	出土遺物⑦（土坑出土）	
図版 39	出土遺物⑧（井戸・溝出土）	
図版 40	出土遺物⑨（溝・土坑墓出土）	
図版 41	出土遺物⑩（ピット・包含層出土）	
図版 42	出土遺物⑪（包含層出土）	
図版 43	出土遺物⑫（包含層出土・陶磁器）	
図版 44	出土遺物⑬（石製品・土製品）	
図版 45	出土遺物⑭（韃羽口・1号土坑墓出土刀子）	
図版 46	出土遺物⑮（2号土坑墓出土刀子、1・2号土坑墓出土刀子 X線写真）	

挿図目次

第1図	延永ヤヨミ園遺跡の位置①	1
第2図	延永ヤヨミ園遺跡の位置②	1
第3図	国道201号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図(1/25,000)	3
第4図	調査区割図(1/2,000)	5
第5図	調査区周辺地形図(1/5,000)	7
第6図	遺跡周辺地形図の変遷(1/50,000)	13
第7図	京都平野における地形分類図(1/50,000)	15
第8図	周辺遺跡分布図(旧石器～古墳時代、1/50,000)	17
第9図	遺跡周辺字図(1/5,000)	19
第10図	延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C区遺構全体図①(1/200)	23
第11図	延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C区遺構全体図②(1/200)	25・26
第12図	延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C区遺構全体図③(1/200)	27・28
第13図	1・2号竪穴住居跡実測図(1/60)	30
第14図	1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	31
第15図	2～4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	32
第16図	3～5号竪穴住居跡実測図(1/60)	33
第17図	5号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	34
第18図	6～8号竪穴住居跡実測図(1/60)	35
第19図	6号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	37
第20図	6号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)	38
第21図	6号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)	39
第22図	9～12号竪穴住居跡実測図(1/60)	41
第23図	8～12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	43
第24図	13・14号竪穴住居跡実測図(1/60)	44
第25図	13・16号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	45
第26図	15・16号竪穴住居跡実測図(カマドは1/30、他は1/60)	46
第27図	17号竪穴住居跡実測図(1/60)	47
第28図	17号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	48
第29図	1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)	49
第30図	1～7号土坑実測図(1～4は1/30、他は1/60)	51
第31図	3号土坑出土土器実測図(1/3)	52
第32図	4号土坑出土土器実測図(1/3)	53
第33図	5～7・10・11号土坑出土土器実測図(1/3)	55
第34図	8・10～13号土坑実測図(1/60)	57

第 35 図	12 号土坑出土土器実測図① (1/3)	58
第 36 図	12 号土坑出土土器実測図② (1/3)	59
第 37 図	14～17 号土坑実測図 (15 は 1/30、他は 1/60)	61
第 38 図	15・16 号土坑出土土器実測図 (1 は 1/6、他は 1/3)	63
第 39 図	18～22 号土坑実測図 (1/60)	65
第 40 図	17～19 号土坑出土土器実測図 (1/3)	66
第 41 図	20・21 号土坑出土土器実測図 (1/3)	67
第 42 図	23～25 号土坑実測図 (24 は 1/120、他は 1/60)	68
第 43 図	23 号土坑出土土器実測図 (1/3)	69
第 44 図	24 号土坑出土土器実測図① (1/3)	70
第 45 図	24 号土坑出土土器実測図② (1/3)	71
第 46 図	24 号土坑出土土器実測図③ (1/3)	72
第 47 図	25 号土坑出土土器実測図① (1/3)	73
第 48 図	25 号土坑出土土器実測図② (1/3)	74
第 49 図	26～32 号土坑実測図 (1/60)	75
第 50 図	26・29・30・32・34・36・39 号土坑出土土器実測図 (1/3)	77
第 51 図	33～38 号土坑実測図 (1/60)	78
第 52 図	39～41 号土坑実測図 (1/60)	79
第 53 図	1 号地下式土坑実測図 (1/60)	80
第 54 図	1 号地下式土坑出土土器実測図 (1/3)	81
第 55 図	1～3 号井戸実測図 (1/60)	83
第 56 図	1・2 号井戸出土土器実測図 (1/3)	85
第 57 図	4・5 号井戸実測図 (1/60)	86
第 58 図	3・4 号井戸出土土器実測図 (1/3)	87
第 59 図	6・7 号井戸実測図 (1/60)	88
第 60 図	5～7 号井戸出土土器実測図 (1/3)	89
第 61 図	7・11・20～25・29 号溝、32 号土坑土層図 (土 23 は 1/30、他は 1/60)	91
第 62 図	3・5・6～8 号溝出土土器実測図 (1/3)	93
第 63 図	10 号溝出土土器実測図 (1/3)	94
第 64 図	11・11 および 14 号溝出土土器実測図 (1/3)	95
第 65 図	14 号溝・土層実測図 (土層は 1/60、他は 1/120)	97
第 66 図	13・14・16・17・20・21 号溝出土土器実測図 (1/3)	99
第 67 図	23 および 24・25 号溝出土土器実測図 (1/3)	101
第 68 図	27 号溝出土土器実測図 (1/3)	102
第 69 図	29 号溝出土土器実測図 (1/3)	103
第 70 図	1・2 号土坑墓実測図 (1/20)	104

第71図	1・2号土坑墓出土土器実測図(1/3)	105
第72図	ピット出土土器実測図①(1/3)	107
第73図	ピット出土土器実測図②(1/3)	108
第74図	ピット出土土器実測図③(1/3)	109
第75図	包含層出土土器実測図①(1/3)	111
第76図	包含層出土土器実測図②(1/3)	112
第77図	包含層出土土器実測図③(1/3)	113
第78図	包含層出土土器実測図④(1/3)	114
第79図	包含層出土土器実測図⑤(1/3)	115
第80図	包含層出土土器実測図⑥(1/3)	117
第81図	包含層出土土器実測図⑦(127は1/6、他は1/3)	119
第82図	出土石製品実測図①(1/3)	120
第83図	出土石製品実測図②(30・31は1/6、他は1/3)	121
第84図	出土瓦実測図(1/3)	122
第85図	出土土製品実測図(1/3)	123
第86図	出土鉄製品実測図(1/3)	124

表目次

第1表	一般国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧	3
第2表	延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間	6
第3表	延永ヤヨミ園遺跡周辺遺跡一覧	7
第4表	延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C区出土特殊遺物一覧表	125

文中写真目次

1	Ⅳ-A区竪穴住居跡密集状況	4
2	Ⅳ-C区木製品出土状況(ねずみ返し)	4
3	Ⅲ-C区木製導水施設出土状況	6
4	Ⅲ-C区準構造船部材出土状況	6
5	Ⅳ-B区古代道路	8
6	Ⅲ-A区古墳周溝か	8
7	Ⅲ-B区方形区画溝	9
8	Ⅲ-C区発掘現場状況	21
9	ビワノクマ古墳の現状	22
10	水没した発掘現場(Ⅲ-C区)	図版扉

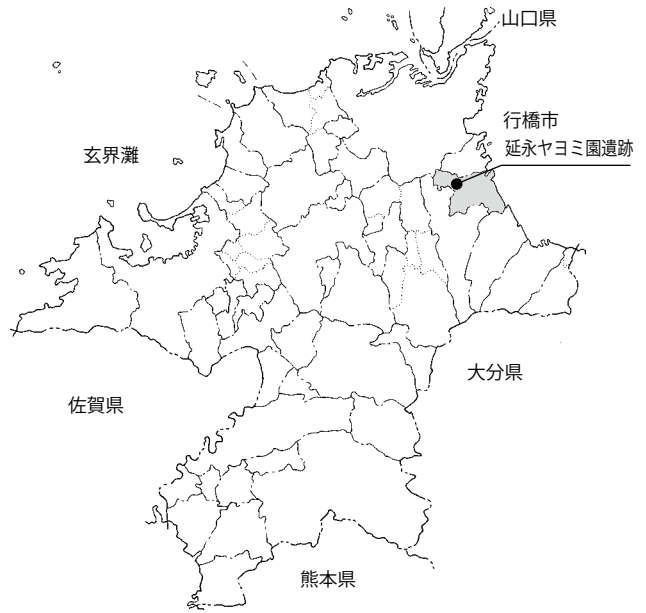
I はじめに

1 調査に至る経緯

一般国道201号は、福岡県福岡市と福岡県京都郡荇田町とを結ぶ福岡県中央部の横断幹線道路である。当路線は、福岡市を起点として飯塚市、田川市等を経由し荇田町に至る延長約64kmの道路で、4市8町にまたがる。古くは篠栗街道として栄え、明治以来の日本の近代化・工業化を支えた一大炭鉱地帯の幹線道路としての役割を果たしてきた。しかし、昭和30年代には、石炭産業から石油産業への転換に伴い、産業基盤の衰退が著しく、当路線は再活性化を担う沿線市町にとって重要な路線となるとともに、現在は九州縦貫自動車道福岡インターや国道200・211・322号、建設中の東九州自動車道行橋インターと連結し、近年では緊急輸送ネットワークに位置づけられる主要な幹線道路となっている。

一般国道201号行橋インター関連は、国道201号の終点部に位置し、国道10号と連絡している。行橋市及び荇田町市街地部の交通混雑の緩和並びに建設中の東九州自動車道や新北九州空港と筑豊地域とを連結する重要な路線として、平成12年度に事業着手された延長4.5kmの区間である。

道路建設に係る発掘調査の経緯は、まず平成14年9月に同路線の計画についての説明が初めて国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所から福岡県教育庁総務部文化財保護課にあった。平成15年4月には同所と文化財保護課との調整会議の場において、路線決定後に遺跡分布調査の必要性を両者で確認しているが、日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）の民営化の問題もあり、



第1図 延永ヤヨミ園遺跡の位置①



第2図 延永ヤヨミ園遺跡の位置②（福岡県立アジア文化交流センター提供）

具体的に事業が動きはじめたのは平成 19 年度からである。

平成 19 年 5 月に行橋市吉国の終点側の試掘調査を行ったのを契機として、北九州国道事務所より平成 20 年 3 月 24 日付国九整北調第 57 号で本路線予定地の埋蔵文化財の確認について依頼があった。その依頼に対し、福岡県教育庁文化財保護課は平成 20 年 7 月 20 日付 20 教文第 2474 号で、本路線を任意に 7 地点に分割し、その取り扱いについて回答している（第 3 図、第 1 表）。

この依頼を受け、平成 20 年 5 月より本格的な発掘調査に入ることとなった。その最初に行われた発掘調査が、今回報告対象の延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－C 区である。

本遺跡が所在する丘陵については、当初より埋蔵文化財の包蔵地として周知化されていたこと、福岡県教育庁文化財保護課を担当としてすでに近接する東九州高速自動車道予定地の発掘調査が実施され、その非常に高い密度の遺構分布から、同一丘陵全体に遺構が所在すると判断されたため、確認調査は行わず直接本調査を行うこととなった。

その後平成 21～24 年度まで継続して実施されており（第 2 表）、現在もⅢ－B 区の一部の未買収地の調査が未了のため、買収後の来年度上半期で本遺跡の発掘調査は全て終了する予定である。

2 調査の経過

(1) 国道 201 号行橋インター関連埋蔵文化財調査の概要

a. 調査区割りの設定

本遺跡の発掘調査は路線内の用地買収が終了し、発掘調査が実施可能な地区から調査を進めた。本遺跡は東九州自動車道行橋インター予定地北側の隣接地に位置することから、西日本高速道路株式会社が施工する東九州自動車道とそのアクセス道路で福岡県行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）が施工する県道直方行橋線バイパスと本路線の 3 路線が複雑に入り組む形となる（第 4 図）。

そのため、大きく事業ごとにⅠ～Ⅴ区という区分けを行い（第 2 表）、国道分は台地と谷の落ち際にⅢ・Ⅳ区という区分けを行っている。またその区の中で、調査を実施した順番と現道などを考慮し、Ⅲ区は北から A・B・C 区に、Ⅳ区も北から A・B・C 区に小区分けを行っている（第 4 図）。

以下では今年度までの調査概要を記述する。

b. 平成 20 年度

●延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－C 区→正報告は本書所収

調査期間：平成 20 年 5 月 8 日～平成 21 年 3 月 27 日

調査面積：約 4,600㎡

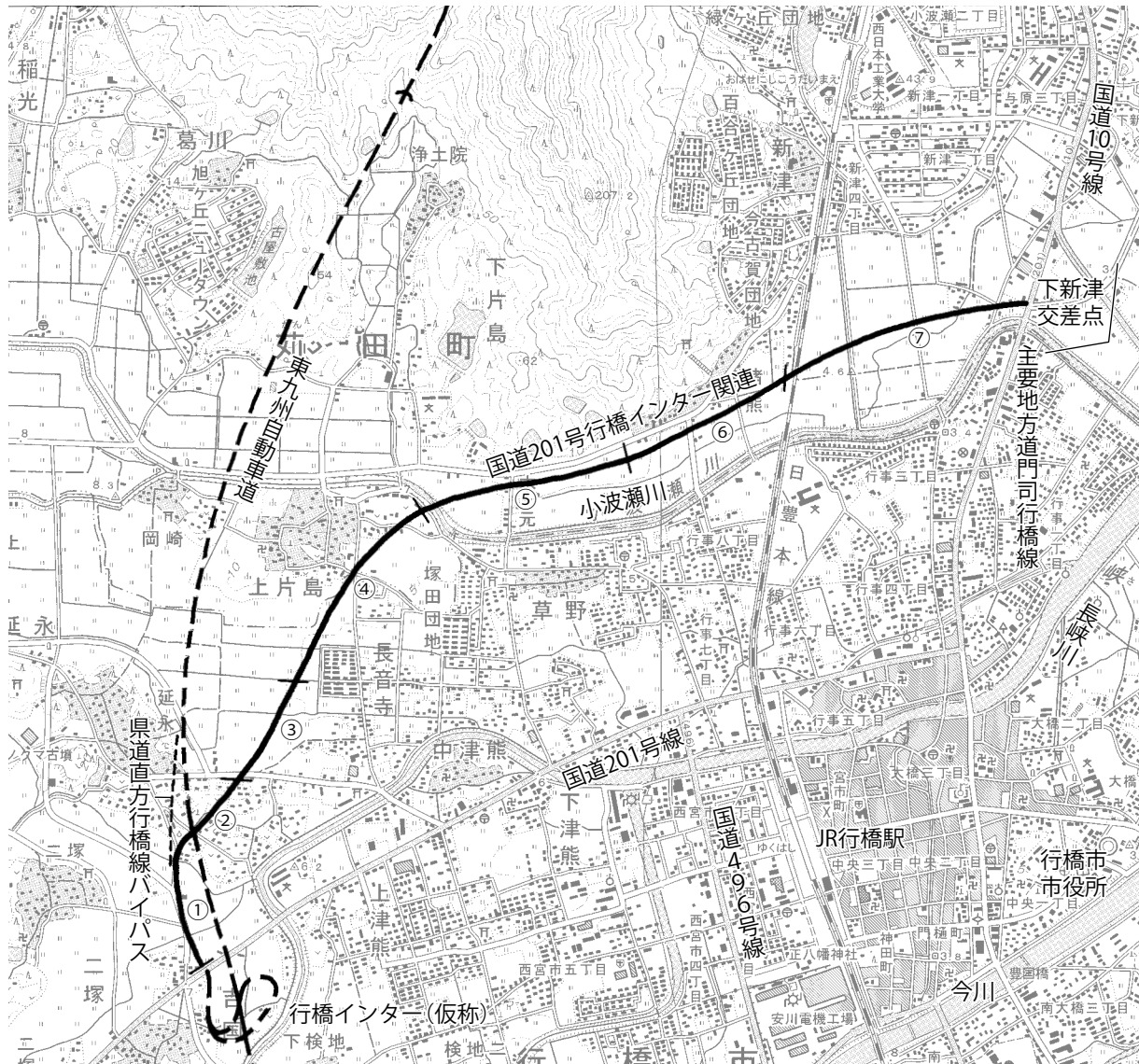
調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 進村真之 城門義廣

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、中世、近世

主な検出遺構：竪穴住居跡 17 棟、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 41 基、地下式土坑 1 基、井戸 7 基、溝 27 条、土坑墓 1 基、ピット多数

出土資料：土器・木器（奈良時代に属するものが主体）などを中心にパンケース 86 箱

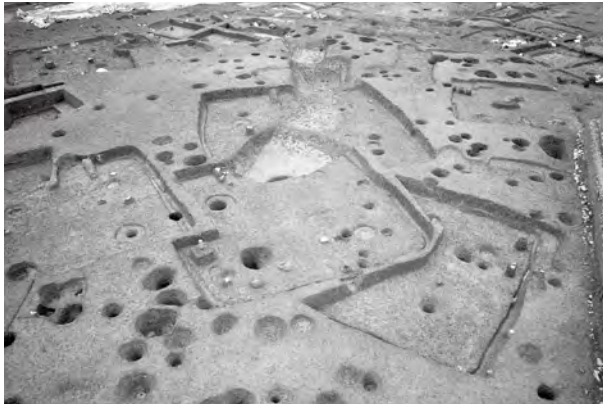
特筆事項：奈良時代の 1 号井戸から「京都大」墨書土器、3 号井戸から木簡、斎串、木製鞍・木製壺鐙の未製品が出土した。



第3図 国道201号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図 (1/25,000)

地点名	遺跡名	所在地	地点範囲	回答 (H20.7.10)	試掘年度	発掘調査 面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	その後の 対応
1		行橋市大字吉国	行橋インター交差点 (現国道201号線、終点) ~ 山崎川	遺跡なし	H19・20					遺跡なし
2	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市大字吉国・延永	山崎川~県道直方行橋線	発掘調査		約19,000㎡	H20~25 (予定)	H24~26	本冊	発掘調査
3		行橋市大字吉国	県道直方行橋線~長音寺団地横	要試掘調査	H21					遺跡なし
4	上片島遺跡群	行橋市大字延永 京都郡菟田町上片島	長音寺団地横~小波瀬川	要確認調査	H24	約900㎡	H24	H25		発掘調査
5		京都郡菟田町上片島	小波瀬川~都市計画道路猪熊行橋線	要試掘調査	H21					遺跡なし
6		京都郡菟田町下片島	都市計画道路猪熊行橋線~JR日豊本線	要試掘調査	H22					遺跡なし
7		京都郡菟田町新津	JR日豊本線~国道201号接続部 (下新津ランプ、始点)	要試掘調査	H23					遺跡なし

第1表 一般国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧



1 IV - A 区 竪穴住居跡密集状況

出土資料：土器・陶磁器などを中心にパンケース6箱

特筆事項：13世紀代の2号土坑墓から大型の刀子1点と青磁碗2点が出土した。

c. 平成 21 年度

●延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - C 区→正報告は本書所収

調査期間：平成 22 年 1 月 5 日～平成 22 年 2 月 23 日

調査面積：約 200㎡

調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 進村真之 下原幸裕 城門義廣

主な時代：中世（13世紀代が中心）

主な検出遺構：溝2条、土坑墓1基

○延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ - A 区→正報告は平成 25 年度予定

調査期間：平成 21 年 6 月 10 日～平成 22 年 3 月 29 日

調査面積：約 1800㎡

調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 進村真之 下原幸裕

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、中世

主な検出遺構：竪穴住居跡 80 棟以上、古代道路、溝

出土資料：土器などパンケース 70 箱

特筆事項：古代道路を検出した。

○延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ - C 区（谷部分）→正報告は平成 26 年度予定

調査期間：平成 21 年 8 月 24 日～平成 21 年 12 月 25 日

調査面積：約 2,000㎡

調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 進村真之 下原幸裕

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代

主な検出遺構：土坑 16 基、井戸 2 基、溝 1 条、ピット多数

出土資料：土器・木器（奈良時代に属するものが主体）などを中心にパンケース 80 箱

特筆事項：井桁状に7段組み、廃絶時の祭祀行為が予想される平安時代の1号井戸、弥生時代後期～古墳時代を中心とする木製品の未製品が多く出土した。

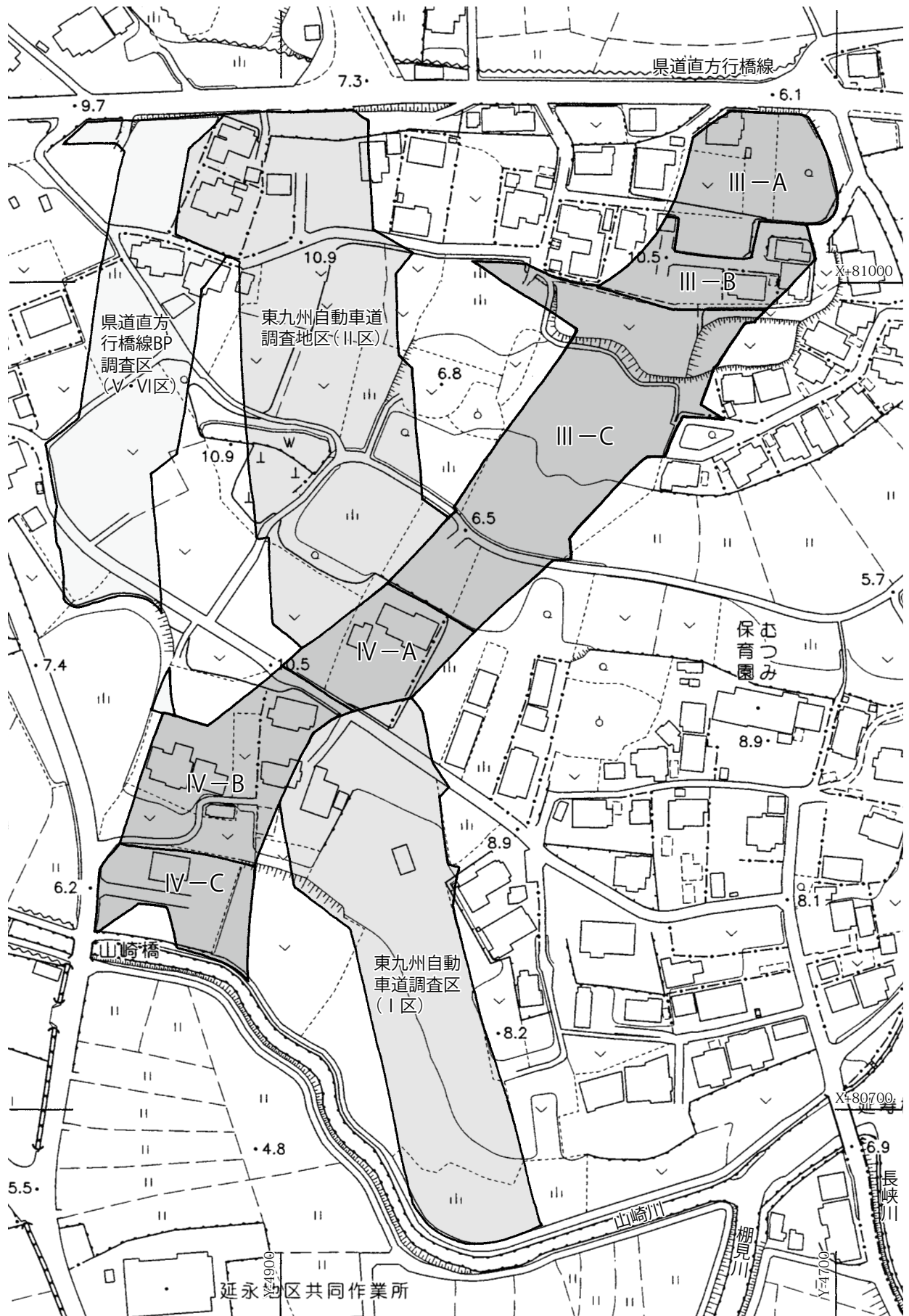


2 IV - C 区 木製品出土状況（ねずみ返し）

d. 平成 22 年度

○延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ - A 区→正報告は平成 25 年度予定

調査期間：平成 22 年 5 月 12 日～平成 23 年 1 月



第4図 調査区割図 (1/2,000)



3 III - C 区木製導水施設出土状況



4 III - C 区準構造船部材出土状況

6日

調査面積：約 1,700㎡

調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 下原幸裕

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、中世

主な検出遺構：竪穴住居跡 80 棟以上、掘立柱建物跡、古代道路、溝

出土資料：土器などパンケース約 50 箱

特筆事項：昨年度に引き続き、古代道路を調査。集落内部の道路としては、幅約 3m と幅広く、その床面には小礫・土器・瓦などを突き固めた基礎地業を行った痕跡を確認できた。

○延永ヤヨミ園遺跡 III - C 区（谷部分）→正報告は平成 26 年度予定

調査期間：平成 22 年 12 月 17 日～平成 23 年 3 月 24 日

調査面積：約 1,500㎡

調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 城門義廣

調査第二係 城門義廣

主な時代：弥生時代後期、飛鳥・奈良時代

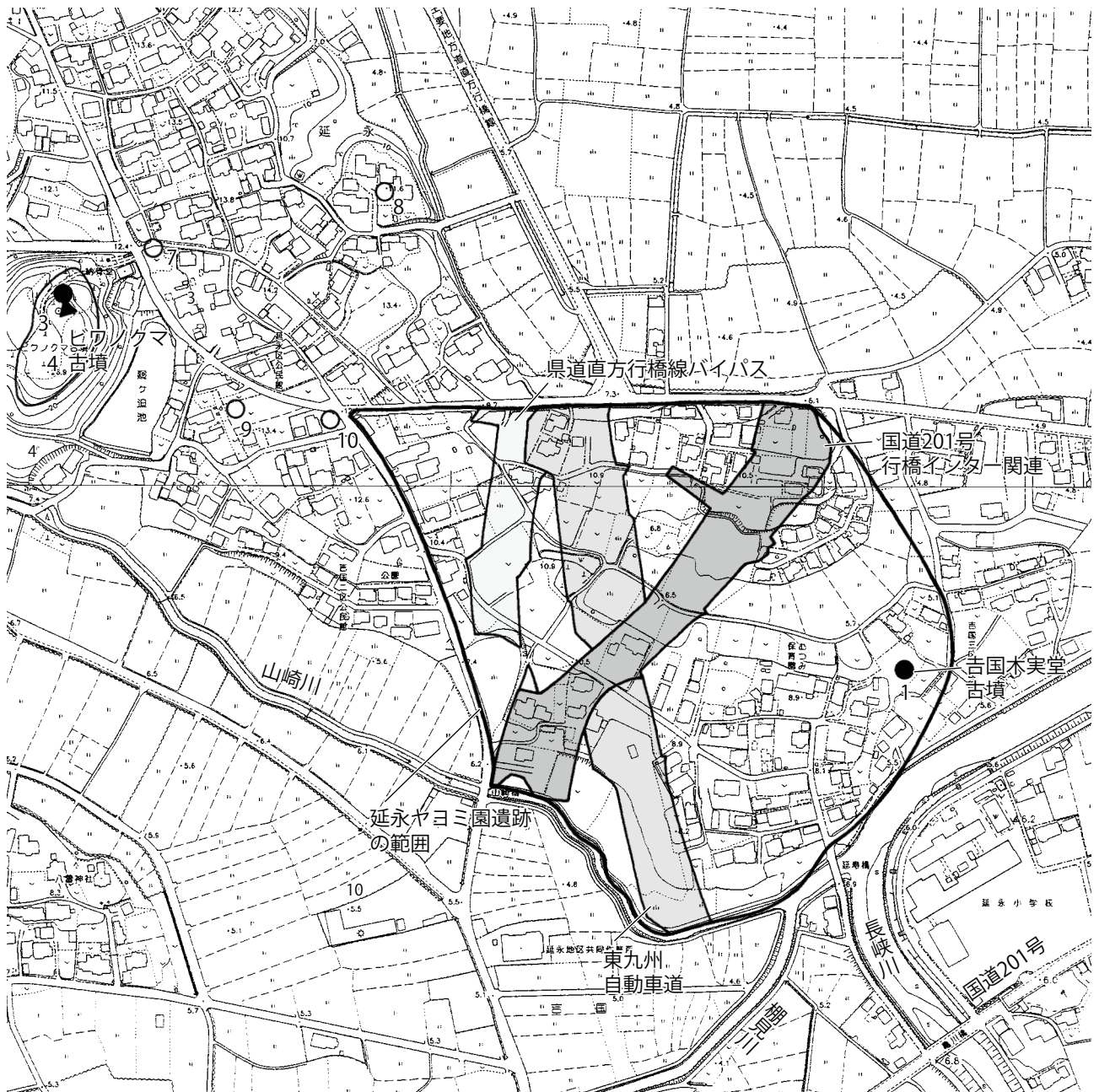
主な検出遺構：土坑 10 基、溝 1 条

出土資料：土器・木器などを中心にパンケース 150 箱

特筆事項：九州初出土の木製導水施設、準構造船の波除け板、木製臼、杵などが出土した。

事業主体	事業名	調査主担当	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25
国土交通省北九州国道事務所	国道 201 号行橋インター関連	進村		III - C	III - C、IV - C				
		下原			IV - A	IV - A・B	IV - B		
		城門				III - C		III - B	III - B (予定)
		大庭					IV - B、III - A・B	III - B	
西日本高速道路株式会社福岡工事事務所	東九州自動車道	飛野	I 区	I - 1、I - 3、I - 4、I - 5	I - 4、I - 2、I - 3、I - 7				
		城門		II - 1	II - 2	II - 2、II - 1、II - 3	II - 4		
福岡県京築県土整備事務所 (H22 まで行橋土木事務所)	県道直方行橋線バイパス	岡田			V - A・B				
		宮地				V - 2～4			
		飛野					V - 5・6	V - 5・6	

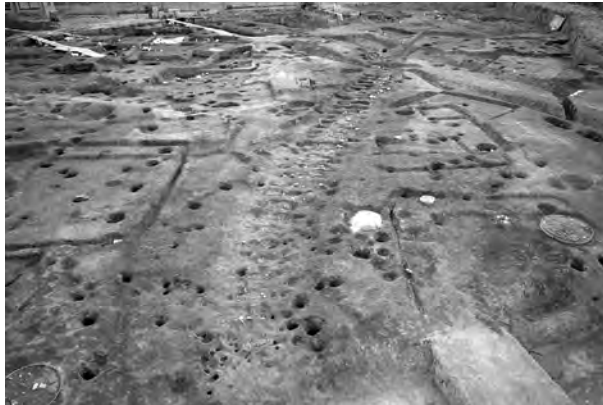
第2表 延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間



第5図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

番号	市登録番号	遺跡名	種類	時代	概要
1	14114001	吉国木実堂古墳	古墳	古墳	長峽川左岸に近接する丘陵上に所在
2	14115001	延永水取遺跡	交通	奈良	大溝(幅4.2m)検出。瓦、製塩土器等出土。草野津関連施設を結ぶ運河跡か。
3	14115002	延永中熊遺跡	散布地	弥生	丘陵上に所在。
4	14115003	ビワノクマ古墳	前方後円墳	古墳	全長50m以上の前方後円墳。主体部は竪穴式石室。県指定史跡。
5	14115004	ビワノクマ墳墓群	墳墓	古墳	丘陵上に所在。
6	14115005	ビワノクマ遺跡	横穴墓	古墳	丘陵斜面に所在。
7	14115006	延永宮本遺跡	集落	弥生	台地上に所在。
8	14115007	延永勝丸遺跡	墳墓	中世	丘陵上に所在。地下式坑
9	14115008	延永石畑遺跡	散布地	弥生	低丘陵上に所在。
10	14115009	長尾病院南西遺跡	散布地	弥生	低丘陵上に所在。

第3表 延永ヤヨミ園遺跡周辺遺跡一覧



5 IV - B区古代道路

建物跡、古代道路、溝

出土資料：土器などパンケース約 50 箱

特筆事項：IV - A 区から伸びる古代道路を調査。直線的に伸びるのではなく、途中で屈曲すること、また鎌倉時代には道路の機能を停止することが判明した。

○延永ヤヨミ園遺跡IV - B 区→正報告は平成 26 年度予定

調査期間：平成 22 年 9 月 27 日～平成 23 年 3 月 23 日

調査面積：約 1,550m²

調査機関：福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係 下原幸裕

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、中世

主な検出遺構：竪穴住居跡 50 棟以上、掘立柱

e. 平成 23 年度

○延永ヤヨミ園遺跡IV - B 区→正報告は平成 26 年度予定

調査期間：平成 23 年 5 月 10 日～平成 24 年 3 月 26 日

調査面積：約 1,550m²

調査機関：九州歴史資料館 大庭孝夫 下原幸裕

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、中世

主な検出遺構：竪穴住居跡 20 棟以上、土坑、ピット群

出土資料：土器などパンケース 79 箱

特筆事項：昨年度から継続調査の古代道路は、基礎地業の波板状凹凸面が少なくとも 3 面確認されたことから、少なくとも 3 回以上道路を補修していたと考えられる。

○延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - A・B 区→正報告は平成 26 年度予定

調査期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 3 月 26 日

調査面積：Ⅲ - A 区 2,500m²、Ⅲ - B 区 100m² 計約 2,600m²



6 Ⅲ - A 区古墳周溝か

調査機関：九州歴史資料館 大庭孝夫

主な時代：弥生時代後期～古墳時代後期、中世

主な検出遺構：竪穴住居跡 18 棟以上、掘立柱建物 5 棟以上、土坑 3 基、溝 7 条、方形区画溝 1 条、ピット群

出土資料：土器などパンケース約 35 箱

特筆事項：古墳時代前期の方形区画溝を検出した。

f. 平成 24 年度

○延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－B区→正報告は平成 26 年度予定

調査期間：平成 24 年 5 月 8 日～6 月 8 日、平成 24 年 8 月 20 日～9 月 30 日

調査面積：約 800㎡

調査機関：九州歴史資料館 大庭孝夫 城門義廣

主な時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、中世

主な検出遺構：竪穴住居跡 19 棟以上、土坑 9 基、溝 20 条、ピット群

出土資料：土器などパンケース 34 箱

特筆事項：南側に陸橋 1 ヶ所を伴う、東西 23 m×南北 21 m の古墳時代前期の方形区画溝を発見。



7 Ⅲ－B区方形区画溝

なお、先述したように、平成 25 年度もⅢ－B区の一部（約 400㎡）の調査を実施する予定である。

(2) 延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－C区の調査の経過

当初の遺物整理計画においては、本書ではⅢ区すべての調査成果を掲載する予定であったが、1 の調査に至る経緯で先述したように、現在Ⅲ－B区の一部の調査が未了であることから、本書では平成 20・21 年度に調査を実施したⅢ－C区の調査成果を掲載することとし、調査の経過についても、Ⅲ－C区のみ記述する。

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－C区は福岡県行橋市大字吉国に所在する。周囲には低地が広がっており、ピワノクマ古墳が築かれる丘陵の延長上に遺跡が展開している。以下、調査の経過を記述する。

平成 20 (2009) 年

平成 20 (2009) 年 5 月 8 日、Ⅲ－C区中央部分を重機により掘削開始する。6 月 5 日、作業員の雇用を開始する。7 月 8 日 福岡県教育委員会による安全パトロールが行われる。8 月 6 日、1 号井戸より「京都大」墨書土器が出土した。木製横櫛が出土した。8 月 7 日、豪雨。その後数日間、水汲みを行う。9 月 10 日、行橋市立延永小学校 3 年生 15 名、体験発掘を行う。9 月 24 日、包含層から「○一石」の文字が書かれた木簡が出土する。9 月 25 日、3 号井戸より木製の鎧未成品および「急」の文字が書かれた木簡が出土する。10 月 30 日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。11 月 11 日、Ⅲ－C区北側部分の調査を開始する。11 月 14 日、14 号溝の床面で連続した土坑を検出する。11 月 19 日、10 号溝より土馬が出土する。12 月 2 日、地下式土坑を検出する。

平成 21 年 1 月 22 日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。2 月 6 日、Ⅲ－C区南側の調査を開始する。1 号土坑墓を検出する。2 月 16 日から担当者入院のため一時中断する。3 月 9 日、担当者交代後、現場再開する。3 月 27 日、Ⅲ－C区南側部分の調査を終え、撤収した。

平成 21 (2010) 年

平成 22 年 1 月 5 日、Ⅲ－C区西側部分の重機による掘削を開始する。1 月 6 日、遺構検出を開始する。2 月 23 日、機材の撤収を行い、調査を終了した。

3 調査・整理の組織

平成 20～24 年度の発掘調査関係者及び平成 23・24 年度の整理作業関係者は以下のとおりである。なお、平成 23 年度は組織改革により、九州歴史資料館にて事業者との契約から整理報告までを行っている。

国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
所長	後藤 徹	後藤 徹	世利正美	世利正美	赤星文生
副所長	柳田誠二	上村一明	上村一明	大成和明	大成和明
建設監督官	樋口洋一	松永鉄治	松永鉄治	松永鉄治	松木厚廣
調査課長	池田稔浩	池田稔浩	大榎 謙	大榎 謙	大榎 謙
専門職	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	東 昌毅
専門調査員	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博	秋田賢一
国土交通技官			山本陽子	山本陽子	
工務課長	今田一典	谷川征嗣	谷川征嗣	谷川征嗣	松元勝美
専門官			楯 淳司	楯 淳司	児玉祐一

福岡県教育委員会（平成 23 年度の機構改革により、発掘調査業務は九州歴史資料館に移管）

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
総括			
教育長	森山良一	森山良一	杉光 誠
教育次長	榑崎洋二	亀岡 靖	荒巻俊彦
総務部長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄
副理事兼文化財保護課長	磯村幸男		
文化財保護課長		平川昌弘	平川昌弘
同 副課長	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋
参事	新原正典		
参事兼課長技術補佐	小池史哲	小池史哲	小池史哲
	伊崎俊秋	伊崎俊秋	
課長補佐	前原俊史	前原俊史	日高公德
参事補佐兼調査第一係長	小田和利		
調査第一係長		吉村靖徳	吉村靖徳
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文
調査第一係地域担当	岸本 圭	小澤佳憲	宮地聡一郎

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
庶務					
管理係長	富永育夫	富永育夫	富永育夫		
主事	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔		
調査					
調査第二係主任技師	進村真之	進村真之	下原幸裕		
		下原幸裕	城門義廣		
技師	城門義廣	城門義廣			
九州歴史資料館					
総括					
館長				西谷 正	西谷 正
副館長				南里正美	篠田隆行
企画主幹（総務室長）				圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹（文化財調査室長）				飛野博文	飛野博文
企画主幹（文化財調査室長補佐）					吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）				小川泰樹	小川泰樹
庶務					
企画主査				塩塚孝憲	長野良博
事務主査					青木三保
主任主事				熊谷泰容	
				近藤一崇	近藤一崇
主事				谷川賢治	谷川賢治
調査					
主任技師				大庭孝夫	大庭孝夫
				下原幸裕	城門義廣
整理報告					
技術主査（保存管理班長）				加藤和歳	加藤和歳
参事補佐				小池史哲	小池史哲
主任技師				大庭孝夫	大庭孝夫
				下原幸裕	下原幸裕
				城門義廣	城門義廣
技術主査兼福岡県立アジア文化交流センター技術主査				進村真之	進村真之

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、地元の吉国区、延永区の方々、発掘調査に参加された方々、北九州国道事務所、同行橋建設監督官詰所、戸田建設（株）延永作業所、行橋市都市政策課国道・高速道対策室、行橋市教育委員会文化課の皆様よりご協力を賜った。記して感謝いたします。

Ⅱ 位置と環境

1 地理的環境

行橋市は、福岡県北東部の周防灘（瀬戸内海）に面した場所にあり、東経 130° 54′ ～ 131° 3′、北緯 33° 40′ 20″ ～ 32° 45′、面積は 68.65km²を測る。東は周防灘、北は京都郡菟田町と北九州市小倉南区、西は京都郡みやこ町、南はみやこ町と築上郡築上町に接する。

行橋市は昭和 29 年 10 月に行橋町、蓑島村、今元村、仲津村、泉村、今川村、稗田村、延永村、椿市村の 9 町村が合併し、成立した自治体で、人口は現在 70,000 人余りを数え、西日本の気候区分では、「瀬戸内海型」に属し、行橋市の年間平均気温は 15.5℃、年間降水量は 1,800mm 前後で、比較的温暖である。また行橋市域を構成する岩石と地層（岩層）は、古期の変成岩類と花崗岩類及び新期の第四期層である。

行橋市は、地形的には臨海盆地に位置づけられ、その中央部には京都平野が発達し、市街地を形成している。その盆地の周囲を見てみると、北西部は国指定天然記念物である平尾台カルストに接し、周防変成岩類、平尾花崗閃緑岩類が広く分布している。この平尾花崗閃緑岩類の風化・浸食面上には第四紀更新統の河川堆積層が堆積し、高～低位段丘地形を形成する。

本遺跡は東・南を長峽川、北を小波瀬川によって形成された平尾花崗閃緑岩類を基盤とする砂礫台地である河成の低位段丘上に立地する（第 7 図、巻頭図版 2、図版 1～4）。本遺跡が立地する中位・低位段丘は、河川堆積物である黒添砂層が約 5.5 m 堆積し、その上には阿蘇 4 火砕流堆積層が約 0.5m ～ 3 m 覆い、段丘を形成する。

長峽川・小波瀬川流域の低湿地の地下には海成層である行事層が分布するが、この海成層は行橋市草野の地下 2 m でも確認されていることから、推定旧海岸線は深く湾入していることが判明している。このボーリング調査等の地質調査結果と遺跡分布から、行橋盆地における旧海岸線の位置を検討した太田正道氏の推定ライン（行橋市史編集委員会 2004）を第 7 図に記入するが、本遺跡は低地に突き出す形となる。地名にかつて島であったことの名残がある菟田町片島や前田山遺跡など低地に突き出す丘陵上には弥生時代～古墳時代、古代の遺跡が濃く分布し、その下の低地部分には下稗田遺跡の調査成果から水田が広がっていたと考えられる。

花粉分析による京都平野における植生変遷の検討によると、弥生時代前期までは照葉樹林（自然林）が広く分布していたが、古墳時代後半期以降は急速に衰退したことが指摘されていることは、本遺跡を含めた周辺の遺跡動態も含めて注目される。

2 歴史的環境（旧石器～古墳時代）（第 8 図）

本遺跡はすべての遺物整理が終わっていない状態ではあるが、発掘調査時の所見では、弥生時代後期後半に成立し、弥生時代後期後半～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代、中世と、一時集落が衰退・断絶する時期はあるものの、丘陵上から斜面にかけて密に遺構が営まれる。

現状で、本遺跡では弥生時代後期前半以前の遺構・遺物は発見されていないが、当遺跡周辺では、弥生時代前期の環濠集落である葛川遺跡、弥生時代前期末～古墳時代初頭の集落・墳墓群の前田山遺跡、弥生時代前・中期を中心とする集落の下稗田遺跡など、遺跡が所在する丘陵下の低地を水田などに利用したと思われる著名な遺跡が存在する。弥生時代後期後半に突如として成立する本遺跡の在り方を考える上で、周辺の集落・集団の消長を把握することは重要であると考えられる。



第6図 遺跡周辺地形図の変遷 (1/50,000) (明治33年陸軍陸地測量部測量)

この京都平野の遺跡の動向については、『行橋市史 上巻 自然・地理・原始・古代』2004年、『行橋市史 資料編 原始・古代』2006年において、その時点で未報告の遺跡も含めて詳細に検討されており、また本遺跡における東九州自動車道分の調査報告書第1冊目で、昨年度刊行した『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-2-(延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の調査1)』2012年でも当遺跡を中心に、周辺遺跡の動態を概観している。

今回記述する内容は、上記の文献の内容と多くが重複するものの、先述したように本遺跡を中心とした周辺の遺跡の動態を把握することは重要であるため、先述した『行橋市史』の内容を基礎としつつ、概観することとしたい。

なお、本遺跡の調査報告は次年度以降も刊行されるため、本年度は本遺跡が位置する京都平野の旧石器時代から古墳時代までの遺跡について概観し、古代以降は次年度に触れることとする。

旧石器時代

京都平野の旧石器時代の遺跡は、表面採集と調査された遺跡とを合わせると、これまで後期旧石器時代の13遺跡が発見されている。これらの遺跡の立地は、今川と祓川に挟まれた丘陵や段丘上に立地するもの、小波瀬川上流の椿市廃寺や長峡川上流の下崎ヒガンデ遺跡や入覚大原遺跡などが属する平尾台や御所ヶ谷山など京都平野を取り囲む山麓部、渡築紫遺跡C区やみやこ町徳永川ノ上遺跡などが立地する周防灘沿いの丘陵部と大きく3地域に区分される。

これらの多くは、丘陵平坦地から緩斜面の見晴らしが良い場所で、日当たりも良いことから、当該期の人々は狩猟を中心としながら短期間居住した場所は、安定した丘陵部が主体であったと考えられる。

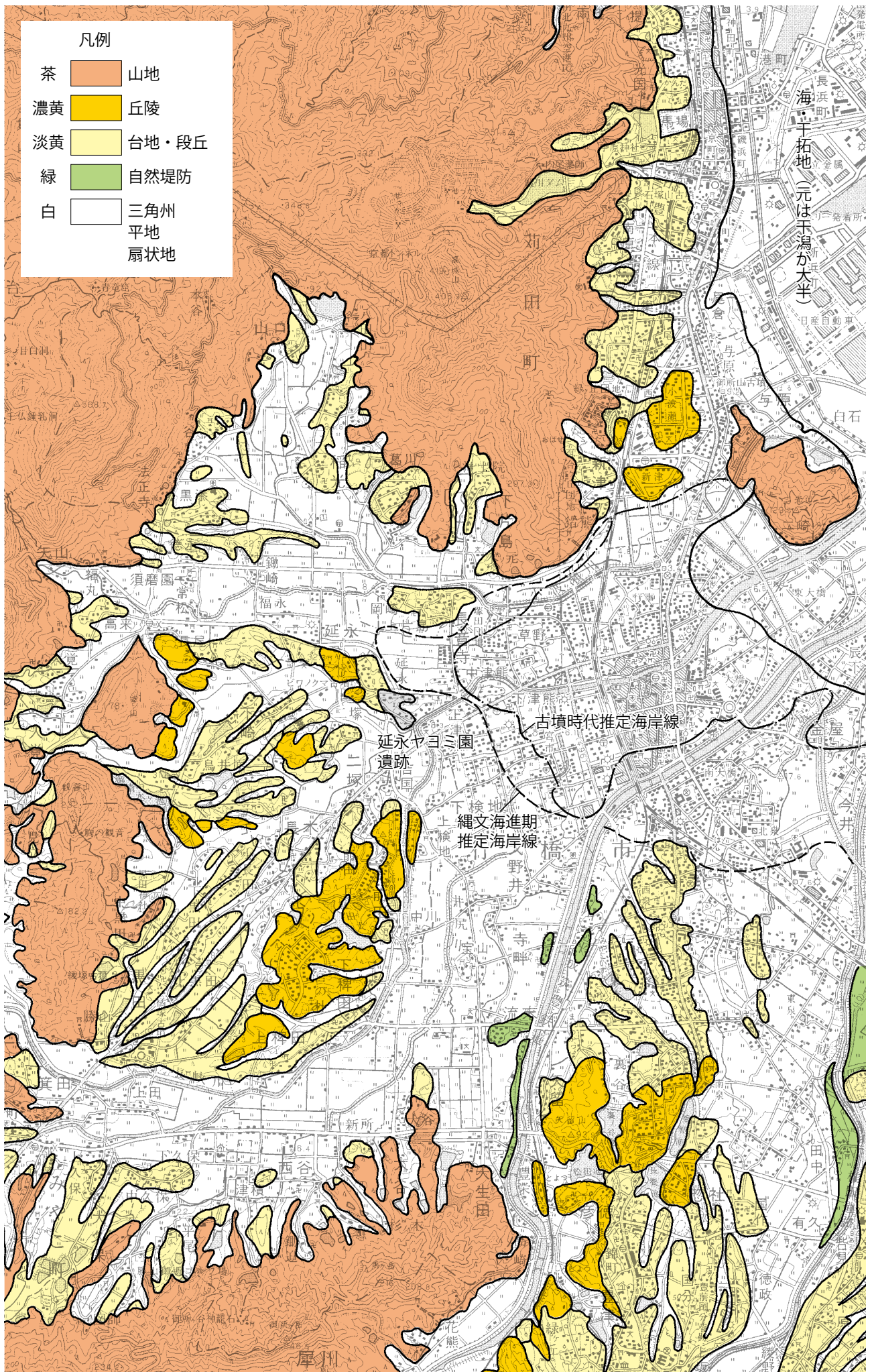
これらの遺跡の中でも、後期旧石器時代初頭の渡築紫遺跡C区では、台形様石器や尖頭状石器があるが、明確なナイフ形石器は伴っていないことが特徴である。また後期旧石器時代中頃の徳永川ノ上遺跡ではナイフ形石器、三稜尖頭器が確認されている。

縄文時代

京都平野の縄文時代の遺跡については、草創期の遺跡・遺物は発見されていないが、早期の押型文土器が、丘陵上や標高10m以上の沖積微高地上の遺跡で混入した状態でごく少量発見されている。さらに、一般的に早期頃のものとなる落とし穴状遺構が、周防灘沿いの丘陵部を中心に多数確認されている。

続く縄文時代前・中期の遺跡・遺物も京都平野では極めて少ない。後期になると、後期旧石器時代以来の生活空間の地である平尾台山麓の下崎瀬戸溝遺跡などに加え、消滅した宝山貝塚、柳井田早崎遺跡など今川沿いの沖積微高地に生活空間が広がるようである。

この京築地域は、縄文時代後期前半～後半にかけて竪穴住居跡が九州内でいち早く増加し、その形態も他地域よりも先行して新しい形態のものが採用され、九州内の他地域に広がる状況が小池史哲氏により指摘されている。京都平野では、福原長者原遺跡で後期末～晩期初頭の1棟と、みやこ町中黒田遺跡での3棟と発見例が少ないものの、未報告のみやこ町節丸西遺跡で後期中頃～晩期初頭24棟が確認されている。また苅田町浄土院遺跡では、後期西平式の火葬甕棺墓や敷石住居跡の可能性のあるものが発見されている。



第7図 京都平野における地形分類図 (1/50,000) (福岡県農政部 1971 を一部改変)

ちなみに、下山正一氏によると、縄文海進は約 6,000 年前頃・約 4,700 年前頃・約 3,100 年前頃の 3 回が確認できるとされており、さらに千田昇氏による京都平野の地理的研究では、約 4,800 年前の海進以降も京都平野では内湾が広がる状態であったようである。このことから、縄文時代後期では標高 10 m 内外が低地遺跡として最も低い地点であった可能性がある。

その後の縄文時代晩期は、遺跡数・遺物量が少なく、柳井田早崎遺跡などで土器や石器が少量確認されたのみである。

弥生時代

弥生時代になると、縄文時代の遺跡が少なかった今川や祓川などが形成した標高 10 m 前後の沖積微高地などに遺跡が多く進出する。

弥生時代前期では、周防灘に面した海岸砂丘上に位置する長井遺跡において、500 基を超える箱式石棺墓や 6 基以上の甕棺墓などが、土取工事により正式な発掘調査も行われなまま破壊されている。表採された土器の時期は夜臼式土器を含む弥生時代前期初頭～中期後半まで及んでおり、加えてその規模から長期間に渡って営まれた大規模墳墓群であったと想定される。

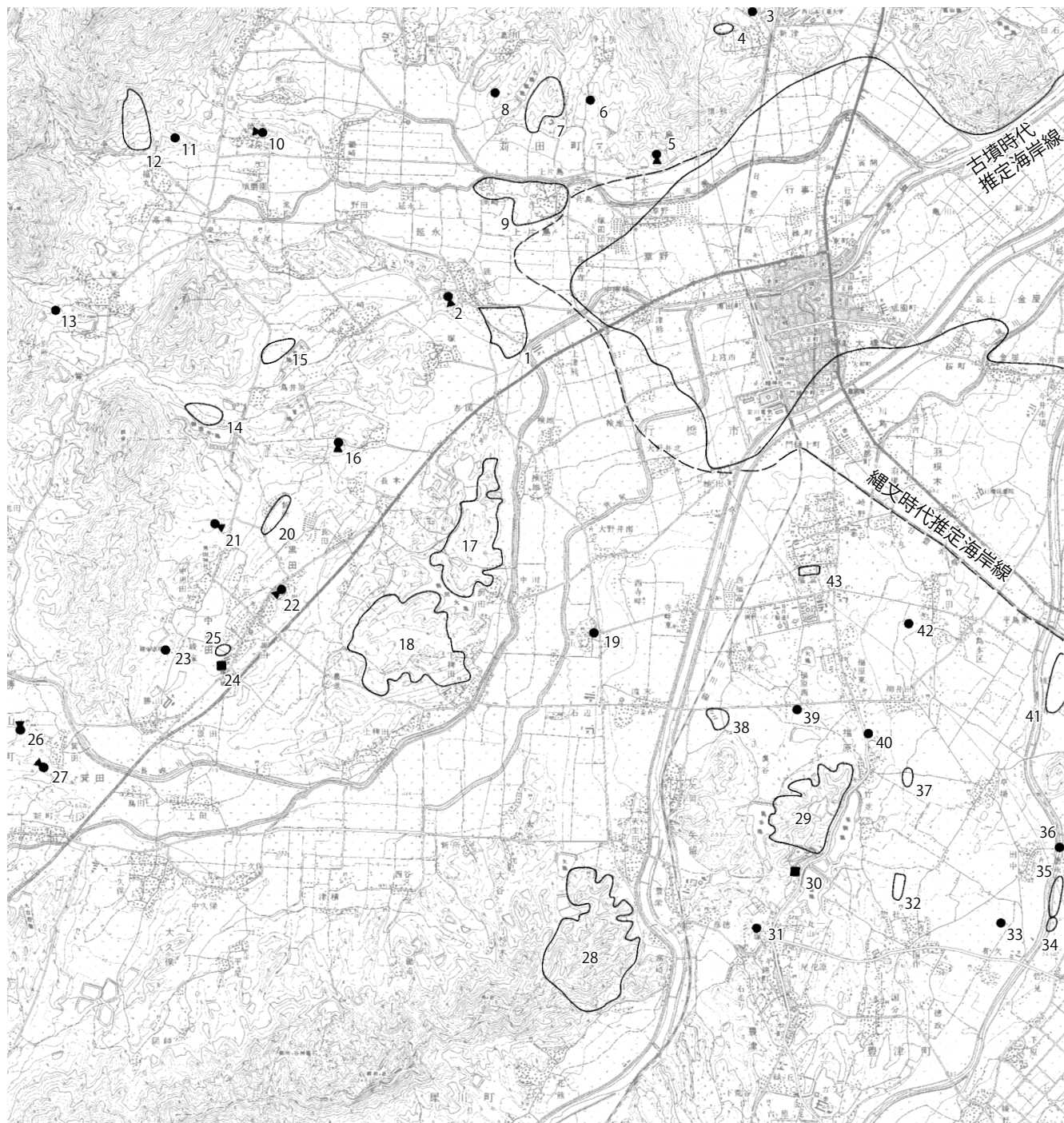
弥生時代前期の集落遺跡では、環濠を伴う辻垣遺跡群や苅田町葛川遺跡、環濠を伴わない鬼熊遺跡などが代表的なものである。

標高 10～13 m の祓川右岸の自然堤防上に位置する辻垣遺跡群内の、畠田・長通地区では前期前半頃の断面 V 字形を呈する円形環濠と考えられる溝 1 条、貯蔵穴、小型竪穴住居跡の可能性もある長方形土壙が発見され、ヲサマル地区では円形環濠と考えられる溝 1 条が発見されている。本遺跡から小波瀬川を挟んだ丘陵上に位置する葛川遺跡では、弥生時代前期中葉の断面 V 字形の円形環濠が発見され、その内部は貯蔵穴のみ検出されている。みやこ町神手遺跡でも貯蔵穴を取り囲む前期後半の環濠を検出し、その外側に数棟の円形竪穴住居跡の存在が指摘されている。

一方、環濠を伴わない鬼熊遺跡では、円形竪穴住居跡と貯蔵穴群が分かれて存在することが確認されている。このように、本地域の前期の遺跡は、水田稲作等の導入に伴い、沖積低地部分を水田域として開発することで遺跡が増加し、集落内部においても環濠の有無は別として、居住域と貯蔵域が共存しながら、明確に分離することが特徴である。

弥生時代前期中葉～中期になると、それまでの沖積低地での水田開発により生産能力を向上させた集団が独立した丘陵状に集落を営み、その丘陵下の平地や丘陵間の谷が生産域となる集落が展開する。この代表的な遺跡としては、下稗田遺跡がある。下稗田遺跡周辺は、当時標高 8 m 前後まで長峽川の氾濫原や低湿地が広がっており、さらにその近くまで海岸線が内側に入り組んでいたことが、これまでの地質調査や埋蔵文化財試掘調査などから判明している。また下稗田遺跡では貝類が発見されていることから、漁労活動も生産活動の一つであったと推測される。

下稗田遺跡について、少し詳しく見てみると、前期中葉に丘陵上の I 地点で小規模な集落が営まれるようになり、前期後半になると I 地点では爆発的ともいえるべき集落が発達し、また II・III・IV 地点という別の丘陵上に、新たに集落が展開し、丘陵上一帯が集落となる。中期初頭には I 地点以外では住居数が減少する傾向にある。中期前半になると前段階で消滅した IV 地点以外も急速に集落が衰退し、中期後半まで集落が営まれる I・II 地点でも衰退が進む。この後は、後期終末まで小規模ながら集落は継続する。



- | | | | |
|----------------|--------------|---------------|-------------|
| 1. 延永ヤヨミ園遺跡 | 12. 福丸古墳群 | 23. 綾塚古墳 | 34. 神手遺跡 |
| 2. ビワノクマ古墳 | 13. 入覚コウチ遺跡 | 24. 橋塚古墳 | 35. 徳永川ノ上遺跡 |
| 3. 恩塚古墳 | 14. 入覚大原遺跡 | 25. 中黒田遺跡 | 36. 居屋敷遺跡 |
| 4. 百合ヶ丘古墳群 | 15. 下崎ヒガンテ遺跡 | 26. 扇八幡古墳 | 37. 鬼熊遺跡 |
| 5. 木ノ元幸古墳群 1号墳 | 16. 八雷古墳 | 27. 箕田丸山古墳 | 38. 矢留堂ノ前遺跡 |
| 6. 浄土院遺跡 | 17. 前田山遺跡 | 28. 天生田古墳群 | 39. 福原長者原遺跡 |
| 7. 岩屋古墳群 | 18. 下稗田遺跡 | 29. 竹並遺跡 | 40. ヒメコ塚古墳 |
| 8. 葛川遺跡 | 19. 宝山貝塚 | 30. 甲塚方墳 | 41. 辻垣遺跡群 |
| 9. 上片島遺跡群 | 20. 黒田エノヲ遺跡 | 31. 彦徳甲塚古墳 | 42. 柳井田早崎遺跡 |
| 10. 徳永丸山古墳 | 21. 寺田川古墳 | 32. 豊前国府跡惣社地区 | 43. 福富小畑遺跡 |
| 11. 願光寺裏山古墳 | 22. 庄屋塚古墳 | 33. 京ヶ辻遺跡 | |

第8図 周辺遺跡分布図 (旧石器～古墳時代、1/50,000)
 (地図は昭和45年11月30日発行 国土地理院 1/25,000「行橋」)

この中期前半以降の下稗田遺跡の衰退と時を同じくして、丘陵周辺の沖積微高地を中心に小規模集落が展開する。先述したように京都平野の前期中葉までの集落は、居住域と貯蔵域が明確に分離するが、下崎ヒガンテ遺跡のように中期後半まで貯蔵穴が残り、貯蔵穴が集中するというという前期の系譜を引くものと、下稗田遺跡のように貯蔵穴と住居が混在して、各住居が貯蔵穴を管理したと考えられるという、2つの集落構造が確認される。中期後半の入覚大原遺跡では1×2間の高床倉庫が認められることから、この時期に貯蔵穴から高床倉庫での切り替えが徐々に進行していたことが伺える。

前田山遺跡では、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落と、弥生時代前期末～中期後半、弥生時代後期の大規模な墓地を確認している。特に後期の墓地から銅鏡が、計2面出土していることは注目される。

沖積微高地を中心に遺跡が進出する中期以降は、下崎ヒガンテ遺跡や代遺跡が代表的なものであるものの、未報告であるため詳細は不明であるが、後期中頃～古墳時代初頭にかけて集落内部が急速に拡大するようである。この状況は、弥生時代後期終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡30棟余りを検出したみやこ町黒田地区遺跡群の黒田下原出口遺跡などでも確認される。後期には竪穴住居は円形から方形ベッド付の竪穴住居跡に、方形竪穴住居跡の支柱穴は2本柱から4本柱に次第に変化する。後期後半から本遺跡でも集落が形成されはじめると思われ、これまでの調査で検出された竪穴住居数は100棟を超える規模で確認されている。

弥生時代後期には京都平野が北部九州における瀬戸内海交流の窓口であったことが、吉備系などの瀬戸内系や畿内系などの外来系土器や内面朱付着土器などの出土から想定されている。

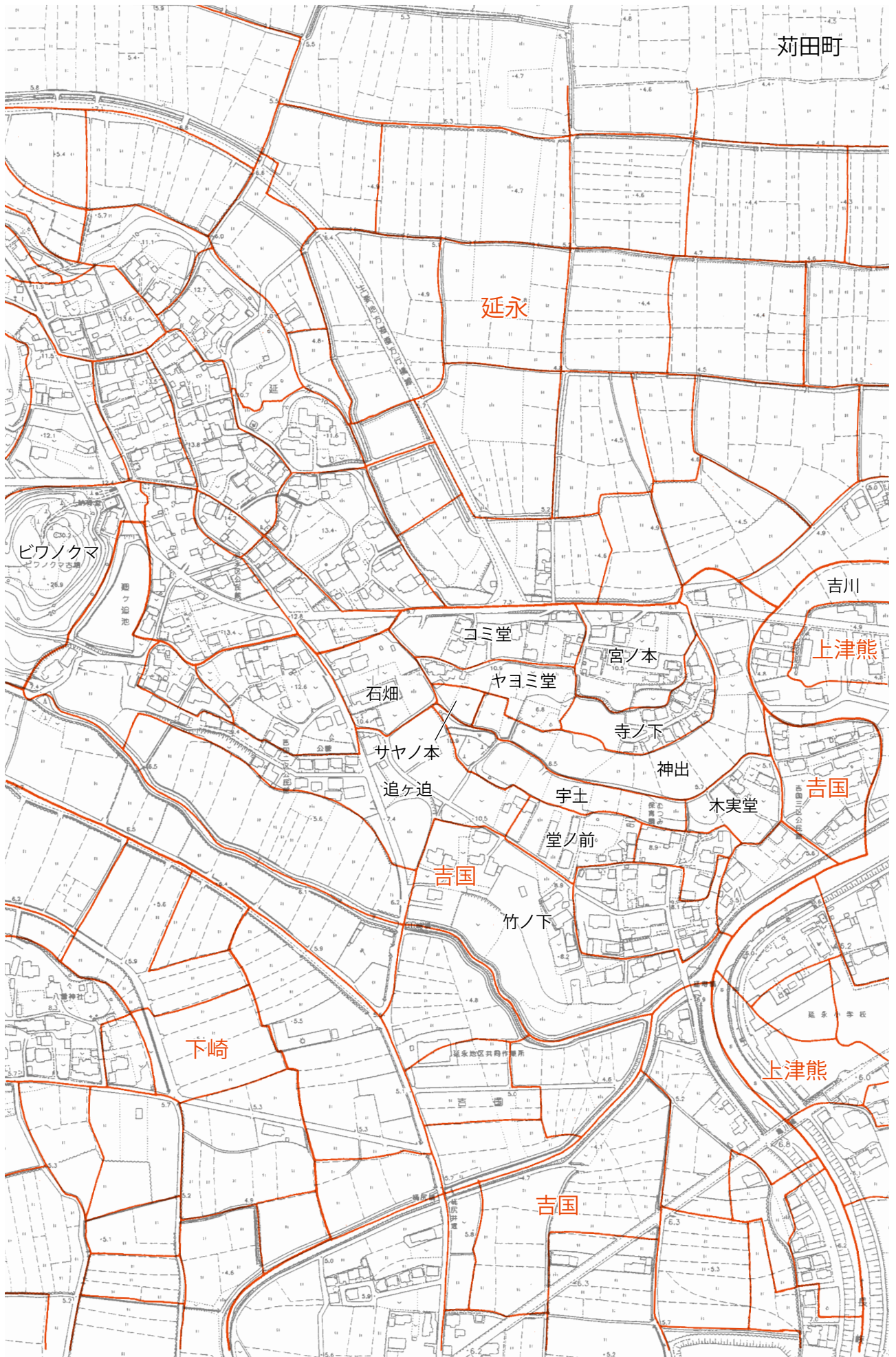
さらに祇川右岸の河岸段丘上に位置するみやこ町徳永川ノ上遺跡では、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の墳丘墓群が発見され、銅鏡や玉類、鉄製品が副葬されていた。これらは、遺跡内において比較的まんべんなく出土しており、墳墓間での格差は何もないものの、このことからこの地域の首長層の出現は確認できよう。

古墳時代

古墳時代になると、3世紀末前後、周防灘を眼下に望む台地先端上に全長110m、7面以上の三角縁神獣鏡を副葬する畿内型前方後円墳、荻田町石塚山古墳が築造される。この被葬者は副葬品や墳丘、石室などから、畿内ヤマト王権と密接な関係を持ち、北部九州にヤマト王権の勢力を築く上で重要な役割を果たした人物と推測される。

4世紀に入ると、当地域ではこの石塚山古墳に継続する盟主的な古墳はなくなり、小規模化して新たな在地の首長墓系列が出現する。本遺跡が位置する同一丘陵上にあるビワノクマ古墳は、4世紀末前後に築造されたと思われる全長50m以上の前方後円墳で、竪穴式石槨を主体とする。本遺跡ではこの前段階に集落の急速な拡大と、溝で区画された方形区画を複数検出していることを合わせて考えると、本遺跡の西約200mに位置するビワノクマ古墳の被葬者は、本遺跡を中心とする小地域を統率した、在地の有力首長層が想定される。

石塚山古墳以降の盟主的な古墳としては、5世紀前半～中頃に、有明海沿岸地域の影響をうかがわせる石障系石室を持つ、全長118mの前方後円墳である荻田町御所山古墳が築造される。副葬品である馬具は朝鮮半島製の可能性が指摘されている。この首長墓系列は、5世紀末～6世紀



第9図 遺跡周辺字図 (1/5,000)

初頭に全長 50 m の前方後円墳である苅田町番塚古墳に継続する。番塚古墳からも、大陸の葬送思想に通ずる蟾蜍形木棺金具が出土しており、御所山古墳・番塚古墳の被葬者は朝鮮半島を含む広域的な交流を担った首長層であったと推定できる。

『日本書紀』景行天皇 12 年 9 月 5 日条に「天皇、遂に筑紫に幸して、豊前国の長峽県に到りて、行宮を興てて居します。故、其の処を号けて京と曰う。」という記事がある。この長峽県は企救郡長野郷に比定する意見もあるが、現在椿市廃寺の所在する行橋市長尾を含む長峽川流域付近の可能性が指摘されている。この長峽川流域では、6 世紀初頭～中頃にかけて、みやこ町寺田川古墳 (40 m)、みやこ町扇八幡古墳 (58 m)、八雷古墳 (80 m)、みやこ町箕田丸山古墳 (40 m)、みやこ町庄屋塚古墳 (90 m) という前方後円墳が築かれる。特に庄屋塚古墳は、この時期における豊前地域でも最大級の古墳であることから、この京都平野内陸部に拠点を持った首長層は、豊前地域でも最も有力な勢力であり、その首長層は「長峽県主」の系列であったと想定される。

なお京都平野では、周防灘沿岸の 5 世紀中頃の帆立貝式前方後円墳である石並古墳を盟主墳とする稲童古墳群を代表とするように、中小古墳も含めて甲冑などの武具類の出土が顕著であり、軍事的性格が強い首長層の存在が指摘されている。

6 世紀後半になると、前方後円墳の築造は終息に向かうが、6 世紀末～7 世紀初頭にはみやこ町橋塚古墳 (40 m、方墳)、みやこ町綾塚古墳 (30～40 m、円墳) などの大型横穴式石室を持つ大型古墳が築造されるなど、長峽川では庄屋塚古墳から継続する首長系列が認められる。

また 5 世紀後半～7 世紀にかけて群集墳の築造が盛んになる。群集墳は平尾台山、馬ヶ岳、御所ヶ岳などの山麓部に濃密に分布するが、硯山・沓尾・長井・稲童の海岸部の分布密度は希薄である。群集墳は横穴墓も合わせると、横穴墓約 1,000 基以上が展開する竹並遺跡も含め、少なくとも 2,000 基以上になると考えられる。

集落遺跡では、古墳時代中期では陶質土器が出土した鬼熊遺跡や、近年東九州自動車道建設により調査されたみやこ町徳永居屋敷窯跡で生産されたと考えられる初期須恵器が多数出土した、みやこ町京ヶ辻遺跡などから、当地域では 5 世紀代に渡来系文化の定着が伺うことができる。

後期の集落は、本遺跡で 500 棟を優に超える数の竪穴住居跡が発見されていることから、先述した弥生時代後期～古墳時代初頭の集落様相とともに、本遺跡の調査報告によりその様相が大きく変化することが考えられよう。

引用・参考文献

- 鏡山猛 1959 「福岡県行橋市琵琶隈古墳」『日本考古学年報 8』 日本考古学協会
- 福岡県農政部農地開拓課 1971 『周防灘周辺開発地域土地分類基本調査 (行橋・蓑島)』
- 千田昇 1977 「歴史の背景としての自然」『豊津町史』上巻 豊津町・豊津町史編纂委員会
- 竹並遺跡調査会 1979 『竹並遺跡』 寧楽社
- 酒井仁夫 1984 『葛川遺跡』 苅田町文化財調査報告書第 3 集 苅田町教育委員会
- 長嶺正秀編 1985 『下稗田遺跡』 行橋市文化財調査報告書第 17 集 行橋市教育委員会
- 長嶺正秀編 1987 『前田山遺跡』 行橋市文化財調査報告書第 19 集 行橋市教育委員会
- 緒方泉編 1992 『神手遺跡』 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 6 集 福岡県教育委員会
- 副島邦弘編 1993 『辻垣オサマル遺跡』 一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 1 集 福岡県教育

委員会

岡村秀典・重藤輝行 1993 『番塚古墳』 苅田町文化財調査報告書第20集 苅田町教育委員会・九州大学考古学研究室

柳田康雄編 1994 『辻垣畠田・長通遺跡』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会

小川秀樹ほか 1994 『渡築紫遺跡』 行橋市文化財調査報告書第23集 行橋市教育委員会

柳田康雄編 1996 『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会

長嶺正秀 1996 『豊前石塚山古墳』 苅田町・苅田町郷土史研究会

柳田康雄編 1997 『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会

小川秀樹ほか 1999 『鬼熊遺跡』 行橋市文化財調査報告書第27集 行橋市教育委員会

飛野博文・小池史哲編 2000 『寄原遺跡・長者原遺跡』 福岡県文化財調査報告書第146集 福岡県教育委員会

行橋市史編集委員会 2004 『行橋市史 上巻 自然・地理・原始・古代』 行橋市

小田富士雄ほか 2004 『福岡県京都郡における二古墳の調査ほか』 福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊 福岡大学考古学研究室

山中英彦編 2005 『稲童古墳群』 行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会

行橋市史編集委員会 2006 『行橋市史 資料編 原始・古代』 行橋市

坂元雄紀 2006 「遠賀川流域以東地域における弥生集落の成立と展開」『弥生集落の成立と展開』 第55回埋蔵文化財研究集会実行委員会

長嶺正秀編 2007 『瑞穂の国の成立Ⅰ－豊前地方出土青銅器－』 苅田町歴史資料館2007年秋の特別展示図録 苅田町教育委員会

勝山町史編纂委員会 2007 『勝山町史 上巻』 勝山町

長嶺正秀 2008 『瑞穂の国の成立Ⅱ－豊前地方出土品－』 苅田町歴史資料館2008年秋の特別展示図録 苅田町教育委員会

伊藤昌広・中原博編 2010 『行橋市内遺跡等分布地図』 行橋市文化財調査報告書第37集 行橋市教育委員会

末永弥義他編 2010 『みやこ町内遺跡等分布地図』 みやこ町文化財調査報告書第6集 みやこ町教育委員会

宇野慎敏 2010 「豊前首長系譜に見る画期と歴史的意義」『九州における首長墓系譜の再検討』 第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表資料集 九州前方後円墳研究会

城門義廣編 2012 『延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の調査Ⅰ』

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－2－ 九州歴史資料館



8 III－C区発掘現場状況

Ⅲ 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

延永ヤヨミ園遺跡は、福岡県行橋市大字吉国・延永に位置する。遺跡は平尾台カルストから東西方向に伸びた、東・南を長峽川、北を小波瀬川によって形成された砂礫台地である中位～低位段丘上に立地する。図版2～4の空中写真や、試掘・確認調査から、本遺跡のすぐ北側には小波瀬川の支流と想定される旧河川があり、本遺跡南側は現在の数倍の川幅が想定される山崎川、また西側には現在よりも大きく蛇行した長峽川が流れ、かつて丘陵の3方は河川で囲まれた状況であったと考えられる（図版3）。

本遺跡は、福岡県文化財地図（福岡県教育委員会 1976『福岡県遺跡等分布地図（行橋市・京都郡）』）ではヤヨミ園遺跡（県登録番号 140140・140141）、文化庁遺跡地図（文化庁文化財保護部 1984『全国遺跡地図 福岡県』）ではヤヨミ園遺跡Ⅰ・Ⅱと登録されていたが、平成21年度に刊行された行橋市内遺跡等分布地図（伊藤昌広・中原博 2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第37集 行橋市教育委員会）では、市登録番号 14115010の延永ヤヨミ園遺跡として登録され、本遺跡の周辺の遺跡として第3表に掲載された遺跡が周知されている。本遺跡は丘陵の先端部に位置し、周辺の遺跡分布から、ビワノクマ古墳付近まで弥生～古墳、中世の集落跡が広がっていることが推測される。

本遺跡周辺の主要な遺跡

本遺跡周辺の遺跡分布地図は、第5図の北側外に位置するビワノクマ遺跡・延永水取遺跡を除き、第5図と第3表に掲載されているが、ここでは主要な遺跡について取り上げてみたい。

ビワノクマ古墳

ビワノクマ古墳は、標高25mの丘陵上に位置する。近年の行橋市教育委員会による範囲確認調査で全長50m以上の前方後円墳である可能性が指摘されている。昭和30年に九州大学考古学研究室により竪穴式石槨内と墳丘の調査が行われ、銅鏡1・硬玉製勾玉1・ガラス小玉55・素環頭大刀1・短剣1・鉄鏃12・織布製矢筒1・小札革級甲冑1領分が出土したようである。未報告のため詳細は不明ながら、4世紀末頃に比定される。

ビワノクマ遺跡（1号横穴）（位置は図版3参照）

ビワノクマ古墳が位置する丘陵の西側斜面で、工事中に発見された。玄室内部から比較的若い成年期の男性人骨1体分と鉄鏃、刀子、須恵器が出土したが、追葬の痕跡は確認できなかった。



9 ビワノクマ古墳の現状

出土土器から6世紀後半に比定される。

延永水取遺跡（位置は図版3参照）

延永ヤヨミ園遺跡が位置する丘陵の北裾部に位置する。1号溝は幅4.2m、2号溝は幅4mの大溝2条を検出し、出土土器から1号溝は8・9世紀、2号溝は1号溝廃絶後の9～14世紀に機能したと想定される。草野津と椿市廃寺とを結ぶ運河である可能性も指摘されている。



第10図 延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - C区遺構全体図① (1/200)

2 III-C区の遺構と遺物

延永ヤヨミ園遺跡は、京都平野に突き出すように東に延びた丘陵の先端部に位置する。その丘陵は今回調査した地点で、二股に分かれている。二股の中央部と丘陵南北には谷が広がり、遺構・遺物は丘陵上～斜面、丘陵中央に入り込む谷と南側の谷で検出した。III-C区は北側の丘陵南斜面に位置する。谷沿いに位置することから、井戸が多く発見された。

今回報告するのは、竪穴住居跡 17 棟、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 41 基、地下式土坑 1 基、井戸 7 基、溝 29 条、土坑墓 2 基、ピット多数である。遺構および遺物は、概ね古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世の 4 時期に分かれる。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版9、第13図)

調査区の中央西端で検出した。平面プランは、東西 5.3m、南北 2.2m + a で、北側は調査区外へ延びる。壁の深さは深い部分で 0.3m ほど、東側が一段高くなっており、ベッド状遺構となる可能性がある。周囲には深さ 5 cm 程度の壁小溝が全体に巡る。中央付近に深さ 0.4m のピット 1 基を検出しており、支柱穴である可能性が高い。遺物は完形の土器数点が床面付近から出土した。

出土遺物 (図版32、第14図)

1～3は土師器の壺である。1は口縁がやや内湾しながら開く。胴部外面の調整はケズリの後、部分的に刷毛目を施す。内面の調整は下半部が刷毛目、上半部はケズリである。内面には粘土の接合痕が帯状に残る。口径 11.0cm、胴部最大径 14.5cm、器高 14.0cm である。2は口縁が直線的に開く。外面にケズリ痕が残る。口径 10.0cm である。3はNo.1の位置から出土した。口縁がわずかに外反しながら開くものである。胴部内外面の調整はケズリで、その上から部分的に刷毛目を施す。胴部下半に焼成後の穿孔を施す。

4・5は土師器甕の口縁部である。いずれも胴部外面の調整は刷毛目である。内面はケズリである。4の口径は 18.4cm である。5の口径は 17.2cm である。6は甕の底部である。焼成前に穿孔される。底径 4.0cm である。7・8は土師器の碗である。7はNo.3の位置から出土した。外面はケズリ、内面は刷毛目である。8の外面はケズリ、内面はナデである。口径 7.4cm、胴部最大径 9.0cm、器高 6.0cm である。

9・10は土師器の高杯である。9はNo.2の位置から出土した。外面の調整はナデで、部分的に刷毛目が残る。脚部の内面はケズリである。10の脚部外面はナデ、脚部内面はケズリである。11は土師器の甑である。外面の調整は刷毛目、内面の調整はケズリである。胴部中位に把手の剥離した痕跡が残る。

2号竪穴住居跡 (図版9、第13図)

調査区の中央東寄りで検出した。北壁が段落ちの壁にわずかに残った状態で検出されたため、北壁以外の壁は残存していない。3・4号住居跡、3号土坑、7号溝に切られる。平面プランは、東西 4.7m、南北 2.2m + a である。壁の深さは 0.6m ほどで、北壁部分には深さ 5 cm の壁小溝が巡る。住居中央付近で炭化物が集積した部分があり、炉跡と考えられる。また支柱穴と見られるピット 3 基を確認できたが、南西部では検出できなかった。遺物は土師器、砥石(第82図17)が出土した。



第12図 延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - C区遺構全体図③ (1/200)

出土遺物（第15図1～11）

1は加飾した二重口縁壺の破片である。内外面の調整はナデである。外面屈曲部に貼付浮文が施される。2は土師器の小型壺である。外面は縦方向の粗い刷毛目が施される。内面の調整はナデである。口径11.6cmである。3・4は土師器の甕である。3の内外面の調整はナデである。口径16.4cmである。4の口径は14.2cmである。5は土師器の甕の口縁部であろう。内外面の調整はナデである。6は土師質の杯である。口径10.6cmである。7～10は土師器の高杯である。7はNo.1の位置から出土した。屈曲し、外反しながら口縁が広がるものである。口径14.0cmである。8の外面は刷毛目、内面はミガキである。脚部に2ヶ所、焼成前の穿孔を施す。9も焼成前に穿孔を施す。10は底径16.2cmである。11は鉢である。口縁部が短く屈曲する。内外面の調整はケズリの後、刷毛目を施す。口径34.0cmである。

3号竪穴住居跡（図版10、第16図）

調査区の中央やや東寄りで検出した。4号住居跡とほぼ重複していたため、同時に掘削を行った。東側の壁小溝を検出した段階で重複していることが確実となった。2号住居跡を切り、4号住居跡に切られる。平面プランは、東西6.2m、南北5.1mである。段落ちの部分で検出されたため、北壁以外はほとんど残存しない。壁の深さは0.7mほどで、北壁と東西壁の一部に深さ3cmほどの壁小溝が巡る。中央からかなり南寄りで焼土を検出しており、炉跡であると考えられる。複数のピットを検出しているが、P-1、2は主柱穴となりうるであろう。遺物は須恵器、土師器が出土した。

出土遺物（第15図12～15）

12～15は土師器の碗である。12の内外面はミガキである。口径12.0cm、器高5.7cmである。13の内外面はナデ調整で、部分的に刷毛目が残る。口径13.8cmである。14の外面はケズリ、内面はナデである。口径14.4cm、器高5.1cmである。15は口径14.6cmである。

4号竪穴住居跡（図版10、第16図）

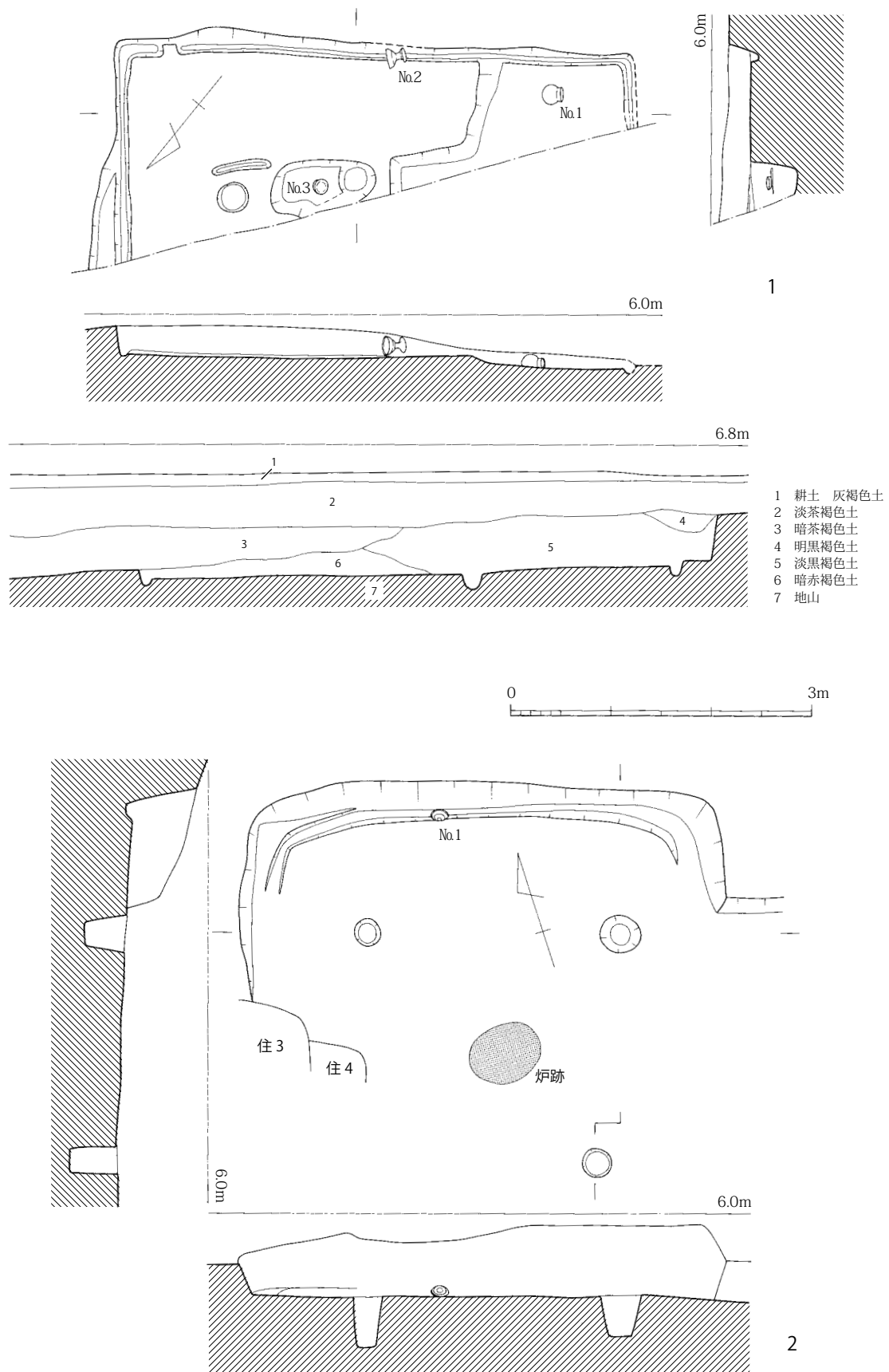
調査区の中央やや東寄りで検出した。3号住居跡とほぼ重複しており、同時に掘削を行ったため、ごく一部しか残存していない。2・3号住居跡を切る。平面プランは、東西 $0.7m + a$ 、南北 $4.0m + a$ である。壁の深さは0.2mほどで、壁小溝は検出されていない。柱穴等も検出されなかった。遺物は土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（図版32、第15図16・17）

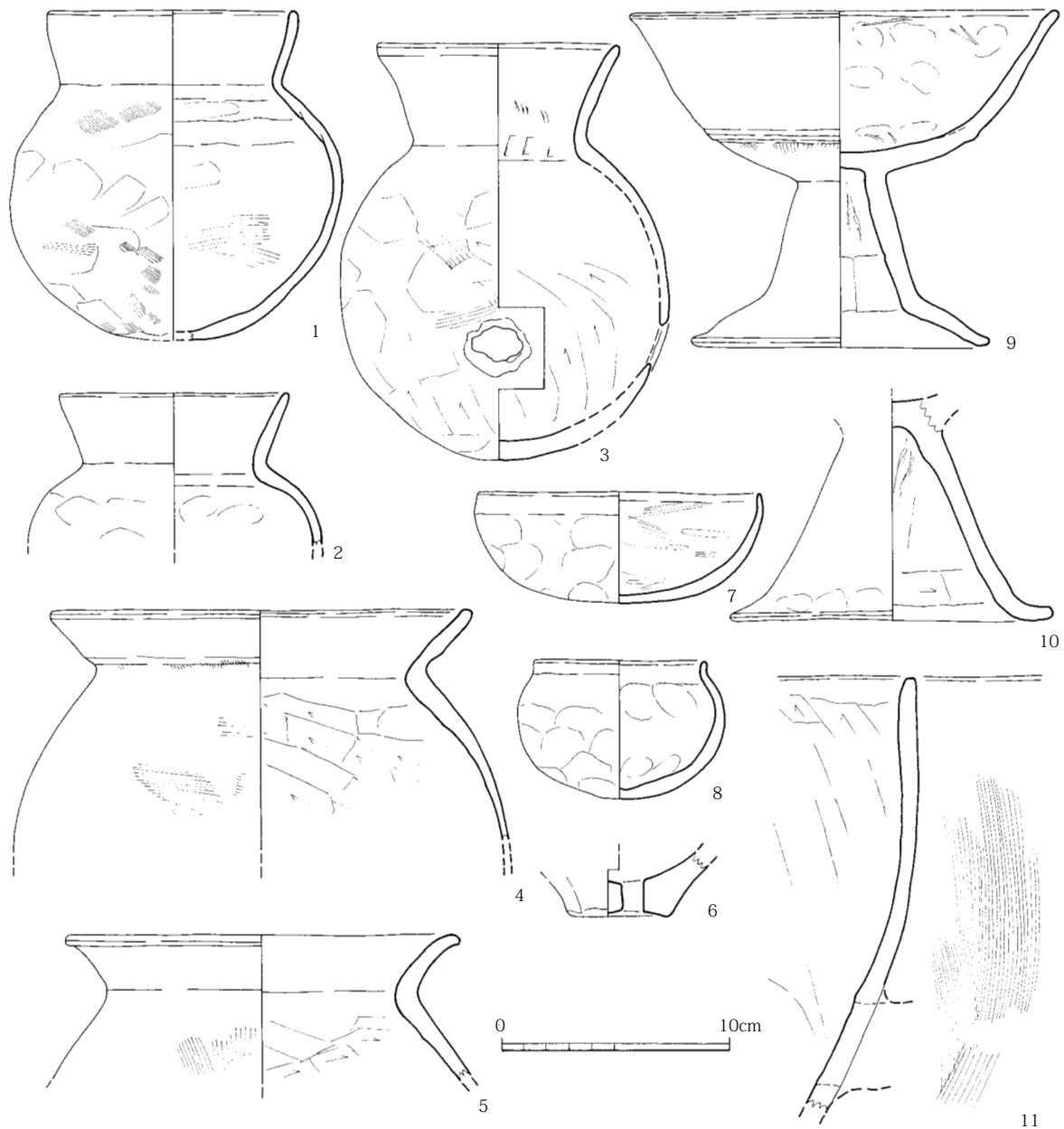
16は土師器の高杯の杯部である。摩滅しているが、一部ミガキが残る。口径15.4cmである。17は須恵器の杯身である。本来、4号住居跡の埋土中であるNo.1の位置から出土している。受け部は小さく、立ち上がりやや内傾する。口径11.0cm、器高4.9cmである。

5号竪穴住居跡（図版10、第16図）

調査区の中央やや西寄りで検出した。4号井戸に大きく切られる。平面プランは、東西5.3m、南北 $4.2m + a$ である。壁の深さは0.5mほどで、周囲に深さ15cmの壁小溝が巡る。深さ50cmのピット1基を検出しており、主柱穴であろう。西壁付近から甕が据えられた状態（3）で出土した。



第 13 图 1·2号竖穴住居迹实测图 (1/60)

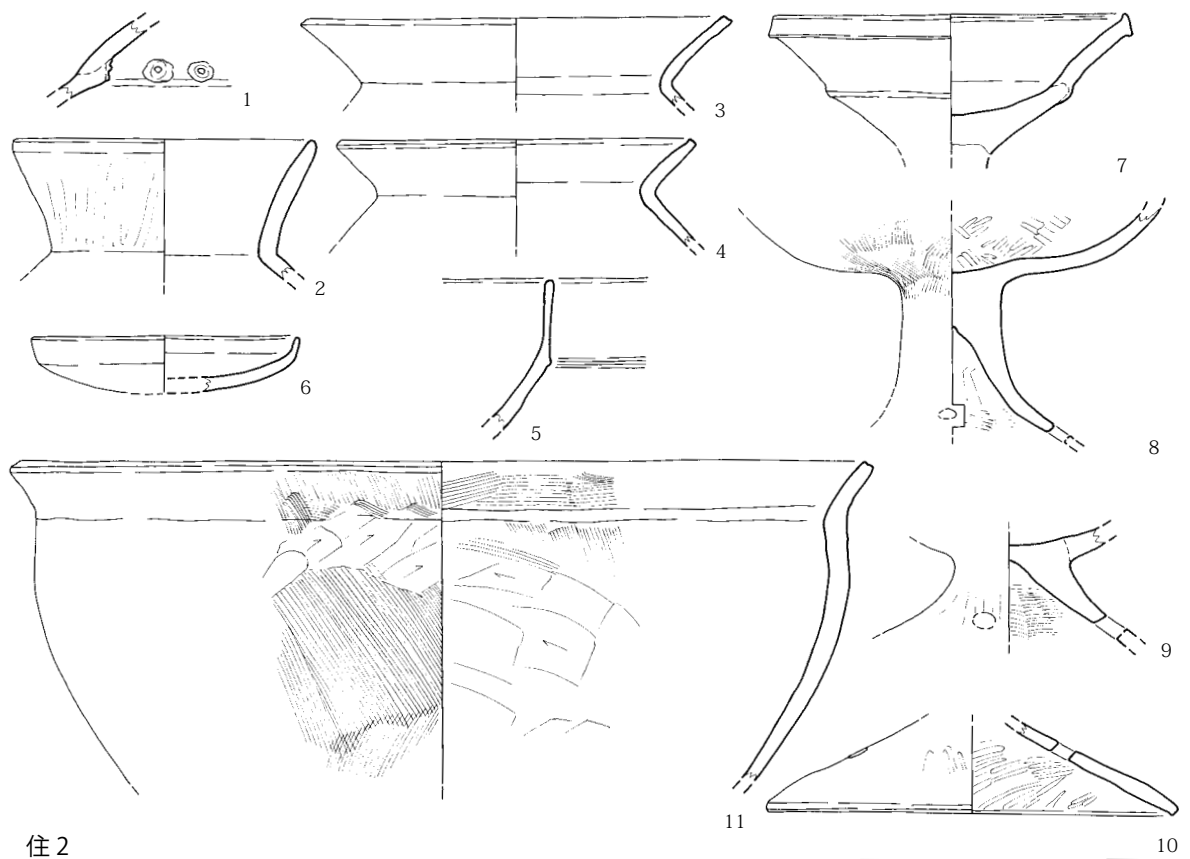


第14図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

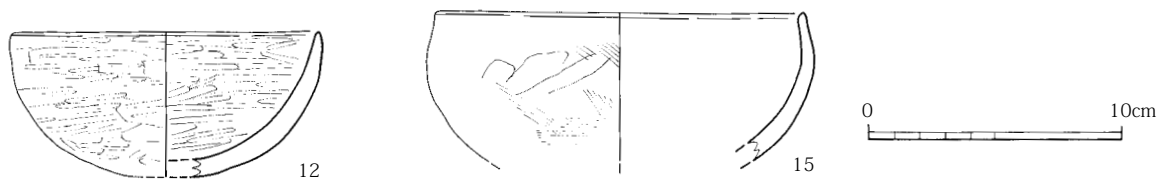
出土遺物 (図版32、第17図1~8)

1~3は土師器の甕である。1の外表面は刷毛目、内面はケズリである。口径16.3cm、胴部最大径18.0cm、器高21.1cmで、胴はあまり張らない。2も同様の器形であろう。口径15.4cmである。3は胴の大きく張るものである。No.1の位置から出土した。外面の調整は刷毛目、内面の調整はケズリである。口径19.8cm、胴部最大径32.0cmである。

4~6は土師器の碗である。4の外表面はケズリの後、刷毛目である。また部分的にナデである。内面の調整はナデである。口径13.4cm、器高5.0cmである。5は摩滅しているが、底部付近にミガキが残る。口径17.0cm、器高4.2cmである。6は口縁端部がわずかに外反する深めの碗である。外面の調整はミガキ、内面の調整はナデである。口径10.0cm、器高6.7cmである。



住2



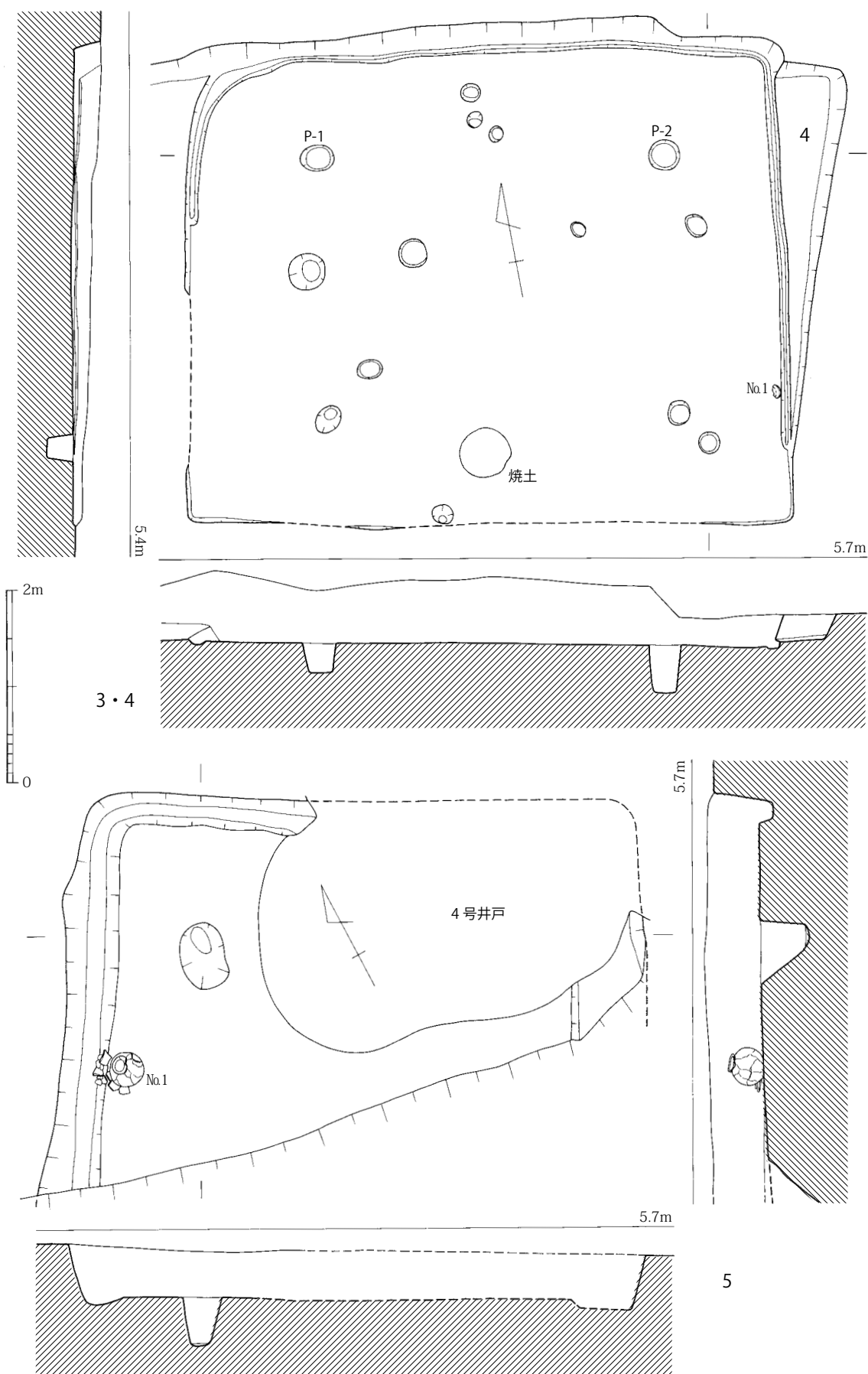
住3
住4

第15図 2～4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

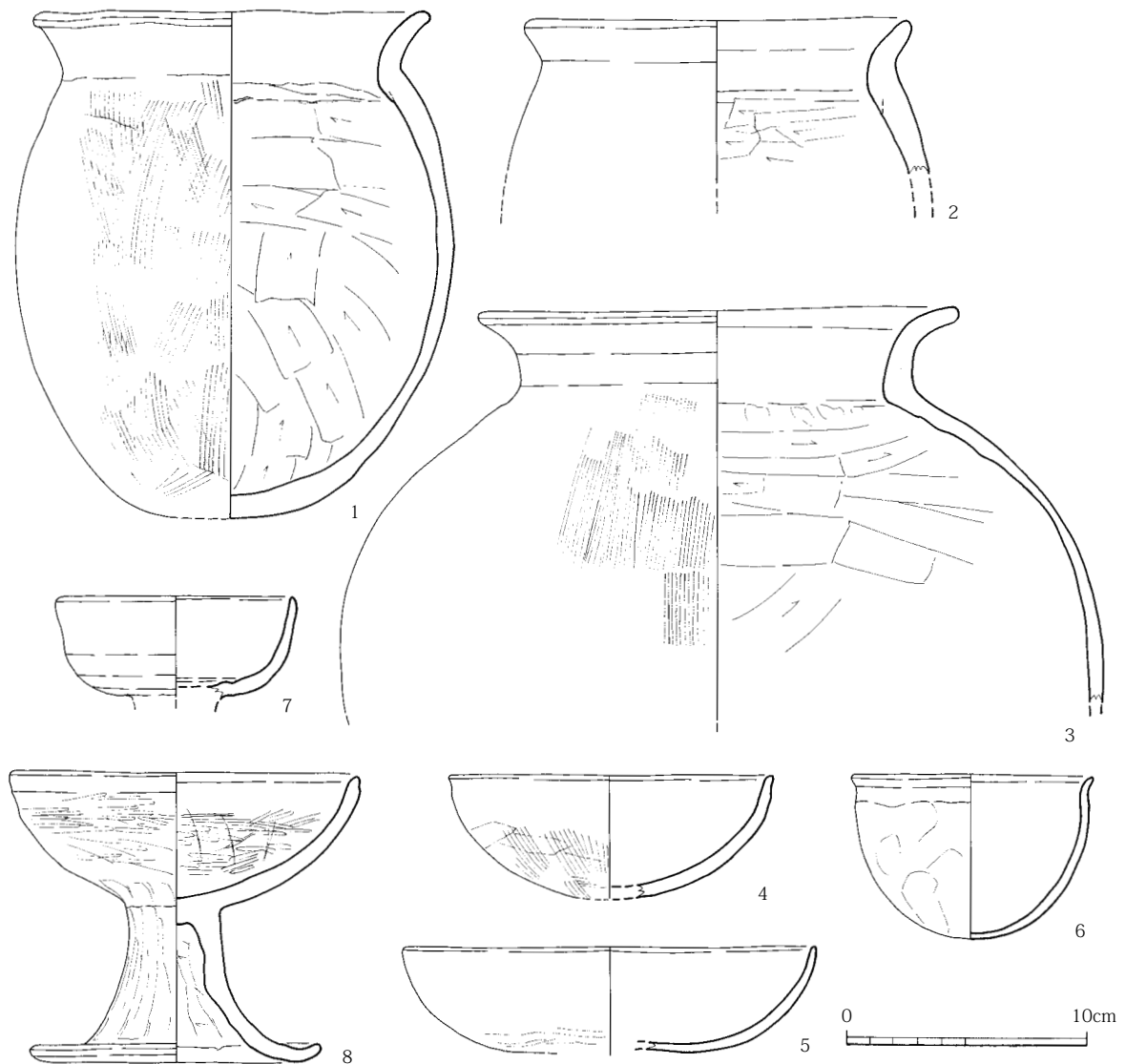
7・8は土師器の高杯である。7の内外面の調整はナデである。口径10.0cmである。8の内外面の調整はミガキである。口径14.5cm、底径10.0cm、器高12.7cmである。

6号竪穴住居跡 (図版10、第18図)

調査区の中央付近で検出した。南側は落ちにより失われている。平面プランは不整形であるが、東西 $3.6m + a$ 、南北 $3m + a$ である。壁の深さは0.4mほどであり、壁小溝はない。北西部にベッド状の高まりが認められた。ピット2基を検出したが、いずれも浅い。遺物は布留式古段階の土



第16図 3～5号竖穴住居跡実測図 (1/60)

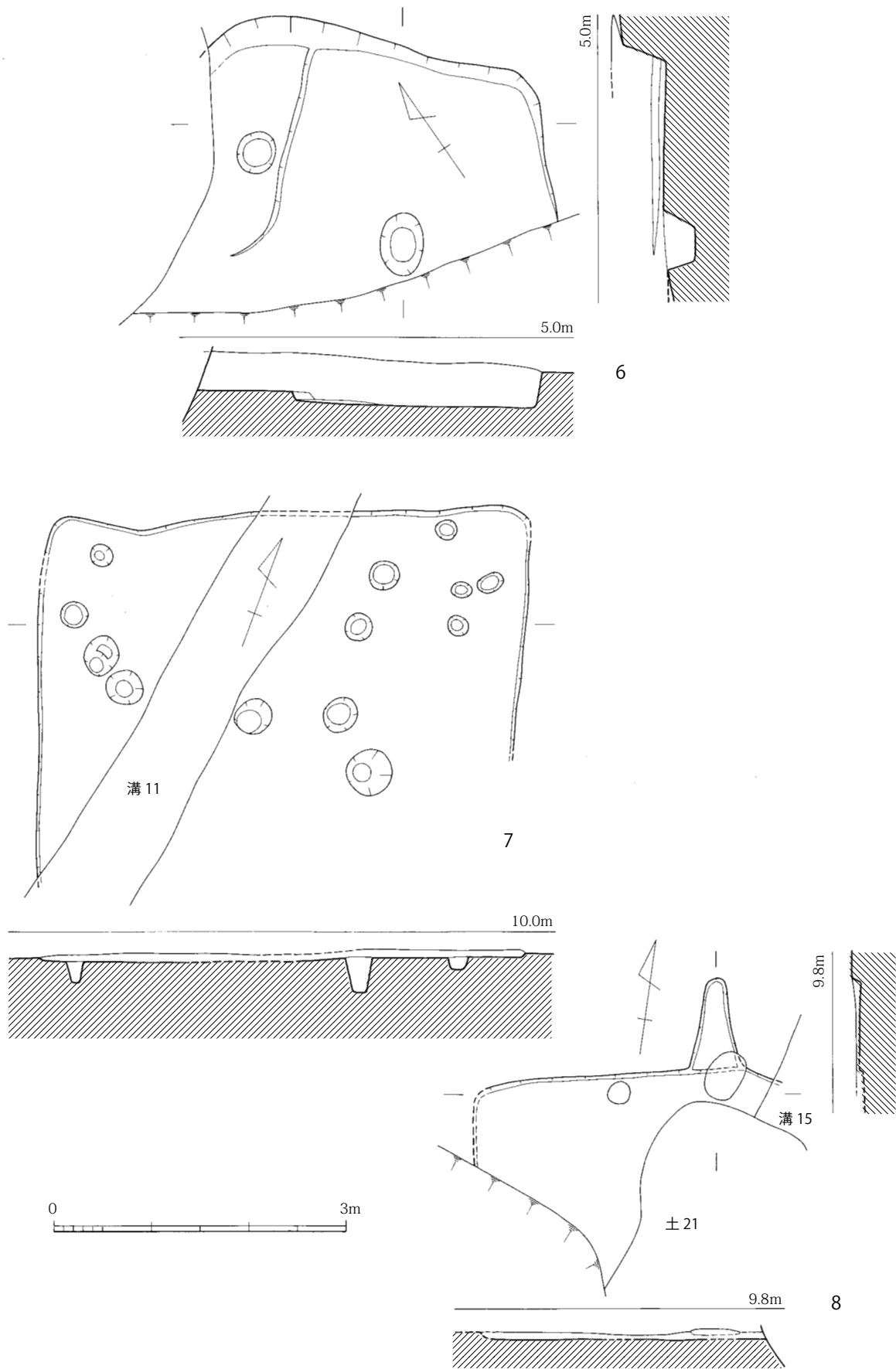


第17図 5号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

師器が出土した。

出土遺物 (図版 32・33、第 19～21 図)

1・2は二重口縁壺である。1は全体に鋭さが無い。やや楕円形の胴部で底部がしっかり残る。口縁部は屈曲部分から緩やかに広がる。内外面ともにナデ調整であるが、部分的に刷毛目が残る。口径14.0cm、胴部最大径15.5cm、底径2.3cm、器高14.2cmである。2は二重口縁壺であるが、屈曲部分に突帯を貼り付けたものである。内外面の調整は摩滅のため不明である。口径16.6cmである。3・4は土師器の壺である。3は口縁が大きく広がるものである。胴部外面の調整は刷毛目、内面はケズリである。その他の部分はナデである。口径13.8cmである。4は口縁が直線的に広がるものである。胴部外面はタタキの後、部分的に刷毛目である。胴部内面はケズリである。口径13.4cmである。5は小型の壺である。外面調整は刷毛目の後、部分的にナデである。胴部内面は上位がケズリ、下位がナデである。口径8.0cm、胴部最大径10.0cm、器高10.0cmである。



第 18 図 6～8 号竖穴住居跡実測図 (1/60)

6～23は布留式系統の甕である。6は肩部に波状文を施す。口径15.3cm、胴部最大径19.0cm、器高21.4cmである。7は肩部に刻みを施すものである。口径16.6cm、胴部最大径23.0cmである。8の口径は15.0cmである。9は肩部に波状文を施す。口径15.6cmである。10の口径は16.0cmである。11の口径は15.0cmである。12の口径は15.8cmである。13の口径は17.0cmである。14の口径は16.0cmである。15の口径は17.0cmである。16は胴があまり張らないものである。口径14.0cmである。17は口径16.0cmである。18は胴が大きく張るものである。口径15.0cmである。19の口径は16.0cmである。20の口径は15.0cmである。21は口径15.0cmである。22は口径16.0cmである。23は口径16.0cmである。24は山陰系の甕である。全体のつくりはシャープではない。口径25.0cmである。25は小型の甕である。胴部外面の調整は刷毛目、胴部内面の調整はケズリである。口径13.6cm、胴部最大径15.0cmである。

26～36は土師器の高杯である。26・27は杯部の屈曲が無く、口縁端部がわずかに広がるものである。26の口径は16.2cmである。27は摩滅しているが、内面にミガキが残る。口径21.5cmである。28～30は杯部が屈曲するものである。いずれも内外面の調整はミガキである。28の口径は18.2cmである。29の口径は19.6cmである。30の口径は21.4cmである。31は碗状の杯部である。内外面の調整はナデである。口径12.0cmである。32の底径は9.8cmである。33は直線的に広がる脚部である。外面はミガキ、内面はケズリである。底径10.2cmである。34はわずかに外反しながら開く脚部である。焼成前に穿孔を行う。底径9.7cmである。35の外面はミガキである。内面は削って成形を行っている。底径9.1cmである。36はやや膨らみながら開く脚部である。外面は刷毛目、内面はケズリである。底径10.0cmである。37は脚付の碗である。碗部の外面は縦方向のケズリである。その他の部分はナデである。口径16.0cm、底径7.6cm、器高8.2cmである。38は器台である。口径10.7cmである。

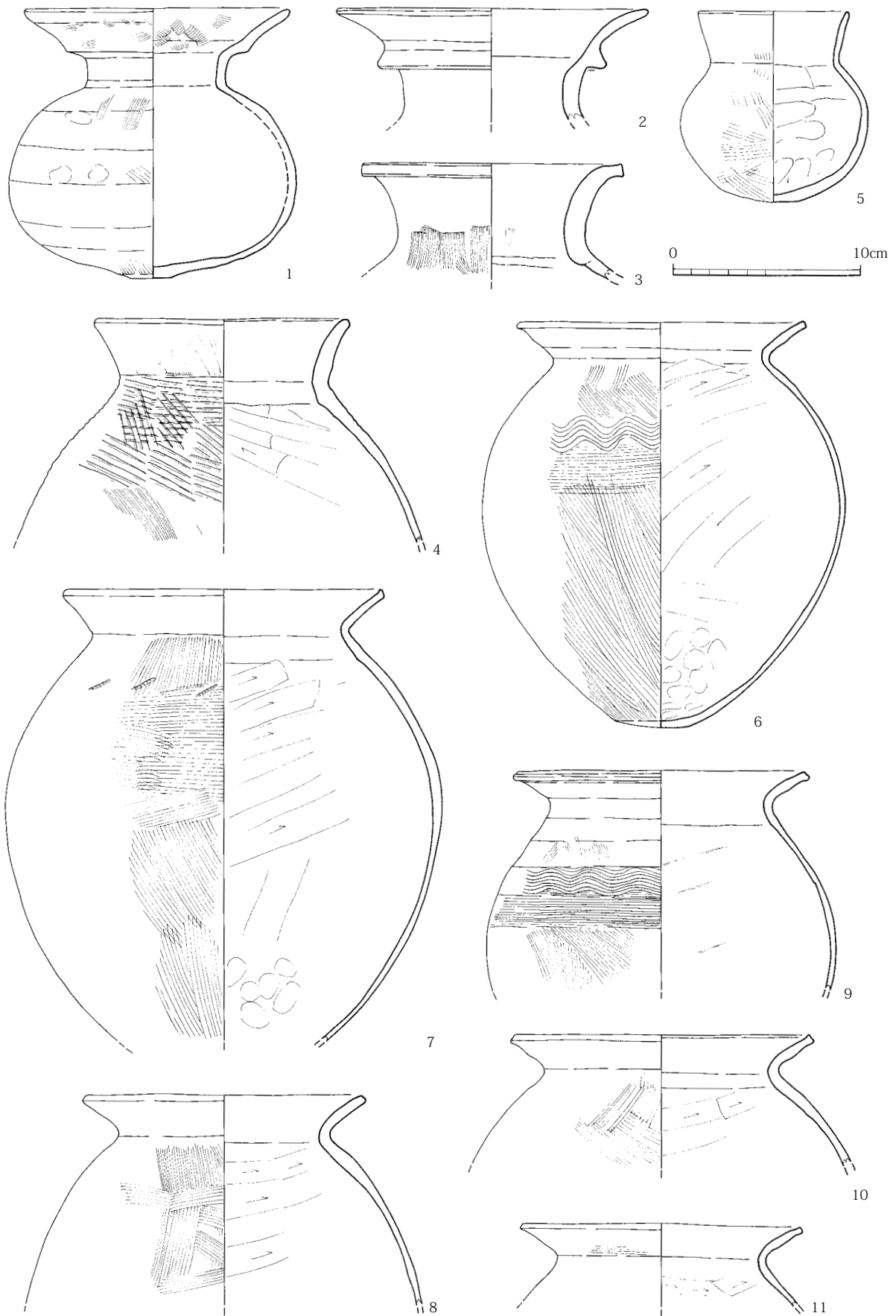
39～43は碗である。39は浅めの碗で、内外面の調整はナデである。口径9.5cm、器高2.6cmである。40の外面はケズリである。口径10.1cm、器高3.2cmである。41の口径は11.6cmである。42はわずかに外反する口縁端部である。外面の調整はケズリで、内面に刷毛目が残る。口径15.2cm、器高6.2cmである。43の内外面はナデである。口径11.7cm、器高6.0cmである。44は小型の壺である。手づくねで成形されており、外面には刷毛目が残る。胴部最大径8.0cmである。

7号竪穴住居跡（図版11、第18図）

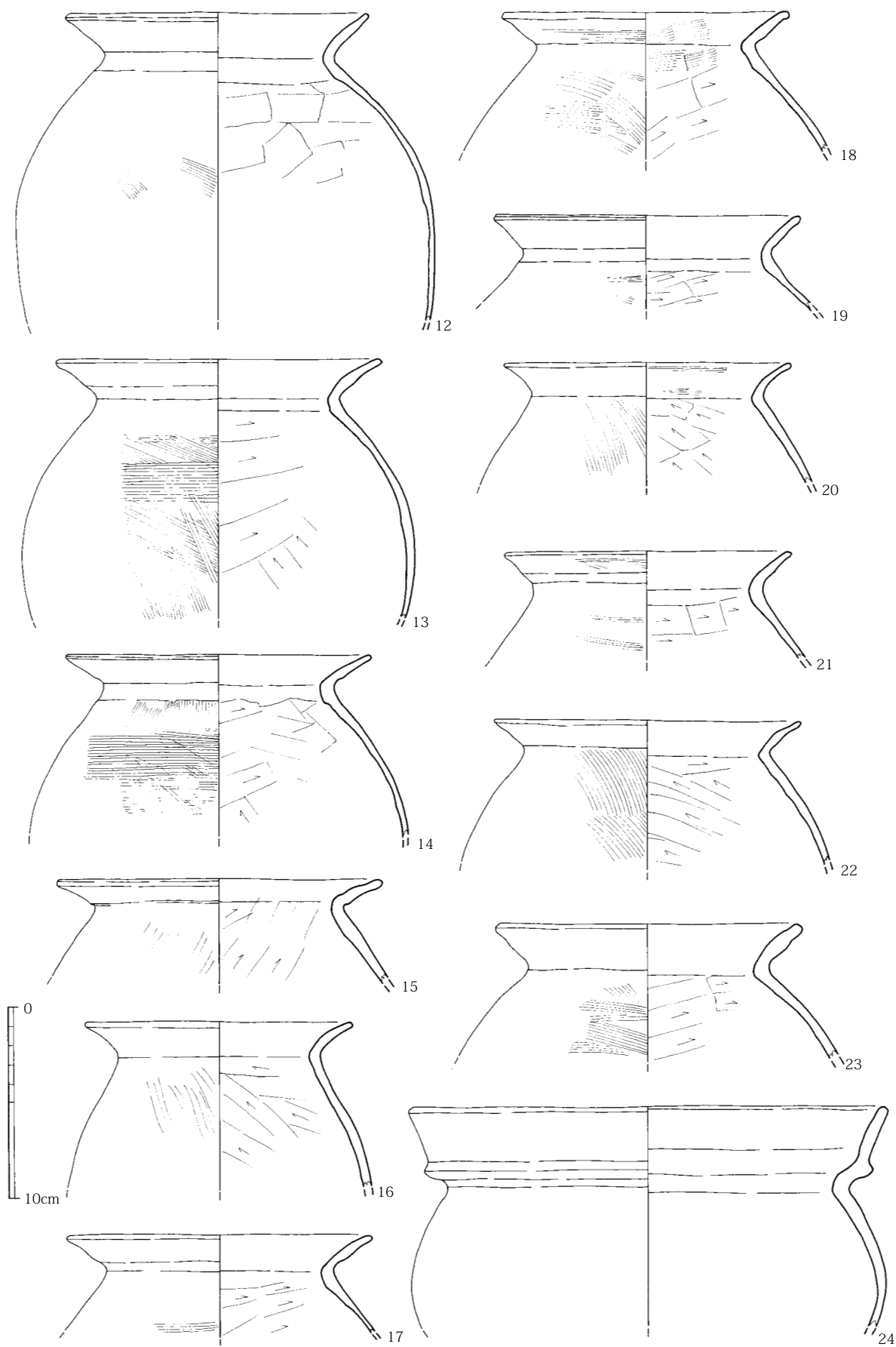
調査区の北側中央付近で検出した。16・17号土坑、11号溝に切られる。平面プランは、東西5.0m、南側は削られ、消失しており、3.6m + aである。壁の深さは5cmほどで、壁小溝等はない。複数のピットを検出したが、支柱穴となりえそうなものはない。図化可能な遺物は出土していない。

8号竪穴住居跡（第18図）

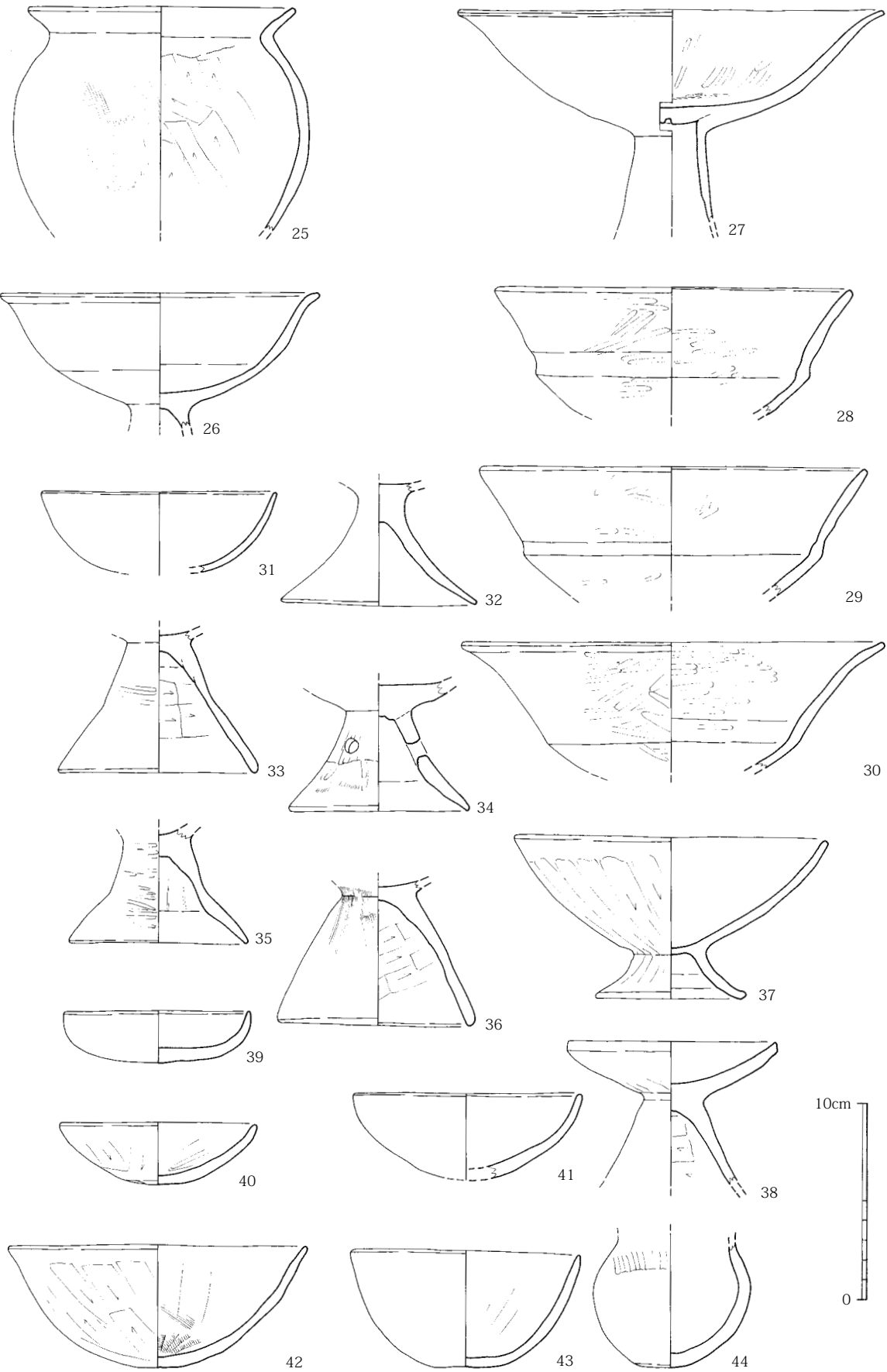
調査区の北側中央付近で検出した。21号土坑、15号溝に切られる。全体に削られており、北壁の部分のみが残存する。東西3.0mである。壁の深さは5cmほどで、壁小溝等はない。北壁には約1mの突出があり、カマドの煙道の痕跡とも考えられるが、被熱等は確認できなかった。遺物は土師器が出土した。



第19图 6号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/3)



第 20 图 6号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)



第21图 6号竖穴住居跡出土土器实测图③ (1/3)

出土遺物（第23図1）

1は土師器の甕である。球形の胴部に直線的に広がる口縁が付く。胴部外面の調整は刷毛目である。内面の調整はナデである。口径20.4cm、胴部最大径23.0cmである。

9号竪穴住居跡（第22図）

調査区の北側やや西寄りで検出した。11・14号溝に大きく切られる。平面プランは、東西3.0m + a、南北2.8m + aである。壁の深さは0.2mほどで、壁小溝はない。南壁中央付近に1.1m × 0.8mの方形の屋内土坑が掘られる。部分的にテラスを持ち、深さは0.7mである。ピットを複数検出しているが、いずれも後世の掘り込みと考えられる。遺物は土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（第23図2～7）

2は加飾した二重口縁壺の口縁部である。屈曲部を大きく肥厚させている。外面に2個一単位の竹管文が施される。3～5は土師器の壺である。3は内外面ともに刷毛目調整である。口縁はわずかに外反しながら大きく広がる。口径14.4cmである。4は内外面ともに刷毛目である。口径17.3cm、胴部最大径25.0cmである。5は底部である。底径4.0cmである。6は甕の口縁部である。胴部内面はケズリである。7は混入の須恵器である。内外面の調整はナデである。

10号竪穴住居跡（第22図）

調査区の北側中央付近で検出した。17号土坑、13号溝に切られる。平面プランは、東西2.4m + a、南北1.9m + aである。壁の深さは15cmほどで、壁小溝はない。住居に伴うピットは検出されなかった。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第23図8・9）

8は土師器の高杯の杯部である。屈曲部から大きく広がる。口径20.1cmである。9は土師器の高杯脚部である。内外面の調整はミガキである。4ヶ所に焼成前穿孔を施す。底径14.0cmである。

11号竪穴住居跡（第22図）

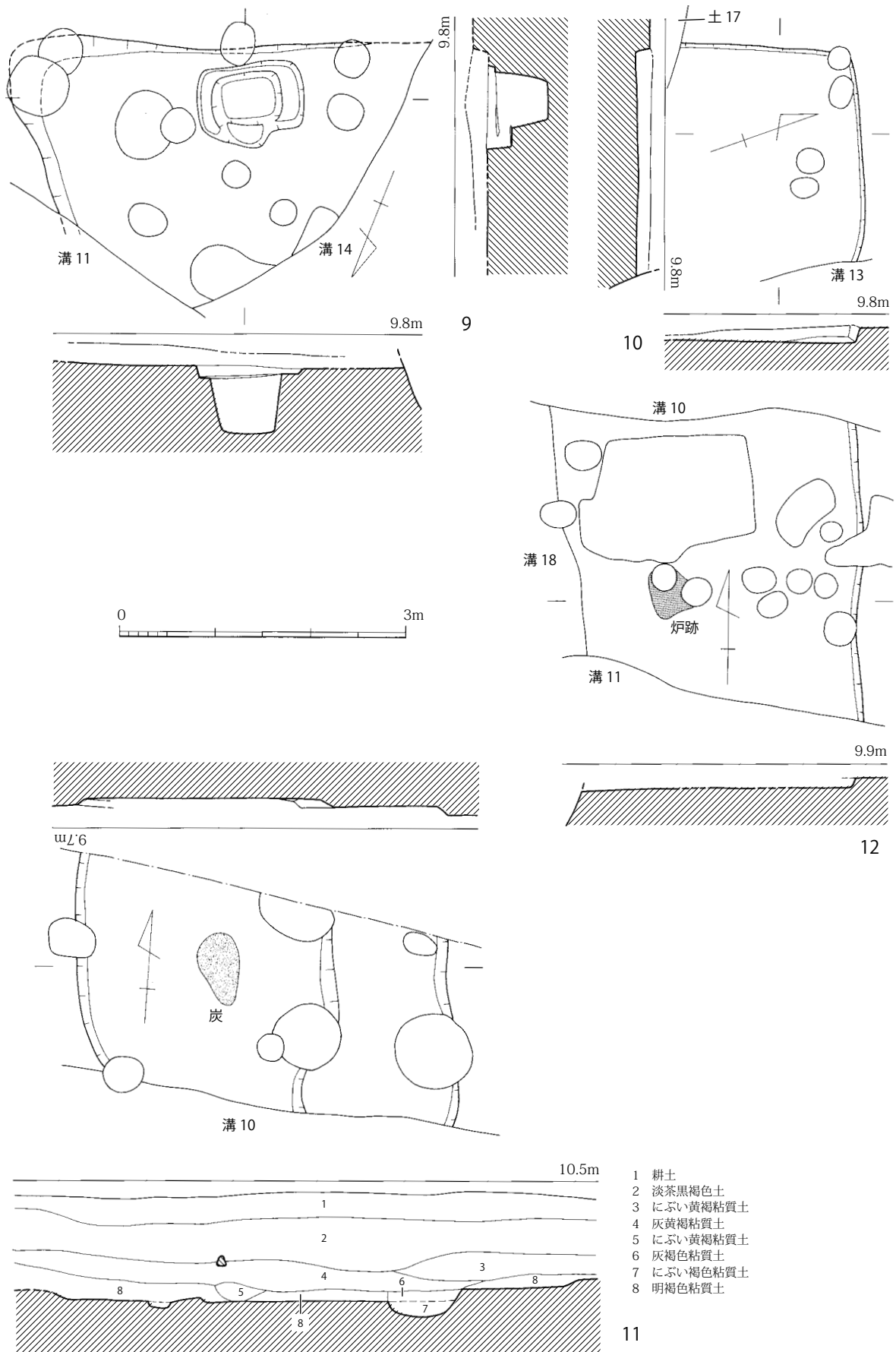
調査区の北端部中央付近で検出した。10号溝に切られる。また、2号掘立柱建物跡と重複するが、前後関係は不明である。北側は調査区外へ延びており、詳細は北のⅢ-B区調査終了後に報告する。遺物は土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（図版33、第23図10～12）

10は土師器の高杯である。脚部内面はケズリである。脚端部はわずかに上を向く。底径9.2cmである。11は須恵器の杯蓋である。天井付近は回転ヘラ削りである。口径11.8cm、器高2.9cmである。12は混入の瓦器碗である。内外面の調整はミガキである。底径は6.6cmである。

12号竪穴住居跡（第22図）

調査区の北側中央付近で検出した。10・11・18号溝に切られ、東壁しか残存しない。平面プランは、東西3.2m + a、南北3.1m + aである。壁の深さは10cmほどで、壁小溝はない。中央付近で炉跡と見られる焼土の集積を検出した。ピットを複数検出しているが、いずれも後世の掘り



第22図 9～12号竪穴住居跡実測図 (1/60)

込みと考えられる。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 23 図 13～15）

13 は土師器の甕である。外反しながら開き、端部をつまみあげる。内外面の調整はナデである。口径 16.7cm である。14 は土師器の高杯である。脚部が中実である。脚部には焼成前に穿孔が施される。15 は碗である。内外面の調整はナデである。口径 13.7cm である。

13 号竪穴住居跡（第 24 図）

調査区の北側やや東寄りで検出した。12 号土坑、10 号溝に切られる。平面プランは、東西 5.2m、南北 4.0m である。壁の深さは 30cm ほどで、壁小溝はない。中央付近で炉跡と見られる焼土の集積を検出した。南壁中央付近には 0.8m × 0.8m の屋内土坑が掘られる。深さは 15cm ほどで、内部からは高杯等の土器がまとまって出土した。ピットを複数検出しているが、いずれも後世の掘り込みと考えられる。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（図版 33、第 25 図 1～3）

1 は土師器の壺である。球形の胴部で、底がしっかり残っている。胴部最大径 25.1cm、底径 4.0cm である。2 は碗である。内外面の調整はミガキである。口径 14.5cm、器高 4.7cm である。3 は手づくね土器である。内外面に強いナデ痕が残る。

14 号竪穴住居跡（図版 11・12、第 24 図）

調査区の南側西寄りで検出した。平面プランは、東西 5.5m、南北 5.8m のほぼ正方形に近い。壁の深さは最も残りのよい南側で 0.7m ほどである。北西部と南東部分に深さ 10cm ほどの壁小溝を持つ。西壁中央付近に台状の高まりを検出した。床面の東寄りで検出した P-1、P-2 は支柱穴であると考えられるが、西寄りでは検出できなかった。埋土は黒褐色土を中心に堆積する。遺物は石庖丁（第 82 図 4）が出土した。

15 号竪穴住居跡（図版 12、第 26 図）

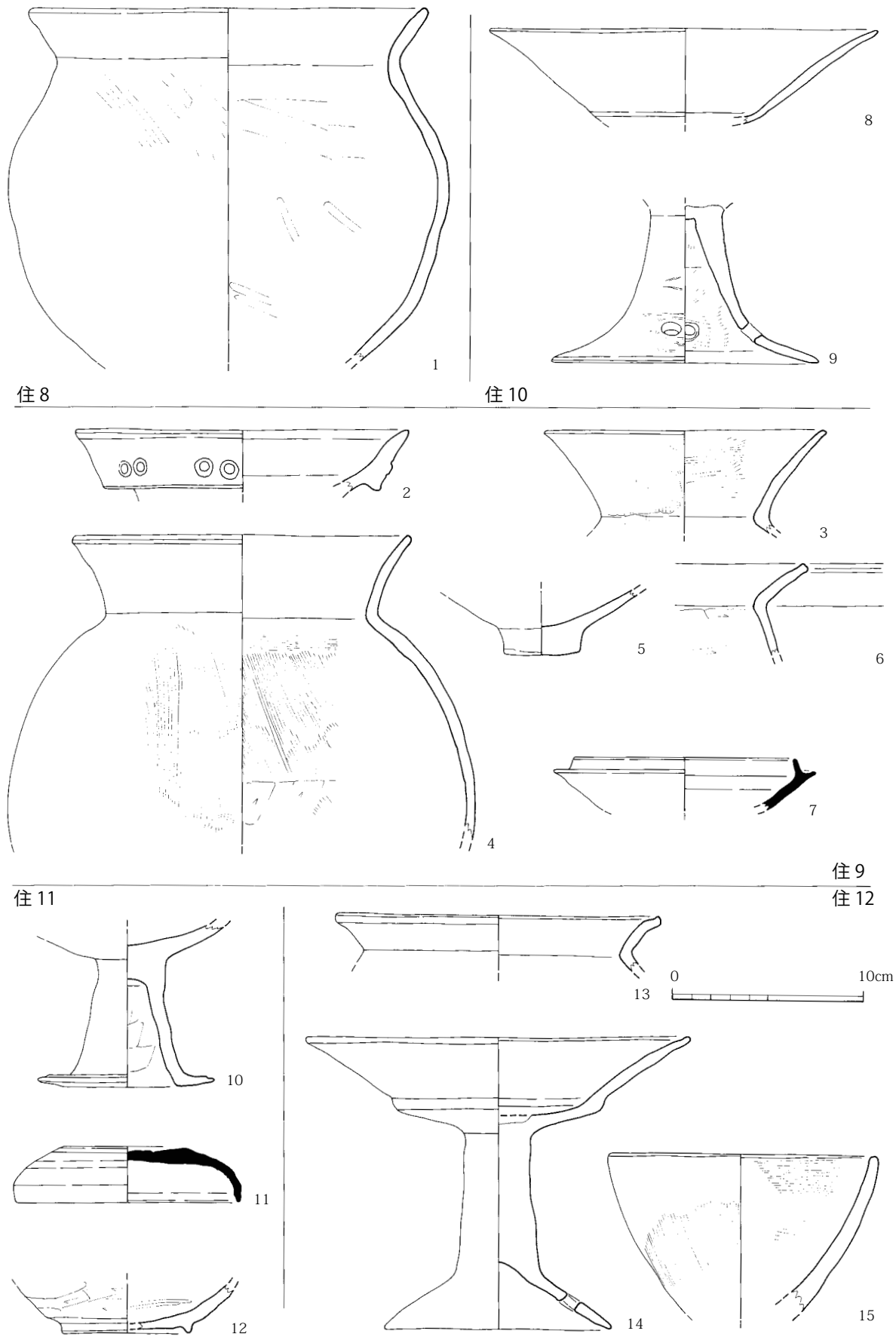
調査区の南側東寄りで検出した。30・32 号土坑に切られる。平面プランは、東西 3.4m + a、南北 2.9m の隅丸方形を呈する。壁の深さは最も残りの良い部分で 0.6m ほど、壁小溝はない。壁の立ち上がりは急である。床面で複数のピットを検出したが、いずれも支柱穴とはなりえない。図化できる遺物は出土していない。

16 号竪穴住居跡（図版 12、第 26 図）

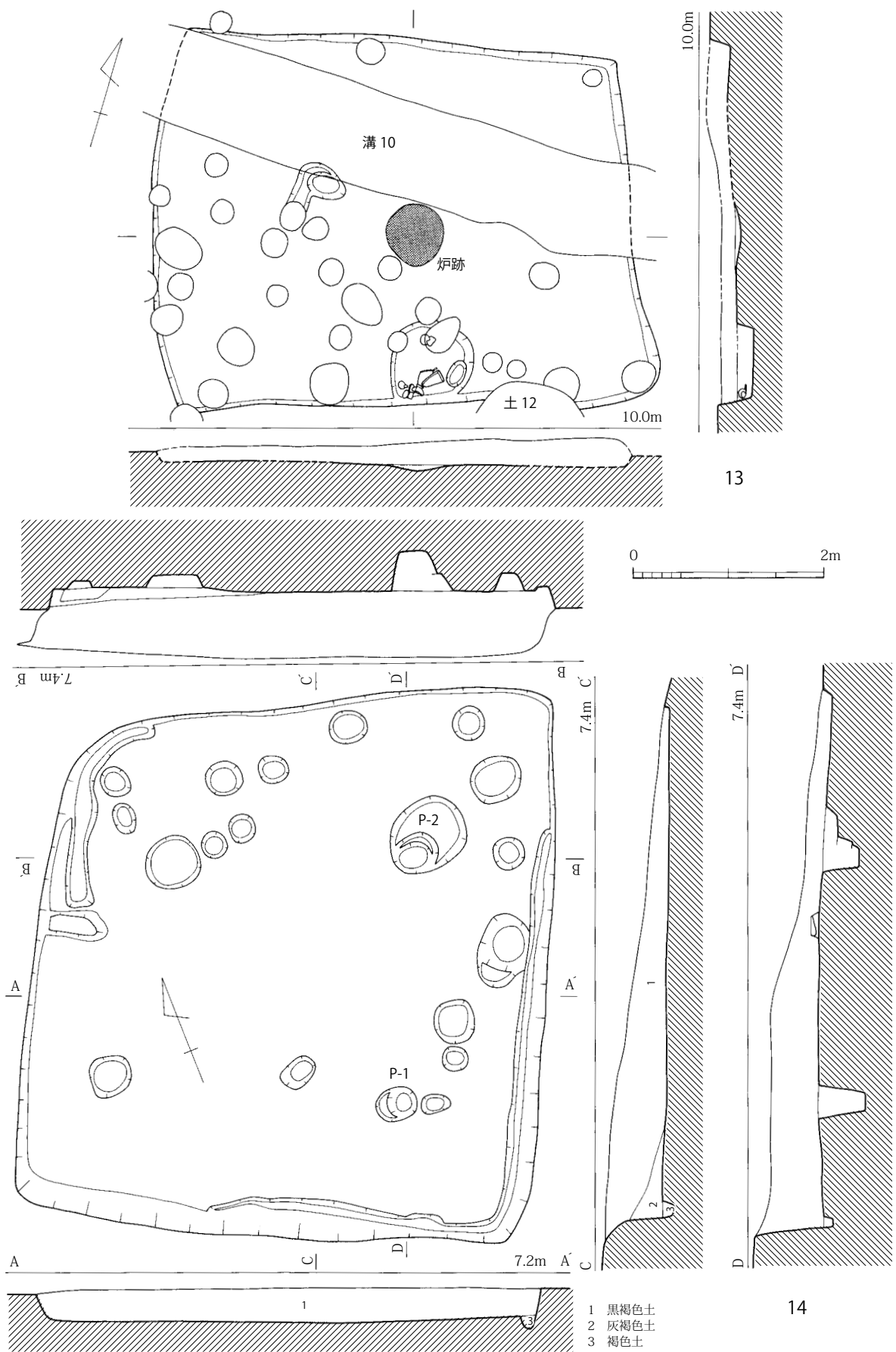
調査区の南側やや西寄りで検出した。40 号土坑、41 号土坑を切り、35 号土坑、7 号井戸に切られる。平面プランは東西 5.1m、南北 4.5m + a である。壁の深さは最も残りの良い部分で 0.6m ほど、部分的に壁小溝が巡る。壁の立ち上がりはやや急である。西側中央部分にカマドが設置される。床面で複数のピットを検出している。遺物は土師器と須恵器が出土した。

カマド（図版 13、第 26 図）

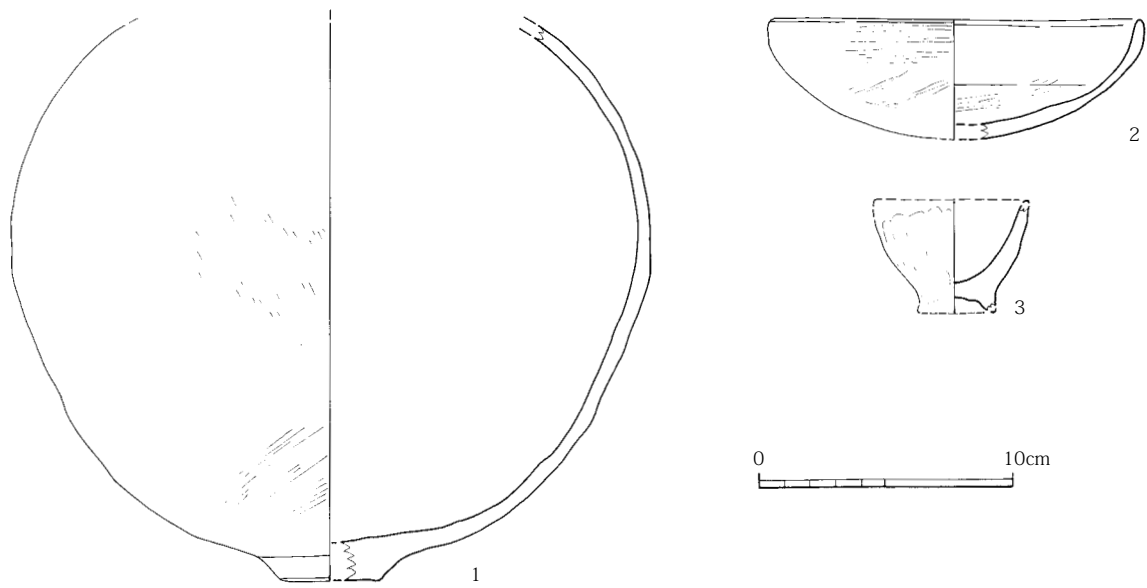
西壁中央部で検出した。両袖は白灰色の粘土を用いており、両側ともに高さ約 10cm 残る。中央に土師質の支脚が据えられたままの状態出土している。カマド内には炭化物が広がる。



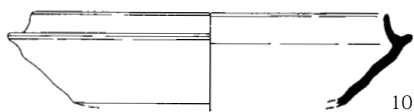
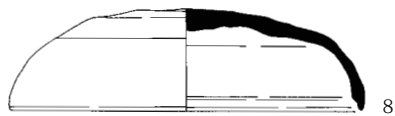
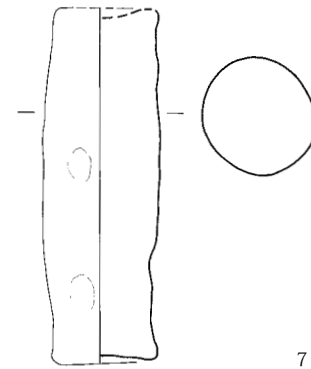
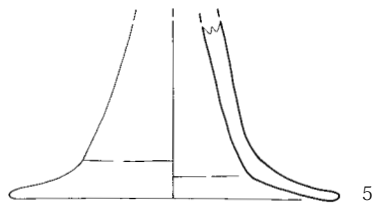
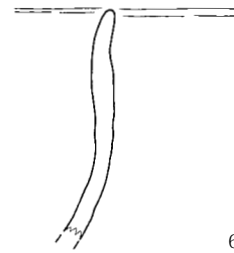
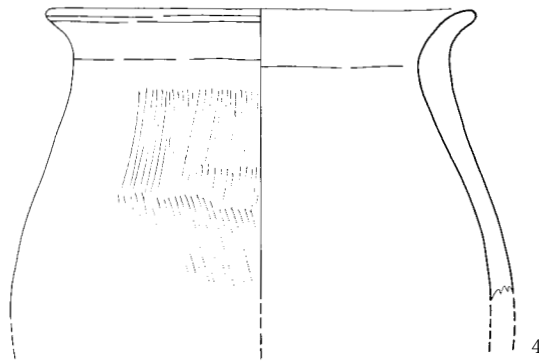
第23图 8~12号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)



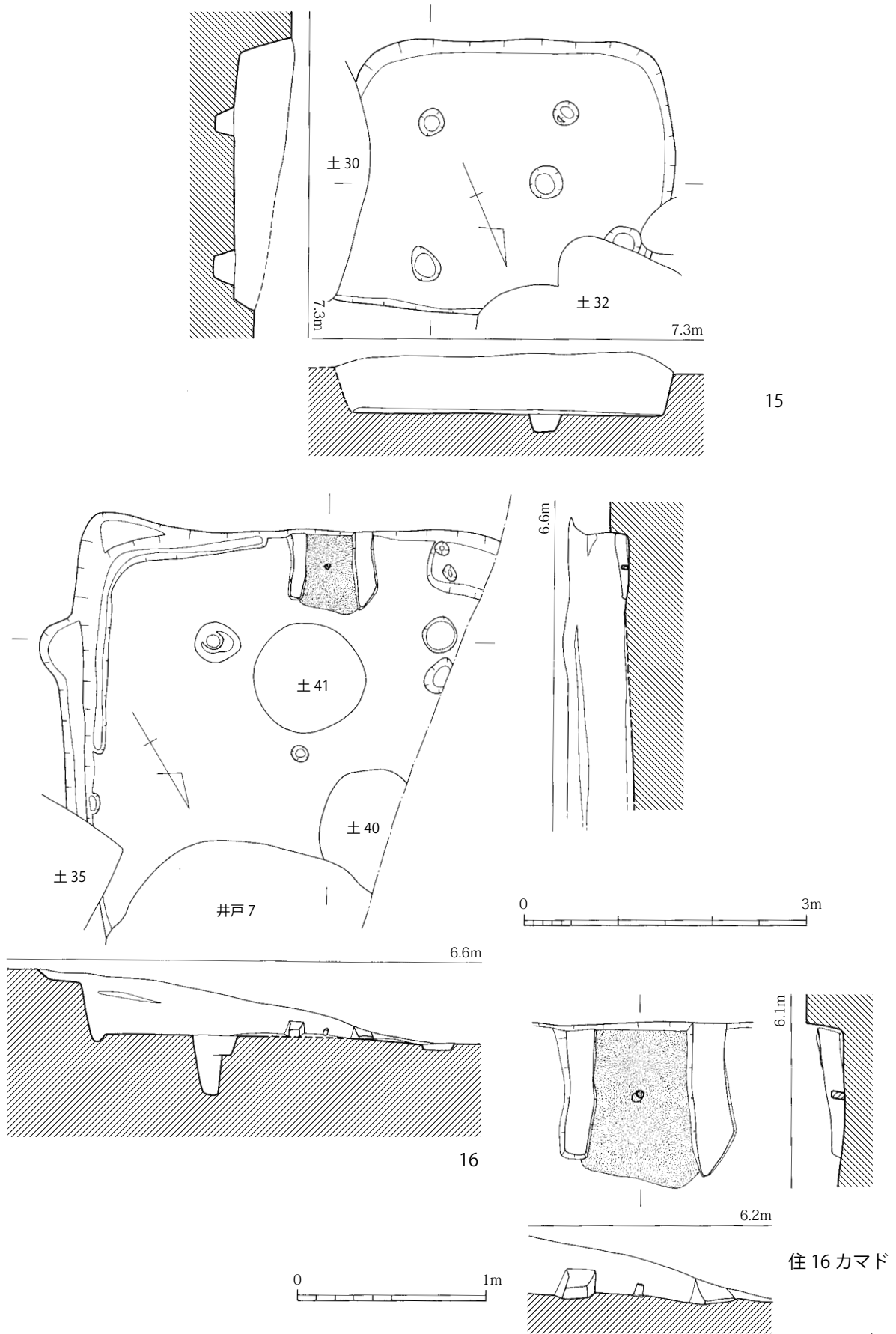
第 24 图 13·14 号竖穴住居跡実測图 (1/60)



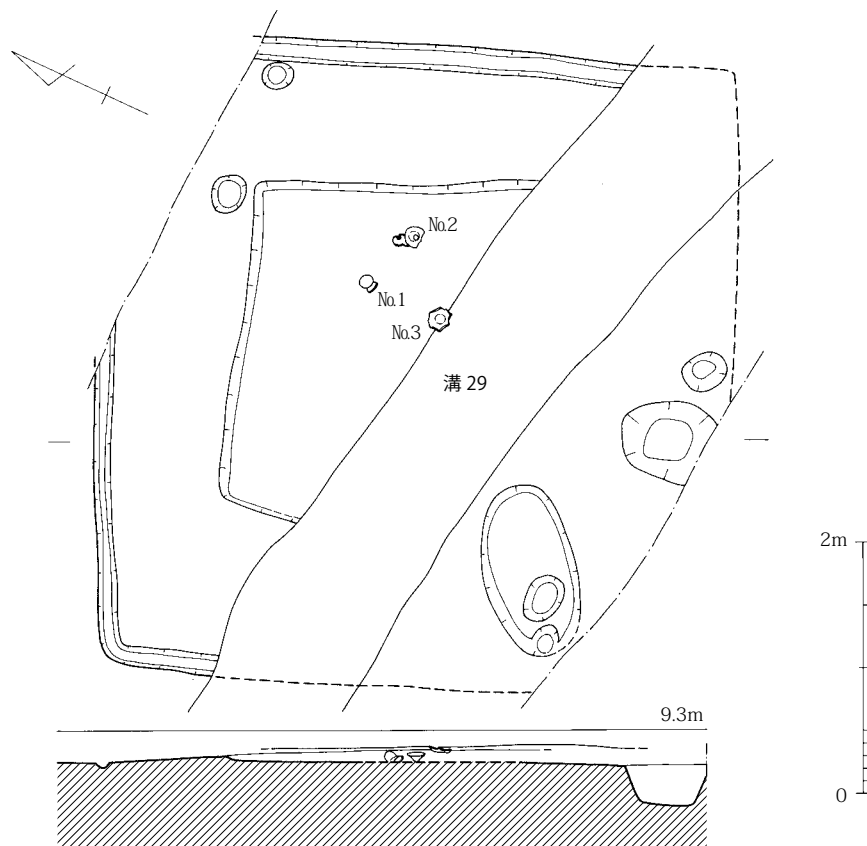
住 13
住 16



第 25 图 13·16 号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第26図 15・16号竪穴住居跡実測図 (カマドは1/30、他は1/60)



第 27 図 17 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第 25 図 4 ~ 11)

4 は土師器の甕である。胴はあまり張らない。外面の調整は刷毛目、内面の調整はケズリである。5 は高杯の脚部である。底径 13.0cm である。6 は甑もしくは鉢の口縁部である。7 は支脚である。カマドの中央から据えられたままの状態出土した。

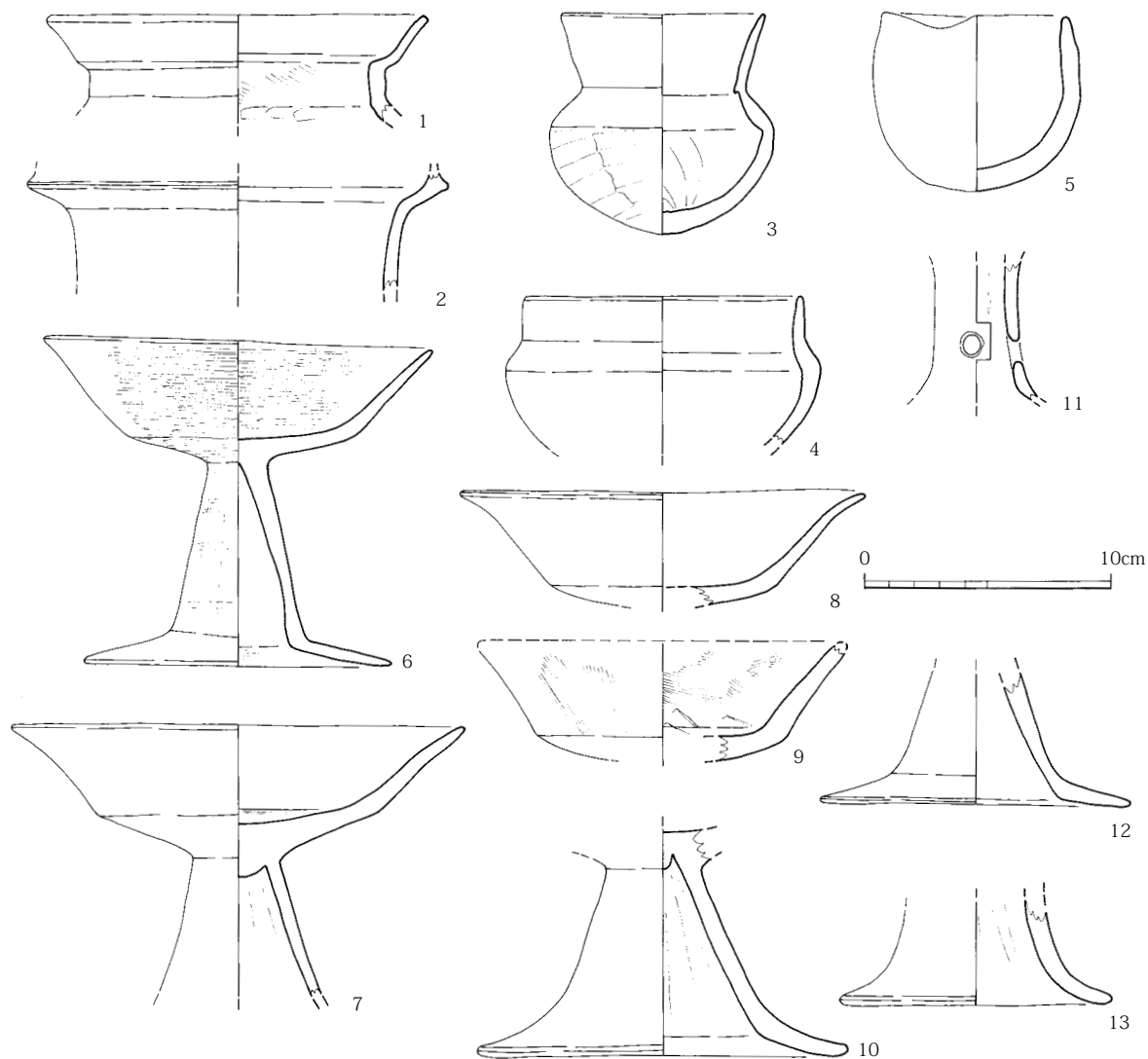
8・9 は須恵器の杯蓋である。8 は口径 14.0cm、器高 4.0cm である。9 は口径 16.0cm、器高 4.4cm である。10 は須恵器の杯身である。口径 14.0cm である。11 は須恵器の甕である。内外面の調整はナデである。口径 15.0cm である。

17 号竪穴住居跡 (図版 13、第 27 図)

調査区の北側西端部で検出した。29 号溝に切られる。平面プランは東西 5.0m、南北 5.0m のほぼ正方形をなす。壁の深さは約 0.1m で、全体に壁小溝が巡る。中央部分が一段深く掘り込まれている。床面からは複数のピットを検出したが、いずれも支柱穴ではないであろう。遺物は土師器、鞆の羽口 (第 85 図 9) が出土した。

出土遺物 (図版 33、第 28 図)

1・2 は二重口縁壺である。1 は内面に刷毛目が残る。口径 15.5cm である。2 の最大径は 17.0cm である。3・4 は土師器の壺である。3 は No. 1 の位置から出土した。内外面ともにナデ調整である。口径 8.2cm、胴部最大径 9.0cm、器高 8.9cm である。4 は口径 11.3cm である。5 は碗



第28図 17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

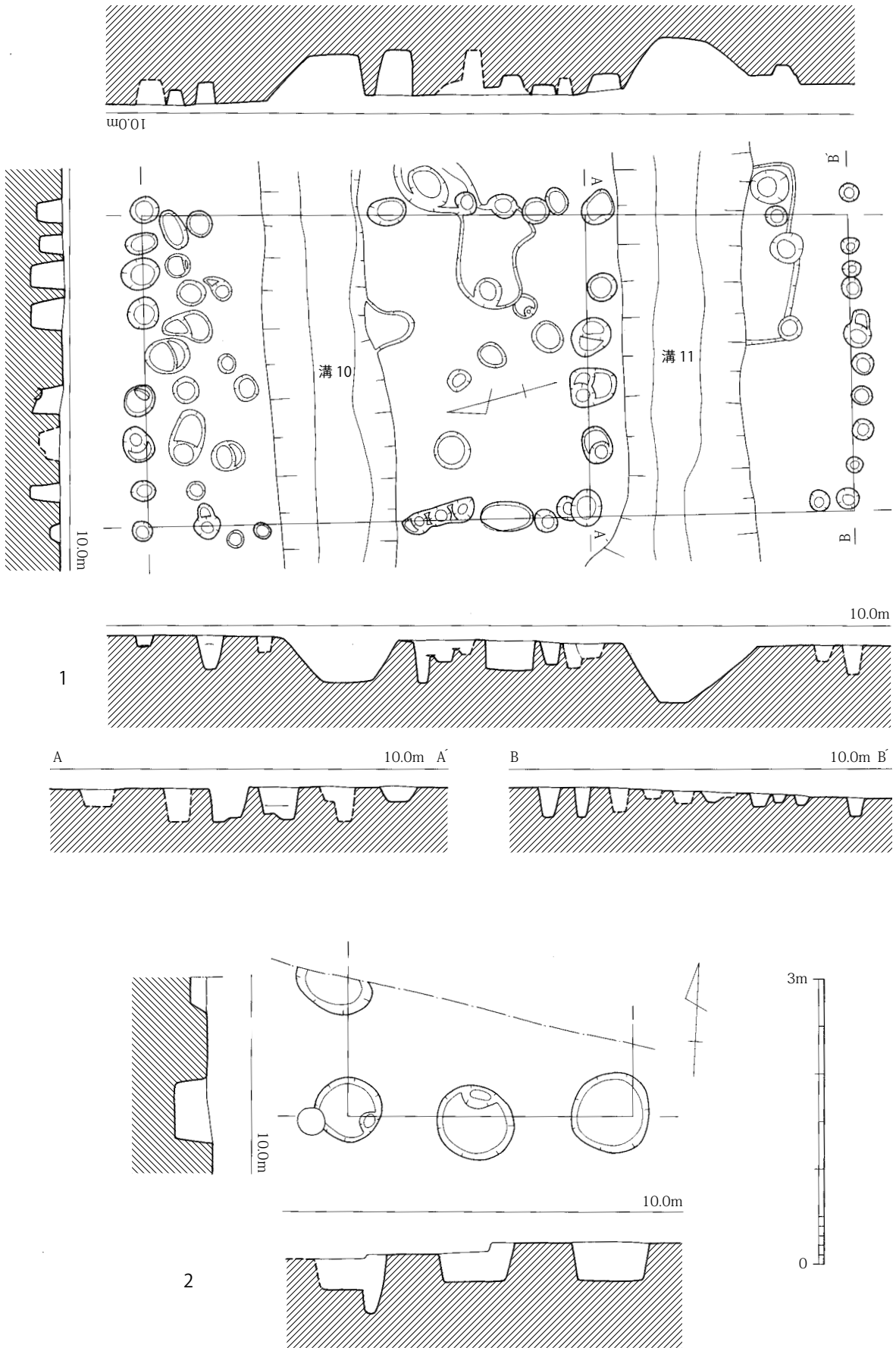
である。内外面の調整はナデであり、口径7.6cm、器高7.1cmである。

6～13は土師器の高杯である。6の調整は内外面ともに横方向のミガキである。口径15.8cm、底径12.4cm、器高13.5cmである。7はNo.3の位置から出土した。口径18.4cmである。8の口径は16.4cmである。9の調整は内外面ともにナデである。10はNo.2の位置から出土した。底径15.0cmである。11は焼成前に穿孔を施している。12は底径12.6cmである。13は底径11.0cmである。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版13、第29図)

調査区の北側中央付近で検出した。東西8～9間、南北5間+aの建物である。直線的に並ばない小さな柱が連続していること、先に溝10・11を掘削してしまったため、前後関係および正確な柱の数はわからない。さらに調査区の北側に延びる可能性もある。梁行3.2m、桁行7.3mである。図化できる遺物は出土していない。



第29图 1·2号掘立柱建物跡実測图 (1/60)

2号掘立柱建物跡（図版 14、第 29 図）

調査区の北側やや東寄りで検出した。11号住居跡と重複するが、前後関係は不明である。東西2間、南北1間 + a で更に北側に延びる。詳細は北のⅢ - B区調査終了後に報告する。図化できる遺物は出土していない。

（3）土坑

1号土坑（図版 14、第 30 図）

調査区の中央やや北寄りで検出した。平面プランは 1.7m × 1.4m の楕円形で深さ 0.2m、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は中世の捏鉢の底部が出土しているが、整理段階で所在不明である。

2号土坑（図版 14、第 30 図）

調査区の中央付近で検出した。平面プランは 2.85m × 0.4m の長楕円形で、深さは 0.1m ほどである。遺物は近世陶磁器が出土しているが、整理の段階で所在不明である。その他に不明鉄器（第 86 図 4）が出土した。

3号土坑（図版 15、第 30 図）

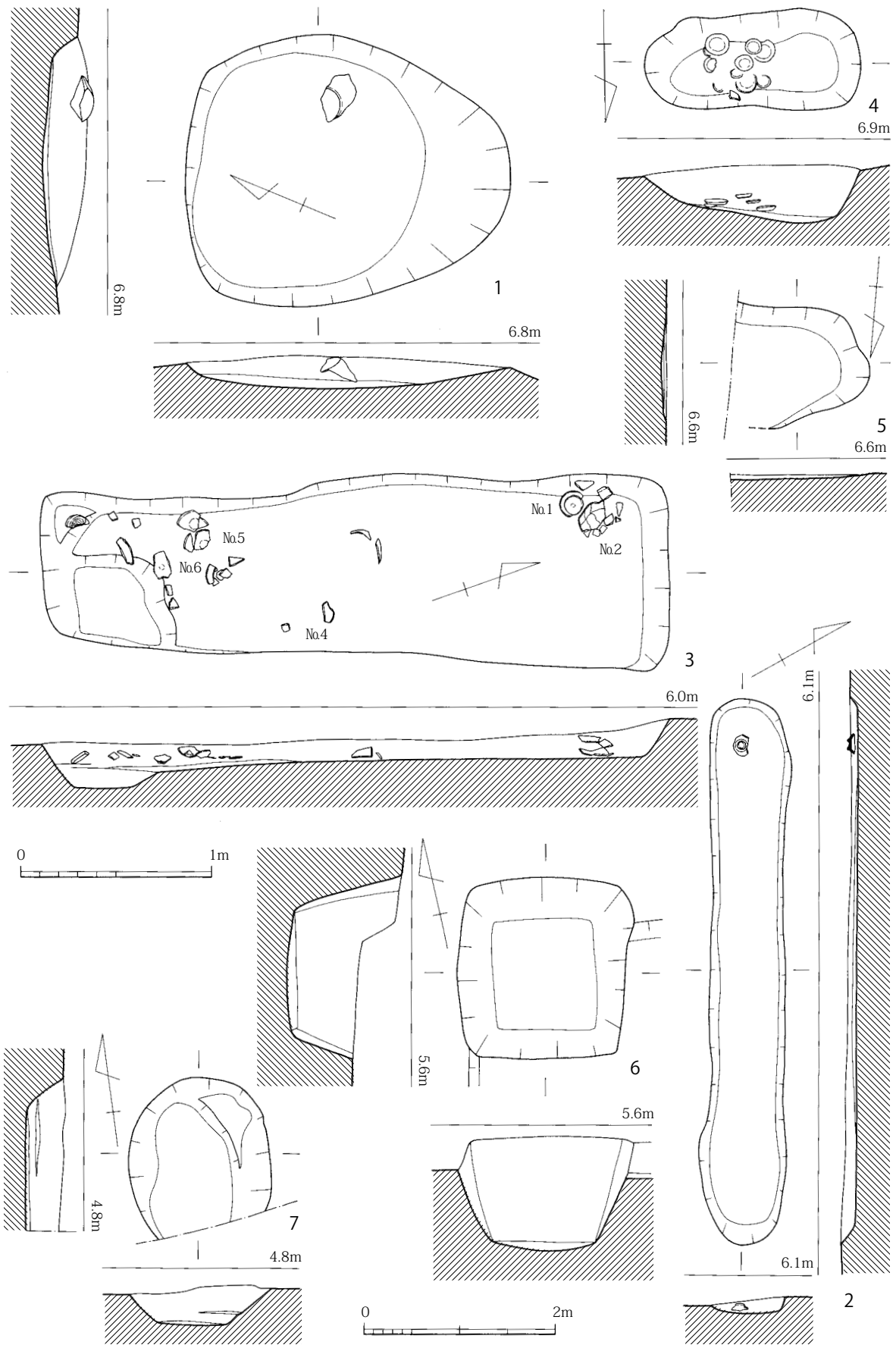
調査区の中央やや東寄りで検出した。南半分は古代以降の包含層より掘り込まれていた。7号溝に切られ、2号住居跡を切る。平面プランは 3.3m × 1m の長方形である。深さは 0.2m ほどで、南側は一段深くなっている。遺物は中世の土器がまとまって出土しているほか、石鍋（第 83 図 29）が出土した。

出土遺物（図版 34、第 31 図）

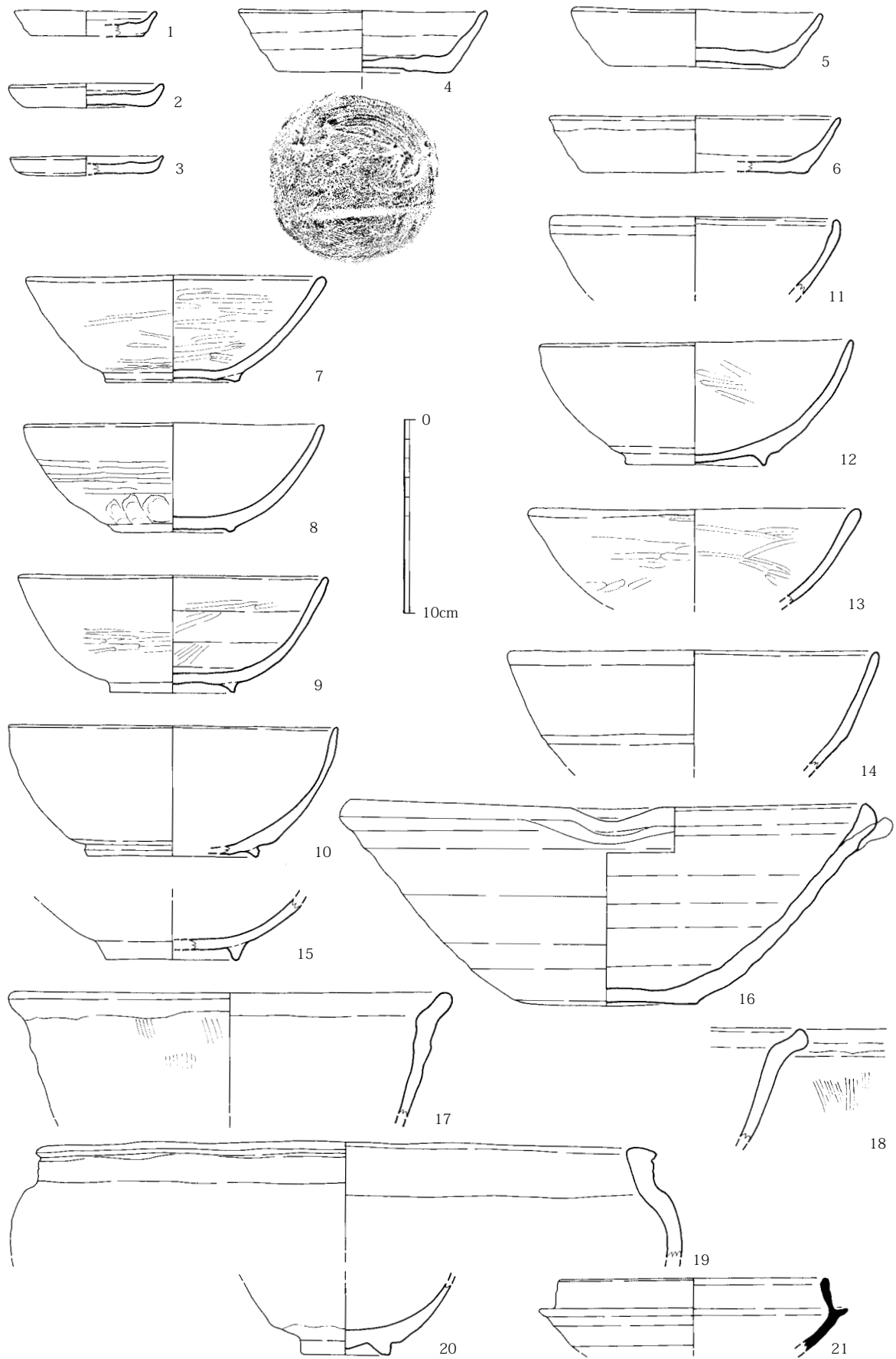
1～3は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。1はNo.1の位置から出土した。口径 7.6cm、器高 1.3cm である。2は口径 8.0cm、器高 1.2cm である。3は口径 8.0cm、器高 0.9cm である。

4～6は土師質の杯である。いずれも糸切り底である。4はNo.1の位置から出土した。口径 12.8cm、底径 8.6cm、器高 3.2cm である。5は口径 12.9cm、底径 8.9cm、器高 2.9cm である。6は口径 15.0cm、底径 11.6cm、器高 2.9cm である。

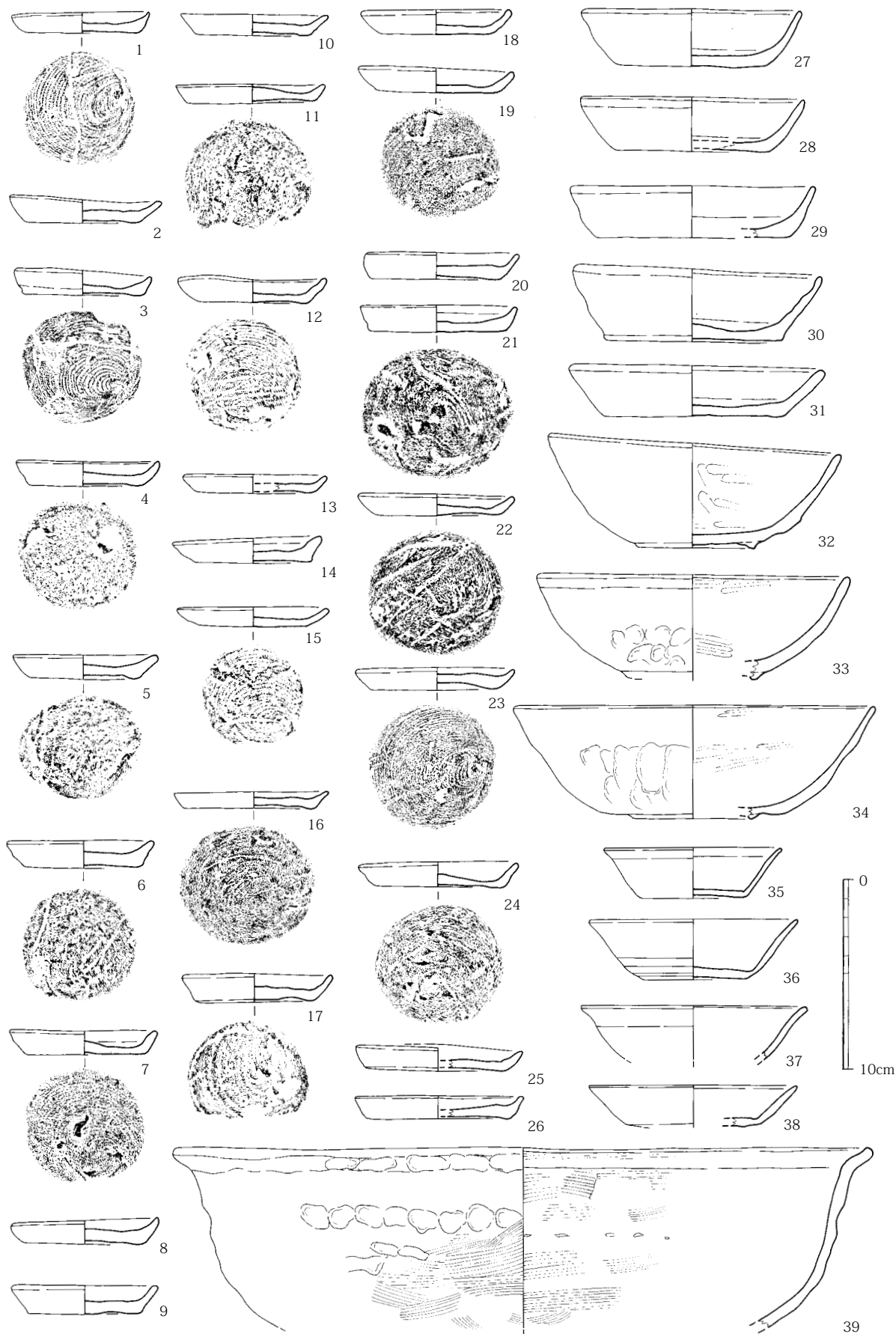
7～15は瓦器碗である。いずれも内外面ともにミガキもしくはナデである。8・9はNo.5の位置から出土した。10はNo.4の位置から出土した。12はNo.6の位置から出土した。16は東播系の捏鉢である。No.2の位置から出土した。口縁の一ヶ所が片口となっている。内外面の調整はナデである。底部は糸切りである。口径 27.7cm、底径 9.4cm、器高 10.4cm である。17は土師質の鍋である。No.1の位置から出土した。口径 23.0cm である。外面にはススが付着している。18は土師質の鍋である。No.1の位置から出土した。19は土師質の大きめの釜である。口径 32.0cm である。20は磁器の碗である。No.1の位置から出土した。高台部分は露胎である。高台径 4.6cm である。21は混入の須恵器の杯身である。口径 14.0cm である。



第30図 1~7号土坑実測図 (1~4は1/30、他は1/60)



第31图 3号土坑出土土器实测图 (1/3)



第 32 图 4 号土坑出土土器实测图 (1/3)

4号土坑（図版 15、第 30 図）

調査区の中央東寄りで検出した。平面プランは 1.1m × 0.45m の楕円形である。深さは 0.3m ほどで、壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は中世の土器及び陶磁器がまとまって出土した。

出土遺物（図版 34・35、第 32 図）

1～26 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。口径 7.4～9.0cm、器高 1.1～1.5cm である。27～31 は土師質の杯である。いずれも糸切り底である。27 は口径 11.6cm、底径 7.8cm、器高 3.0cm である。28 は口径 11.8cm、底径 8.0cm、器高 2.8cm である。29 は口径 12.8cm、底径 9.6cm、器高 2.7cm である。30 は口径 13.2cm、底径 9.0cm、器高 4.0cm である。31 は口径 13.5cm、底径 9.2cm、器高 2.8cm である。

32～34 は瓦器碗である。32 は口径 15.5cm、底径 6.3cm、器高 5.5cm である。33 は口径 16.6cm、底径 7.0cm、器高 5.5cm である。34～38 は白磁の皿である。34 は口径 19.2cm、底径 6.8cm、器高 6.0cm である。35 は口縁端部のみ露胎である。口径 9.4cm、底径 5.2cm、器高 2.7cm である。36 も口縁端部のみが露胎である。口径 11.0cm、底径 5.3cm、器高 3.2cm である。37 は口縁付近の破片であるが、全面に施釉される。口径 12.0cm である。38 は底部のみが露胎である。口径 11.0cm、底径 5.4cm、器高 2.2cm である。39 は土師質の鍋である。外面は圧痕が残り、その上から刷毛目を施す。内面の調整は刷毛目である。外面にはススが付着する。口径 37.0cm である。

5号土坑（図版 15、第 30 図）

調査区の中央東端部で検出した。平面プランは 1.3m + a × 1.2m の不整形を呈し、東側は調査区外へと延びる。深さは 5 cm ほどである。遺物は中世の土器と青磁が出土した。

出土遺物（第 33 図 1～5）

1・2 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。1 は口径 8.2cm、底径 6.6cm、器高 0.9cm である。2 は口径 7.8cm、底径 6.0cm、器高 0.9cm である。

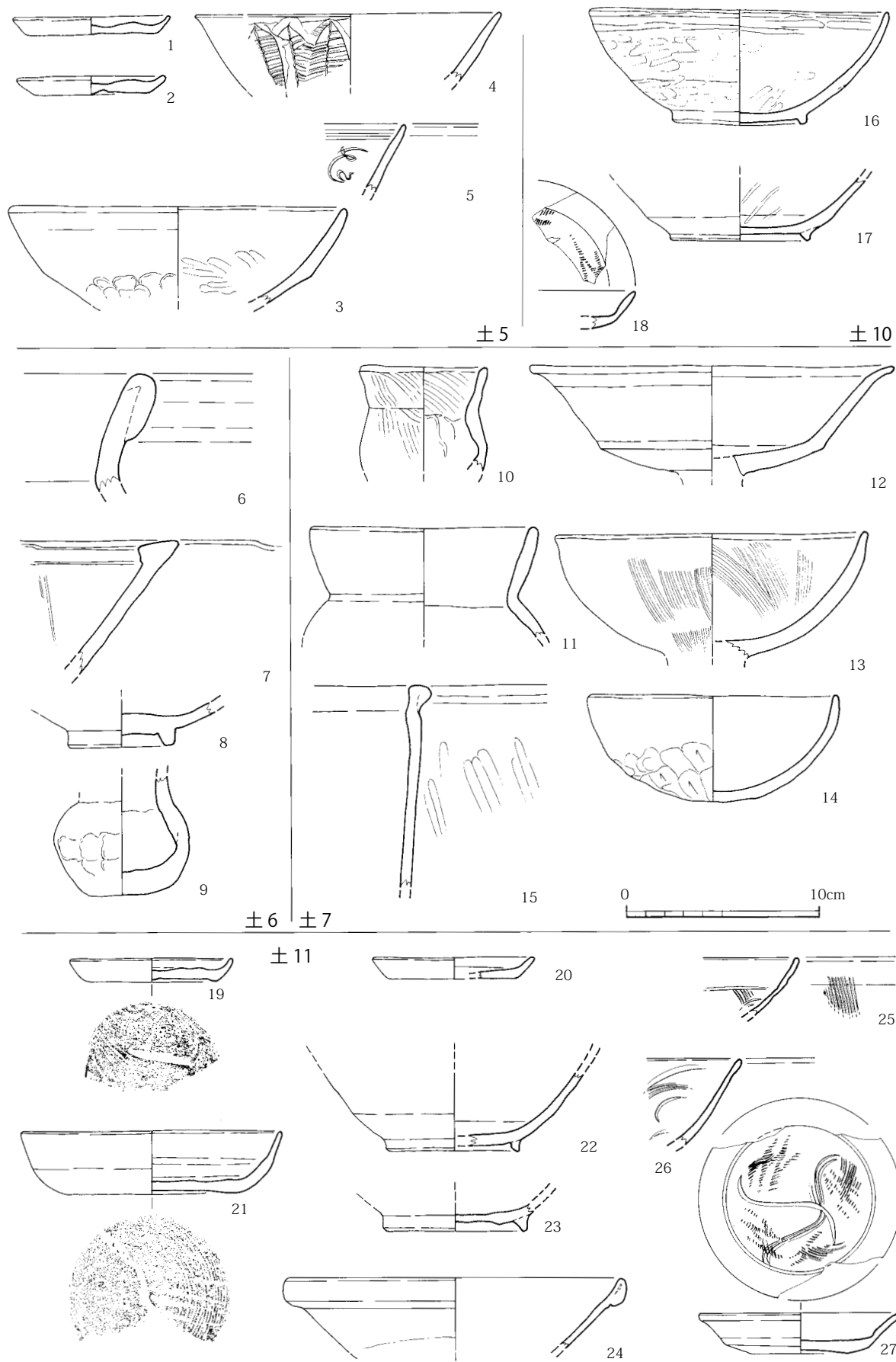
3 は瓦器の碗である。内外面の調整はナデ、部分的にミガキである。口径 17.6cm である。4 は龍泉窯系の青磁碗である。外面には蓮弁を刻むが、鎚部分と直行して段が連続してつけられているが、意図的なものではなく、文様を刻む際に偶然ついたものと考えられる。口径 16.0cm である。5 は龍泉窯系の青磁である。内面に花文が描かれる。

6号土坑（図版 16、第 30 図）

調査区の中央付近で検出した。平面プランは 1.9m × 1.8m のほぼ正方形を呈する。深さは 1.1m ほどで、壁の立ち上がりは急である。遺物は中世の土器、石臼（第 83 図 30）などが出土した。

出土遺物（第 33 図 6～9）

6 は備前焼の甕の口縁部である。全体に釉薬がかかり、焼成は良好である。7 は瓦質の播鉢である。口縁端部内面が突出する。口縁部は片口となっている。外面にススが付着している。8 は青磁の碗である。高台部分も全体的に施釉される。見込みには目跡が二ヶ所残る。9 は手づくねの壺である。表面に圧痕が多く残る。内外面の調整はナデである。胴部最大径は 7.0cm である。



第33图 5~7·10·11号土坑出土土器实测图(1/3)

7号土坑（図版 16、第 30 図）

調査区の中央東端部で検出した。南側が一部調査できなかったが、平面プランは 1.5m × 1.7m + a の楕円形を呈すると思われる。深さは 0.4m ほどで、一部にテラスを持つ。遺物は土師器、石庖丁（第 82 図 1）が出土した。

出土遺物（図版 35、第 33 図 10～15）

10 は土師器の小型壺である。内外面の調整は刷毛目である。口径 6.6cm である。11 は土師器の壺である。口径 11.8cm である。12 は土師器の高杯である。杯部が屈曲して大きく広がるものである。口径 19.0cm である。13 は土師器の高杯である。内外面の調整は刷毛目である。口径 16.2cm である。14 は土師器の碗である。外面底部付近はケズリであり、その他の部分はナデである。口径 13.0cm、器高 5.5cm である。15 は土師質の深鉢である。外面はナデである。

8号土坑（図版 16、第 34 図）

調査区の中央やや東寄りで検出した。7号溝に切られる。平面プランは 3.8m × 2.8m の楕円形を呈する。深さは 1.15m ほどである。図化できる遺物は出土していない。

10号土坑（図版 17、第 34 図）

調査区北端中央部分で検出した。18号溝を切る。未調査部分がある。遺物は瓦器と青磁、鞆の羽口（第 85 図 8）が出土した。

出土遺物（第 33 図 16～18）

16 は土師質の碗である。内外面の調整はミガキである。口径 15.5cm、底径 7.0cm、器高 5.5cm である。17 は土師質の碗である。底径 7.2cm である。18 は同安窯系の青磁皿である。口縁部片であるが、全面に施釉される。

11号土坑（図版 17、第 34 図）

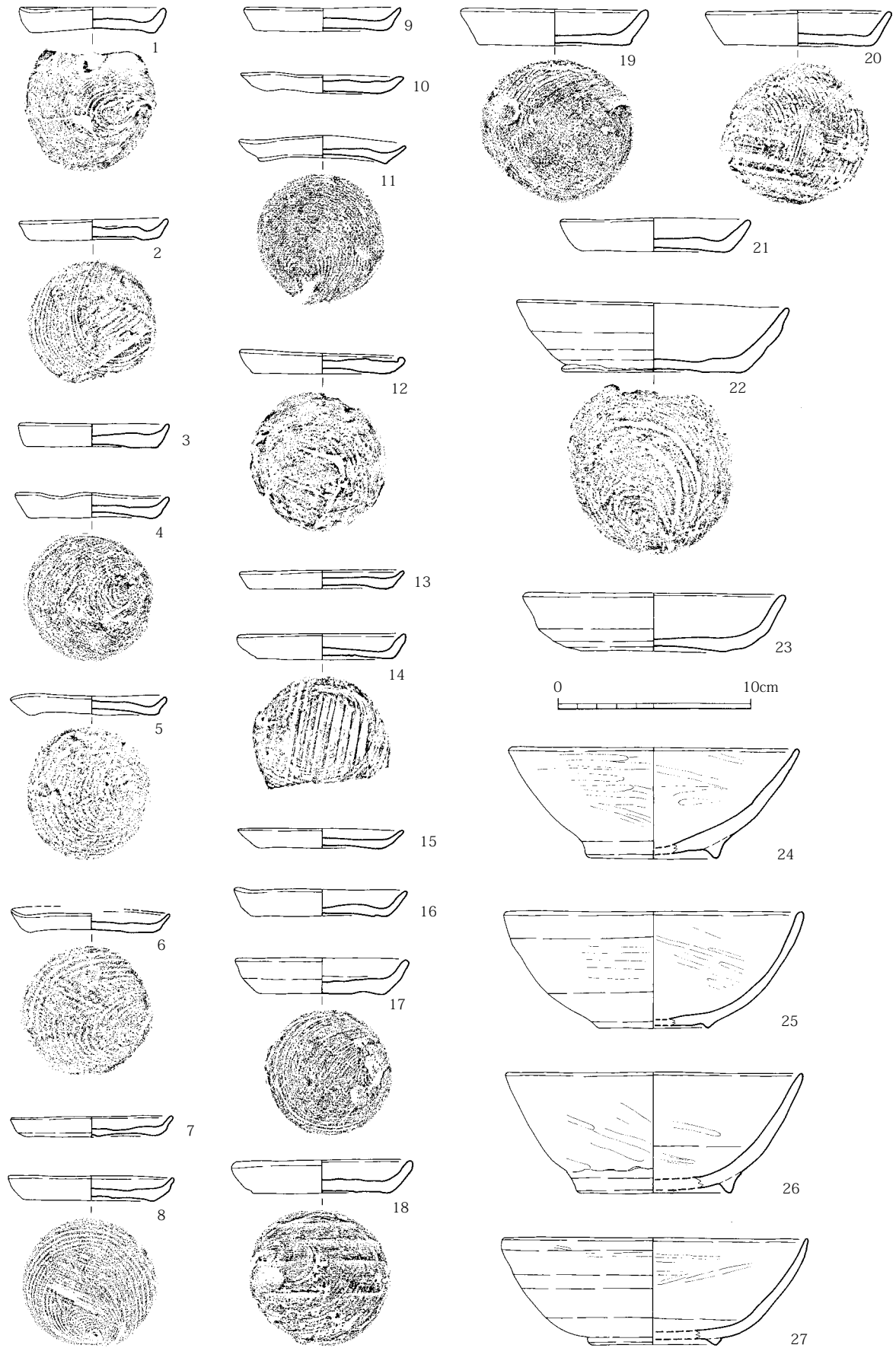
調査区の北側やや東寄りで検出した。平面プランは 1.4m × 1.6m の方形に近い形状である。深さは 0.5m ほどで、壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は中世の土器および青白磁が出土した。

出土遺物（第 33 図 19～27）

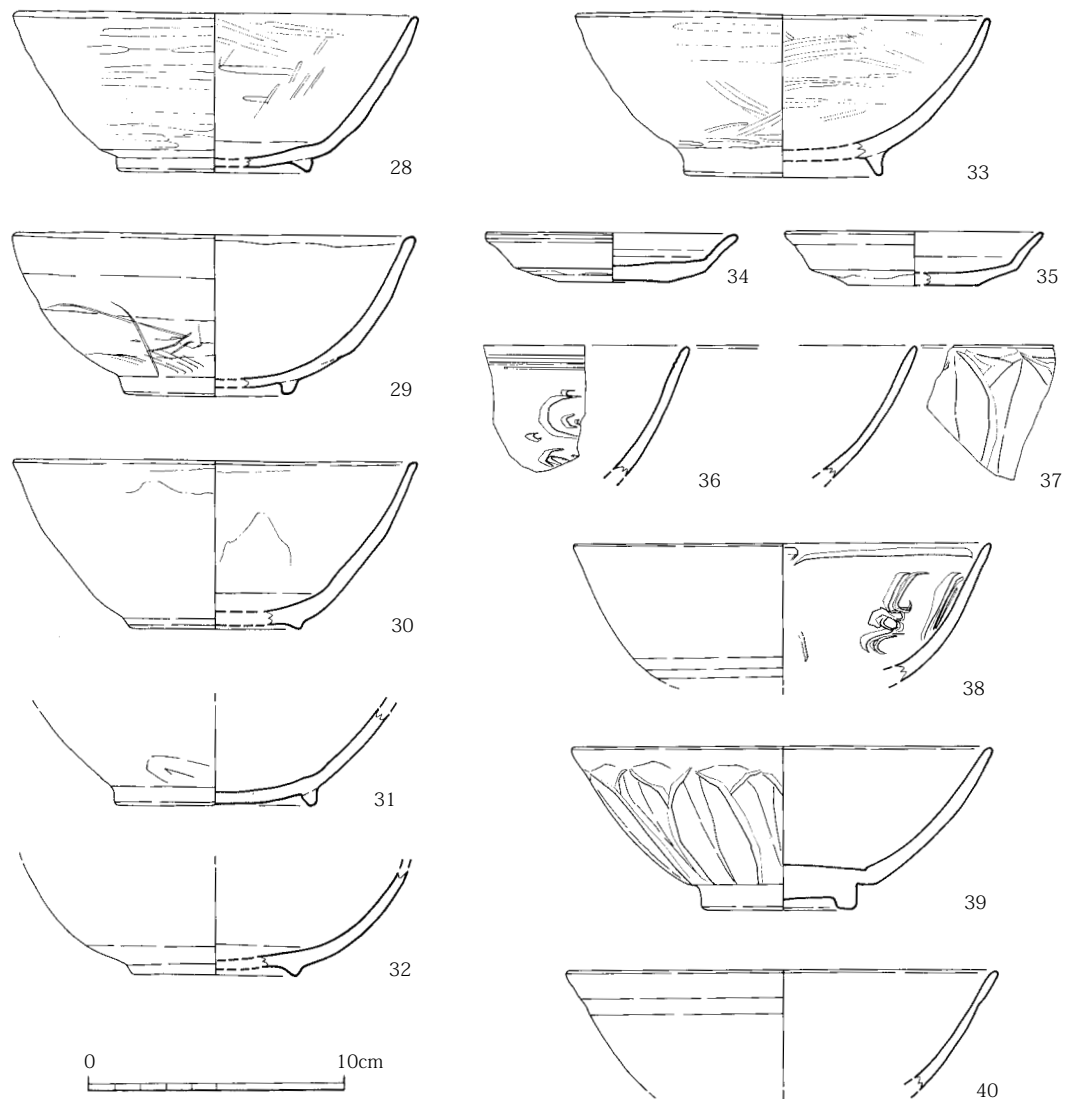
19・20 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。口径 8.2cm、底径 6.6cm、器高 1.2cm である。20 は口径 8.4cm、底径 6.6cm、器高 1.1cm である。21 は土師質の杯である。糸切り底である。口径 13.6cm、底径 8.4cm、器高 3.2cm である。22・23 は瓦器碗である。22 は底径 7.0cm である。23 は底径 7.4cm である。24 は玉縁の白磁である。口径 17.8cm である。25 は同安窯系の青磁の碗である。26 は龍泉窯系の青磁の碗である。27 は同安窯系の青磁皿である。底部付近が露胎である。口径 10.4cm、底径 5.0cm、器高 2.1cm である。

12号土坑（図版 17・18、第 34 図）

調査区の北側やや東寄りで検出した。13号住居跡を切る。平面プランは 1.8m × 1.1m の隅丸方形を呈する。深さは 0.6m ほどで、壁の立ち上がりはやや緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色で締まりがない。遺物は中世の土器および青磁が出土した。



第35图 12号土坑出土土器实测图① (1/3)



第36図 12号土坑出土土器実測図② (1/3)

出土遺物 (図版35・36、第35・36図)

1～21は土師質の小皿である。いずれも糸切りである。口径7.7～9.9cm、器高1.0～1.9cmである。14は底部に板状の痕跡が残る。22・23は土師質の杯である。いずれも糸切り底である。22は口径14.0cm、底径9.5cm、器高1.7cmである。23は口径13.6cm、底径7.2cm、器高3.0cmである。24～33は瓦質の碗である。内外面の調整はミガキもしくはナデである。口径15.0～16.4cmである。

34・35は青磁の皿である。いずれも底部付近が露胎である。34は口径10.0cm、底径4.2cm、器高1.9cmである。35は口径10.2cm、底径5.0cm、器高2.1cmである。36～39は龍泉窯系の青磁碗である。37は鎬蓮弁文である。38の口径は16.4cmである。39は口径16.6cm、底径6.1cm、器高6.4cmである。40は青磁の碗である。口径17.0cmである。

13号土坑 (図版18、第34図)

調査区の北側やや東寄りで検出した。平面プランは2.8m × 1.5mのやや不整な方形を呈する。

一部にテラスを持ち、深さは0.2mほどである。図化できる出土遺物は無い。

14号土坑（図版18、第37図）

調査区の北側中央付近で検出した。11号溝に切られ、18号溝を切る。平面プランは3.4m × 2.2m + aの不整な楕円形を呈する。深さは0.6mほどで、壁の立ち上がりはやや緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色土を中心にレンズ状に堆積している。遺物は鞆の羽口（第85図7）が出土した。

15号土坑（図版19、第37図）

調査区の北側やや西寄り出土した。平面プランは0.7m × 0.7mのほぼ正円を呈する。深さは0.4mほどで、壁の立ち上がりはやや緩やかである。常滑焼の甕（1）が一個体分、据えられたような状態で検出された。甕の上半部は内側に落ち込んでいた。

出土遺物（図版36、第38図1～4）

1は常滑焼の甕である。ほぼ1個体分であるが、底部を欠損する。口縁部はややつぶれ気味に大きく開く。外面は部分的にタタキ跡が残る。内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残る。肩部に「8」字を横にしたような窯印が刻まれる。焼成は甘い。口径35.3cm、胴部最大径62.4cm、器高は現状で56.0cmが残る。2は土師質の杯である。器表面は全体に摩滅が著しい。口径15.7cm、底径7.6cm、器高3.4cmである。3は瓦器の碗である。内面にミガキが残る。口径16.4cm、底径6.4cm、器高7.1cmである。4は同安窯系の青磁の皿である。底部は露胎である。口径11.0cm、底径5.1cm、器高2.0cmである。

16号土坑（図版19、第37図）

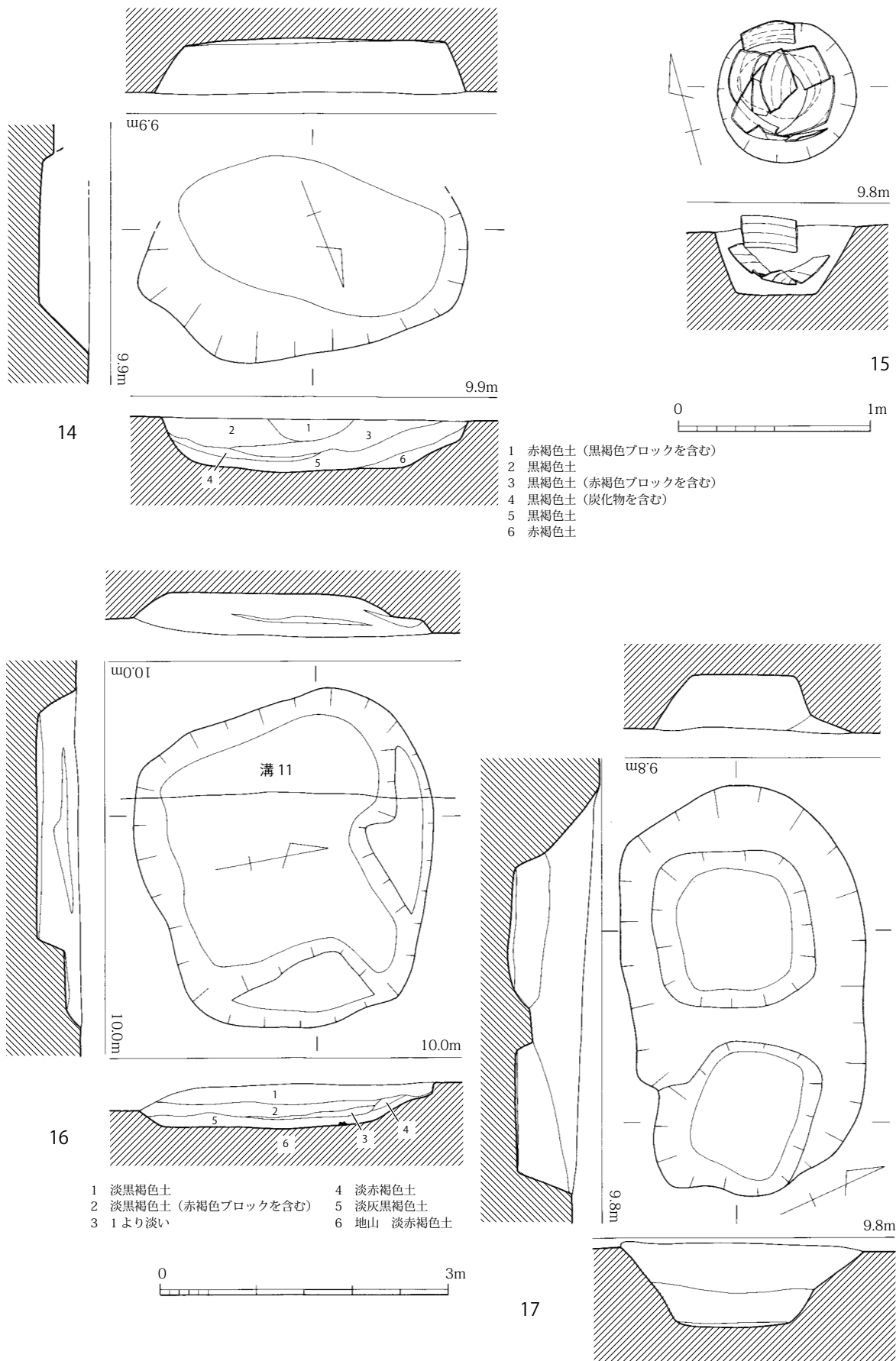
調査区の北側やや西寄り出土した。7号住居跡を切り、11号溝に切られる。平面プランは3.5m × 3.1mの不整な方形を呈する。部分的にテラスを持ち、深さは0.4mほどである。埋土は黒褐色土を中心とした堆積である。遺物は中世の土器と青磁、白磁、砥石（第82図11）が出土した。

出土遺物（図版36、第38図5～19）

5～7は土師質の小皿である。5の底部には糸切り痕が残る。口径8.1cm、底径6.5cm、器高1.0cmである。6の底部には板状の痕跡が残る。口径8.2cm、底径6.0cm、器高1.1cmである。7の底部には板状の圧痕が残る。口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.5cmである。8～10は土師質の碗である。8は口径16.0cm、底径6.0cm、器高6.0cmである。9は口径16.5cm、底径6.7cm、器高6.1cmである。10は口径15.6cm、底径6.3cm、器高5.0cmである。

11は瓦器の碗である。内外面の調整はミガキである。口径16.4cm、底径6.3cm、器高7.1cmである。12は東播系の捏鉢である。底部は糸切りである。内外面の調整はナデである。口径28.6cm、底径9.6cm、器高10.4cmである。

13・14は白磁碗である。いずれも口縁端部が外側に鋭く摘み出されるものである。15は白磁碗の底部である。底面の周辺は露胎である。底径6.4cmである。16も白磁碗で底部付近が露胎である。底径6.6cmである。17は白磁の碗である。丸みを持った体部で、わずかに外反する口縁が肥厚する。底部周辺は露胎である。口径17.1cm、底径6.1cm、器高7.0cmである。18は同安窯系



第37図 14～17号土坑実測図 (15は1/30、他は1/60)

の青磁碗である。底部周辺は露胎である。口径 16.8cm、底径 5.0cm、器高 7.2cm である。

19 は混入の須恵器の高杯脚部である。内外面ともにナデ調整である。底径 8.6cm である。

17 号土坑（図版 19・20、第 37 図）

調査区の北側中央付近で検出した。7・10 号住居跡を切る。平面プランは 3.4m × 2.5m の不整な楕円形を呈する。中央にテラスを持ち、二ヶ所の方形の掘り込みをもつことから、近接する 2 基の土坑を同時に掘削した可能性が高い。埋土は淡茶褐色土を中心としており、締めりはなかった。遺物は中世の土器および青磁が出土した。

出土遺物（図版 36、第 40 図 1～4）

1 は土師質の杯である。底部は糸切りである。内外面の調整はナデである。口径 12.9cm、底径 8.7cm、器高 2.9cm である。2 は土師質の鉢である。内外面ともにナデ調整である。口径 28.0cm である。3 は青磁の碗である。4 は青磁の杯であろうか。畳付けの部分が露胎であり、他の部分の釉は厚い。底径 6.4cm である。

18 号土坑（図版 20、第 39 図）

調査区の北側中央付近で検出した。13 号溝を切る。平面プランは 2.7m × 2.1m の不整な楕円形を呈する。深さは 0.4m ほど、壁の立ち上がりは緩やかで、床面は方形を呈する。埋土は淡黒褐色土を中心とした堆積である。遺物は中世の土器および青磁白磁が出土した。

出土遺物（図版 36、第 40 図 5～20）

5～9 は土師質の小皿である。全て糸切り底である。5 は口径 8.0cm、底径 5.8cm、器高 1.5cm である。6 は口径 8.4cm、底径 5.4cm、器高 1.7cm である。7 は口径 9.0cm、底径 6.4cm、器高 1.3cm である。8 は口径 9.4cm、底径 7.3cm、器高 1.3cm である。9 は口径 9.4cm、底径 7.3cm、器高 1.3cm である。10 は土師質の杯である。内外面の調整はナデである。口径 16.0cm、底径 10.1cm、器高 3.6cm である。

11～13 は瓦器碗である。11 は口径 16.8cm、底径 6.7cm、器高 6.1cm である。12 は口径 17.0cm、底径 6.5cm、器高 6.0cm である。13 は底径 6.2cm である。14 は鍋の口縁部分であろうか。土師質である。内外面の調整はナデである。15 は東播系の鉢である。全体にナデ調整である。

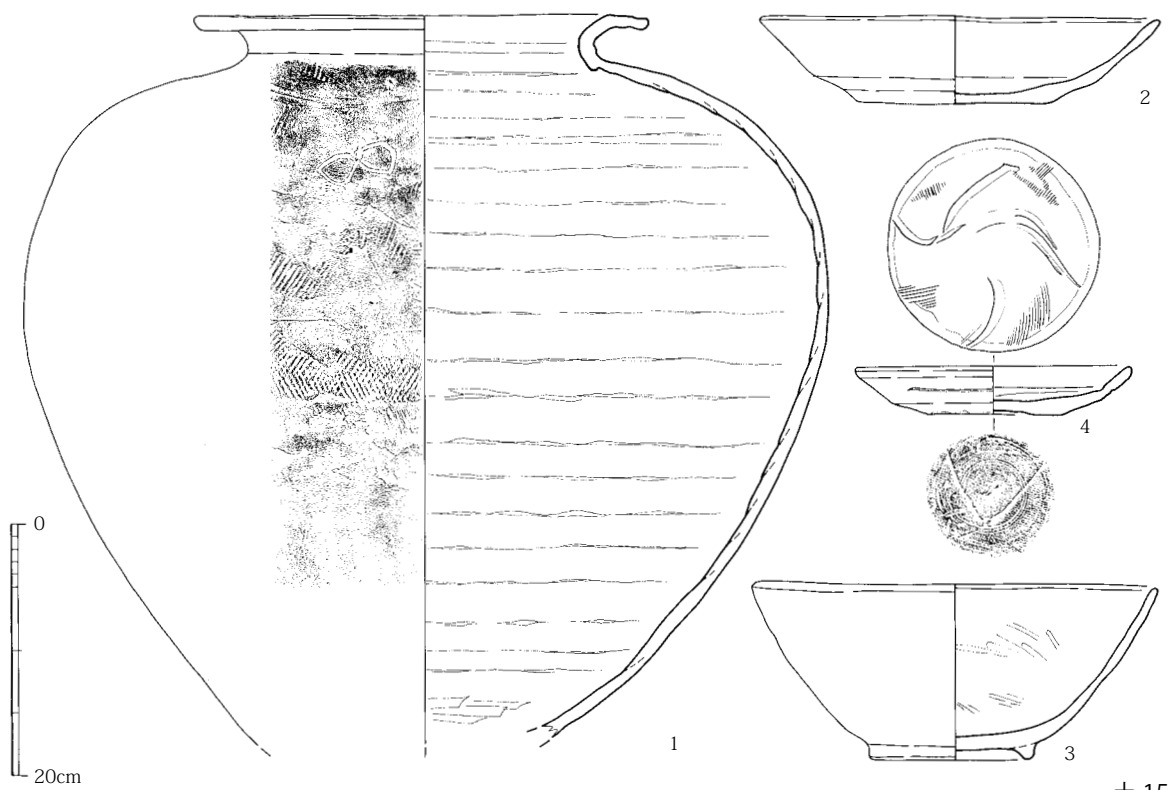
16・17 は白磁の口縁部である。16 は全体に釉薬がかけられる。17 は下端付近が両面とも露胎である。18～20 は青磁碗の底部である。18 の見込みは蛇目釉剥ぎである。外面は底部周辺が露胎である。底径 5.9cm である。19 は高台内が露胎である。底径 5.8cm である。20 は外面周辺が露胎である。底径 5.2cm である。

19 号土坑（図版 20、第 39 図）

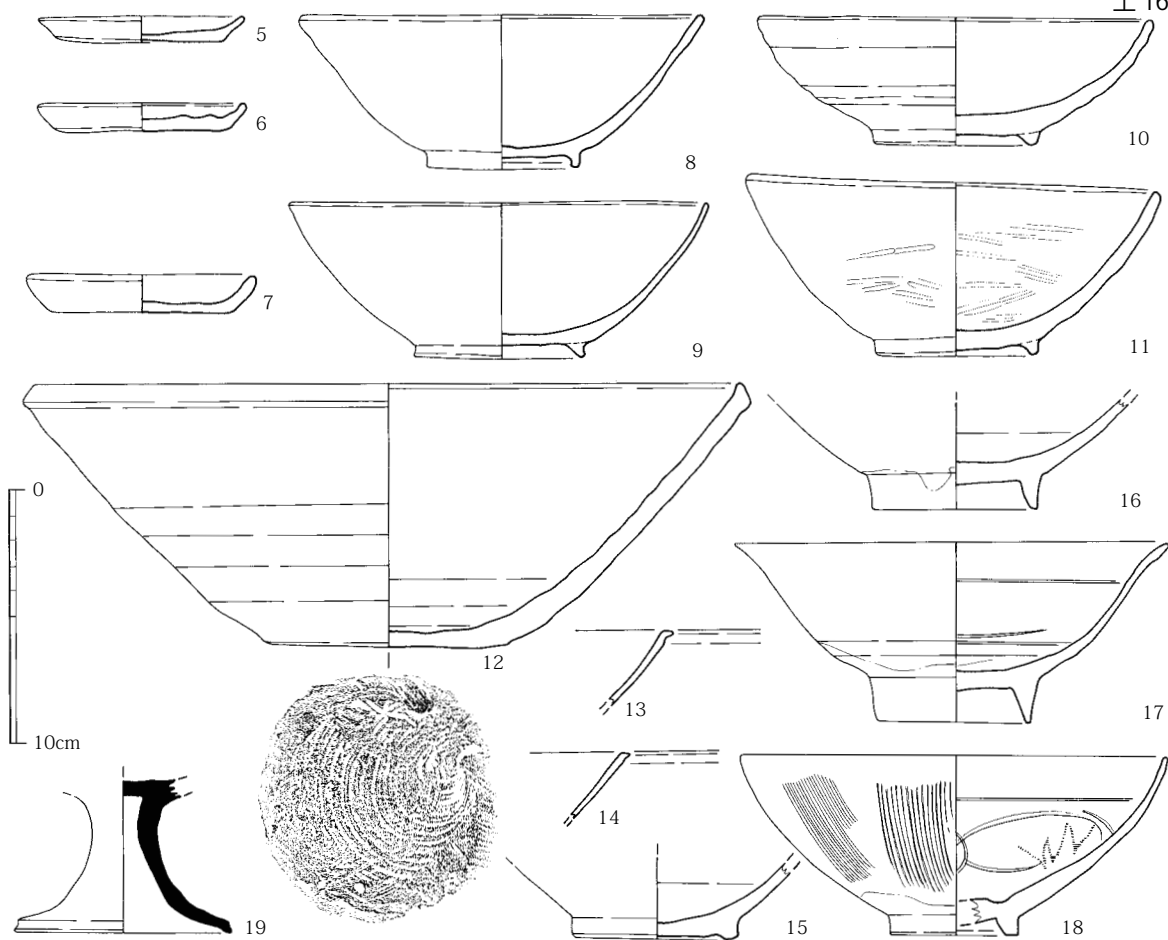
調査区の北側中央付近で検出した。13 号溝を切り、11 号溝に切られる。平面プランは 2.8m × 2.0m + a の不整形を呈する。東側にテラスを持ち、深さ 0.6m ほど、床面は円形を呈する。埋土は淡黒褐色土である。遺物は中世の土器と青磁、白磁が出土した。

出土遺物（図版 36・37、第 40 図 21～30）

21 は土師質の皿である。摩滅のため、内外面の調整は不明である。口径 8.6cm、底径 6.8cm、



± 15
± 16



第38図 15・16号土坑出土土器実測図（1は1/6、他は1/3）

器高 1.0cm である。22～24 は土師質の杯である。22 は口径 12.4cm、底径 7.6cm、器高 3.3cm である。23 は口径 13.2cm、底径 8.0cm、器高 2.9cm である。24 は口径 13.8cm、底径 8.1cm、器高 3.4cm である。25・26 は瓦器の碗である。内外面の調整はミガキである。25 は口径 16.5cm、底径 7.0cm、器高 6.7cm である。26 は口径 15.9cm、底径 7.3cm、器高 6.5cm である。

27 は青磁の碗である。口縁端部を短く強く折り曲げる。外面の下端部が露胎である。口径 15.0cm である。28 は龍泉窯系の青磁碗である。29 は白磁碗の口縁部片である。30 は青磁碗の底部である。高台内が露胎である。底径 6.1cm である。

20 号土坑（図版 21、第 39 図）

調査区の北側中央付近で検出した。15 号溝に切られる。平面プランは $2.5\text{m} \times 1.2\text{m} + a$ の隅丸方形を呈する。深さは 0.6m ほどで、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は淡黒褐色土を中心に堆積する。遺物は中世の土器と陶磁器が出土した。

出土遺物（図版 37、第 41 図 1～18）

1～6 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。1 は口径 8.6cm、底径 6.2cm、器高 1.3cm である。2 は口径 8.6cm、底径 6.3cm、器高 1.0cm である。4 は口径 8.5cm、底径 6.9cm、器高 1.0cm である。3 は口径 8.6cm、底径 6.7cm、器高 0.9cm である。5 は口径 9.8cm、底径 7.8cm、器高 1.5cm である。7～9 は土師質の杯である。7・8 は糸切り底である。7 は口径 13.2cm、底径 7.9cm、器高 3.0cm である。8 は口径 13.4cm、底径 9.0cm、器高 3.0cm である。9 は口径 15.2cm である。

10～15 は瓦器の碗である。10 は口径 16.7cm、底径 6.8cm、器高 6.6cm である。11 は口径 15.8cm、底径 7.3cm、器高 6.4cm である。12 は口径 16.9cm である。13 は口径 17.1cm、底径 6.9cm、器高 6.1cm である。14 は底径 7.0cm である。15 は底径 7.7cm である。

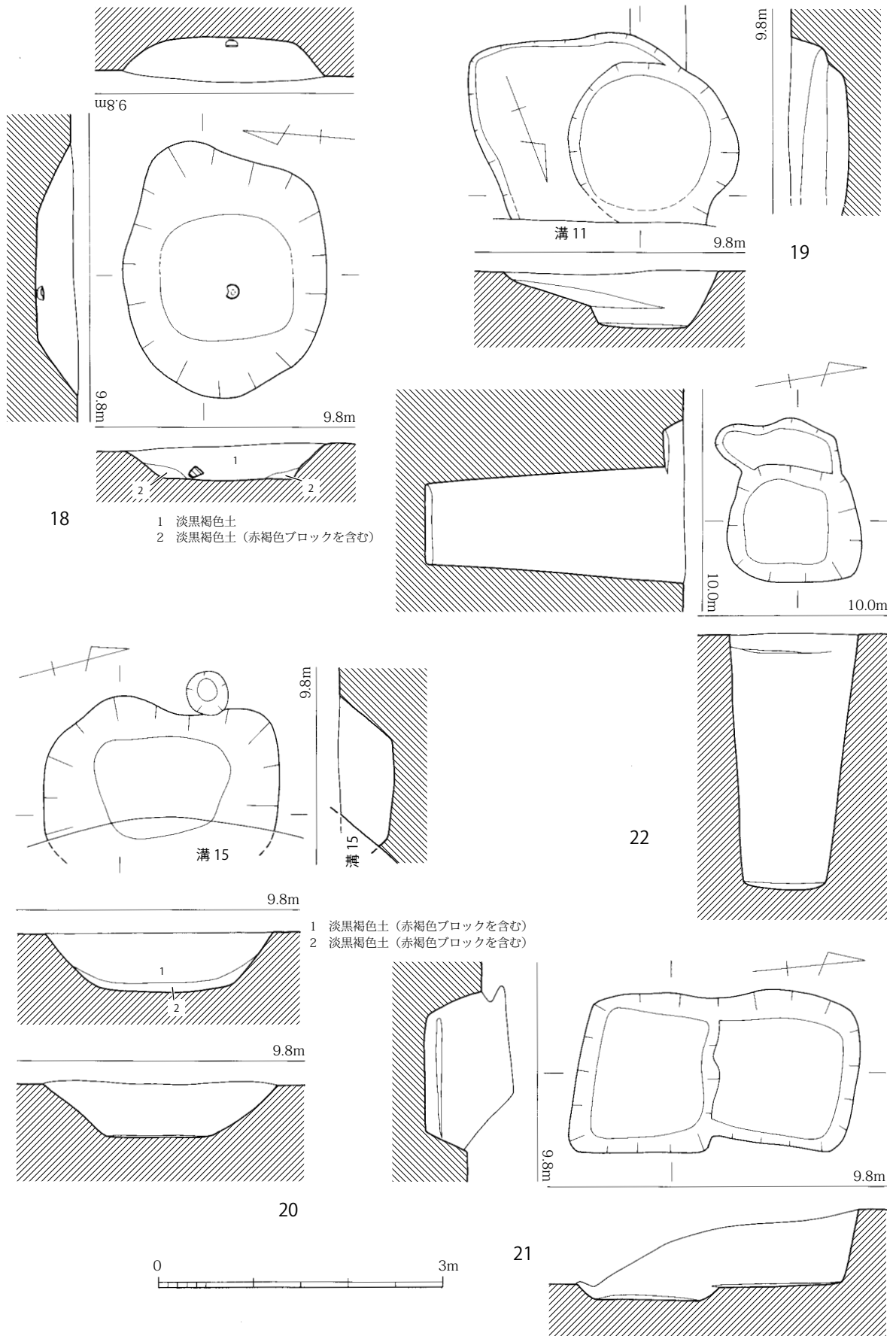
16 は白磁碗の口縁部である。端部を外側につまみ出すように仕上げる。17 は青磁碗の底部である。見込みは蛇の目釉剥ぎである。高台より内側は露胎である。18 は白磁の四耳壺の耳部分であろう。全体に施釉される。

21 号土坑（第 39 図）

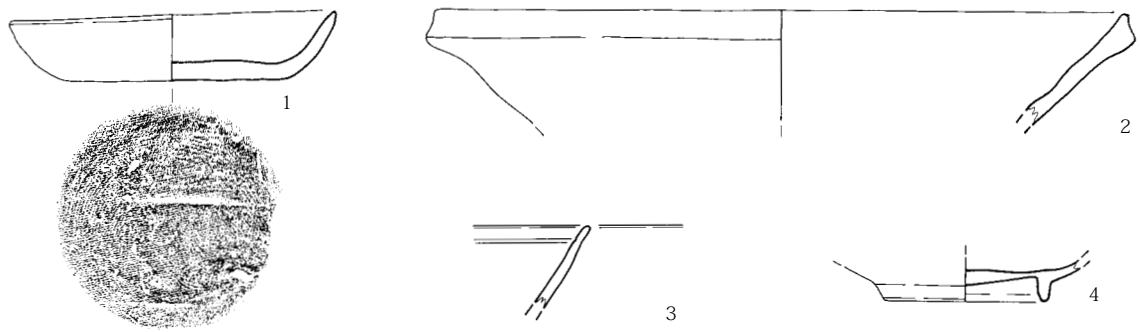
調査区の北側中央付近で検出した。8 号住居跡を切り、15 号溝に切られる。平面プランは $3.0\text{m} \times 1.7\text{m}$ で長方形を呈する。深さは 0.9m ほどで、壁の立ち上がりはやや急である。平面プランの中央付近において、不自然な屈曲があり、ちょうどその部分が床面においてもテラスとなることから、近接する 2 基の土坑を同時に掘削した可能性が高い。埋土は淡黒褐色であった。遺物は中世の土器と青磁、砥石（第 83 図 21）が出土した。

出土遺物（図版 37、第 41 図 19～28）

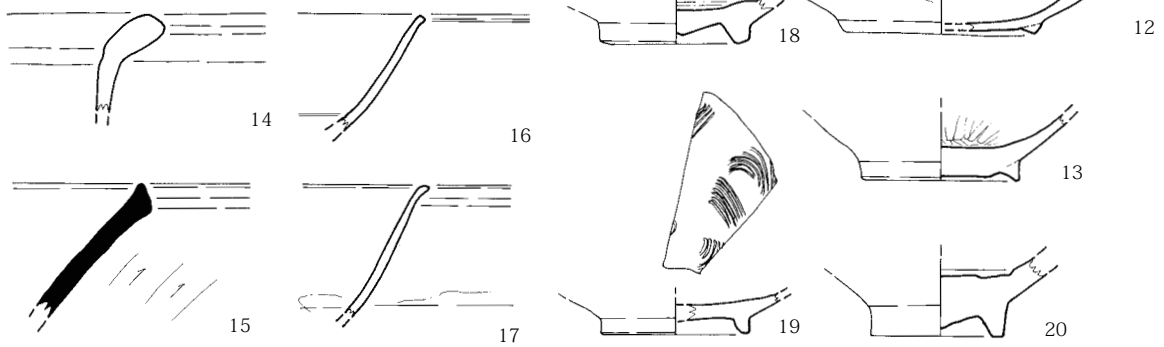
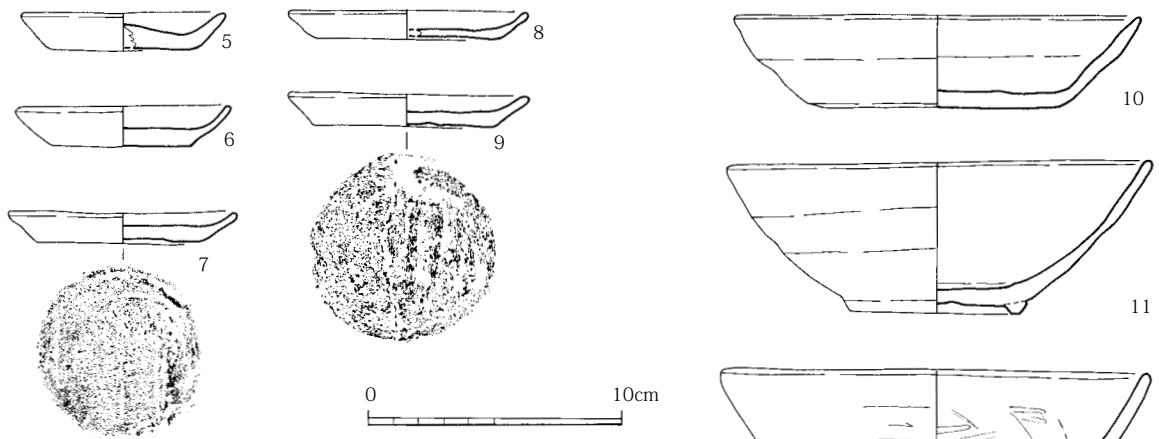
19～21 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。19 は口径 8.3cm、底径 6.9cm、器高 0.8cm である。20 は口径 8.2cm、底径 7.2cm、器高 1.2cm である。21 は口径 8.4cm、底径 7.0cm、器高 1.0cm である。22・23 は土師質の杯である。22 は口径 13.0cm、底径 8.1cm、器高 2.9cm である。23 は糸切り底である。口径 13.2cm、底径 8.7cm、器高 3.4cm である。24・25 は瓦器の碗である。24 は底径 7.2cm である。25 は一部ミガキが残る。口径 16.0cm、底径 8.2cm、器高 5.9cm である。26 は青磁碗の口縁部である。内側に一条の沈線が施される。27 は龍泉窯系の青磁碗である。外



第 39 図 18 ~ 22 号土坑実測図 (1/60)

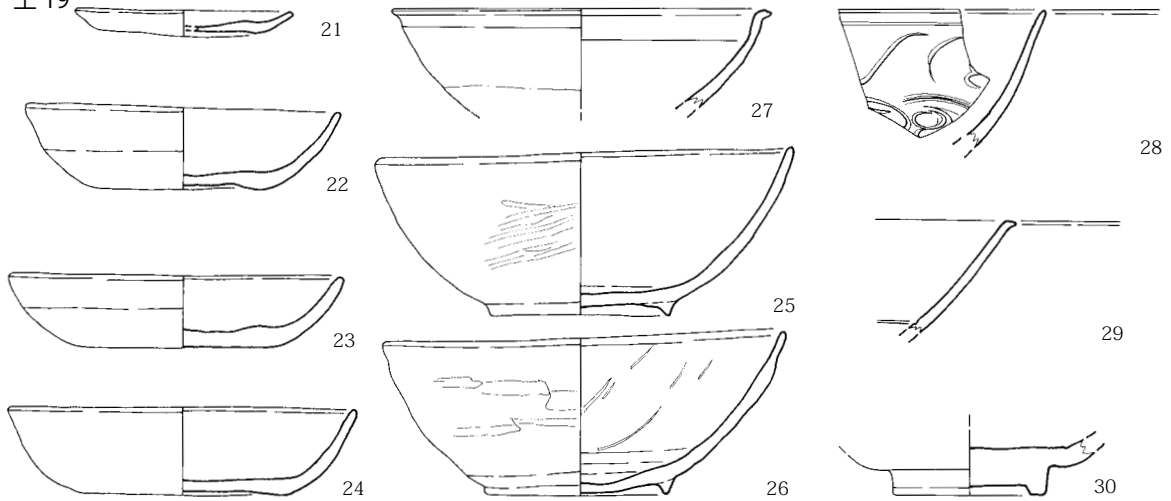


± 17

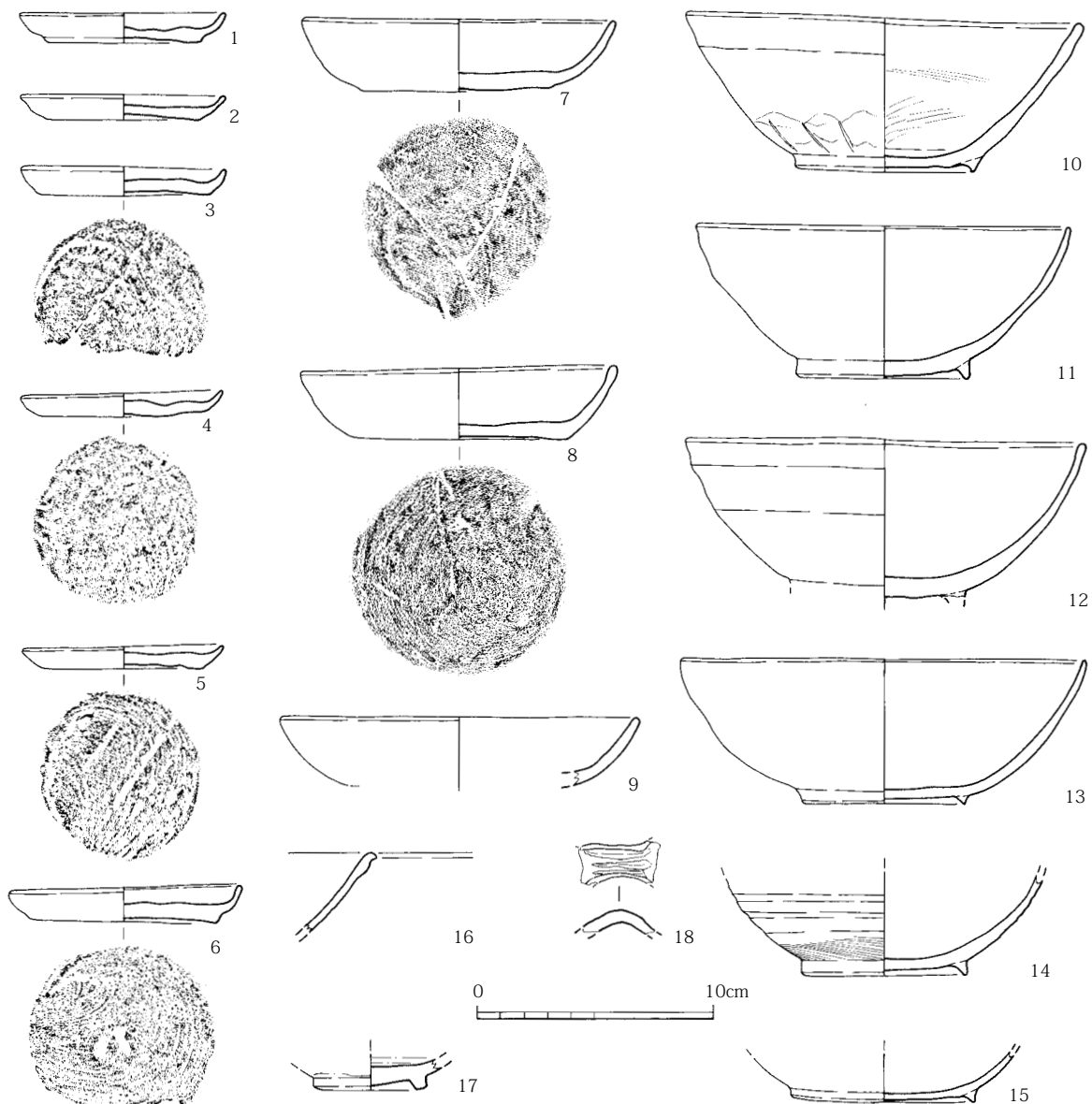


± 18

± 19

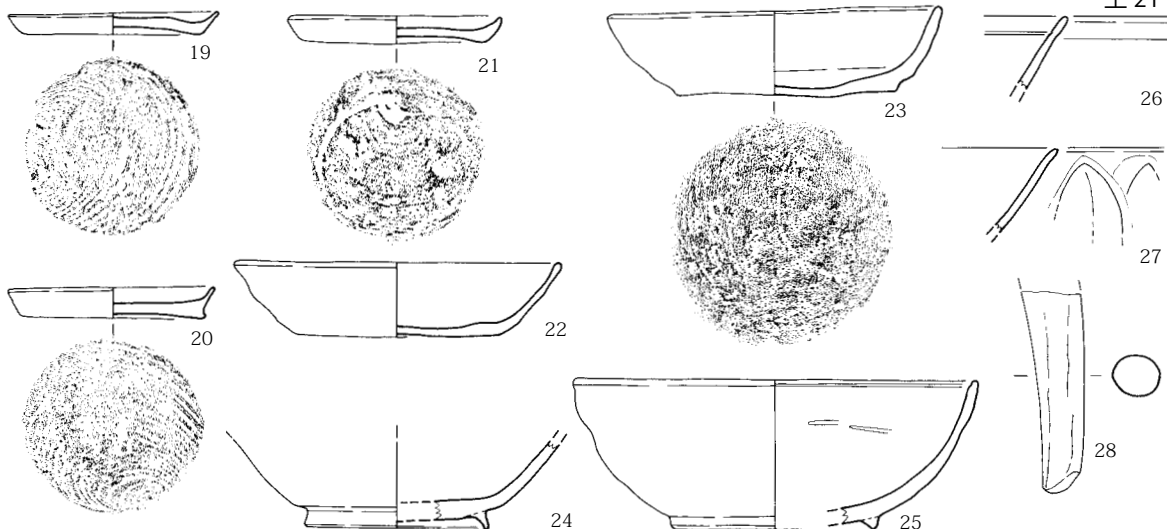


第 40 图 17 ~ 19 号土坑出土土器实测图 (1/3)

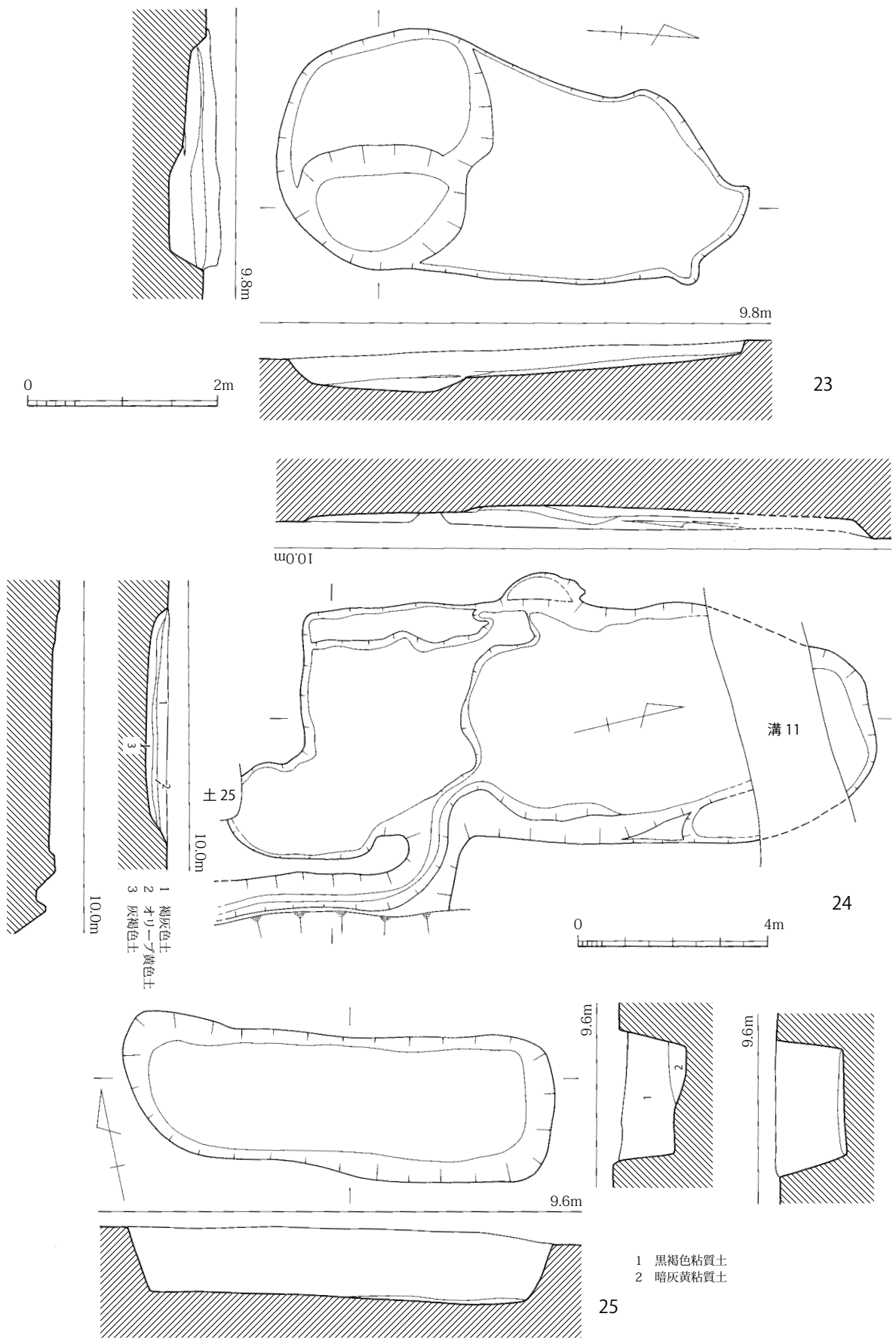


± 20

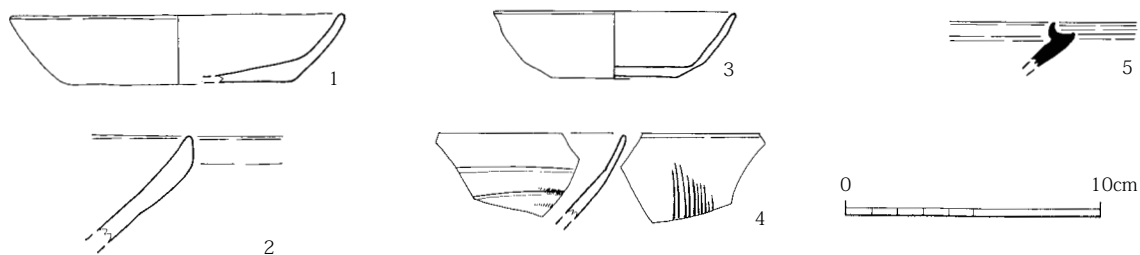
± 21



第 41 图 20·21 号土坑出土土器实测图 (1/3)



第42図 23～25号土坑実測図 (24は1/120、他は1/60)



第 43 図 23 号土坑出土土器実測図 (1/3)

面の蓮弁文にはわずかに鎬が残る。28 は土師質の鍋などの脚部か。表面はナデ調整である。

22 号土坑 (図版 21、第 39 図)

調査区の北側やや西寄りで見出した。11 号溝に切られる。平面プランは 1.7m × 1.3m の不整形な方形を呈する。西側にテラスを持ち、わずかにすぼまりながら、2.7m ほぼ直に近い状態で掘り込まれる。埋土は淡黒褐色であった。図化できる遺物は出土していない。

23 号土坑 (第 42 図)

調査区の北側やや東寄りで見出した。平面プランは 5.0m × 2.5m の不整形な楕円形を呈する。北側はテラスとなり、南側の深さは 0.4m ほどである。埋土は淡黒褐色であった。遺物は中世の土器、青磁、砥石 (第 83 図 18) が出土した。

出土遺物 (第 43 図)

1 は土師質の杯である。磨滅しているが底部は糸切りであろう。口径 13.2cm、底径 9.0cm、器高 2.7cm である。2 は東播系の捏鉢の口縁部である。内外面の調整はナデである。3 は青磁の皿である。底部は露胎である。口径 9.6cm、底径 5.0cm、器高 2.6cm である。4 は同安窯系の青磁碗である。5 は混入の須恵器である。内外面の調整はナデである。

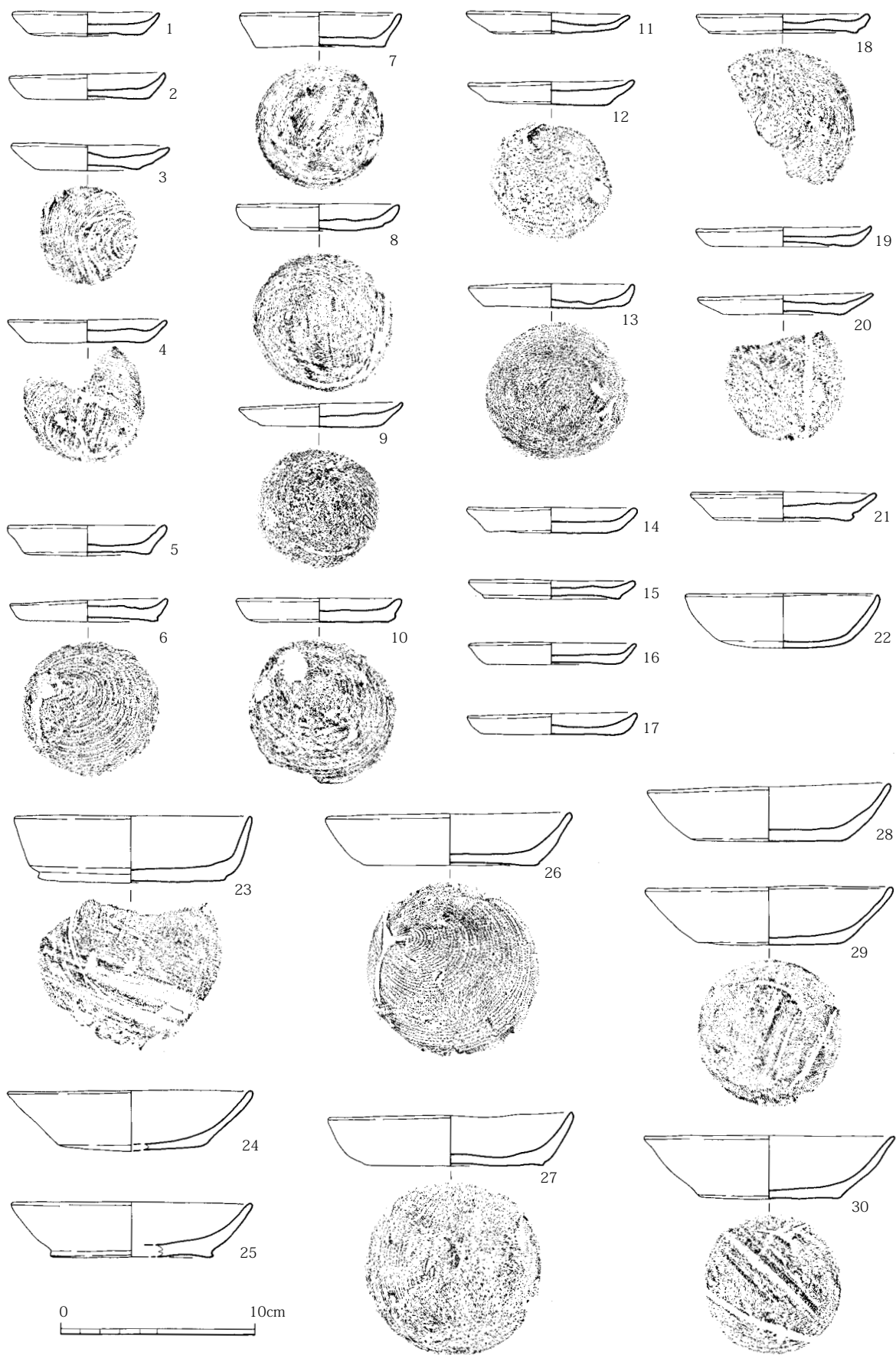
24 号土坑 (図版 21、第 42 図)

調査区の北側東寄りで見出した。25 号土坑、11 号溝に切られる。平面プランは 13.4m × 5.6m の不整形な楕円形を呈する。部分的にテラスを持ち、深さは 0.5m ほどである。南東方向に細いがしっかりとした溝が掘削される。1 基の土坑として掘削を行ったが、土層から観察すると近接する複数の土坑であった可能性も高い。埋土は淡黒褐色を中心にレンズ状に堆積している。遺物は中世の土器および青磁、白磁、土錘 (第 85 図 3) が出土した。

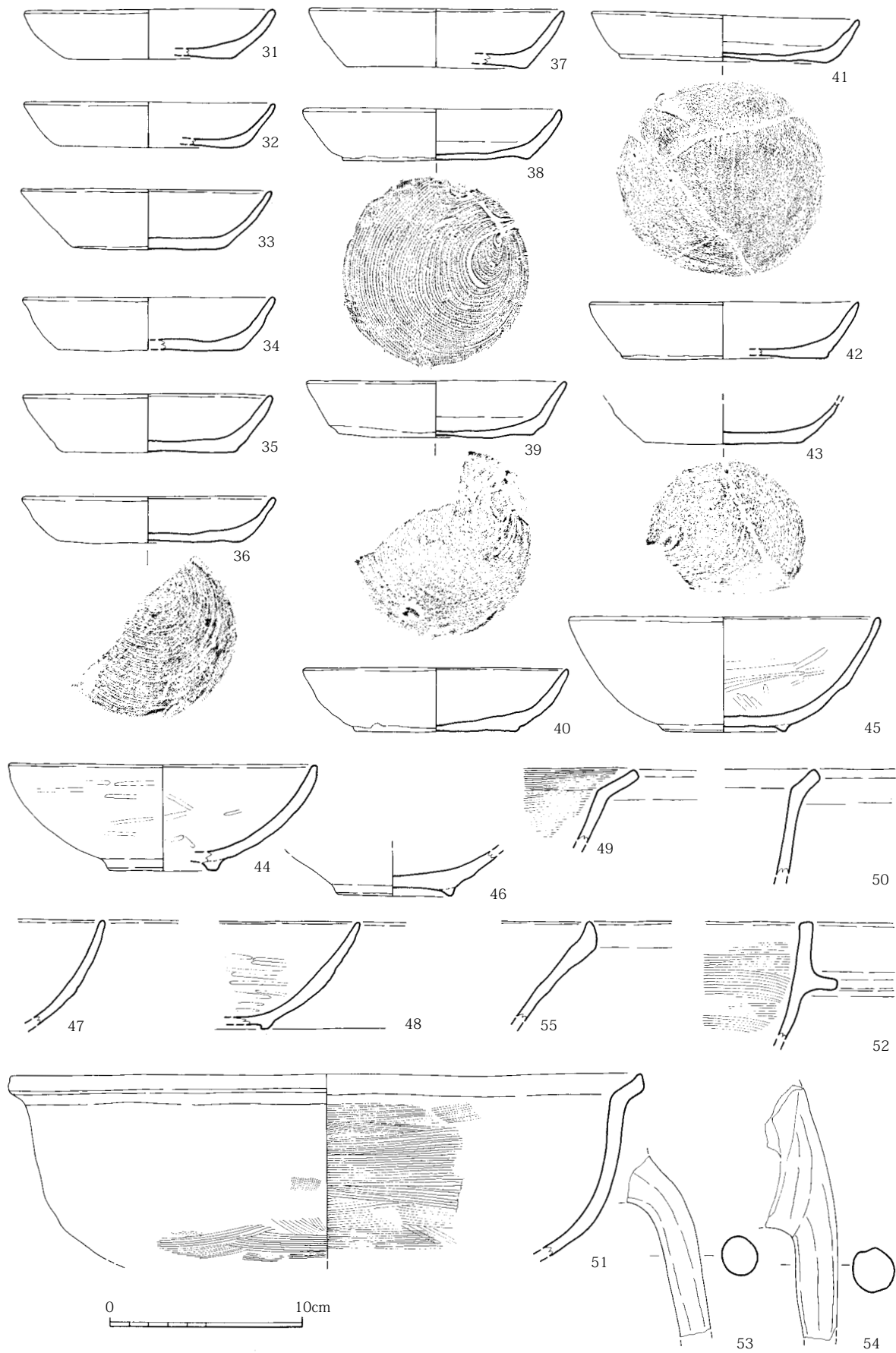
出土遺物 (図版 37・38、第 44～46 図)

1～21 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底で、その他の部分の調整はナデである。口径は 7.6～9.6cm、器高は 0.9～1.8cm である。22 は瓦質の小皿。薄手で、内外面の調整はナデである。底部は丸底に近い。口径 9.7cm、器高 2.8cm である。23～43 は土師質の杯である。いずれも糸切り底である。口径 12.2～14.0cm、器高 2.6～3.4cm である。30 には板状の圧痕が残る。

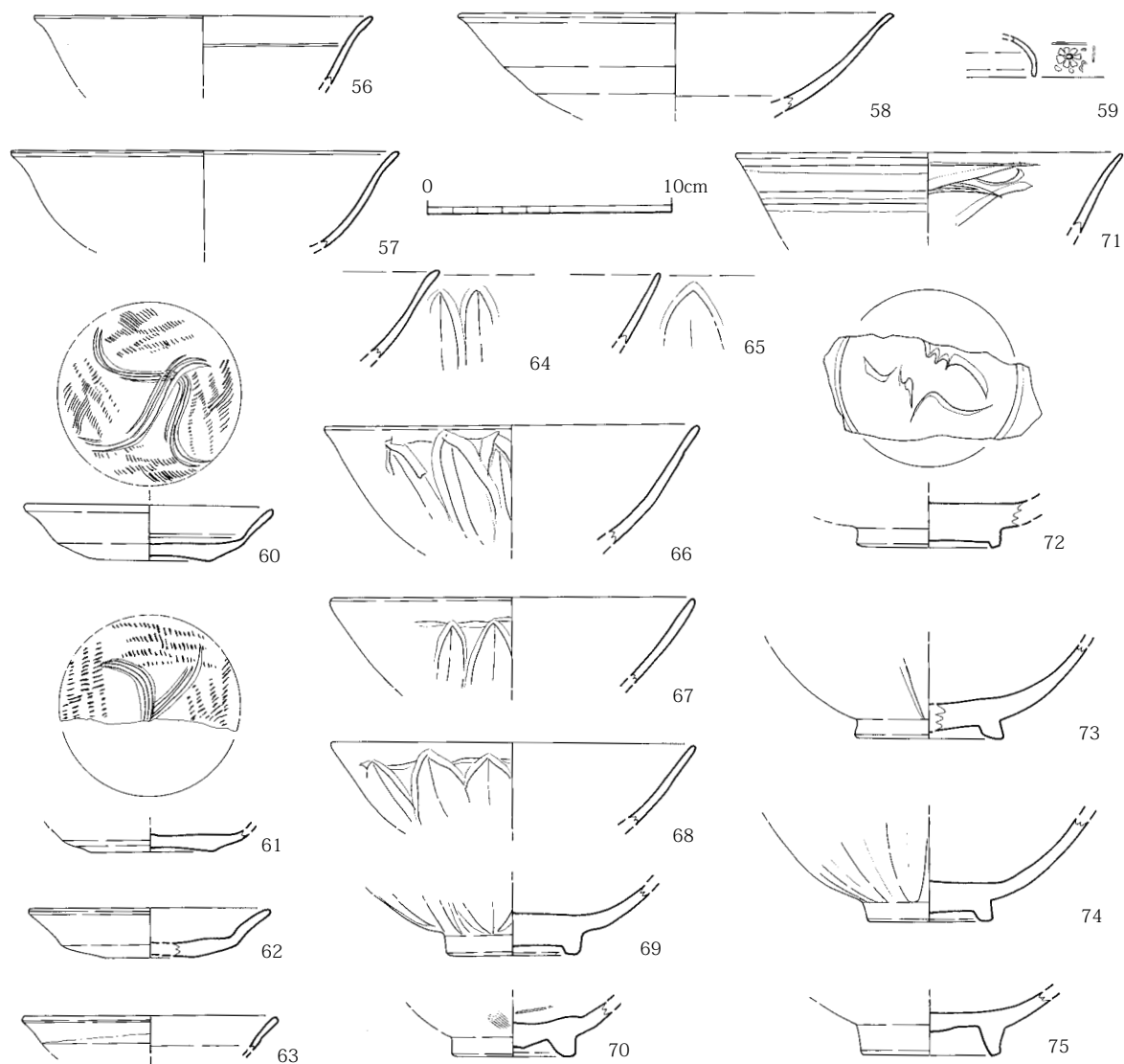
44～48 は瓦器碗である。いずれも内外面の調整はミガキである。44 の口径は 16.0cm、底径 5.7cm、器高 5.5cm である。45 は口径 16.2cm、底径 6.4cm、器高 5.9cm である。46 は見込みに重ね焼きの痕跡が残る。49～52 は鍋である。49～51 は口縁が屈曲して開くものである。内外面の調整



第44图 24号土坑出土土器实测图① (1/3)



第45图 24号土坑出土土器实测图② (1/3)

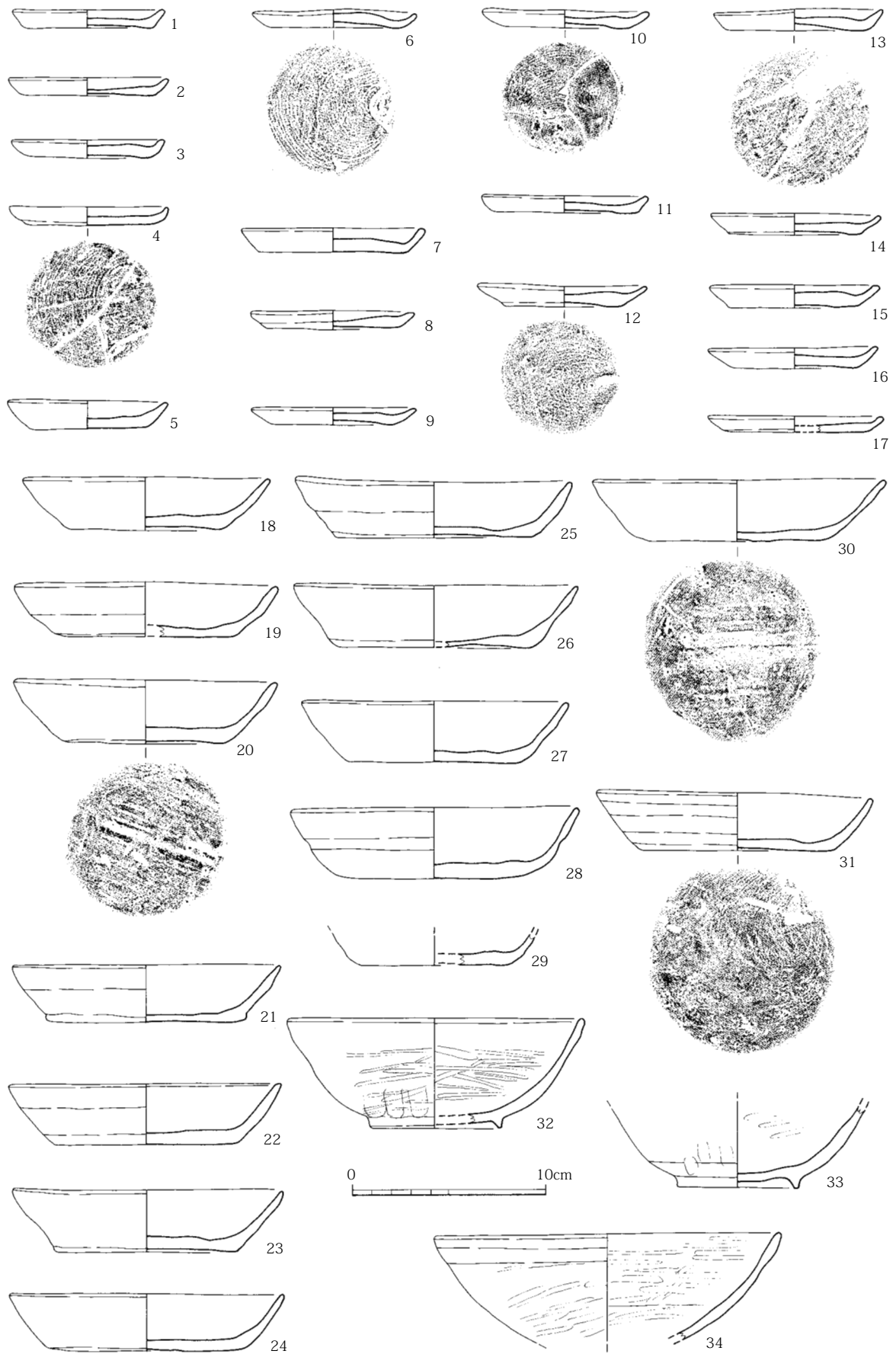


第46図 24号土坑出土土器実測図③ (1/3)

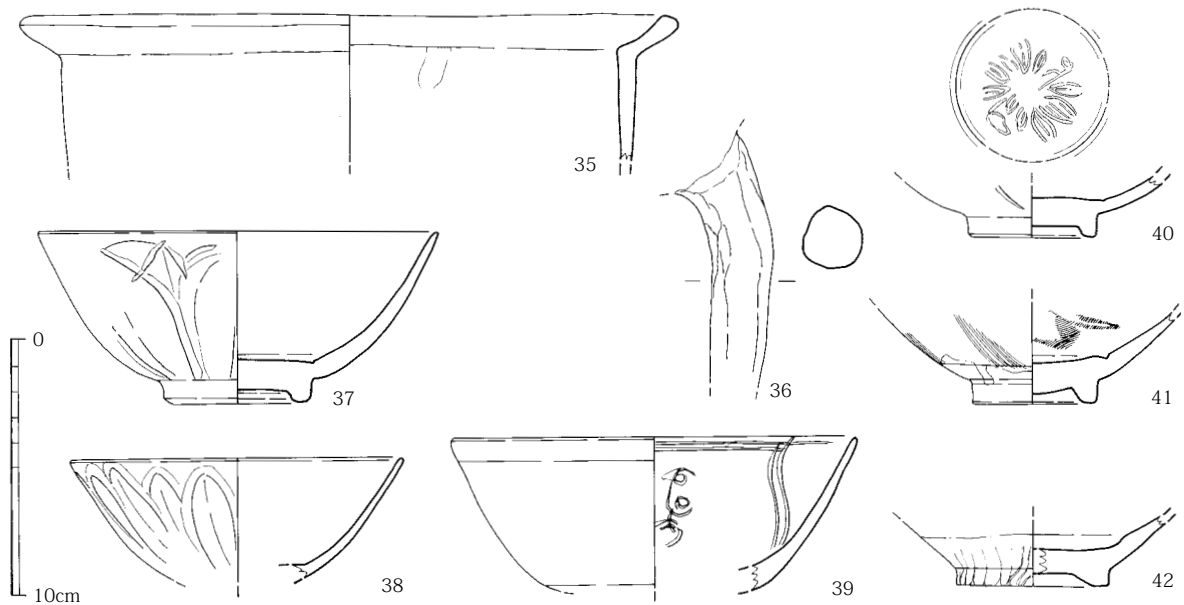
は刷毛目である。49の外面にはススが付着する。51は口径32.8cmである。52は外面に鏝が巡るもので、内面の調整は刷毛目である。53・54は土師質の鍋などの脚部であろう。表面はナデ調整である。55は東播系の捏鉢である。内外面の調整はナデである。

56～58は白磁の碗である。56・57は口縁端部が露胎である。56の口径は14.0cmである。57の口径は16.0cmである。58は口縁を外側につまみ出す。口縁端部を含め、全体に施釉される。59は白磁の合子の蓋である。表面には花文が施される。口縁端部は釉薬を掻き取っている。

60～63は青磁の皿である。60・61は同安窯系で、底部付近は露胎である。60は口径10.3cm、底径4.6cm、器高2.3cmである。61は底径5.0cmである。62は口径10.0cm、底径3.7cm、器高2.1cmである。63は口径10.6cmである。64～69は龍泉窯系の青磁の碗である。いずれも外面に鏝の残った蓮弁文が刻まれる。66の口径は15.4cmである。67の口径は15.0cmである。68の口径は15.0cmである。69は畳付より内側は施釉がなされない。底径5.6cmである。70は同安窯系の青磁碗の底部である。底部付近は露胎である。底径5.1cmである。71は青磁の碗である。口径



第47图 25号土坑出土土器实测图① (1/3)



第48図 25号土坑出土土器実測図② (1/3)

16.0cmである。72は龍泉窯系の青磁碗の底部であろうか。畳付より内側は施釉をされない。底径6.0cmである。73・74はいずれも畳付より内側が露胎である。73は底径6.2cmである。74は底径5.2cmである。75は底部周辺が施釉されない青磁碗である。底径5.2cmである。

25号土坑 (図版22、第42図)

調査区の北側東寄りで検出した。24号土坑を切る。平面プランは4.5m × 1.5mの長楕円形を呈する。深さは0.7mほどで、壁の立ち上がりはやや急である。床面はほぼ平坦である。埋土は淡黒褐色で締まりがない。遺物は中世の土器、青磁、白磁、石庖丁の再加工品(第82図5)が出土した。

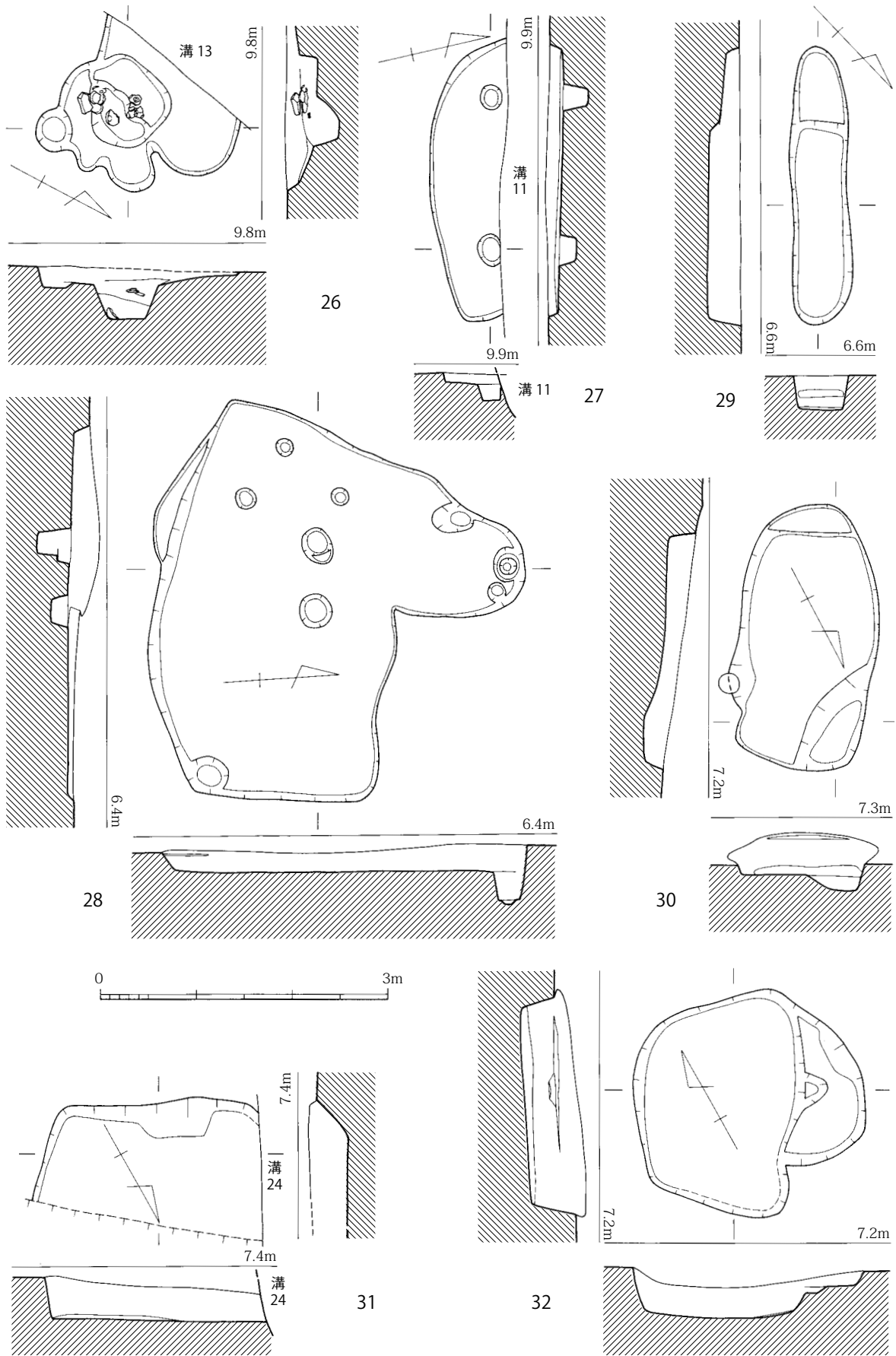
出土遺物 (図版38、第47・48図)

1～17は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。口径は7.8cm～9.0cm、器高0.9cm～1.5cmである。18～31は土師質の杯である。いずれも糸切り底である。口径13.6cm～15.3cm、器高2.8cm～3.5cmである。32～34は瓦器の碗である。内外面の調整はミガキである。33の底径は6.2cmである。34の口径は18.0cmである。35は土師質の鍋である。内外面の調整はナデである。口径26.0cmである。36は土師質の鍋の脚部であろうか。表面の調整はナデである。

37～39は龍泉窯系の青磁碗である。37は外面に蓮弁文が刻まれるが鐫はない。畳付より内側が露胎である。口径15.8cm、底径5.8cm、器高6.8cmである。38は口径13.2cmである。39は口径16.0cmである。40は青磁碗で内面に花文が認められる。底径5.1cmである。畳付より内側が露胎である。41は同安窯系の青磁碗である。底径5.0cmである。底部付近が露胎である。42は白磁の碗である。底径6.0cmである。底部付近が露胎である。

26号土坑 (図版22、第49図)

調査区の北側中央付近で検出した。13号溝に切られる。平面プランは1.8m × 1.5m + aの不整



第 49 図 26 ~ 32 号土坑実測図 (1/60)

形である。中央部分がピット状に約 0.5m と深くなっており、周囲がテラスとなる。中心部分から土師器が出土しているほか、砥石（第 82 図 12）が出土した。

出土遺物（第 50 図 1～7）

1・2 は土師器の鉢である。1 の内外面の調整はナデである。口縁は歪んでおり、器表面に圧痕が残る。1 は口径 7.0cm、底径 2.6cm、器高 6.0cm である。2 の内外面の調整はナデである。口径 10.2cm、底径 5.0cm、器高 8.8cm である。3・4 は土師器の碗である。3 は外面の調整がナデ、内面の調整がミガキである。口径 10.2cm、器高 3.1cm である。4 は内面に圧痕が残る。口径 15.2cm、器高 8.7cm である。5～7 は土師器の高杯である。5 は屈曲する杯部で屈曲部から大きく広がる。口径 22.5cm である。6 は脚部である。内面に工具痕が残る。7 は碗状の杯部である。口径 11.3cm である。

27 号土坑（第 49 図）

調査区の北側やや西寄りで検出した。11 号溝に切られる。平面プランは $2.9\text{m} \times 1.3\text{m} + a$ で楕円形となるであろう。壁の深さは 0.1m ほどで、床面はほぼ平坦である。2 基のピットを検出した。図化できる遺物は出土していない。

28 号土坑（第 49 図）

調査区の南側中央付近で検出した。平面プランは $4.2\text{m} \times 3.9\text{m}$ の不整形を呈する。深さは 0.3m ほどで、壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦で、複数のピットを検出した。図化できる遺物は出土していない。

29 号土坑（第 49 図）

調査区の南側やや西寄りで検出した。平面プランは $3.0\text{m} \times 0.6\text{m}$ の長楕円形を呈する。深さは 0.3m ほどで、西側がテラス状に一段高くなっている。壁の立ち上がりはやや急である。遺物は土師質の小皿が出土した。

出土遺物（第 50 図 8）

8 は土師質の小皿である。底部は糸切り底である。口径 8.5cm、底径 6.8cm、器高 1.0cm である。

30 号土坑（第 49 図）

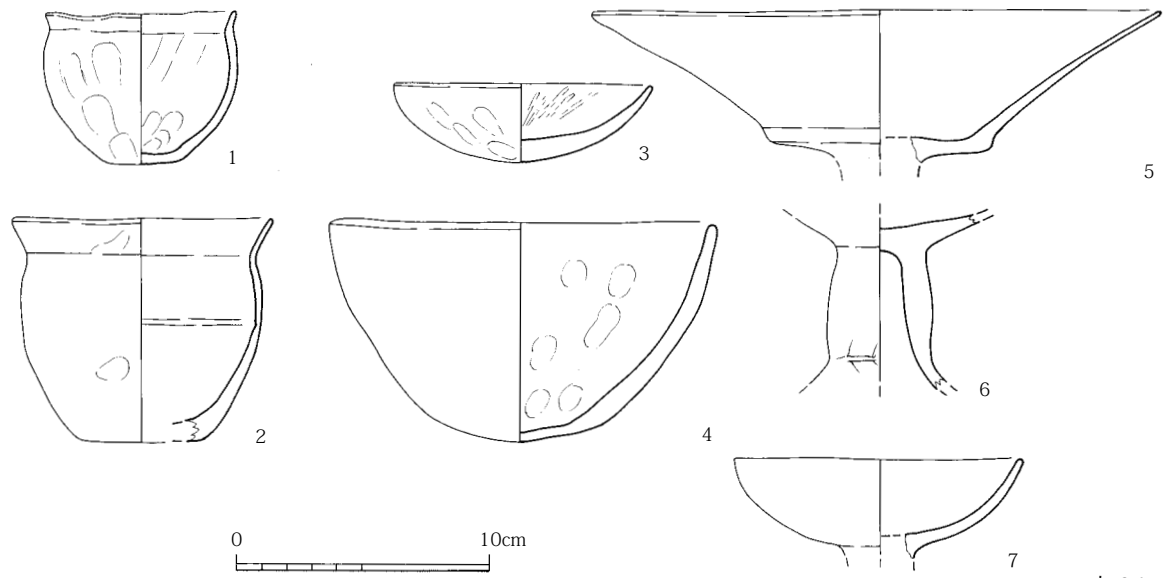
調査区の南側東寄りで検出した。15 号住居跡を切る。平面プランは $2.8\text{m} \times 1.5\text{m}$ の不整な楕円形を呈する。深さは 0.3m ほどで、北側が深くなっている。壁の立ち上がりはやや急である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 50 図 9・10）

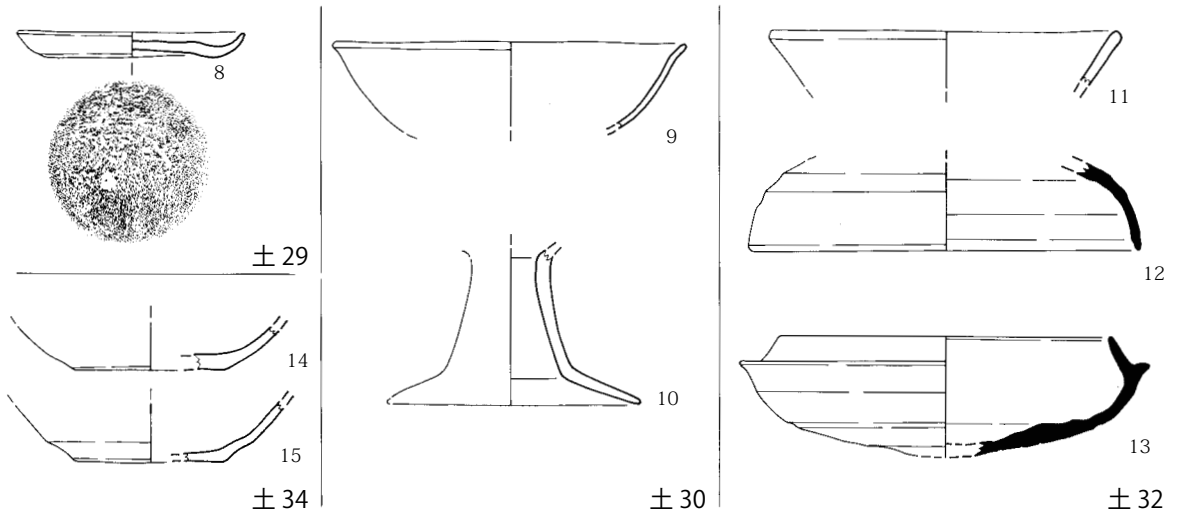
9 は土師器の碗であろうか。口縁端部がわずかに外反する。口径 14.0cm である。10 は高杯の脚部である。内外面の調整は磨滅して不明である。底径 10.4cm である。

31 号土坑（第 49 図）

調査区の南側東寄りで検出した。西側は 24 号溝に切られ、北側は攪乱によって切られる。平



± 26

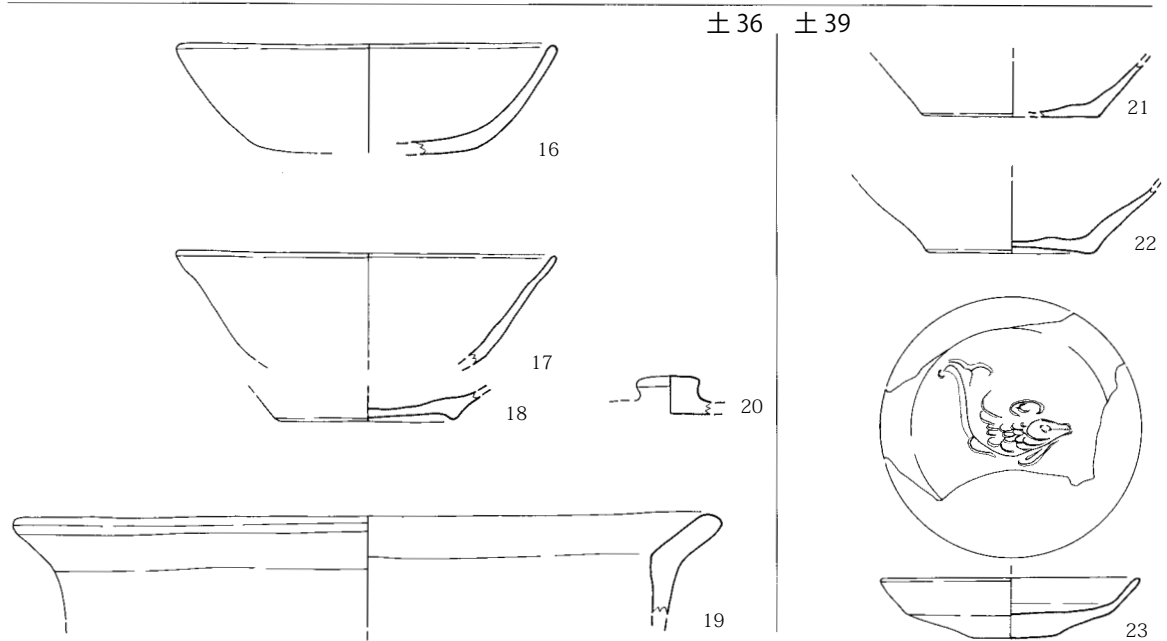


± 29

± 34

± 30

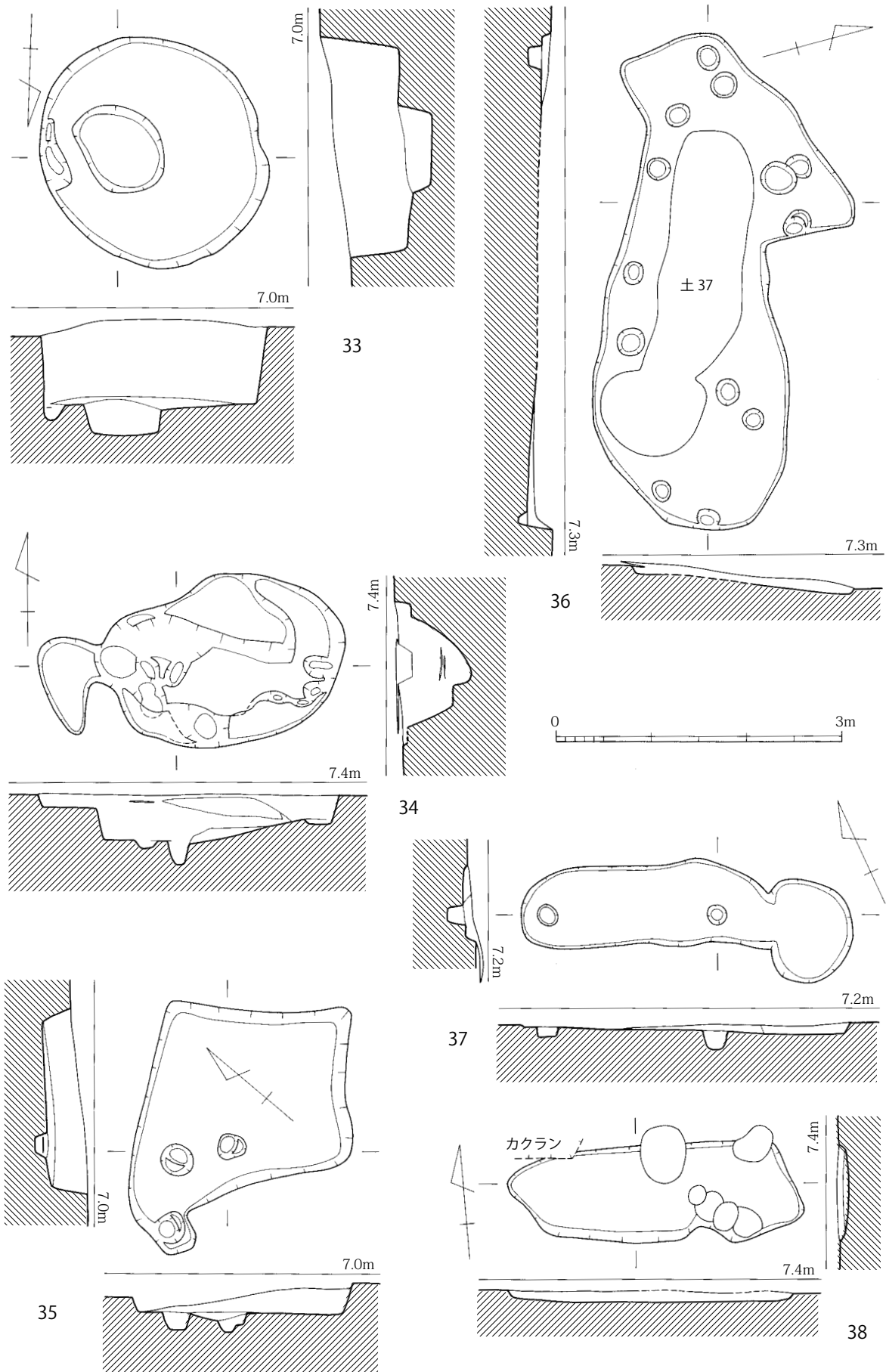
± 32



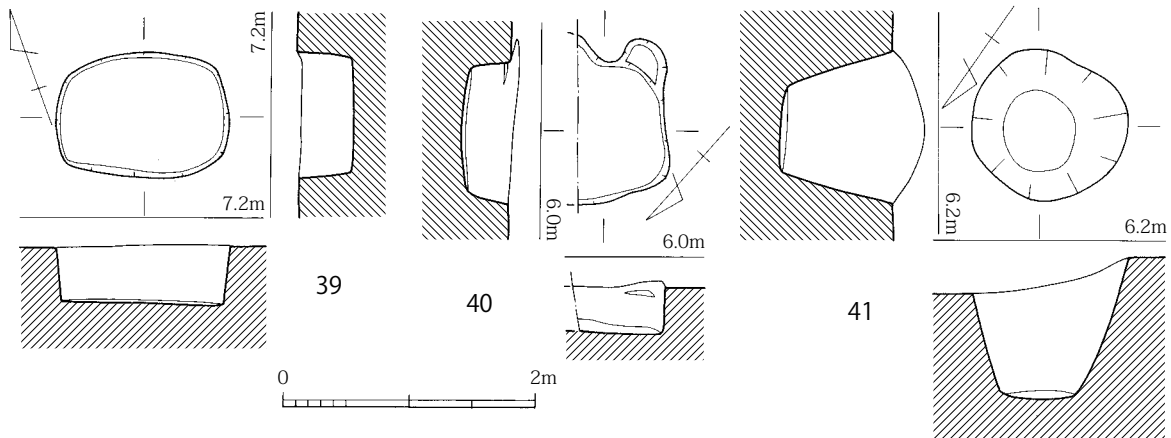
± 36

± 39

第50图 26·29·30·32·34·36·39号土坑出土土器实测图 (1/3)



第51図 33～38号土坑実測図 (1/60)



第 52 図 39～41 号土坑実測図 (1/60)

面プランは $2.4m + a \times 1.5m + a$ である。壁の深さは 0.4m ほどで、壁の立ち上がりはやや急である。図化できる遺物は出土していない。

32 号土坑 (図版 22・23、第 49・61 図)

調査区の南側東寄りで検出した。15 号住居跡を切る。平面プランは $2.4m \times 2.4m$ の不整形を呈する。壁の深さは 0.5m で、立ち上がりは急である。東側がテラス状になる。遺物は土師器・須恵器が出土した。

出土遺物 (第 50 図 11～13)

11 は土師器の碗であろうか。内外面の調整はナデである。口径 14.0cm である。12 は須恵器の杯蓋である。内外面の調整はともに回転ナデである。口縁部にはわずかに段状の痕跡が残る。口径 15.6cm である。13 は須恵器の杯身である。口径 13.0cm である。

33 号土坑 (第 51 図)

調査区の南側東寄りで検出した。平面プランは $2.4m \times 2.4m$ の円形を呈する。壁の深さは 0.8m ほどで、立ち上がりは急である。中央付近に深さ 0.3m ほどの掘り込みがある。図化できる遺物は出土していない。

34 号土坑 (第 51 図)

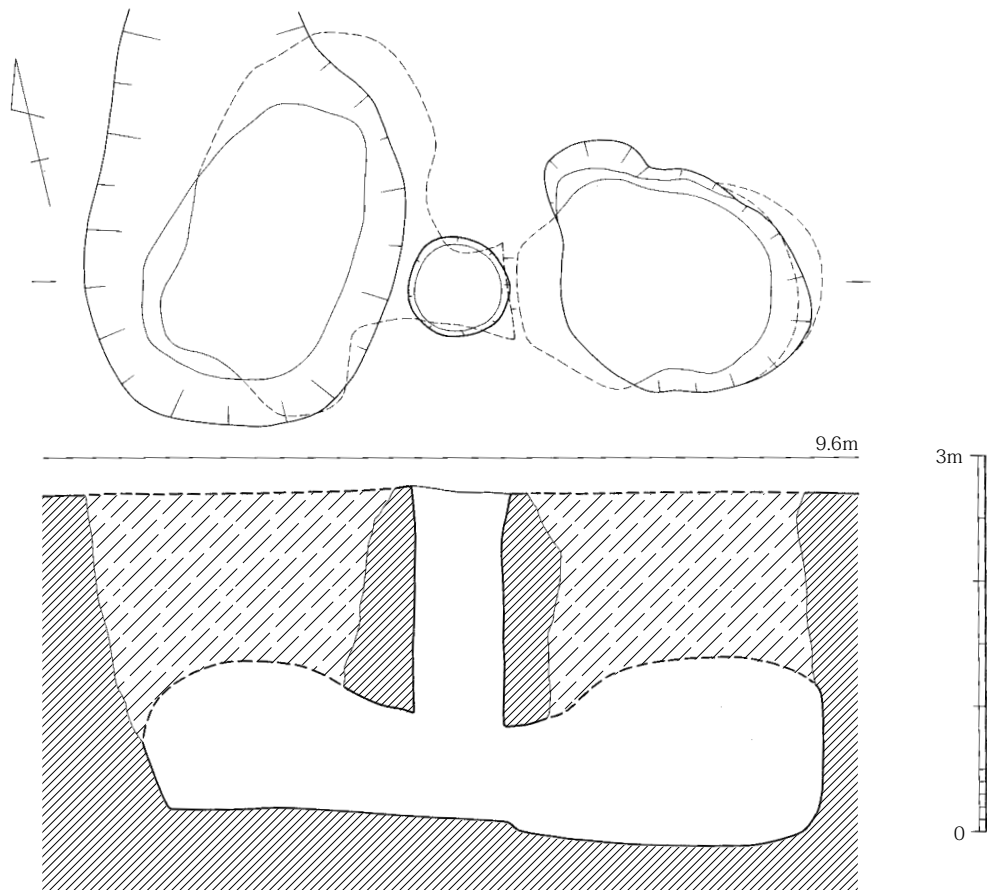
調査区の南側東寄りで検出した。平面プランは $3.1m \times 1.8m$ の不整な楕円形を呈する。部分的に深い部分があるが、壁の深さは 0.5m ほどである。遺物は中世の土器が出土した。

出土遺物 (第 50 図 14・15)

14・15 は土師質の杯である。14 の底径は 6.0cm である。15 の底径は 6.0cm である。

35 号土坑 (第 51 図)

調査区の南側中央付近で検出した。16 号住居跡・28 号溝を切る。平面プランは $2.7m \times 2.3m$ の不整な方形を呈する。壁の深さは 0.4m ほどで、壁の立ち上がりは急である。床面はほぼ平坦で、数基のピットを検出している。図化できる遺物は出土していない。



第53図 1号地下式土坑実測図 (1/60)

36号土坑 (第51図)

調査区の南側東寄りで検出した。37号土坑に切られる。平面プランは5.2m × 2.2mの不整な楕円形を呈する。壁の深さは0.2mほどである。床面はほぼ平坦で、複数のピットを検出している。遺物は中世の土器が出土した。

出土遺物 (第50図16～20)

16は土師質の杯である。内外面の調整はナデである。口径15.0cm、器高4.3cmである。17・18は瓦器の碗である。17の口径は15.0cmである。18は17と同一個体か。底径7.0cmである。19は土師質の鍋である。口径28.0cmである。20は混入の土師器杯蓋のつまみの部分である。

37号土坑 (第51図)

調査区の南側東寄りで検出した。36号土坑を切る。平面プランは3.4m × 0.9mの不整な長楕円形を呈する。壁の深さは0.1mほどである。図化できる遺物は出土していない。

38号土坑 (第51図)

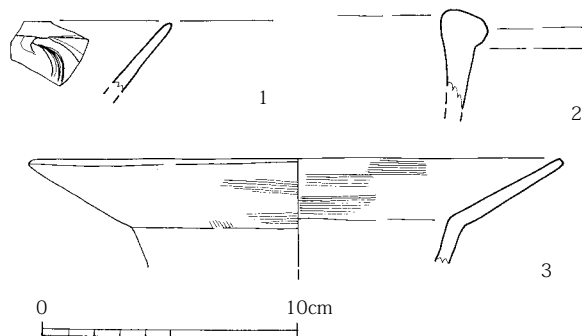
調査区の南側東寄りで検出した。平面プランは3.2m × 1.0mの長楕円形を呈する。深さは0.1mほどで、床面はほぼ平坦である。図化できる遺物は出土していない。

39号土坑（第52図）

調査区の南側東寄りで検出した。平面プランは1.4m × 0.9mの楕円形を呈する。深さは0.4mほどで、壁の立ち上がりは急である。床面はほぼ平坦である。中世の土器、青磁が出土した。

出土遺物（第50図21～23）

21・22は土師質の杯である。21の底径は6.8cmである。22の底径は6.6cmである。23は青磁の皿である。底部は露胎である。見込みには魚文が刻まれる。口径10.2cm、底径3.4cm、器高2.5cmである。



第54図 1号地下式土坑出土土器実測図（1/3）

40号土坑（図版23、第52図）

調査区の南側やや西寄りで検出した。16号住居跡、7号井戸に切られる。平面プランは1.4m × 0.7m + aの不整形な形状を呈する。深さは0.4mほどで、壁の立ち上がりは急である。床面はほぼ平坦である。図化できる遺物は出土していない。

41号土坑（図版23、第52図）

調査区の南側やや西寄りで検出した。16号住居跡に切られる。平面プランは1.2m × 1.2mのほぼ円形を呈する。深さは1.1mほどで、壁の立ち上がりはやや急である。床面はほぼ平坦である。図化できる遺物は出土していない。

（4）地下式土坑

1号地下式土坑（図版24、第53図）

調査区の北側西寄りで検出した。中央の土坑から東西に横穴が続くものである。最初に14号溝に伴う土坑を掘削しているつもりであったが、不自然に広がり、穴が東側へと続くようであった。そこで、14号溝の東側の遺構面を再精査したところ、径0.7mのピットを検出した。さらにそのピットを掘削したところ、東側の横穴とつながった。また、ピットの西側、現状の斜面部分でも、東側横穴と同様の広がりを検出したため、周囲を精査したが、ピットを見つけられなかった。西側の掘削を進めたところ、こちら最終的には中央のピットとつながり、一つの入り口であるピットから東西の横穴を掘削した地下式土坑と判断した。

14号溝の切り合い関係は同時に掘削を行ったため不明である。東側横穴は床面で2.5m × 1.7mの楕円形を呈し、残っている高さは1.2mほどである。床面全体は入り口部分に比べ、一段低くなっている。西側横穴は床面で2.8m × 1.8mの楕円形を呈する。残っている高さは1.0mほどである。埋土は全体に淡黒褐色でかなり締まっていた。遺物は青磁、土師質の土器、土師器の高杯が出土した。

出土遺物（第54図）

1は龍泉窯系の青磁碗の口縁部分である。2は土師質の口縁部分である。器表面は磨滅している。中世の鉢の類であろうか。3は混入の古墳時代前期の高杯の口縁部である。内外面の調整は

刷毛目である。口径 21.0cm である。

(5) 井戸

1号井戸 (図版 24、第 55 図)

調査区の中央やや西寄りで検出した。径 2m 前後の浅い不整な掘り込みの中心を直径 0.8m、ほぼ垂直に掘り込む素掘りの井戸である。調査区の低い部分であり、水が集まることから掘削は非常に困難を伴い、土塊と遺物が混濁した状態で掘り上げ、その中から遺物を探した。深さは 2.6m、標高 2.8m ほどで砂地となり、湧水する。遺物は古代の須恵器、「京都大」墨書土器を含む土師器、砥石 (第 82 図 15) 及び木製横櫛、獣骨が出土している。なお、土器、砥石以外の遺物については現在保存処理中のため、次年度以降に報告の予定である。

出土遺物 (巻頭図版 1、図版 39、第 56 図 1～10)

1～6 は土師質の碗である。内外面の調整はミガキである。1 は部分的に圧痕が残る。口径 11.4cm、器高 3.4cm である。2 は口径 12.3cm、器高 3.2cm である。3 は口径 12.3cm、器高 3.7cm である。4 は口径 12.5cm、器高 3.6cm である。5 は口径 12.6cm、器高 3.6cm である。6 は内面に縦方向のミガキを施す。外面底部付近はケズリである。口径 13.0cm、器高 2.6cm である。

7・8 は土師質の杯である。いずれも他の土器に比較して極めて丁寧な作りである。口縁端部を外反させ、胴部はやや膨らむ。7 は内外面の調整はミガキである。口径は 13.6cm である。8 の底部はやや丸底状である。口径 13.2cm、底径 6.8cm、器高 4.1cm である。外面は丁寧な横方向のミガキ、外面底部は回転ヘラケズリである。内面胴部は横ナデ、見込みは丁寧ならせん状のミガキを施す。外面底面に「京都大」の文字を墨書する。

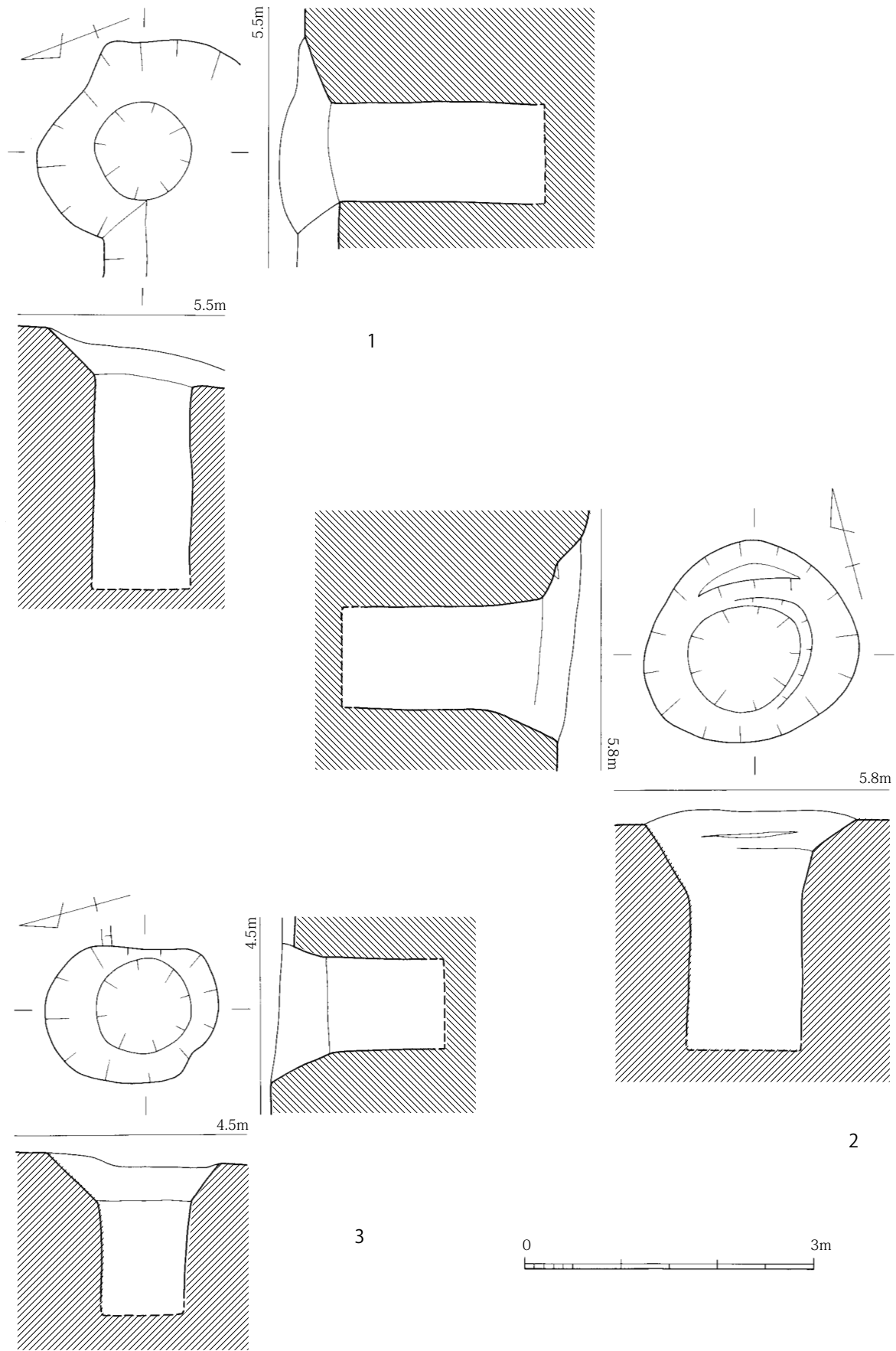
9 は須恵器の杯身である。内外面の調整はナデである。見込みに滑らかになっている上に黒色の物質が付着しており、転用硯として使用されていたことがわかる。10 は須恵器の甕の口縁部である。内外面の調整はナデである。口径 22.6cm である。

2号井戸 (図版 24、第 55 図)

調査区の中央やや西寄りで検出した。直径 2.2m ほどの浅い掘り込みの中心を直径 1.1m、ほぼ垂直に掘り込む素掘りの井戸である。深さは 2.4m、標高 3.2m ほどで砂地となり、湧水する。遺物は中世の土器および陶磁器、石鍋 (第 83 図 26) が出土した。

出土遺物 (第 56 図 11～20)

11～14 は中世の瓦質の鉢の類である。11 は内外面の調整が刷毛目である。口径 37.0cm である。12 は外面口縁部下に波状文が施される。13 は外面に 2 条の突帯を巡らし、花文のスタンプを施す。内外面の調整はナデである。14 は外面に 2 条の突帯を巡らし、菱形のスタンプを施す。内面は刷毛目調整、外面はナデである。15・16 は褐釉の陶器である。いずれも碗になるものであろう。15 は底径 5.0cm である。16 は底径 5.3cm である。17 は青磁の碗である。底部周辺は露胎である。底径 5.0cm である。18 は青磁の大型の碗である。底部周辺は露胎で、底径 9.0cm である。19 は陶器の壺である。底部は糸切りである。内外面はナデ調整である。底径 5.0cm である。20 は青磁の碗である。壺付より内側は露胎である。底径 6.7cm である。



第 55 图 1 ~ 3 号井戸実測図 (1/60)

3号井戸（図版 25、第 55 図）

調査区の中央やや西寄りで検出した。平面プランは径 1.6m ほどの楕円形で、中央を直径 0.8m、ほぼ垂直に掘り込む素掘りの井戸である。1号井戸と同じく、水の集まる低地であったため掘削は非常に困難を伴い、土塊と遺物が混濁した状態で掘り上げ、その中から遺物を探した。深さは 1.5m、標高 2.8m ほどで砂地となり、湧水する。

遺物は古代の土器のほか、「急」の文字を書いた木簡、木製の鞍及び壺鐙の未成品が出土した。なお、土器以外については、現在保存処理中のため、次年度以降に報告を行う。

出土遺物（図版 39、第 58 図 1～10）

1～4は土師質の碗である。1は口径 12.7cm、器高 4.2cm である。2の外表面は横方向のミガキ、内表面は縦方向のミガキである。口径 17.0cm、器高 3.4cm である。3・4は内外面ともにミガキである。5・6は土師器の甕である。5の外表面は刷毛目、内表面はケズリである。口径 14.0cm である。6の外表面は刷毛目、内表面はケズリである。口径 18.6cm である。

7・8は甑である。接合しないが同一個体の可能性もある。7は外表面の調整は刷毛目、内表面の調整はケズリである。8の外表面の調整は刷毛目、内表面の調整はナデもしくはケズリである。底径 13.4cm である。9は須恵器の杯蓋である。口径 12.8cm である。10は須恵器の杯身である。底径 10.8cm である。

4号井戸（図版 25、第 57 図）

調査区の中央やや西寄りで検出した。5号住居跡を切る。平面プランは 5.0m × 3.1m の不整な楕円形である。中央に 3.2m × 2.0m の楕円にほぼ垂直に掘り込むが、調査中の掘削では壁面の崩落が激しかった。深さは 2.2m、標高 3.2m ほどで砂地となり、湧水する。遺物は中世の土器、陶器、石臼（第 83 図 31）が出土した。

出土遺物（図版 39、第 58 図 11～20）

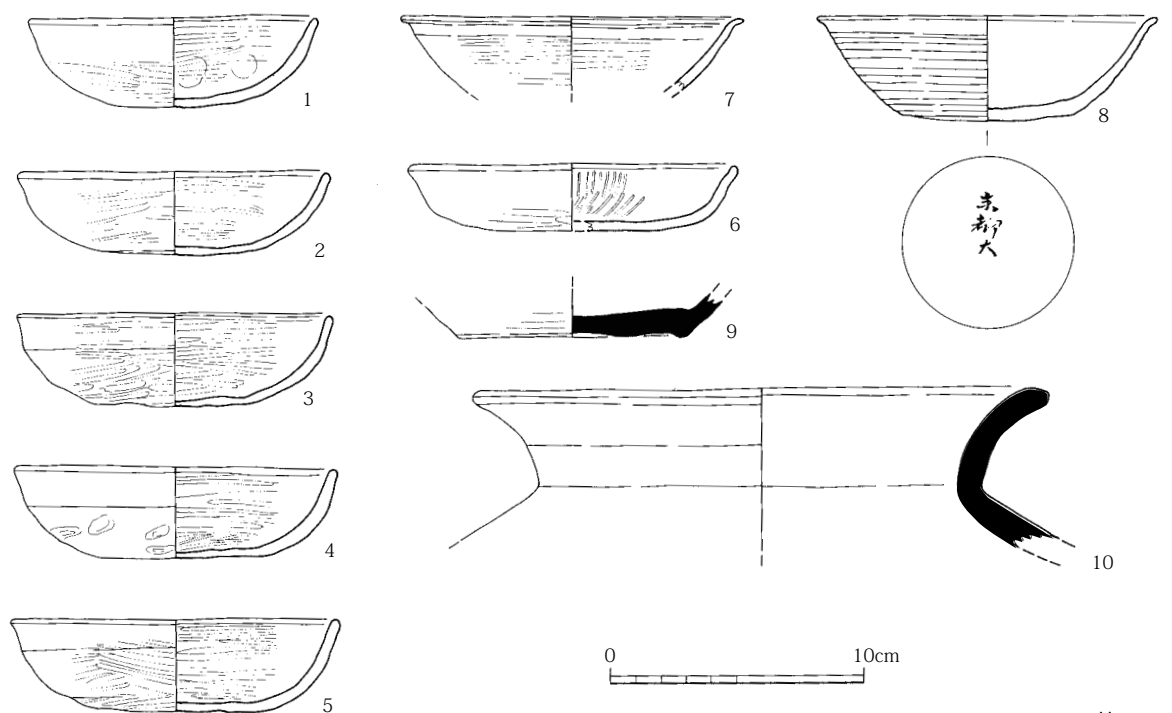
11は瓦器の碗である。内外表面の調整はミガキである。口径 16.0cm である。12は瓦質の鉢である。外表面はナデもしくは部分的にケズリである。内表面はナデである。底径 9.8cm である。13は瓦質の深鉢の類であろう。外表面は縦横方向のミガキ、内表面はナデである。14は土師質の鍋である。外表面に鏝が巡る。外表面はナデ、内表面は刷毛目である。15は瓦質の播鉢である。内外表面はナデ調整であり、内面に 8 条一単位の摺目が施される。16・17は白磁の碗である。ともに口縁部片であるが、全体に施釉される。18は混入の土師器の壺である。内外表面の調整はナデで、一部に刷毛目が残る。口径 8.3cm、底径 3.0cm、器高 8.9cm である。19・20は混入の須恵器の杯蓋である。19の口径は 12.4cm である。20の口径は 12.4cm、器高 2.4cm である。

5号井戸（図版 25、第 57 図）

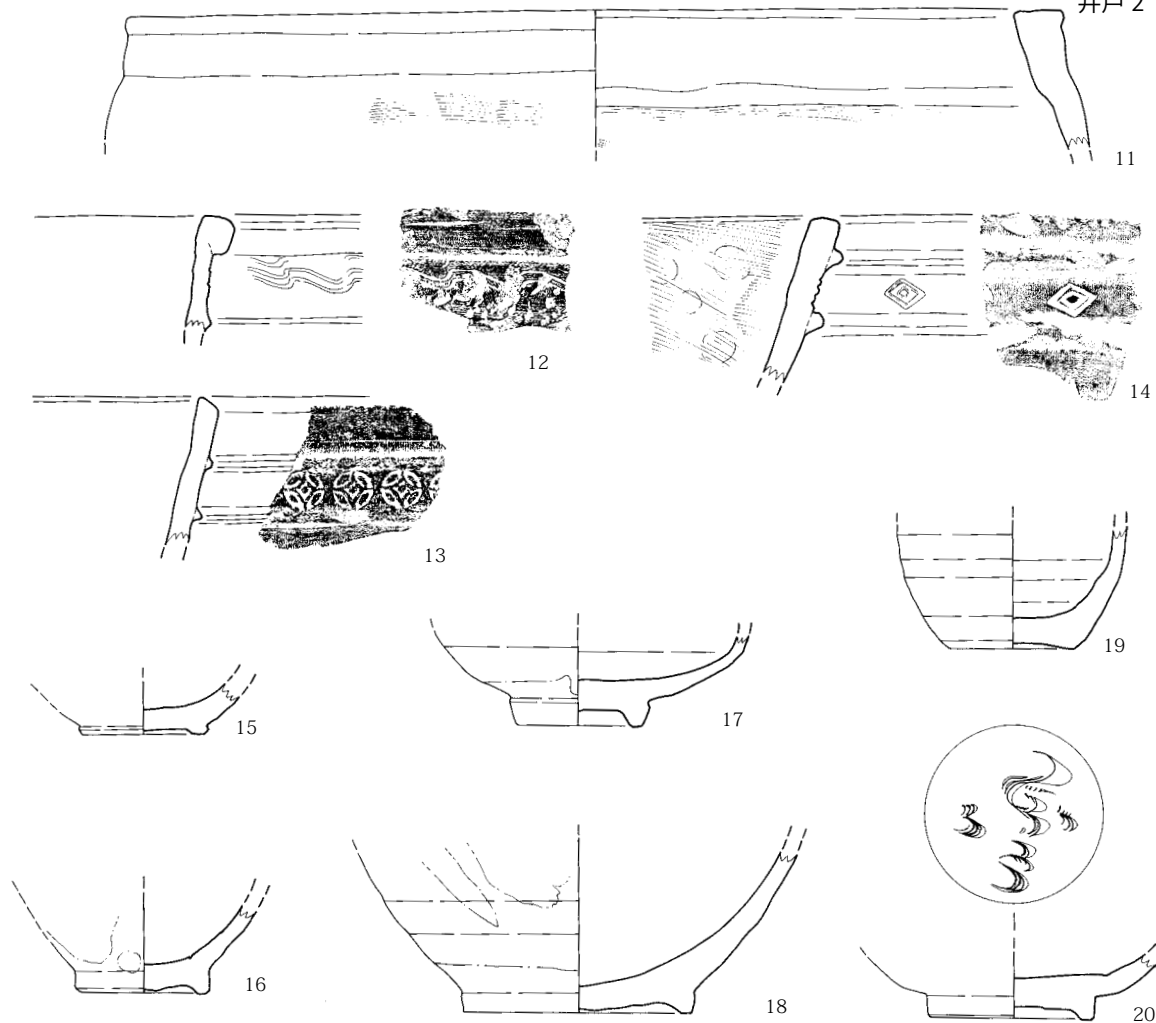
調査区の中央やや西寄りで検出した。6号井戸に切られる。平面プランは直径 2.8m ほどの浅い掘り込みで、中心を直径 1.7m、わずかにすぼまりながら掘り込む素掘りの井戸である。深さは 2.2m、標高 3.2m ほどで砂地となり、湧水する。近世の遺物が出土した。

出土遺物（第 60 図 1～5）

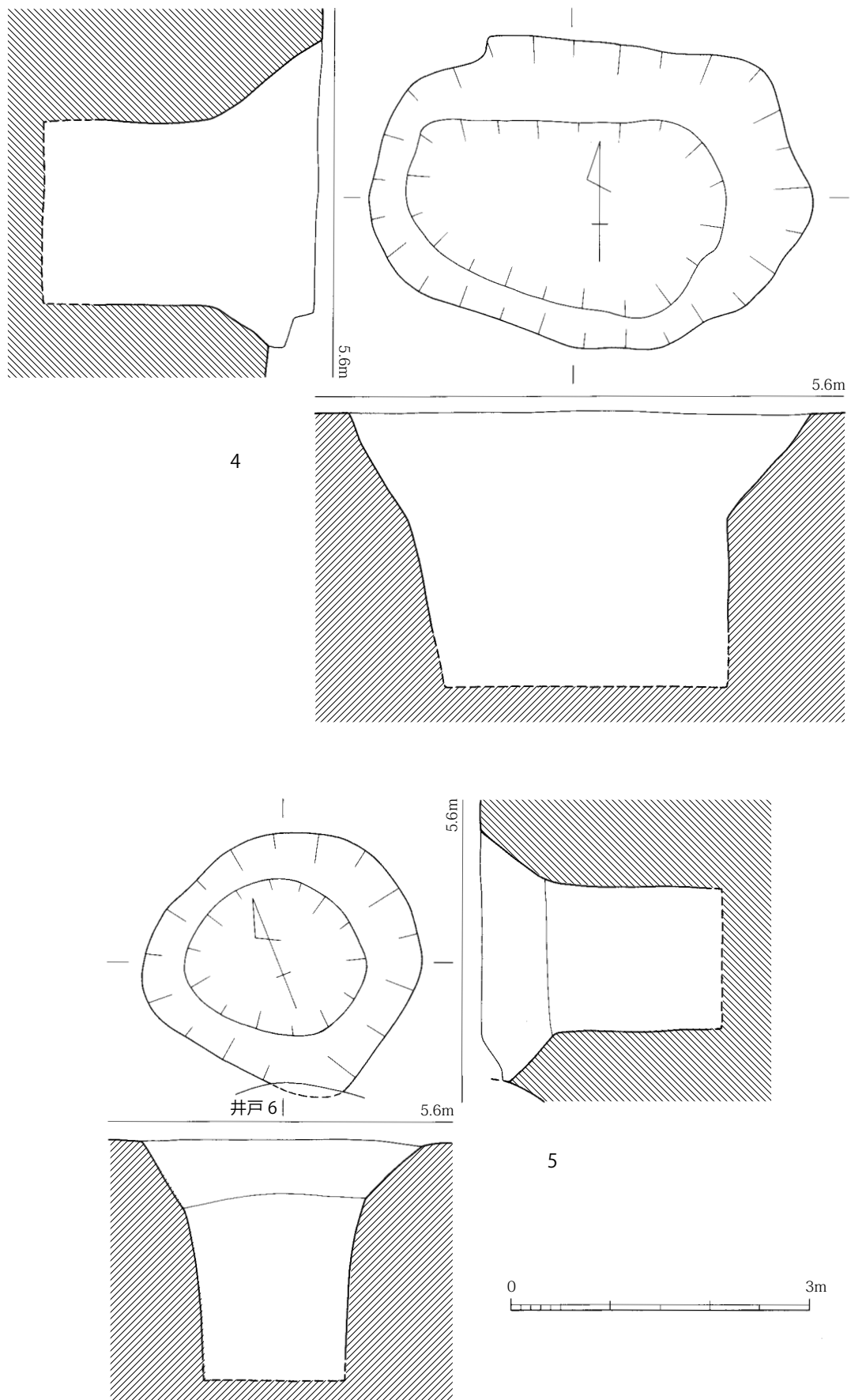
1は陶器の播鉢である。内面に 5 条一単位の摺目が施される。2は土師質の大型の深鉢の類で



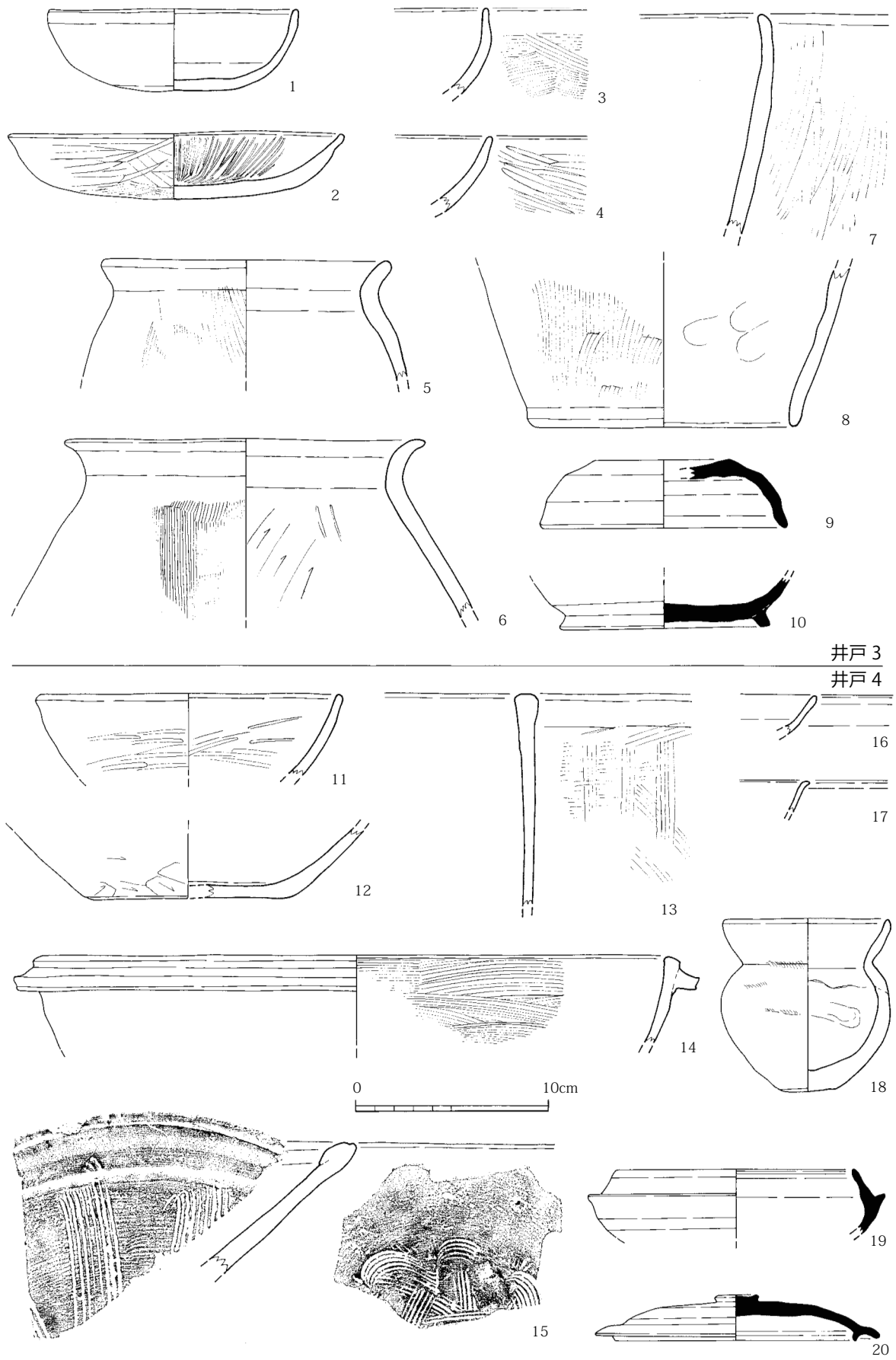
井戸 1
井戸 2



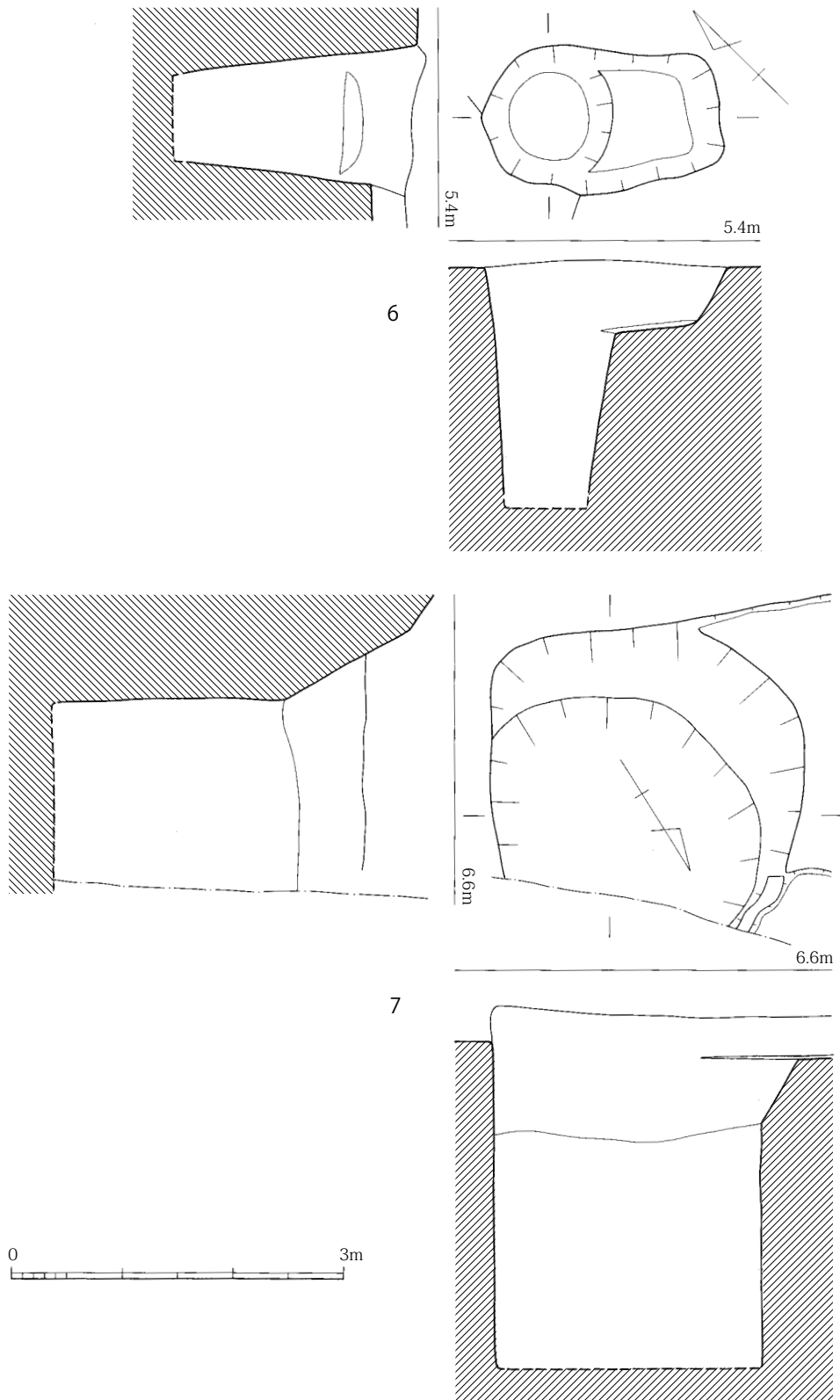
第 56 图 1・2号井戸出土土器实测图 (1/3)



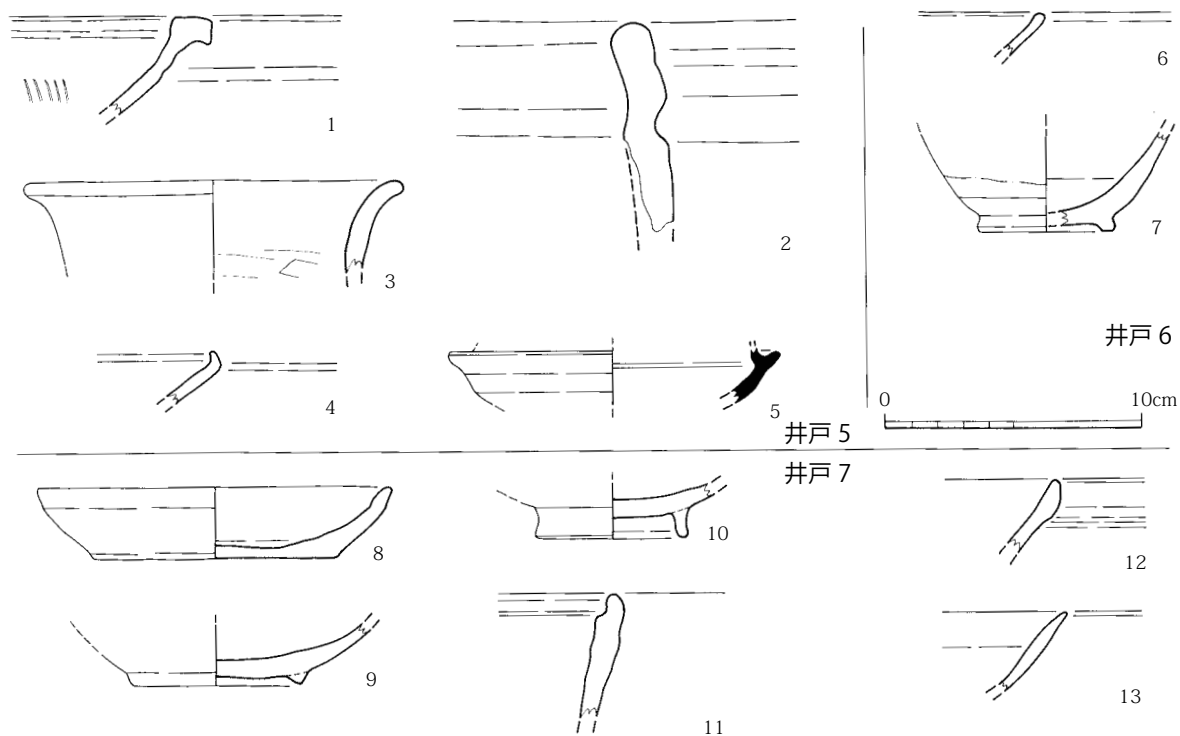
第 57 图 4 · 5 号井戸実測图 (1/60)



第 58 図 3・4号井戸出土土器実測図 (1/3)



第 59 图 6・7号井戸実測図 (1/60)



第60図 5～7号井戸出土土器実測図 (1/3)

あろう。3は土師器の甕である。内面にケズリが残る。4は青磁の皿である。外面に厚く施釉される。5は混入の須恵器の杯身である。口径10.8cmである。

6号井戸 (図版26、第59図)

調査区の中央やや西寄りで検出した。5号井戸を切る。平面プランは2.2m × 1.3mほどの掘り込みで、深さ0.6mほどで南東にテラスを持ち、ややすぼまり掘り込む素掘りの井戸である。深さは約2.2mである。標高3m付近で砂地となり、湧水する。遺物は近世の陶器が出土した。

出土遺物 (第60図6・7)

6は陶器の碗の口縁部片である。全面に厚く施釉される。7は陶器の碗である。外面の底部付近は露胎である。底径5.4cmである。

7号井戸 (図版26、第59図)

調査区の南側やや西寄りで検出した。16号住居跡、40号土坑を切る。平面プランは2.8m × 3.2mほどの掘り込みで、深さは約3.2mである。標高3.0m付近で砂地となり、湧水する。遺物は中世の土器が出土した。

出土遺物 (第60図8～13)

8は土師質の杯である。口径14.0cm、底径9.7cm、器高2.9cmである。9は瓦器の碗である。底径6.5cmである。10は土師質の碗の底部である。底径6.0cmである。11は鉢の口縁部片であろう。内外面の調整はナデである。12は白磁の口縁部である。13は白磁の口縁部片である。全面に施釉される。

(6) 溝

1号溝

調査区の中央西寄りで検出した。2～4号溝を切る。等高線に直交する方向に延びる溝で両端は自然に消失している。最大幅は約1mで、深さは0.1mほど、断面は逆台形を呈する。遺物は近世の陶磁器が出土したが、整理の段階で所在不明である。

2号溝

調査区の中央西寄りで検出した。5号溝を切り、1号溝に切られる。8号溝と重複するが、前後関係は分からなかった。等高線に平行する溝で西側は調査区外へ延び、東側は自然に消失する。最大幅は約1.3mで、深さは0.1mほど、部分的にテラスを持つ。図化可能な遺物は出土していない。

3号溝

調査区の中央西寄りで検出した。4号溝を切り、1号溝に切られる。等高線に平行する方向に延びる溝で、西側は「L」字形に折れ、自然に消失する。東側は1号溝に切られた部分で消える。最大幅は0.6mで、深さは0.15mほど、断面は逆台形を呈する。遺物は近世の陶磁器が出土した。

出土遺物（図版39、第62図1・2）

1は近世の磁器碗である。畳付部分のみが露胎である。口径10.0cm、底径5.0cm、器高7.7cmである。2は脚付きの鉢である。底部の3か所に脚を貼り付ける。底部付近は露胎である。

4号溝

調査区の中央西寄りで検出した。1・3号溝に切られる。最大幅は1.2mで、深さは0.1mほどである。図化可能な遺物は出土していない。

5号溝

調査区の中央西寄りで検出した。2号溝に切られる。等高線にほぼ直行する溝である。最大幅は0.7mで、深さは0.1mほど、断面は逆台形を呈する。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第62図3）

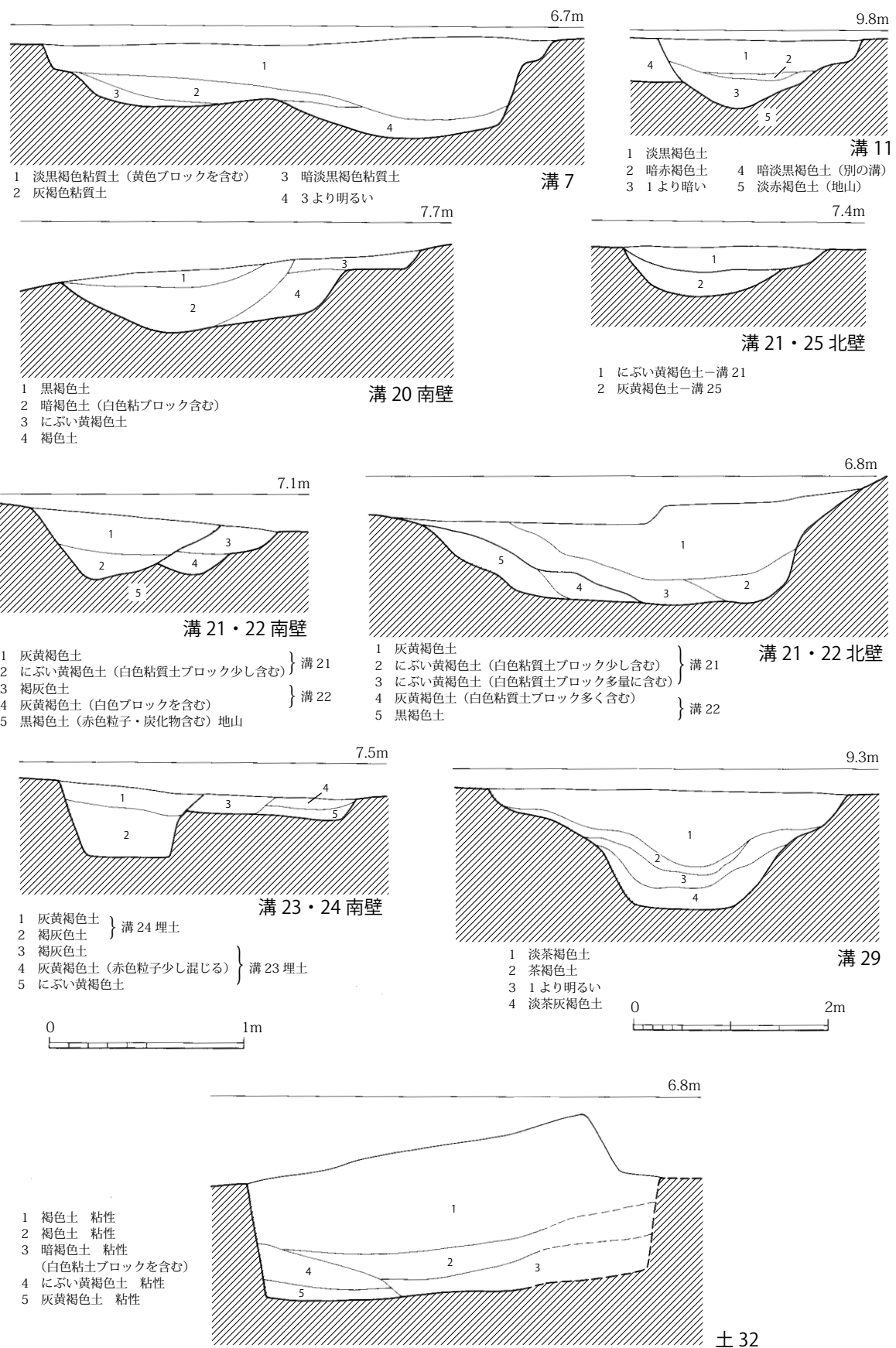
3は高杯の杯部と脚部の境部分であろうか。内面にナデが残る。

6号溝（図版26）

調査区の中央東寄りで検出した。等高線に直行する溝で北側は調査区外へ延び、南側は自然に消失する。幅は1.5mで、深さは0.1mほど、断面は逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土である。遺物は中世の土器、青磁が出土した。

出土遺物（図版39、第62図4～8）

4は瓦器の碗である。底径7.0cmである。5は瓦質の鉢である。2条の突帯を施し、花文をスタンプする。6は瓦質の擂鉢である。外面の調整はナデである。内面の調整は刷毛目で、その上から摺目を施す。口径26.0cmである。7は瓦質の鉢である。外面はナデ調整、内面はミガキである。口径41.2cm、底径18.3cm、器高11.7cmである。8は青磁の皿である。厚く施釉される。



第 61 図 7・11・20～25・29号溝、32号土坑土層図 (土 32 は 1/30、他は 1/60)

7号溝 (図版 27、第 61 図)

調査区の中央東寄りで検出した。2号住居跡、3・8号土坑、9号溝を切る。等高線に直行する溝で北側は「L」字形に折れ、東に向かい、調査区外へ延びる。南側は二股に分かれ、自然に消失する。幅は2.7mほどで、部分的にテラスをもつ。埋土は淡黒褐色粘質土である。遺物は中世の土器、砥石(第82図16)、石鍋(第83図24・27・28)、土錘(第85図1)が出土した。

出土遺物 (第 62 図 9～16)

9は土師質の杯である。口径11.8cm、底径8.0cm、器高4.7cmである。10は瓦器の碗である。口径15.4cm、底径8.0cm、器高5.7cmである。11は瓦質の鉢である。12は瓦質の甕であろうか。内外面の調整はナデである。13・14は白磁の碗である。13は畳付より内側が露胎である。

15は混入の土師器の高杯である。16は混入の土師器の鉢である。外面の調整は刷毛目、内面の調整はナデである。

8号溝

調査区の中央やや西寄りで検出した。2号溝と重複するが前後関係は分からなかった。等高線に直行する溝で、南北両端ともに自然に消失する。最大幅0.8mで、深さは0.1mほど、断面は逆台形を呈する。遺物は中世の土器が出土した。

出土遺物 (第 62 図 17～19)

17は土師質の小皿である。口径7.6cm、底径6.0cm、器高0.9cmである。18は瓦質の皿である。口径9.4cm、底径7.0cm、器高1.8cmである。19は瓦質の捏鉢である。外面の調整はナデ、内面の調整は刷毛目である。

9号溝

調査区の中央東寄りで検出した。東側は急に幅広になり、調査区外へ延びる。西側は攪乱に切られる。深さは0.1mほどで、部分的にテラスを持つ。図化できる遺物は出土していない。

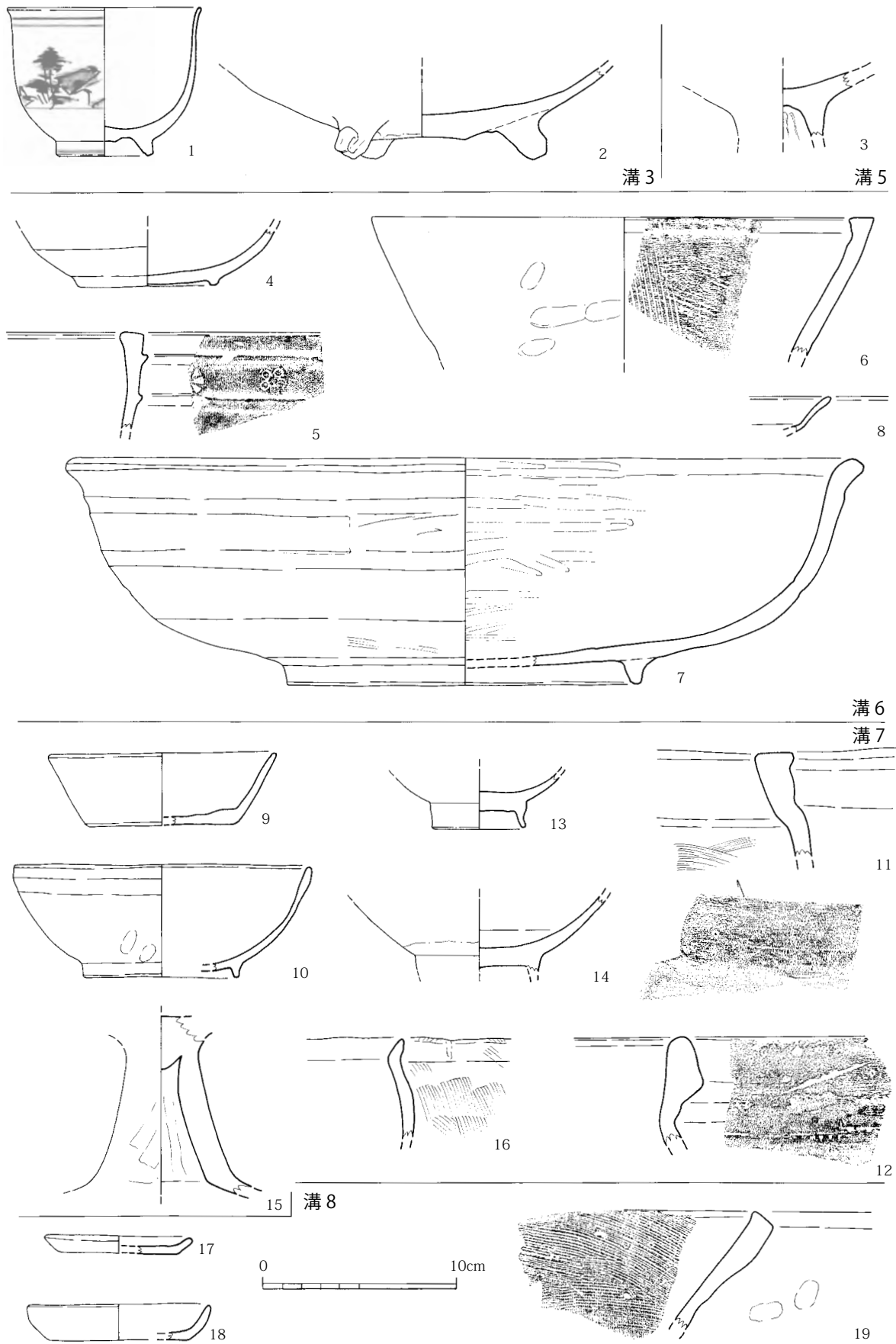
10号溝 (図版 27)

調査区の北側で検出した。11～13号住居跡、12～14・18・19号溝を切る。1号掘立柱建物跡との前後関係は不明である。東西に掘削された溝で、両端は調査区外へと延びる。幅は1.7mほどで、深さは約0.6mである。断面の形状はかまぼこ形に近い。埋土は淡黒褐色である。遺物は中近世の土器、土錘(第85図2)、土馬(第85図11)が出土した。

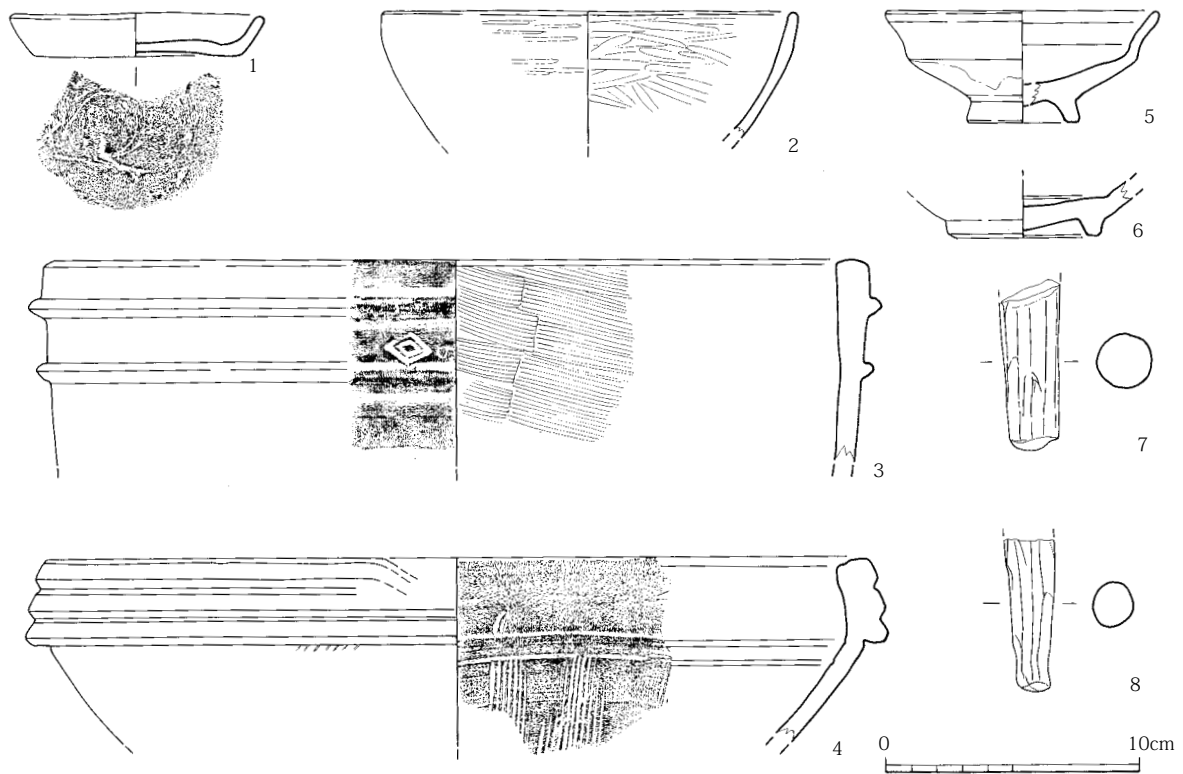
出土遺物 (第 63 図)

1は土師質の皿である。底部は糸切りである。口径10.0cm、底径8.0cm、器高1.7cmである。2は瓦器の碗である。内外面の調整はミガキである。口径1.4cmである。3は瓦質の深鉢である。外面はナデ調整である。2条の突帯を巡らし、菱形のスタンプを施す。内面の調整は刷毛目である。口径31.4cmである。

4は備前焼の播鉢である。口縁が片口となる。口径32.4cmである。5は陶器の碗である。底部付近は露胎である。口径10.8cm、底径4.4cm、器高4.4cmである。6は青磁碗の底部である。底径6.1cmである。7・8は土師質の鍋の脚部であろう。表面の調整はナデである。



第 62 图 3·5·6~8号沟出土土器实测图 (1/3)



第63図 10号溝出土土器実測図 (1/3)

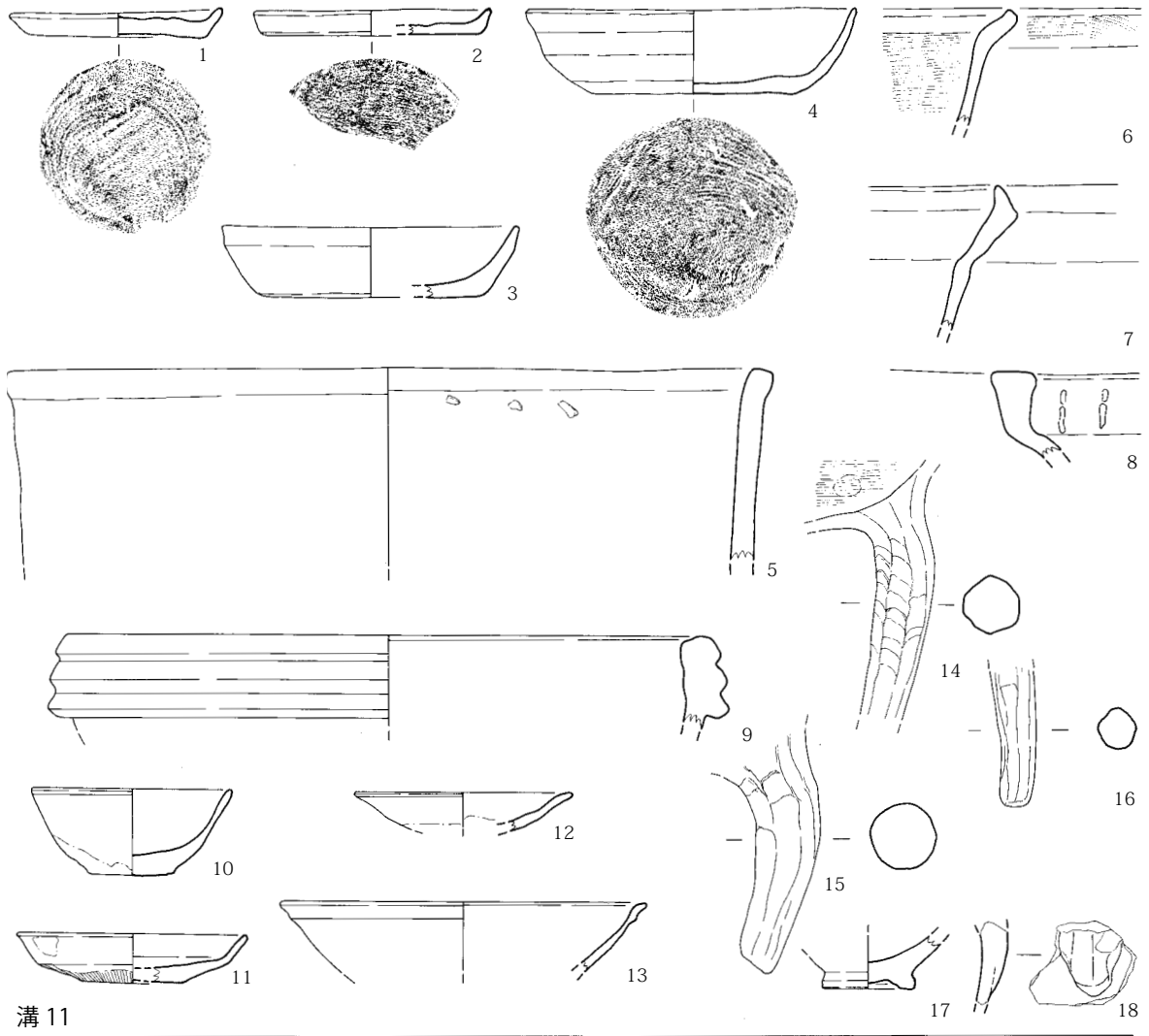
11号溝 (第61図)

調査区の北側で検出した。7・9・12号住居跡、14・16・19・22・24・27号土坑、13～15・18・19号溝を切る。1号掘立柱建物跡との前後関係は不明である。西側は調査区外へ延びる。途中、細く浅い南へ延びる溝が分かれる。東端部はさらに東へ延びるものと南へ延びるものとに分かれるが、その部分で後世に削られ、失われている。溝の幅は約2.0m、深さは0.7mほどで、断面の形状はかまぼこ形に近い。埋土は淡黒褐色土を中心にレンズ状に堆積する。遺物は中世の土器が出土した。

出土遺物 (第64図)

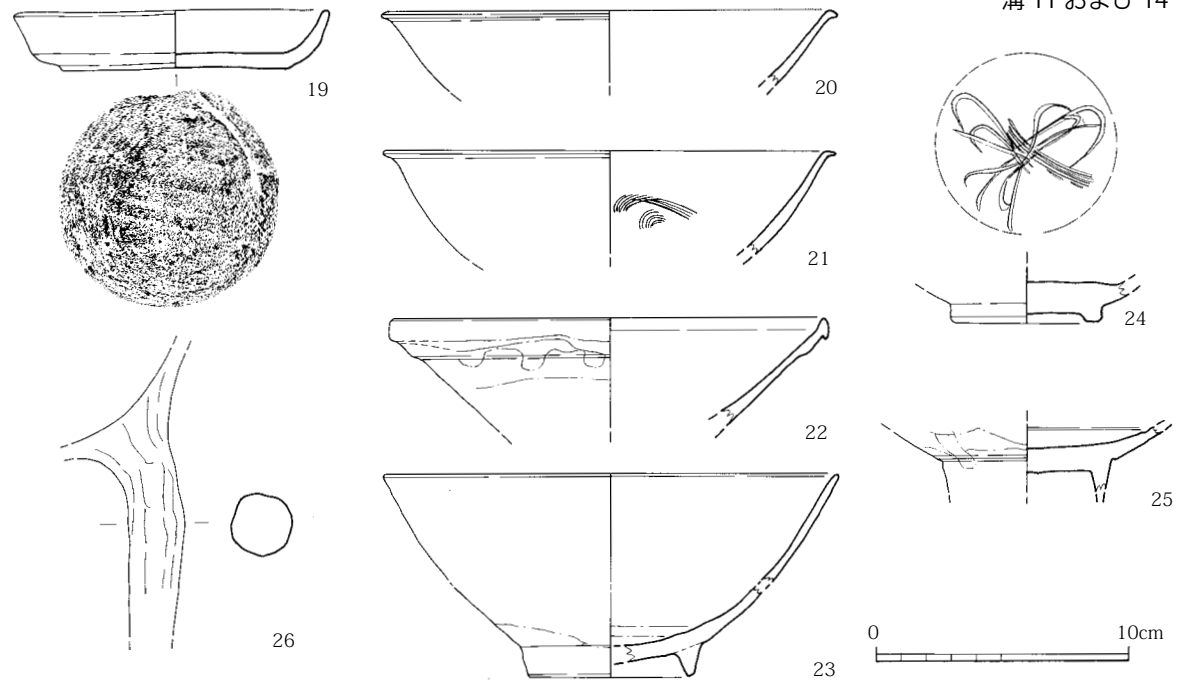
ここでは、「11号溝」出土遺物と「11および14号溝」出土遺物を報告する。1・2は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。1は口径8.7cm、底径7.0cm、器高1.2cmである。2は口径9.6cm、底径9.0cm、器高1.0cmである。3・4は土師質の杯である。3は口径12.0cm、底径9.0cm、器高2.9cmである。4の底部は糸切りである。口径13.4cm、底径8.1cm、器高3.5cmである。5は土師質の深鉢である。口径31.2cmである。6・7は土師質の鍋である。6の内外面の調整は刷毛目である。8は瓦質の浅鉢であろう。内外面の調整はナデである。9は備前焼の搦鉢である。口径26.2cmである。

10は青磁の小型の碗である。底部は糸切りである。底部付近は露胎である。口径8.2cm、底径3.5cm、器高3.5cmである。11は青磁の皿である。底部付近は釉薬を掻き取っている。口径9.4cm、底径3.9cm、器高2.0cmである。12は白磁の皿である。口径7.0cmである。13は白磁の碗である。口径15.0cmである。14～16は土師質の鍋の脚部である。表面の調整はナデである。17は褐釉



溝 11

溝 11 および 14



第 64 図 11・11 および 14 号溝出土土器実測図 (1/3)

の碗である。底径 3.8cm である。18 は褐釉陶器の耳の部分であろう。

19 は土師質の杯である。底部は糸切りである。口径 12.5cm、底径 9.0cm、器高 2.3cm である。

20～23 は白磁の碗である。20 の口径は 18.0cm である。21 は口径 17.8cm である。22 は口径 17.4cm である。23 は口径 18.4cm、底径 6.4cm である。24 は青磁碗の底部である。底径 6.0cm である。25 は青磁碗の底部である。底部付近は露胎である。26 は土師質の鍋の脚部である。

12号溝

調査区の北側やや西寄りで検出した。10号溝に切られる。北側は調査区が延びる。幅は 0.7m ほど、深さ 0.3m ほど、断面の形状は逆台形を呈する。図化できる出土遺物はない。

13号溝

調査区の北側中央付近で検出した。10号住居跡、26号土坑、18号溝を切り、18・19号土坑、10・11号溝に切られる。南北に延びる溝で、南側は後世に削られて消失する。北側は東へ折れるが、その部分で10号溝に切られ、消失する。幅は 0.6m ほどで、深さは 0.2m ほど、断面の形状は逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色土であり、遺物は中世の青磁が出土した。

出土遺物（第 66 図 1・2）

1 は青磁の皿である。口径 9.6cm である。2 は土師器の甕である。外面の調整は刷毛目、内面の調整はケズリである。口径 17.0cm である。

14号溝（図版 28・29、第 65 図）

調査区の北側西寄りで検出した。9号住居跡を切り、10・11号溝に切られる。1号地下式土坑との前後関係は不明である。南北に延びる溝で、南側は後世に削られた部分で消失し、北側は調査区外へ延びている。幅は 2.8m ほどで、深さは 0.7m ほどである。

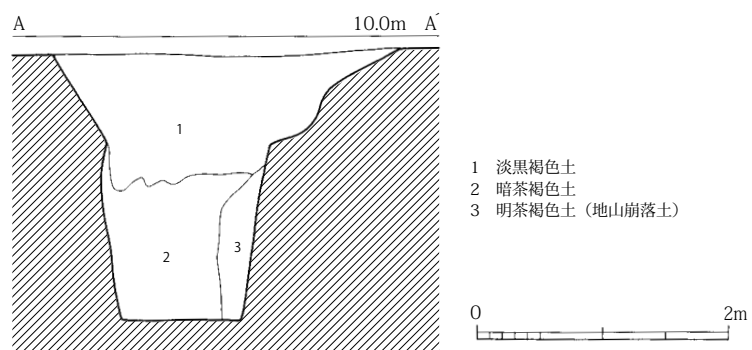
特筆すべき点として、溝の底面に方形の土坑が連続して掘削されていることである。北側では溝幅が狭いためか、溝幅いっぱい掘られるが、南側は 1.5m × 1.2m 及び 1.0m × 2.2m 程のサイズの違う土坑を交互に掘削している。深さは北側が溝の底面から 1.5m ほどで、南側が 2.0m ほどである。遺物は中世の土器が出土した。

出土遺物（図版 39、第 66 図 3～8）

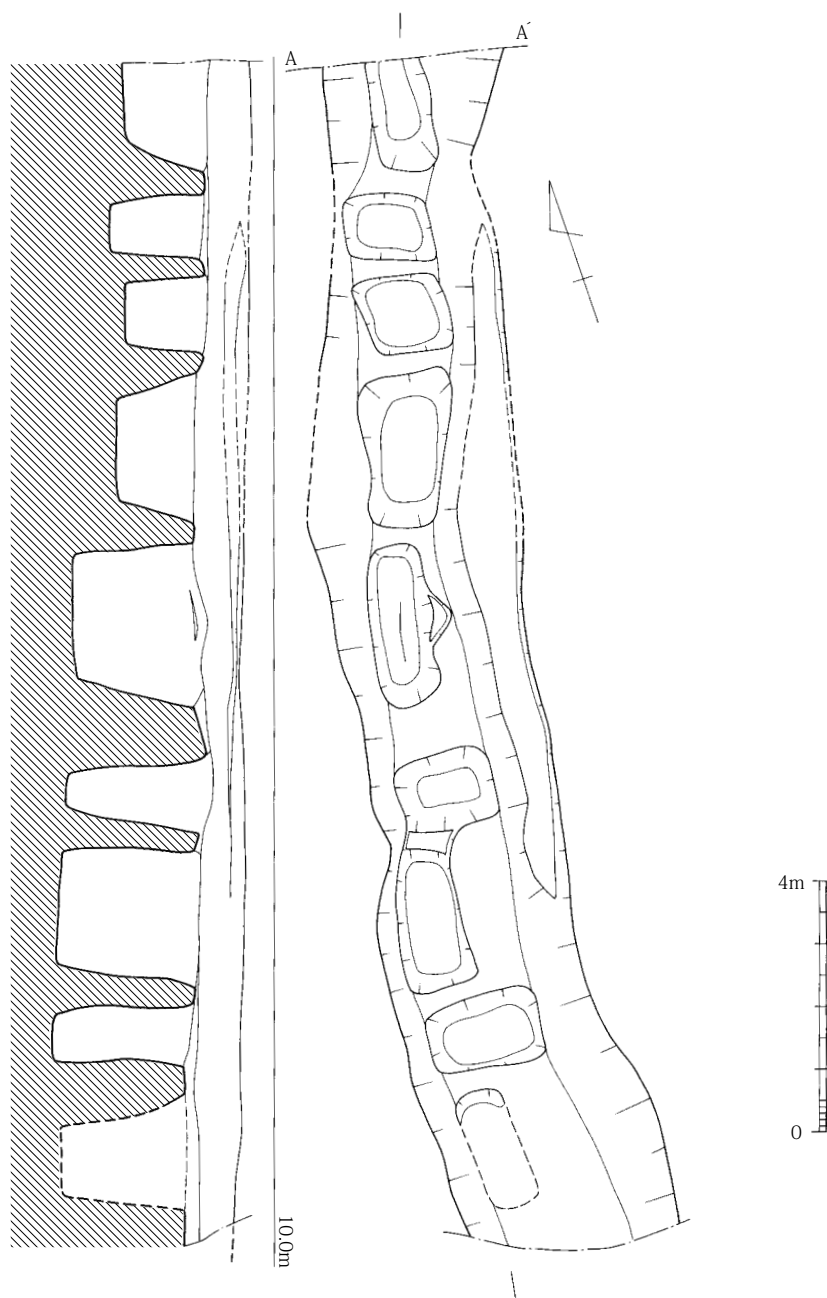
3～6 は瓦器の碗である。3 は口径 15.8cm、底径 7.2cm、器高 6.1cm である。4 は口径 15.8cm、底径 7.8cm、器高 6.0cm である。5 は口径 17.2cm、底径 7.1cm、器高 7.2cm である。6 は口径 16.0cm、底径 7.1cm、器高 6.7cm である。7 は土師質の鍋である。内外面の調整はナデである。8 は土師質の鍋である。内外面の調整はナデである。口径 43.0cm である。

15号溝

調査区の北側中央付近で検出した。8号住居跡、20・21号土坑を切り、11号溝に切られ、消失する。南北に延びる溝で、南側は後世に削られて消失する。幅 1.1m、深さは 0.4m である。図化できる遺物は出土していない。



- 1 淡黒褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 明茶褐色土 (地山崩落土)



第 65 図 14 号溝・土層実測図 (土層は 1/60、他は 1/120)

16号溝

調査区の北側東寄りで検出した。東西に延びる溝で、両端は後世に削られた部分で消失する。幅 2.2m、深さは最も残っている部分で 0.7m ほどである。断面は逆台形を呈する。遺物は中世の土器と青磁が出土した。

出土遺物（図版 39、第 66 図 9～11）

9・10 は龍泉窯系の青磁碗である。外面に鎬の残る蓮弁文が刻まれる。9 は口径 16.0cm である。10 は口径 19.2cm である。11 は東播系の捏鉢である。口縁が片口となる。内外面の調整はナデである。口径 26.6cm、底径 10.3cm、器高 10.0cm である。

17号溝

調査区の北側中央で検出した。南北に延びる溝で、両端は自然に消失する。18号溝を切る。最大幅で 1.3m、深さは 5cm ほどである。遺物は中世の土器と青磁が出土した。

出土遺物（第 66 図 12～17）

12・13 は土師質の小皿である。12 の底部は糸切りである。口径 9.0cm、底径 7.0cm、器高 1.1cm である。13 は口径 8.6cm、底径 6.6cm、器高 1.5cm である。14 は土師質の杯である。口径 10.8cm、底径 8.8cm、器高 2.9cm である。15 は瓦器の碗である。底径 7.2cm である。

16 は龍泉窯系の青磁碗である。外面には鎬のない蓮弁文が刻まれる。17 は青磁の碗である。畳付より内側は露胎である。底径 6.6cm である。

18号溝

調査区の北側中央付近で検出した。12号住居跡を切り、10・14号土坑、10・11・13・17号溝に切られる。南北に延びる溝で、南側は自然に消失する。図化できる遺物は出土していない。

19号溝

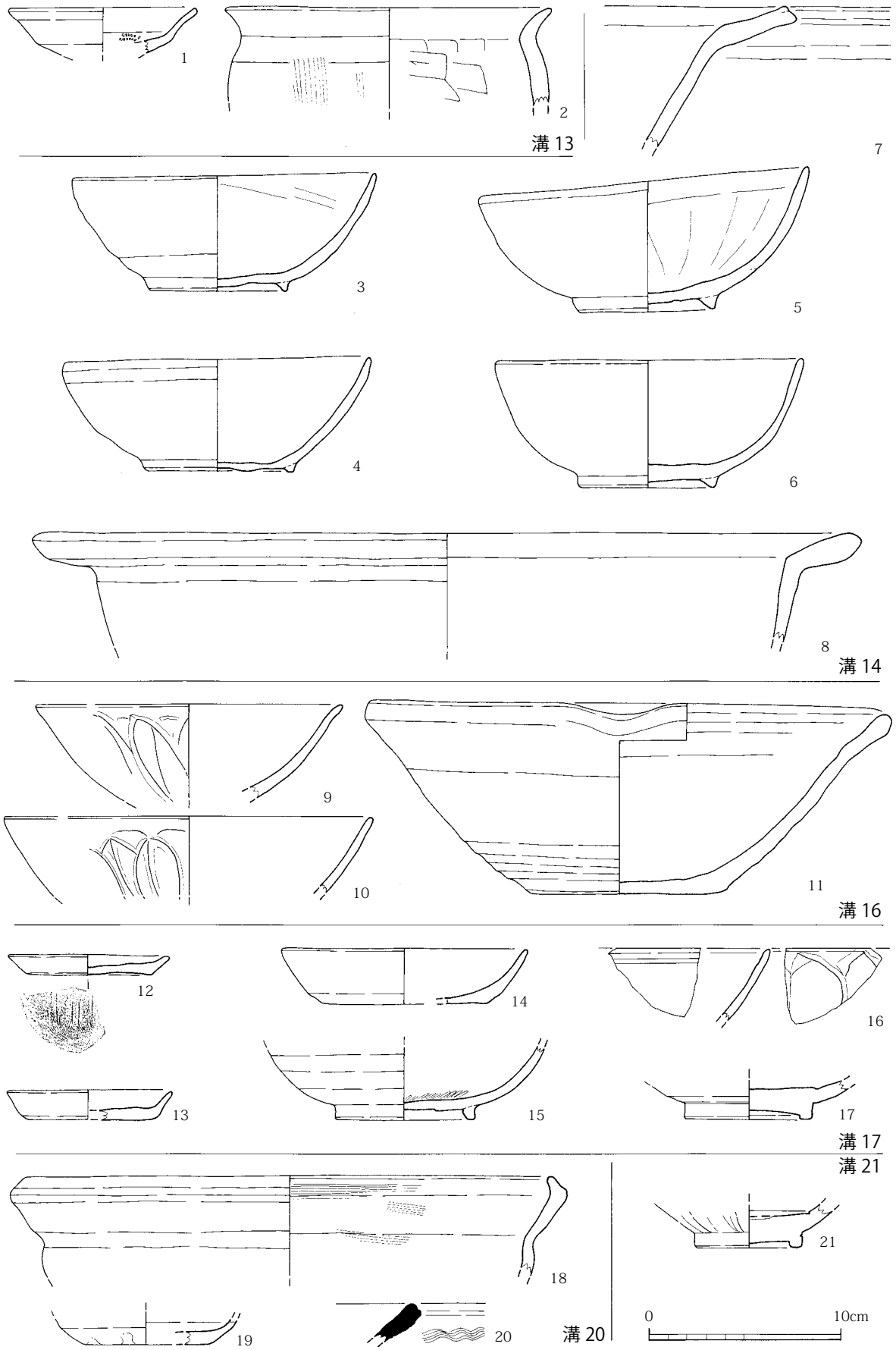
調査区の北側西寄りで検出した。10・11・14号溝に切られる。北側は自然に消失する。幅 1.3m、深さは 0.3m で、断面は蒲鉾状を呈する。図化できる遺物は出土していない。

20号溝（図版 29、第 61 図）

調査区の南側中央付近で検出した。22・25号溝を切る。北側は自然に消失し、南側は調査区外へ延びる。幅 1.5m、深さは 0.3m で、断面は蒲鉾状を呈する。中世の土器と白磁が出土した。

出土遺物（第 66 図 18～20）

18 は土師質の鍋である。内面には刷毛目が残る。口径 26.6cm である。19 は白磁の皿である。底径 6.4cm である。20 は須恵器の口縁部である。内外面の調整はナデで、外面には波状文が施される。



第 66 图 13·14·16·17·20·21 号溝出土土器实测图 (1/3)

21 号溝 (図版 29、第 61 図)

調査区の南側中央付近で検出した。22・25 号溝を切る。北端、南端ともに調査区外へ延びる。幅 2.0m、深さ 0.6m ほどで、断面は逆三角形を呈する。遺物は中世の青磁が出土した。

出土遺物 (第 66 図 21)

21 は龍泉窯系の青磁碗である。畳付より内側は露胎である。外面には蓮弁文が刻まれる。底径 5.4cm である。

22 号溝 (図版 29、第 61 図)

調査区の南側中央付近で検出した。20・21・25 号溝に切られる。北端、南端ともに調査区外へ延びる。幅 1.6m ほど、深さ 0.5m ほどで、断面は蒲鉾形を呈する。図化できる遺物は出土していない。

23 号溝 (図版 30、第 61 図)

調査区の南側中央付近で検出した。北端は自然に消失し、南側は調査区外へ延びる。24 号溝に切られる。幅 0.7m ほど、深さ 0.15m ほどである。23・24 号溝の重複部分で近世の陶器が出土した。

出土遺物 (第 67 図 1・2)

ここでは「23 および 24 号溝」として取り上げた遺物を報告する。1 は瓦質の深鉢である。内外面の調整はナデで、外面に 2 条の突帯を巡らし、その間に花文のスタンプを押す。口径 35.4cm である。2 は備前焼の挿鉢である。口径 29.4cm である。

24 号溝 (図版 30、第 61 図)

調査区の南側中央付近で検出した。北端は自然に消失し、南側は調査区外へ延びる。31 号土坑、23 号溝を切る。幅 0.7m ほど、深さ 0.4m ほどで、断面は逆台形を呈する。「23 および 24 号溝」として取り上げた遺物は 23 号溝で報告している。

25 号溝 (第 61 図)

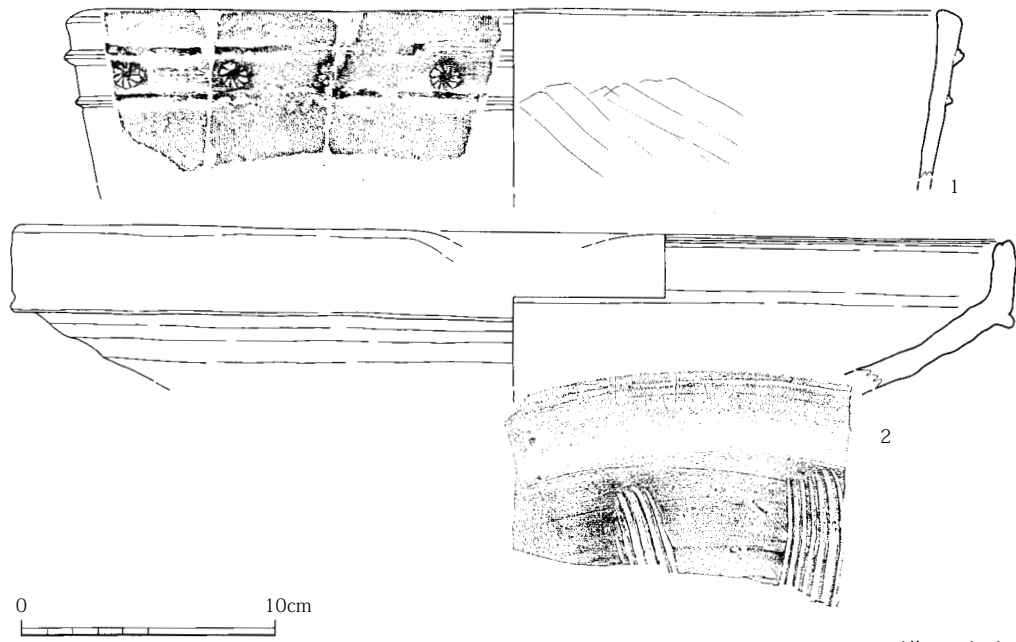
調査区の南側で検出した。22 号溝を切り、20・21 号溝に切られる。東西に延びる溝で、西側は自然に消失し、東側は他の溝に切られる。幅 0.9m ほど、深さ 0.3m ほどで、断面は蒲鉾形を呈する。遺物は中世の鍋が出土した。

出土遺物 (第 67 図 3～6)

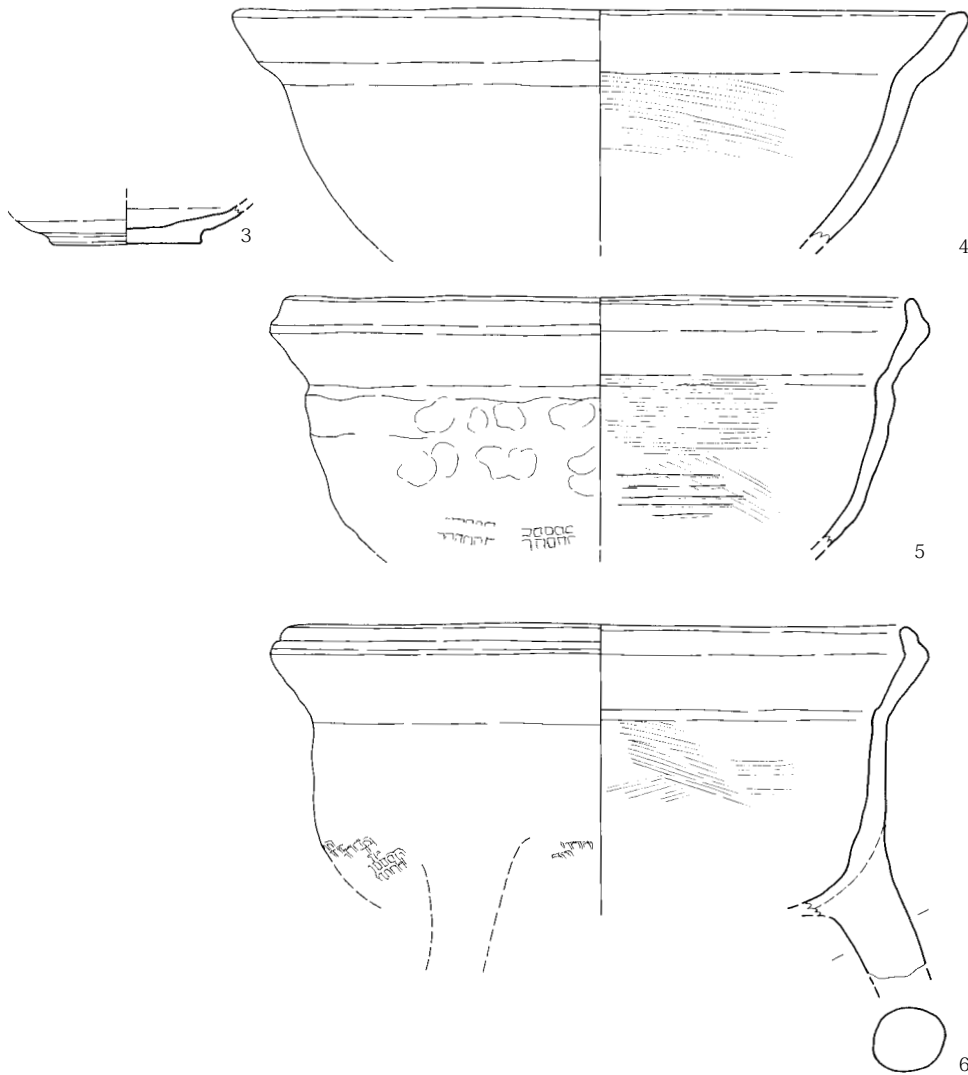
3 は土師質の杯である。底部は糸切りである。底径 6.0cm である。4～6 は土師質の鍋である。4 は内面に刷毛目が残る。口径 29.0cm である。5 は外面の調整はナデで、一部にタタキが残る。内面の調整は刷毛目である。口径 25.0cm である。6 は脚付きの鍋である。外面の調整はナデで、一部にタタキが残る。内面の調整はナデである。口径 24.6cm である。

26 号溝

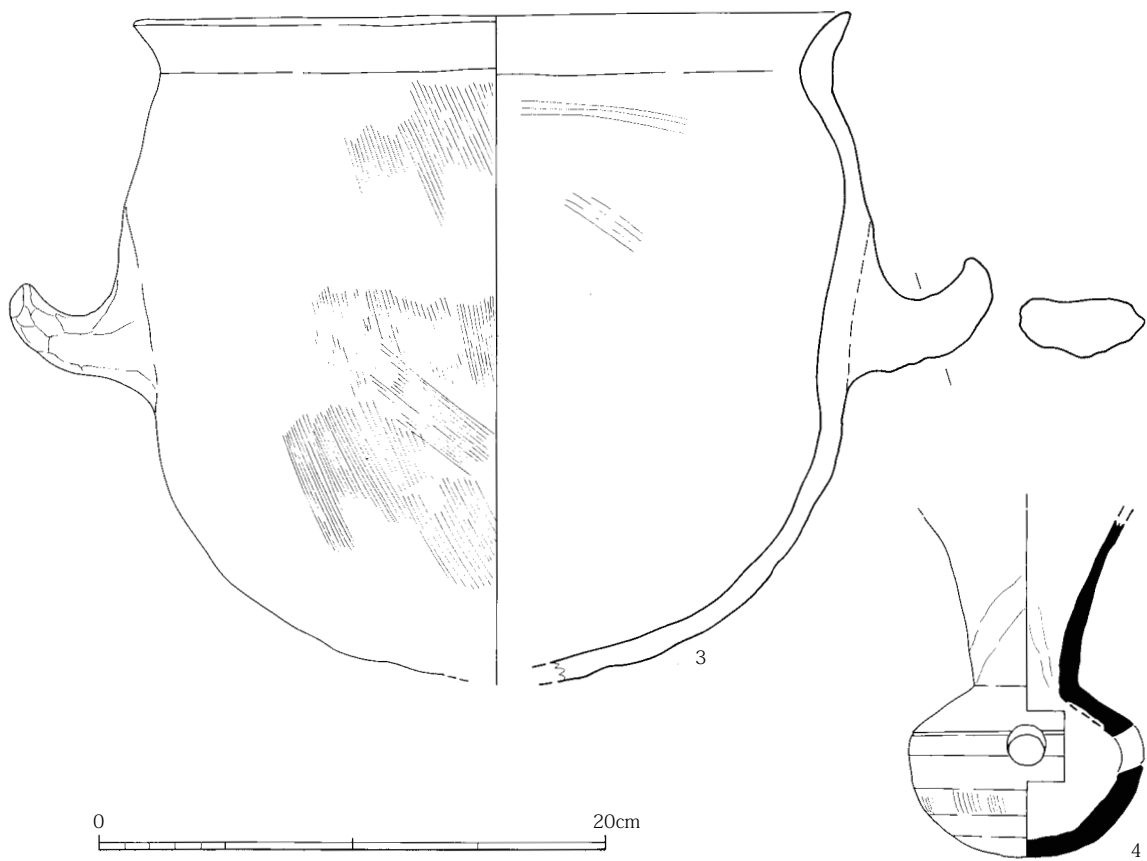
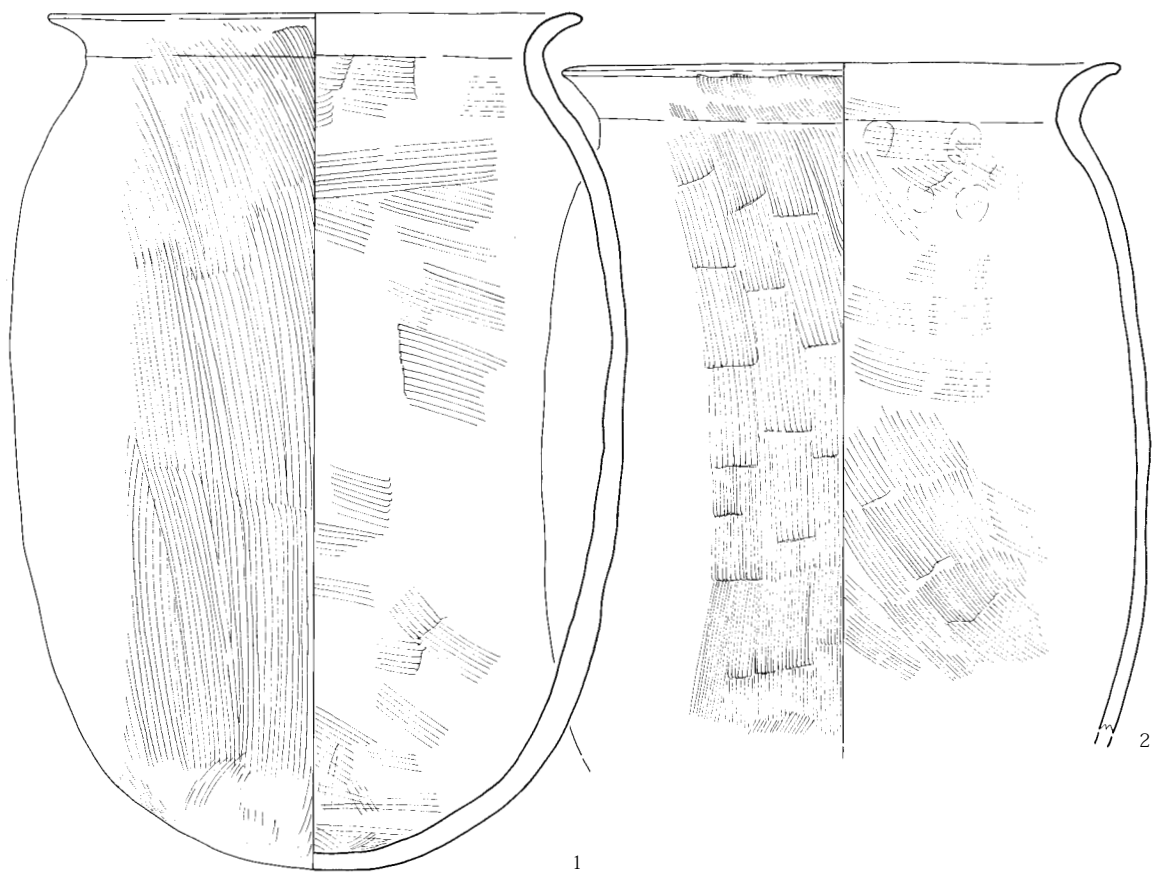
調査区の南側中央で検出した。東西に延びる溝で、両端は自然に消失する。幅 0.3m、深さ 0.15m ほどである。図化できる遺物はない。



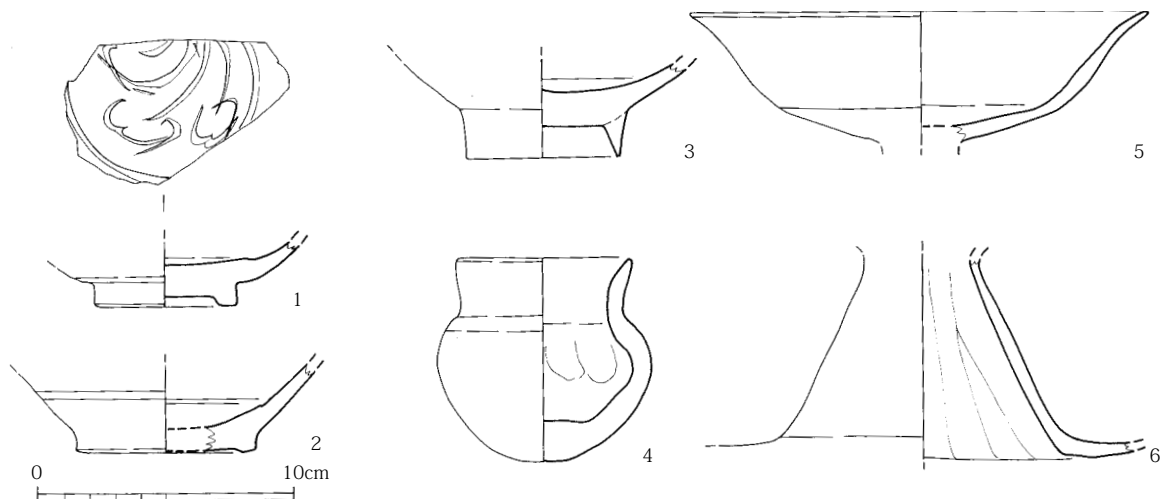
溝 23 および 24
溝 25



第 67 図 23 および 24・25 号溝出土土器実測図 (1/3)



第 68 图 27 号沟出土土器实测图 (1/3)



第 69 図 29 号溝出土土器実測図 (1/3)

27 号溝

調査区の南側西寄りで検出した。南北に延びる溝で、南側は自然に消失し、北側は調査区外へ延びる。幅 0.7m ほど、深さは 0.3m ほどである。遺物は土師器、須恵器が出土した。

出土遺物 (図版 40、第 68 図)

1・2 は土師器の甕である。いずれも長胴である。1 の内外面の調整は刷毛目である。口径 21.0cm、器高 33.8cm である。2 の内外面の調整は刷毛目である。口径 22.0cm である。3 は土師器の把手付きの甕である。内外面の調整はナデである。口径 28.2cm、器高 26.2cm である。4 は須恵器の甗である。内外面の調整はナデである。胴部最大径 9.2cm である。

28 号溝

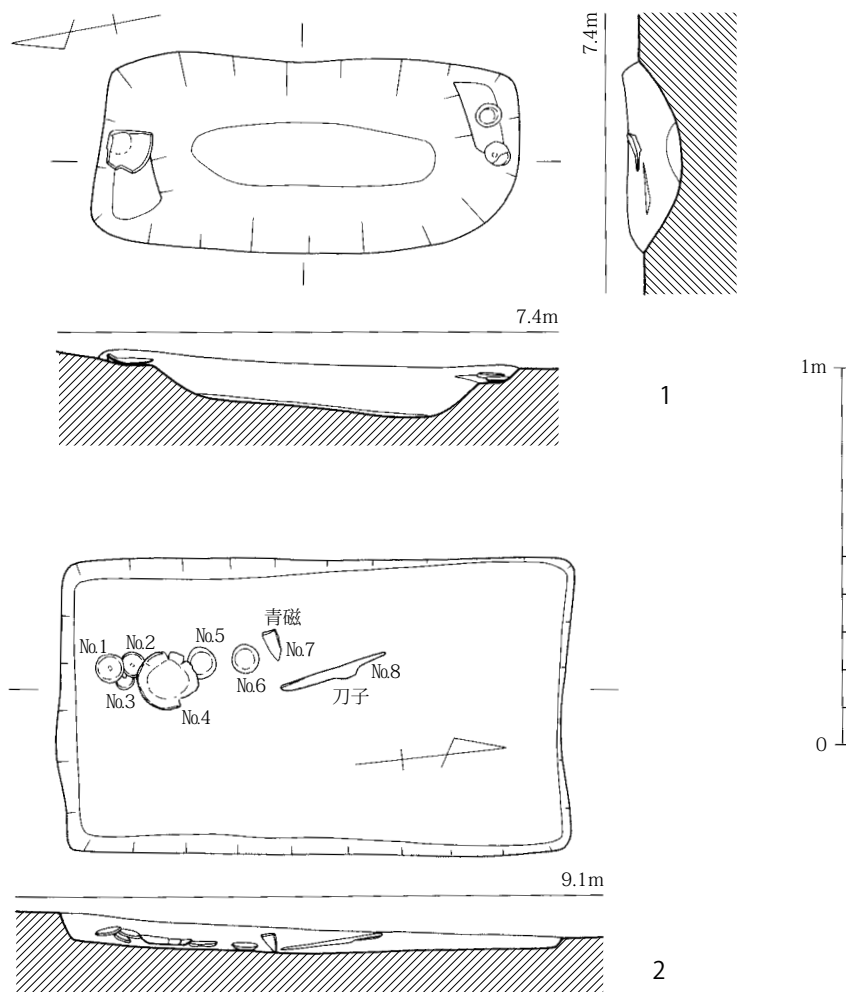
調査区の南側西寄りで検出した。35 号土坑に切られる。東西に延びる溝で、西側は自然に消失し、東側は 35 号土坑に切られる。幅 1.0m ほど、深さは 0.3m ほどである。図化できる遺物は出土していない。

29 号溝 (図版 30、第 61 図)

調査区の西側で検出した。17 号住居跡を切る。東西に延びる溝で、西側は調査区外に延び、東側は南に折れ、調査区外へ延びる。幅 1.9m ほど、深さは 0.6m ほどで、断面は逆台形を呈する。遺物は中世の青磁、白磁、石鍋 (第 83 図 23・25)、瓦 (第 84 図 3・5) が出土した。

出土遺物 (図版 40、第 69 図)

1 は青磁碗である。畳付より内側は露胎である。底径 5.6cm である。2 は青磁碗の底部である。底部周辺は露胎である。3 は青磁碗の底部である。畳付の部分のみ露胎である。4 は土師器の壺である。内外面の調整はナデである。口径 7.0cm、器高 8.0cm である。5・6 は土師器の高杯である。5 は口径 18.2cm である。6 は底径 16.5cm である。



第70図 1・2号土坑墓実測図 (1/20)

(7) 土坑墓

1号土坑墓 (図版31、第70図)

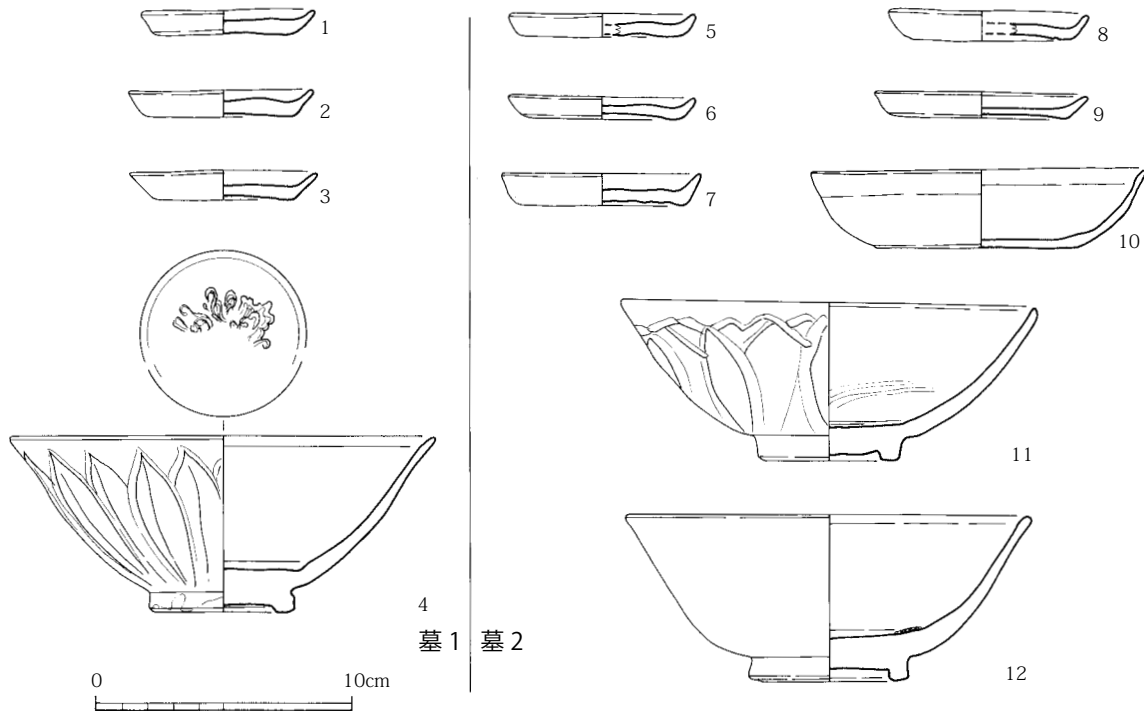
調査区の南側西寄りで検出した。平面プランは、1.4m × 0.5m の隅丸方形を呈する。深さは0.1mほどまで船底状に掘削されている。しかし、これは墓坑を掘削した時の掘り方と考えられ、実際には遺物を検出した深さ5cm程度が、墓として使用された当時の床面であったと考えられる。人骨は残っていなかった。

遺物は、頭部と考えられる北端部から蓮弁文の青磁碗1個、足部と考えられる南端部から土師器小皿数枚が検出されている。また、東側からは鉄製刀子(第86図2)が出土した。

出土遺物 (図版40、第71図1～4)

1～3は土師器の小皿である。1は口径6.8cm、底径5.5cm、器高1.0cmである。2は口径7.2cm、底径6.2cm、器高1.1cmである。3は口径7.3cm、底径5.4cm、器高1.1cmである。

4は龍泉窯系の青磁碗である。外面の蓮弁文には鎬が表現される。口径17.2cm、底径5.7cm、器高7.0cmである。



第71図 1・2号土坑墓出土土器実測図 (1/3)

2号土坑墓 (図版 31、第70図)

調査区の西側で検出した。平面プランは1.35m × 0.8mの方形を呈する。深さは0.1mほどである。床面はほぼ平坦である。頭位は北向きと考えられる。

遺物は中世の土器および青磁の他、鉄製刀子 (第86図3) が出土した。なお、刀子には人骨が付着し、残存している。

出土遺物 (図版 40、第71図5～12)

5～9は土師質の小皿である。5はNo.2の位置から出土している。口径7.3cm、底径6.4cm、器高0.9cmである。6はNo.1の位置から出土している。口径7.4cm、底径6.4cm、器高1.0cmである。7はNo.5の位置から出土した。口径7.8cm、底径6.7cm、器高1.3cmである。8はNo.6の位置から出土した。口径7.9cm、底径6.3cm、器高1.1cmである。9はNo.3の位置から出土した。口径8.4cm、底径6.9cm、器高1.1cmである。10は土師質の杯である。No.4の位置から出土した。口径13.2cm、底径8.3cm、器高3.1cmである。

11はNo.4の位置から出土した。龍泉窯系の青磁碗である。蓮弁文に鎬は見られない。高台内のみ露胎である。口径16.4cm、底径5.6cm、器高6.3cmである。12は青磁の碗である。No.7の位置から出土した。畳付より内側は露胎である。見込みに目跡が残る。口径16.0cm、底径6.3cm、器高6.6cmである。

(8) ピット出土土器 (図版 41、第72～74図)

1は土師器で山陰系の甕である。内面にケズリが残る。口径27.0cmである。P153から出土した。2・3は土師器の甕である。2は外面にタタキが残る。口径16.0cmである。P146から出土した。3は口径14.6cmである。P344から出土した。4～7は土師器の高杯である。4は口径22.0cmで

ある。P431 から出土した。5 は内外面ともにミガキである。口径 20.2cm である。P24 から出土した。6 の底径は 11.3cm である。P185 から出土した。7 は底径 10.2cm である。P527 から出土した。8 は鉢である。外面はナデ、内面は横方向の刷毛目である。P141 から出土した。9 は須恵器の杯身である。口径 11.8cm である。P119 から出土した。

10～26 は土師質の小皿である。いずれも糸切り底である。10 は P164 から出土した。11 は P268 から出土した。12 は P149 から出土した。13 は P553 から出土した。14 は P490 から出土した。15 は P198 から出土した。16 は底部に板状の圧痕が残る。P164 から出土した。17 は P153 から出土した。18 は P592 から出土した。19 は P295 から出土した。20 は P431 から出土した。21 は P393 から出土した。22 は P395 から出土した。23 は P200 から出土した。24 は P318 から出土した。25 は P359 から出土した。26 は P307 から出土した。

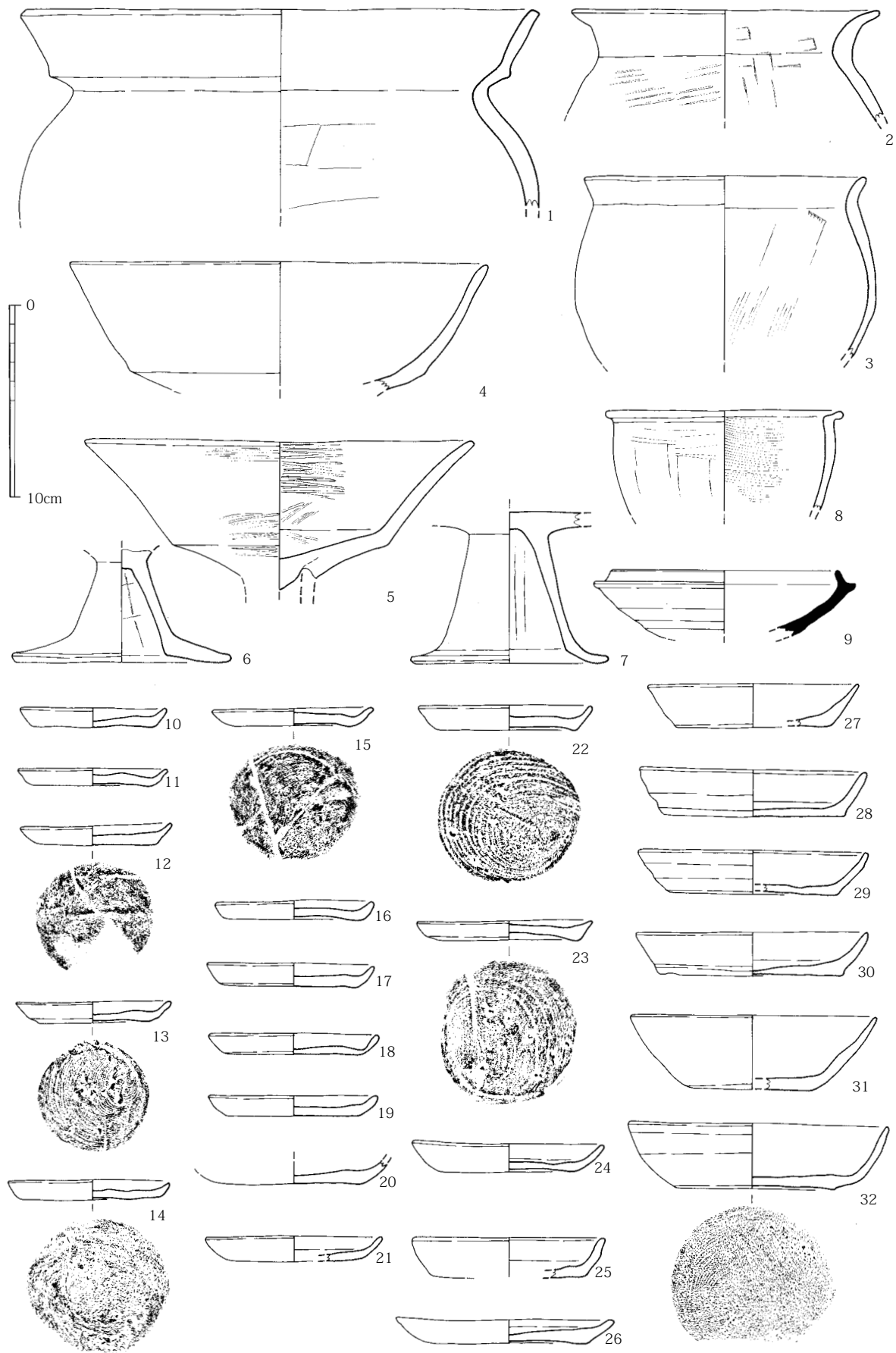
27～38 は土師質の杯である。いずれも糸切り底である。27 は P517 から出土した。28 は P253 から出土した。29 は P336 から出土した。30 は P263 から出土した。31 は P534 から出土した。32 は P21 から出土した。33 は P338 から出土した。34 は P307 から出土した。35 は P534 から出土した。36 は P300 から出土した。37 は P119 から出土した。38 は P165 から出土した。

39～55 は瓦器の碗である。いずれも内外面の調整はミガキである。39 は P523 から出土した。40 は P119 から出土した。41 は P390 から出土した。42 は P449 から出土した。43 は P509 から出土した。44 は P401 から出土した。45 は P216 から出土した。46 は P212 から出土した。47 は P310 から出土した。48 は P311 から出土した。49 は P444 から出土した。50 は P204 から出土した。51 は P336 から出土した。52 は P69 から出土した。53 は P286 から出土した。54 は P359 から出土した。55 は P390 から出土した。56 は瓦質の深鉢の口縁部分である。外面の調整はナデ、内面の調整は刷毛目である。外面は 2 条の突帯を施し、その間に菱形のスタンプ文を押す。P109 から出土した。57 は瓦質の捏鉢である。口径 21.8cm である。P269 から出土した。

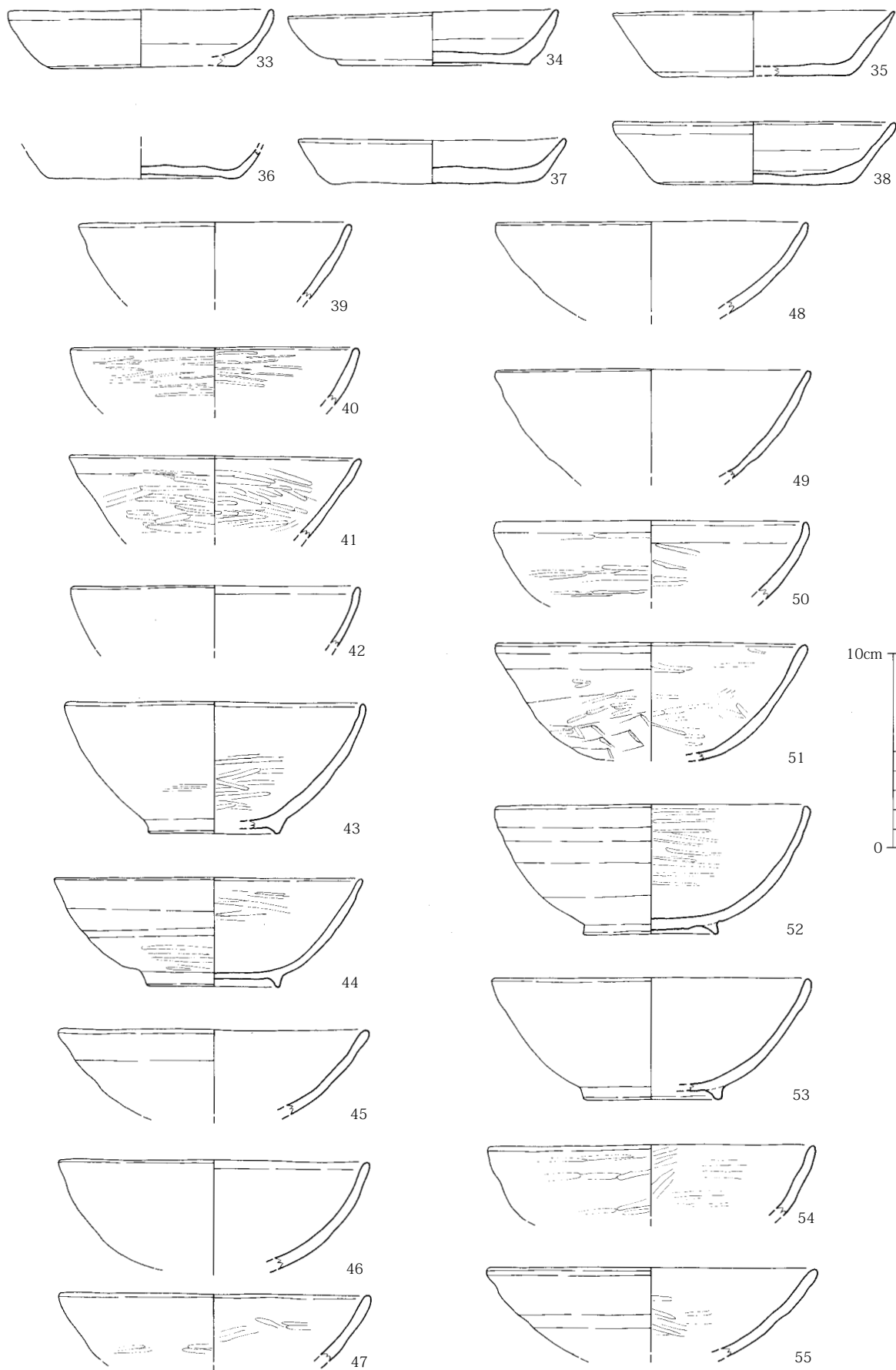
58 は土師質の鍋である。内外面の調整は刷毛目である。口径 23.0cm である。P409 から出土した。59 は土師質の鉢である。内外面の調整はナデである。口径 16.5cm、底径 15.0cm である。P16 から出土した。60 は土師質の鍋である。内外面の調整はナデである。61・62 は瓦質の深鉢である。61 の外面はナデ、内面には刷毛目が残る。P391 から出土した。62 は内外面ともにナデである。P307 から出土した。

63～65 は青磁の皿である。63 は同安窯系で底部は釉を掻き取る。口径 10.6cm、底径 5.0cm、器高 2.2cm である。P467 から出土した。64 は口径 10.0cm である。P390 から出土した。65 は口径 10.0cm である。P390 から出土した。66～71 は青磁の碗である。66 は龍泉窯系で鎬の残る蓮弁文を施す。口径 15.0cm である。P164 から出土した。67 は龍泉窯系で蓮弁文を施す。鎬は残らない。口径 17.2cm である。P176 から出土した。68 は龍泉窯系で蓮弁文を施す。P510 から出土した。69 は龍泉窯系である。P320 から出土した。70 は P293 から出土した。71 は口径 17.4cm である。P408 から出土した。

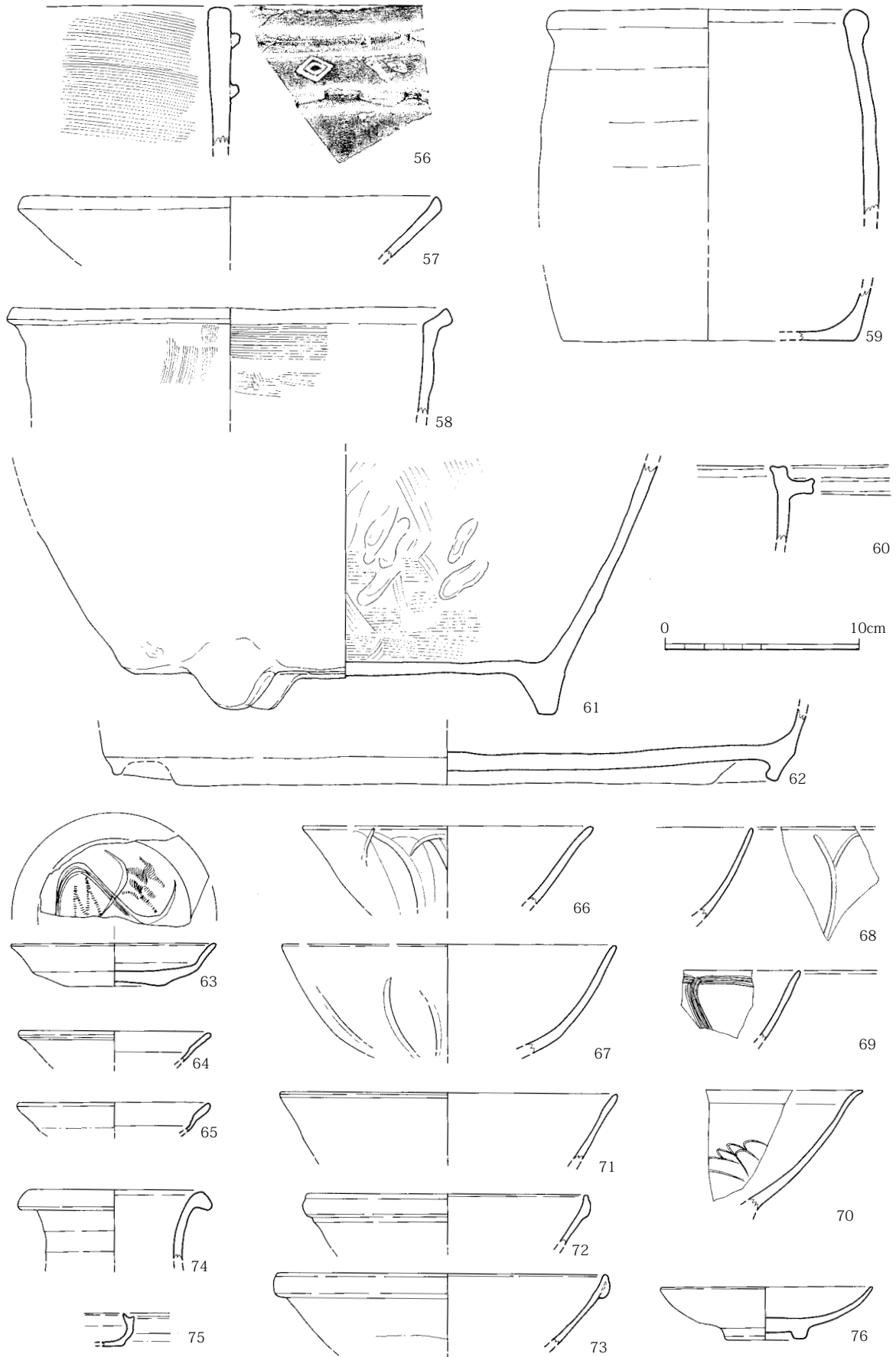
72・73 は玉縁の白磁である。72 は口径 14.5cm である。P321 から出土した。73 は口径 16.8cm である。P124 から出土した。74 は白磁の壺である。口径 10.0cm である。P607 から出土した。75 は白磁の合子の身である。口縁の受け部は露胎である。P390 から出土した。76 は陶器の皿である。畳付より内側は露胎である。口径 11.0cm、底径 4.4cm、器高 2.7cm である。P548 から出土した。



第72図 ピット出土土器実測図① (1/3)



第 73 図 ピット出土土器実測図② (1/3)



第74図 ピット出土土器実測図③ (1/3)

(9) 包含層出土土器 (図版 41 ~ 43、第 75 ~ 81 図)

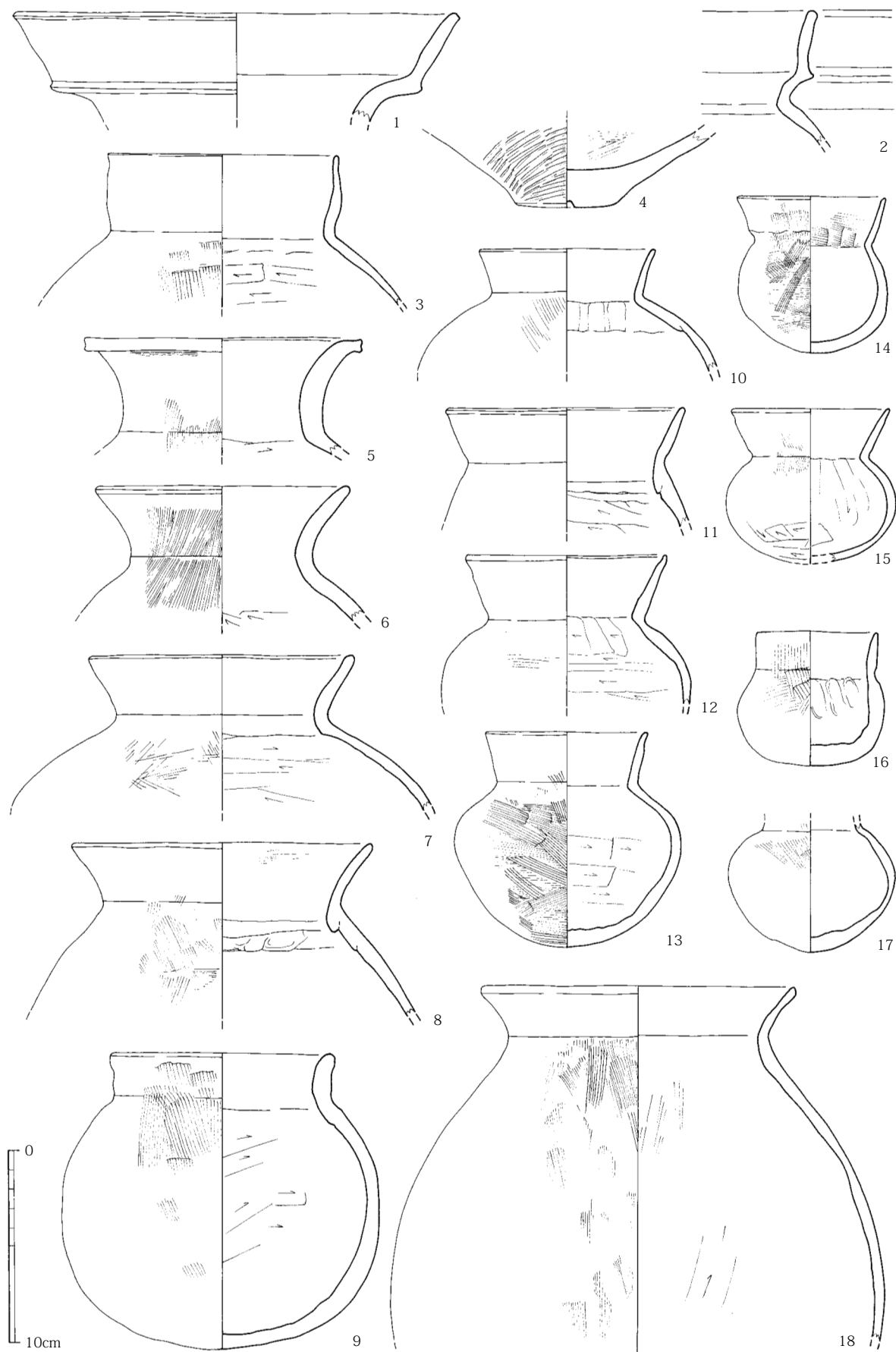
包含層からは下記に報告した土器以外に「○一石」木簡や木製品が出土している。これらは現在、保存処理中であり、次年度以降、報告を行う。

1 は二重口縁壺の口縁部分である。屈曲部分がやや突出し、口縁は直線的に広がる。内外面の調整はナデである。口径 22.6cm である。2 は山陰系の二重口縁壺の口縁部である。内外面の調整はナデである。3 の外面は刷毛目、胴部内面はケズリである。口径 12.0cm である。4 は壺もしくは甕の底部であろう。外面の調整はタタキ、内面の調整は刷毛目である。底径 5.0cm である。5 は口縁端部が外反しながら広がる壺である。外面の調整は刷毛目、胴部内面はケズリである。口径 14.2cm である。6 ~ 8 は直線的に広がる壺である。6 は口径 13.0cm である。7 は胴部内面を強く削る。口径 13.6cm である。8 は内面頸部に接合の痕跡が残る。口径 15.3cm である。9 は直口壺である。口径 11.6cm、胴部最大径 16.4cm、器高 15.3cm である。10 ~ 17 は小型の壺である。10 は口径 9.0cm である。11 は内面を強く削る。口径 12.1cm である。12 は口径 10.2cm である。13 は口径 8.0cm、胴部最大径 11.6cm、器高 11.2cm である。14 は口径 7.6cm、胴部最大径 7.4cm、器高 8.1cm である。15 の外面底部付近はケズリである。口径 8.2cm、胴部最大径 8.8cm、器高 8.0cm である。16 は手づくねで成形される。胴部最大径 7.6cm である。17 の胴部最大径は 8.8cm である。18 の外面は刷毛目、内面はケズリ、部分的に刷毛目である。口径 16.2cm、胴部最大径 25.6cm である。

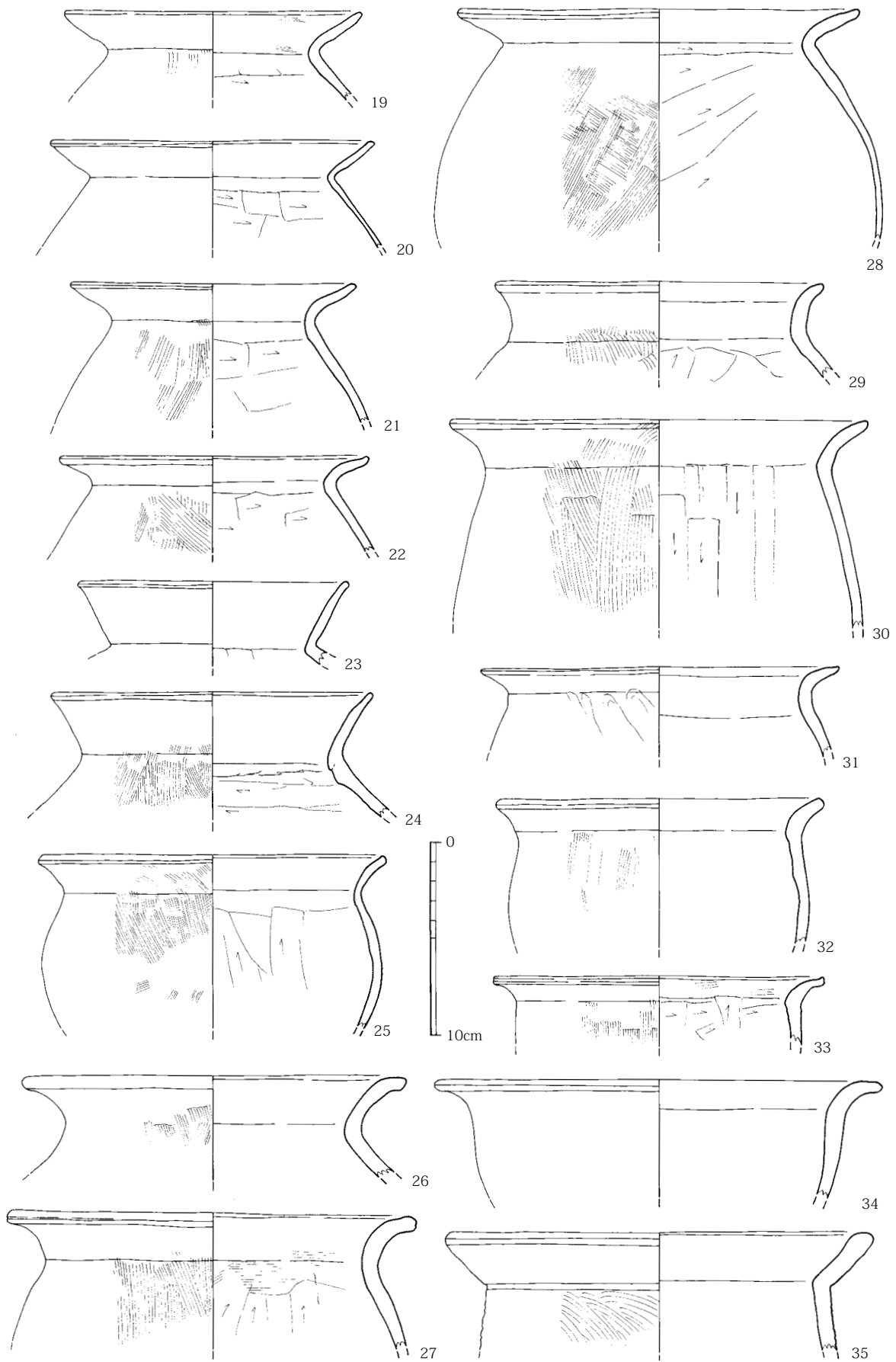
19 ~ 24 は布留系の甕の口縁部である。19 は口径 15.1cm である。20 は口径 16.3cm である。21 は口径 14.4cm である。22 は口径 15.7cm である。23 は口径 13.6cm である。24 は口径 16.3cm である。25 ~ 35 は甕である。25 は頸部と胴部の境が明瞭でない。外面は刷毛目、内面はケズリである。口径 17.6cm である。26 は口縁部が大きく開く。口径 20.0cm である。27 の内面は部分的に刷毛目であり、その上からケズリを行う。口径 20.4cm である。28 の口径は 20.4cm である。29 の口径は 16.6cm である。30 は外面にススが付着する。口径 21.6cm である。31 の外面は工具による強いナデである。口径 18.4cm である。32 の口径は 17.0cm である。33 は口縁端部が沈線状に仕上げられる。口径 17.0cm である。34 はほとんど胴の張らないものである。口径 22.7cm である。35 は豊前企救型甕と呼ばれるものである。口径 20.3cm である。

36 ~ 54 は高杯である。36 ~ 41 は杯部が屈曲するものである。36 は口径 20.6cm である。37 は口径 21.1cm である。38 は口径 19.4cm である。39 は内外面に刷毛目が残る。口径 16.3cm である。40 は口径 17.6cm である。41 は縦横にミガキを施す。口径 16.0cm である。42 ~ 45 は碗状の杯部を持つものである。42 の口径は 15.0cm である。43 の口径は 13.3cm である。44 は内外面ともにミガキである。口径 13.2cm、底径 11.0cm、器高 11.0cm である。45 は杯部が深いものである。内外面の調整は刷毛目である。口径 13.5cm である。46 の外面はミガキである。47 は脚部の 4 ヲ所に焼成前穿孔を施す。底径 14.5cm である。48 も焼成前に穿孔を施す。底径 14.5cm である。49・50 の外面はミガキである。51 の底径は 7.4cm である。52 の底径は 10.8cm である。53 の外面の調整は刷毛目の後、ミガキを施す。54 は底径 14.1cm である。55・56 は支脚である。55 の表面には圧痕が残る。底径 10.0cm である。56 は頂部の平坦面に台形の穿孔が施される。

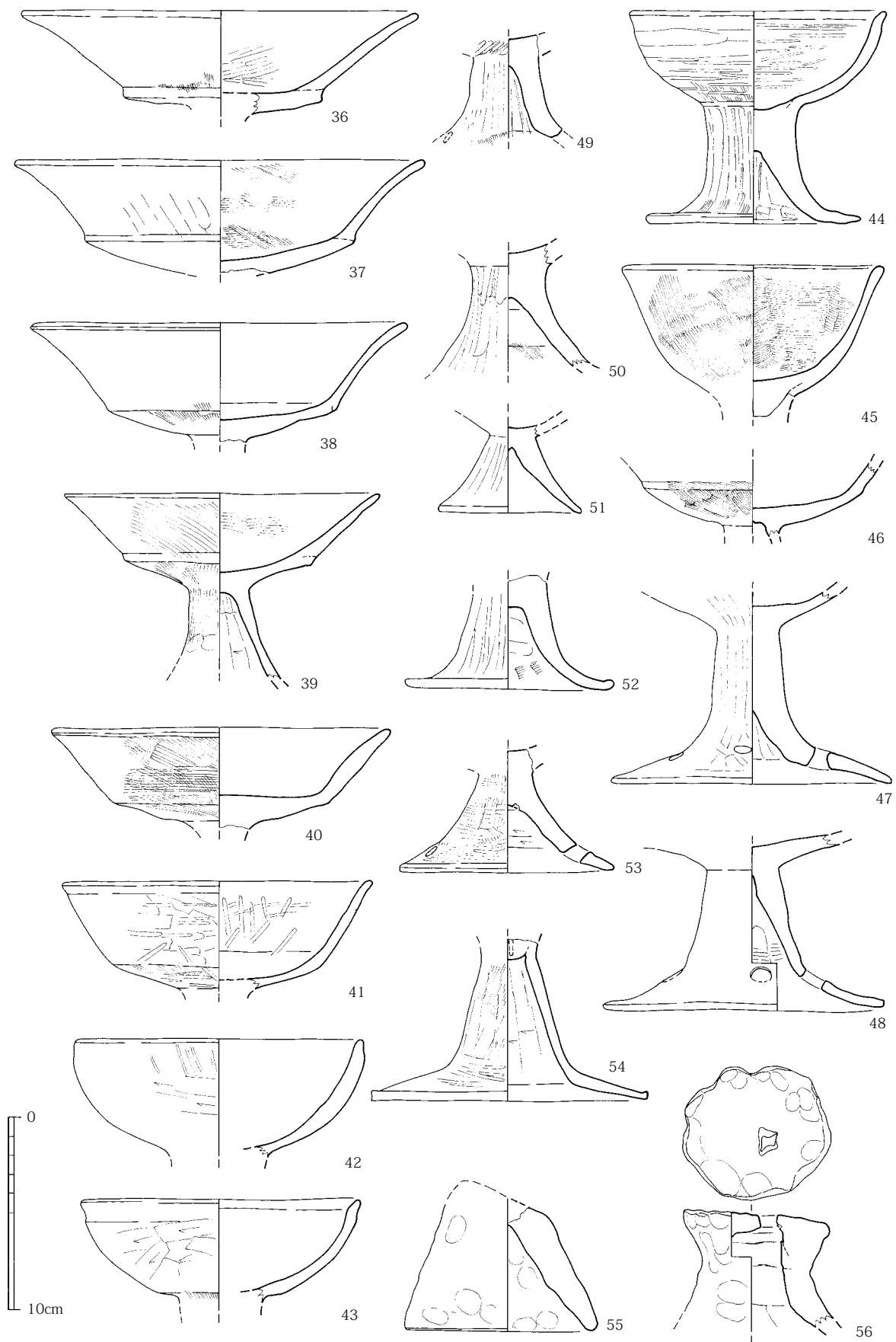
57 ~ 69 は土師質の碗である。57 の内外面の調整はナデである。口径 11.4cm、器高 3.1cm である。58 は底部付近の器壁が極めて厚い。外面底部はケズリである。口径 12.0cm、器高 2.8cm である。



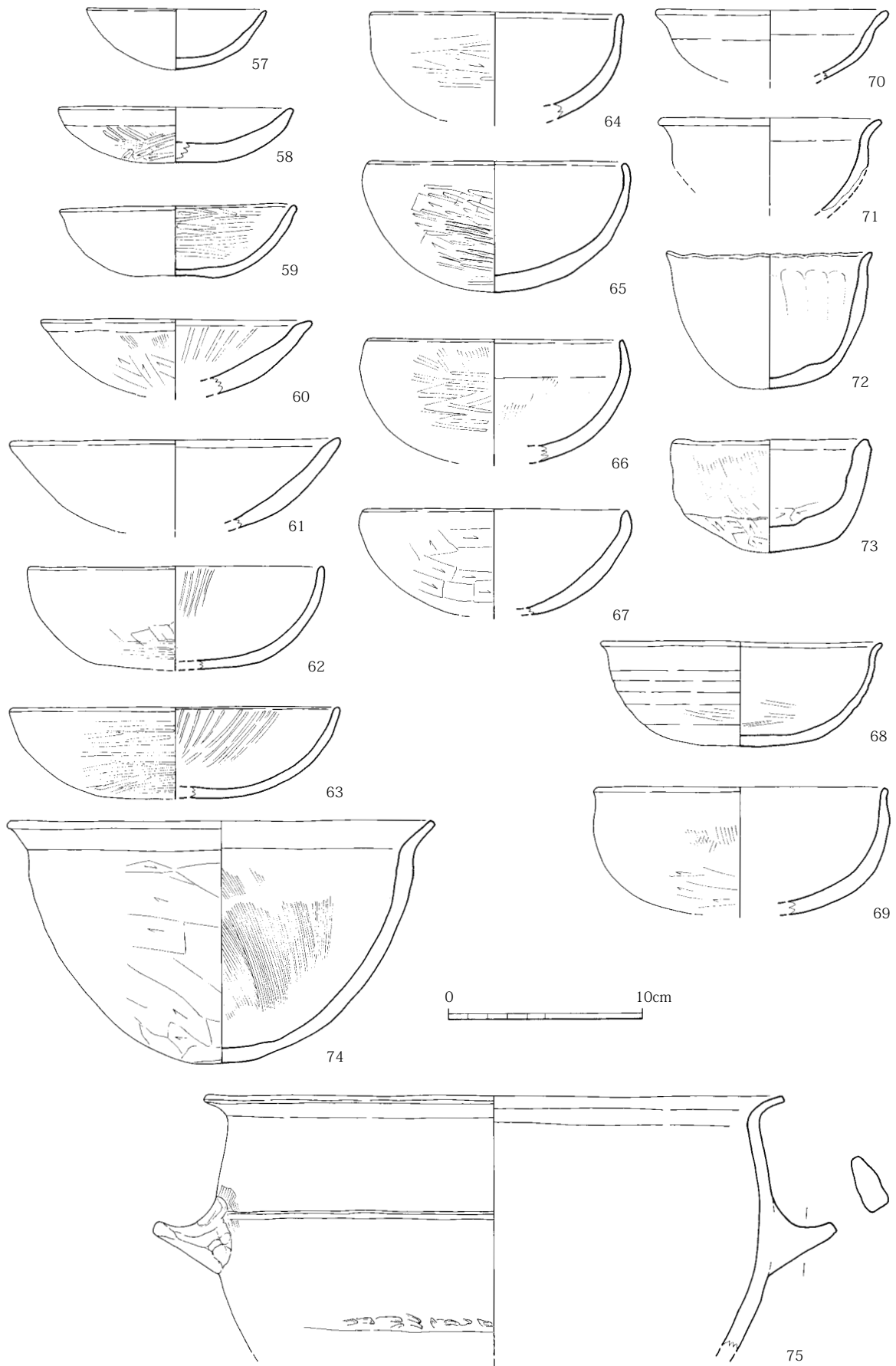
第 75 图 包含層出土土器实测图① (1/3)



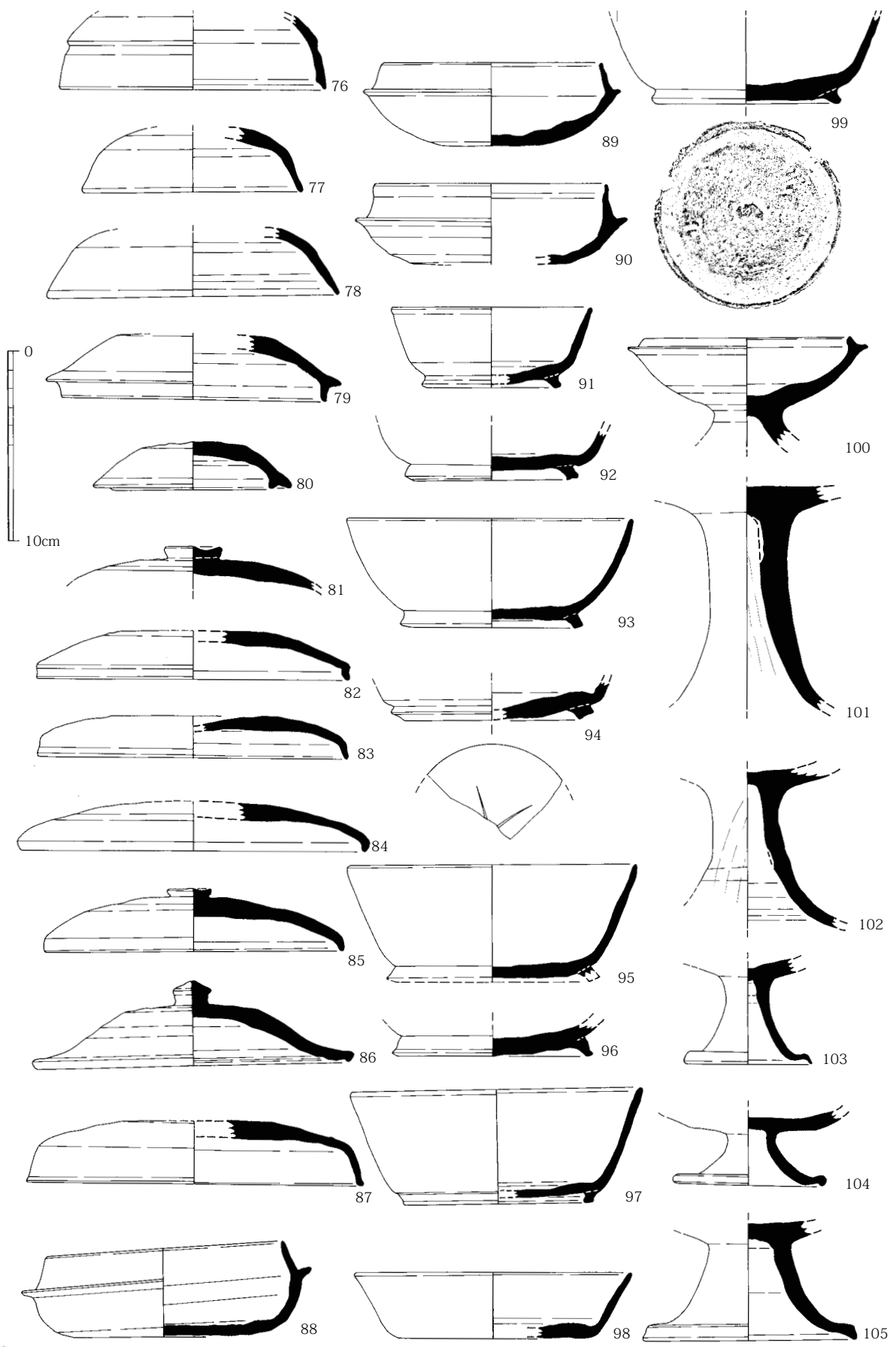
第 76 図 包含層出土土器実測図② (1/3)



第 77 図 包含層出土土器実測図③ (1/3)



第78图 包含層出土土器実測図④ (1/3)



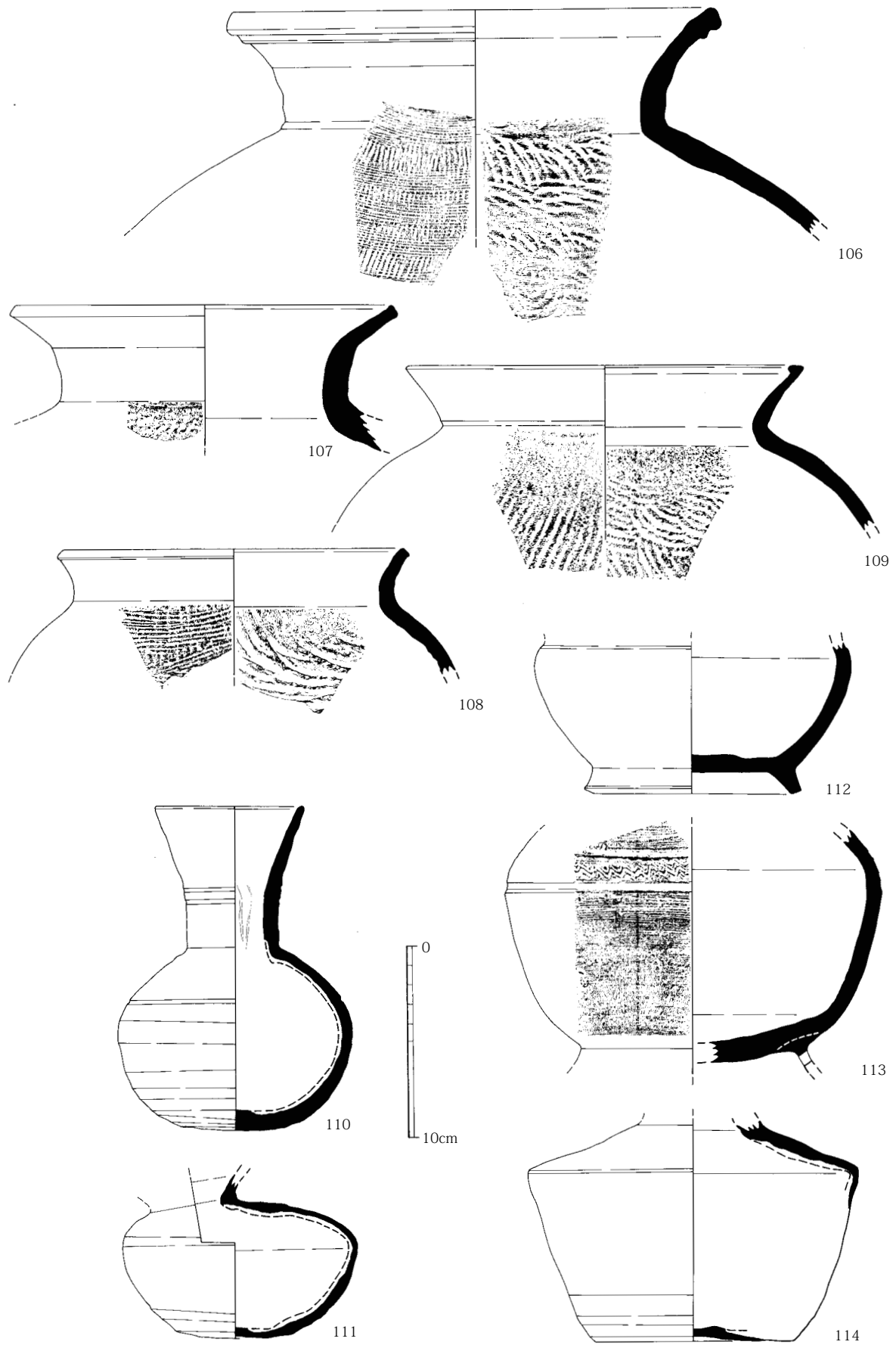
第79图 包含層出土土器実測図⑤ (1/3)

59の内面の調整はミガキである。口径14.2cm、器高3.7cmである。60の内面は縦方向のミガキが施される。口径14.0cmである。61の内外面の調整はナデである。口径17.0cmである。62・63は内面に縦方向のミガキを施す。62は口径15.2cm、器高5.3cmである。63は口径17.0cm、器高4.7cmである。64～66は口縁がわずかに内湾するものである。64は口径13.0cmである。65は口径13.4cm、器高6.7cmである。66は口径13.0cmである。67は器壁が厚い。外面の調整はケズリである。口径13.6cmである。68・69は口縁がわずかに外反するものである。内外面の調整はミガキである。口径14.3cm、器高5.4cmである。69の外面はケズリと刷毛目が残る。口径15.0cm、器高6.5cmである。70・71は口縁が外反する。70は口径12.0cmである。71は口径11.4cmである。72は手づくねの碗である。内外面に縦方向の圧痕が残り、口縁部は波打っている。口径10.8cm、器高7.0cmである。73は器壁が極めて厚い。外面胴部付近は刷毛目、底部付近はケズリである。口径10.2cm、器高5.7cmである。74は土師質の鍋である。外面の調整は刷毛目、内面の調整はケズリである。口径21.6cm、器高12.5cmである。75は把手付きの甕である。土師質である。内外面の調整はナデである。外面胴部中位には一条の沈線が巡る。口径20.0cmである。

76～87は須恵器の杯蓋である。76は天井部と肩部の境に段があり、口縁にも段があるものである。口径14.0cmである。77の口径は11.6cmである。78は口縁付近が広がるものである。口径15.4cmである。79は口径14.0cmである。80は小型の蓋で口径10.3cm、器高2.6cmである。81は扁平のつまみをもつ。82は口縁端部が明確に折れ曲がるものである。口径16.3cmである。83は口径16.4cmである。84は口径18.6cmである。85は扁平なつまみをもつ。口径15.8cm、器高3.4cmである。86は焼成が甘く土師質に近い。口径16.8cm、器高4.5cmである。87は口径17.8cmである。88～99は杯身である。88は底部が広く深めである。口径12.6cm、器高5.0cmである。89は口径11.6cm、器高4.3cmである。90は立ち上がりしがっかりしている。口径12.2cm、器高4.0cmである。91～96は踏ん張る高台を持つものである。91は口径10.6cm、底径7.4cm、器高4.2cmである。92は底径9.1cmである。93は口径15.1cm、底径9.6cm、器高5.8cmである。94は底部にヘラ記号が描かれる。底径10.6cmである。95は口径15.2cmである。96は底径10.6cmである。97は口径15.4cm、底径10.1cm、器高6.0cmである。98は口径14.6cm、底径10.0cm、器高3.5cmである。99は焼成の悪い須恵器の杯身である。底径10.0cmである。100～105は須恵器の高杯である。100は口径10.7cmである。103は底径6.6cmである。104は底径8.0cmである。105は底径11.2cmである。

106～109は甕の口縁部である。106は口縁部外側にわずかに突帯状に張り出すものである。口径25.0cmである。107は口径20.2cmである。108は口径18.4cmである。109は口縁端部が内側に張り出すものである。110は須恵器の壺である。外面底部付近は丁寧なヘラケズリを施す。口径7.6cm、器高16.8cmである。111は平瓶である。胴部最大径12.3cm、底径6.1cmである。112～114は壺である。112・113は高台を持つものである。112は底径13.3cmである。113は肩部に沈線と波状文を施す。高台部分には穿孔を施す。114は胴部最大径17.2cm、底径10.0cmである。

115～119は皿である。115は口径10.2cm、底径6.5cm、器高1.5cmである。116は口径11.2cm、底径8.6cm、器高1.8cmである。117は底部に板状の痕跡がある。口径10.8cm、器高1.3cmである。118は口径11.4cm、器高1.1cmである。119は口径14.0cm、器高2.0cmである。120～122は杯である。120の底部は糸切り底である。口径15.4cm、底径6.0cm、器高4.1cmで



第 80 图 包含層出土土器実測図⑥ (1/3)

ある。121は口径13.4cm、底径8.8cm、器高3.2cmである。122は底部に板状の痕跡が残る。口径12.6cm、底径8.0cm、器高3.7cmである。

123～126は瓦質の碗である。123は高台を持たない。口径16.4cm、器高4.5cmである。124の内外面の調整はミガキである。口径15.2cmである。125の内外面の調整はミガキである。底径6.5cmである。126は口径16.0cm、底径7.0cm、器高6.0cmである。127は瓦質の鉢である胴部外面にタタキが残る。口径27.4cmである。128は瓦質の浅鉢である。外面には二条の突帯の間に花文スタンプが押される。底部には小さな高台が付く。口径35.2cm、底径30.0cm、器高8.7cmである。129は土師質の鉢である。口径5.7cm、底径5.2cm、器高2.9cmである。

130～132は青磁の皿である。130は口径12.4cmである。131は同安窯系である。底径5.4cmである。132は口径13.6cmである。133～137は青磁の碗である。133・134は龍泉窯系で、外面に蓮弁文が刻まれる。133は口径16.0cm、底径4.0cm、器高6.6cmである。134は口径16.0cmである。135・136は龍泉窯系である。135は口径16.4cm、底径6.0cm、器高7.3cmである。136は底径6.2cmである。137は見込みに花文が描かれる。底径5.2cmである。138は白磁の碗である。畳付の部分のみ露胎である。底径6.6cmである。139・140は褐釉陶器である。139は壺などの胴部である。内外面に施釉される。140は取手の部分である。全体に施釉される。

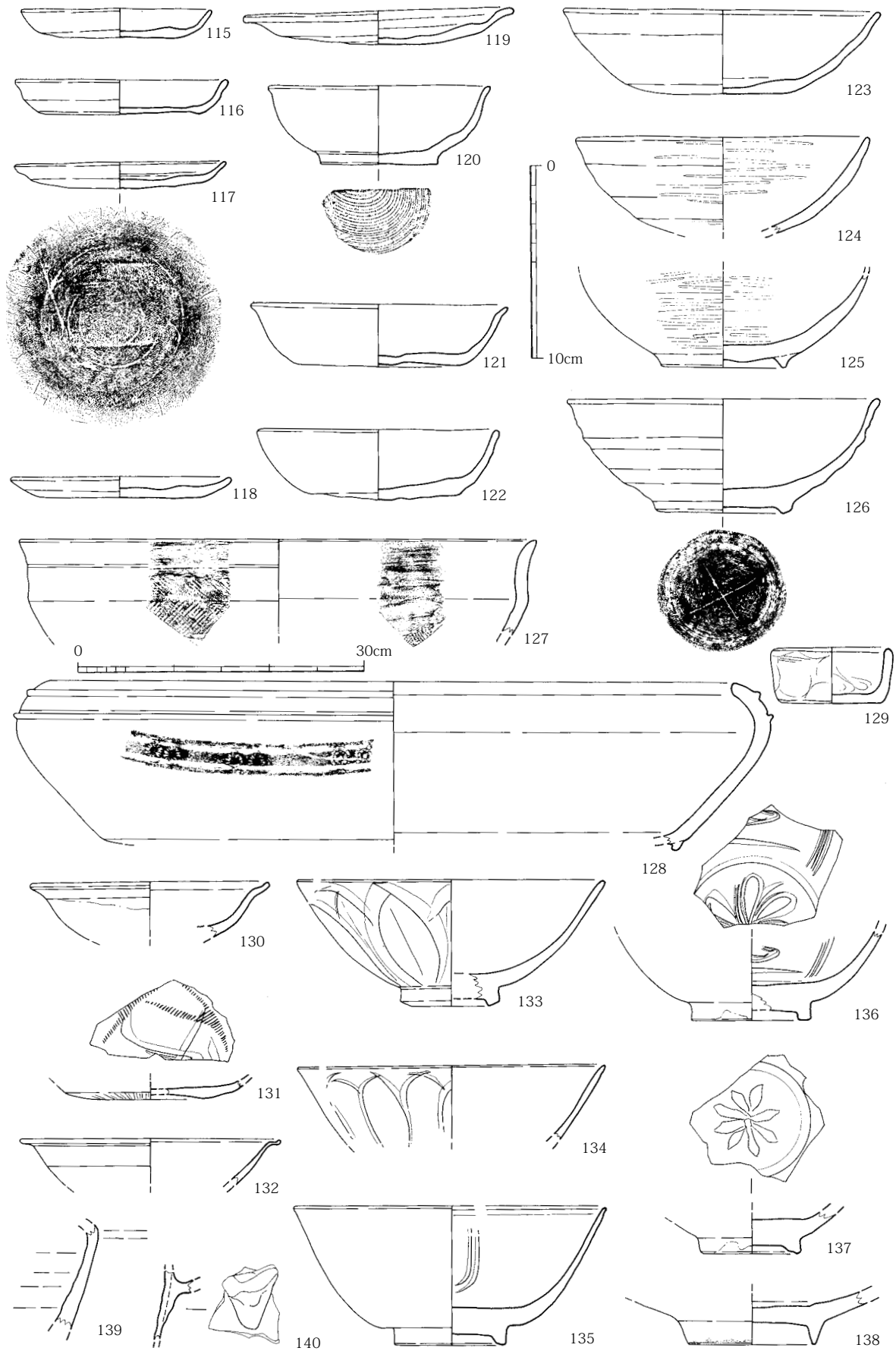
(10) その他の遺物

石製品 (図版44、第82・83図、第4表)

1～4は石庖丁である。1は凝灰岩製である。7号土坑から出土した。2は包含層からの出土である。砂岩製である。3は包含層から出土した。4は14号住居跡から出土した。5は本来石庖丁であったものを再加工したものである。25号土坑より出土した。片岩製である。6は勾玉である。緑色片岩製である。排土中より検出した。7・8は紡錘車である。7は滑石製で、直径4.4cmである。包含層より出土した。8は口径3.8cmである。粘板岩製である。P34より出土した。9は打製の石鍬である。片岩製である。包含層より出土した。10は磨製石斧である。凝灰岩製である。

11～22は砥石である。11は上下端以外全面が砥面として使用される。一部に金属器の刃部の研磨痕が残る。16号土坑から出土した。12は上下端以外全面、砥面として使用される。一部に叩き痕が残る。26号土坑から出土した。13は上下端以外、全面を砥面として使用される。包含層から出土した。14は上下端以外全面を砥面として使用している。一部に筋状の研磨痕が残る。東端部トレンチから出土した。15は2面を砥面として使用している。1号井戸から出土した。16は上下端以外、全面を砥面として使用している。7号溝より出土した。17は両面を砥面として使用している。2号竪穴住居跡から出土した。18は上下端以外、全面を砥面として使用している。23号土坑から出土した。19は残っている3面が砥石として使用されている。包含層から出土した。20は上下端面を研磨し、面取りしている。他の残っている4面は砥面として使用している。包含層から出土している。21は両面を砥面として使用している。一部に金属器の研磨痕が残る。21号土坑から出土した。22は2面を砥面として使用している。包含層から出土した。

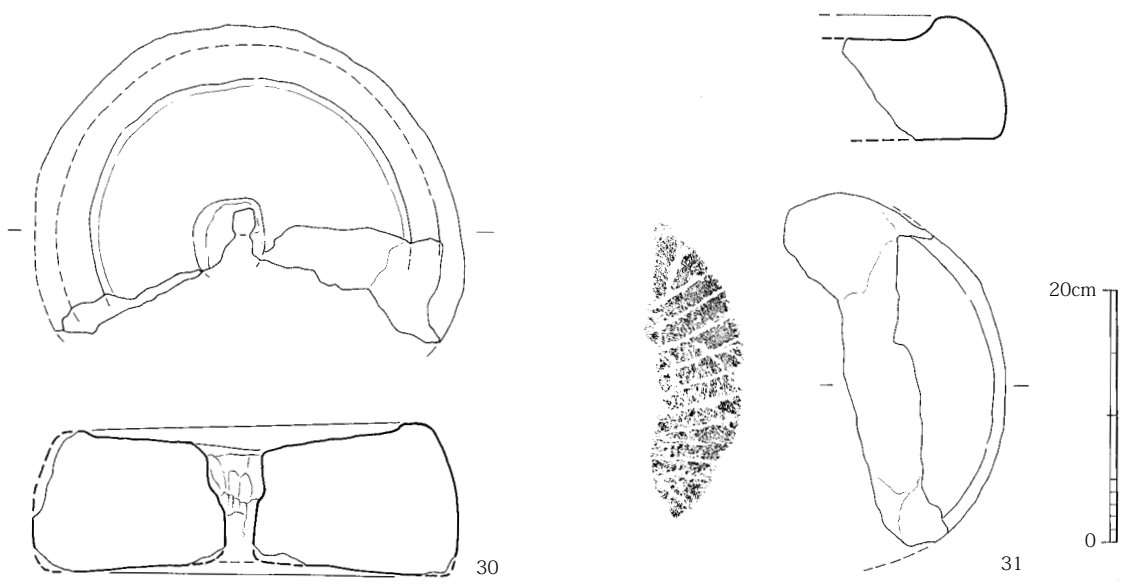
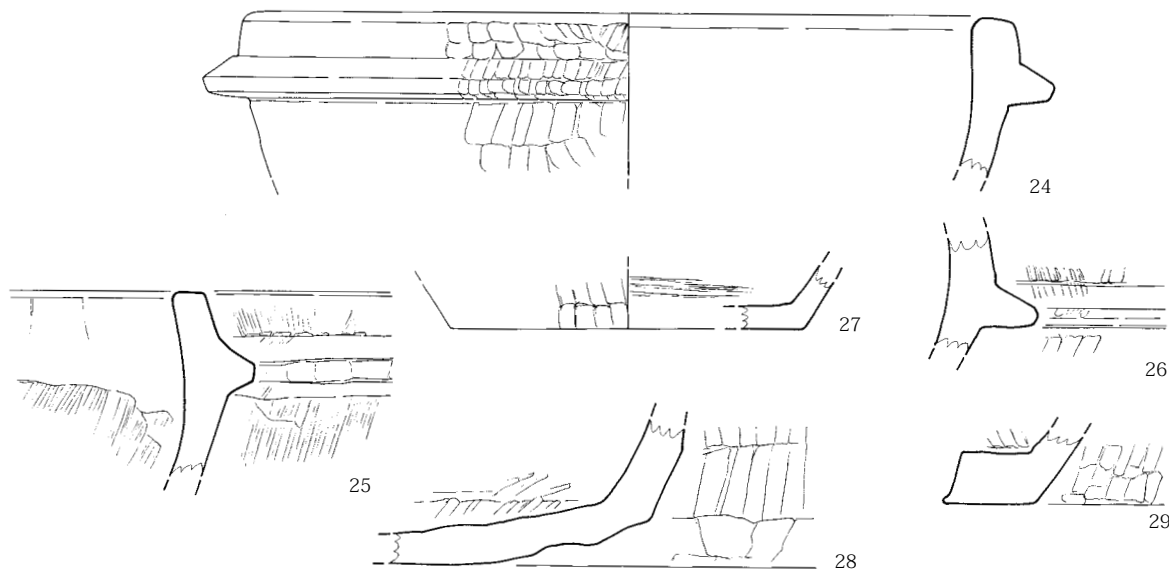
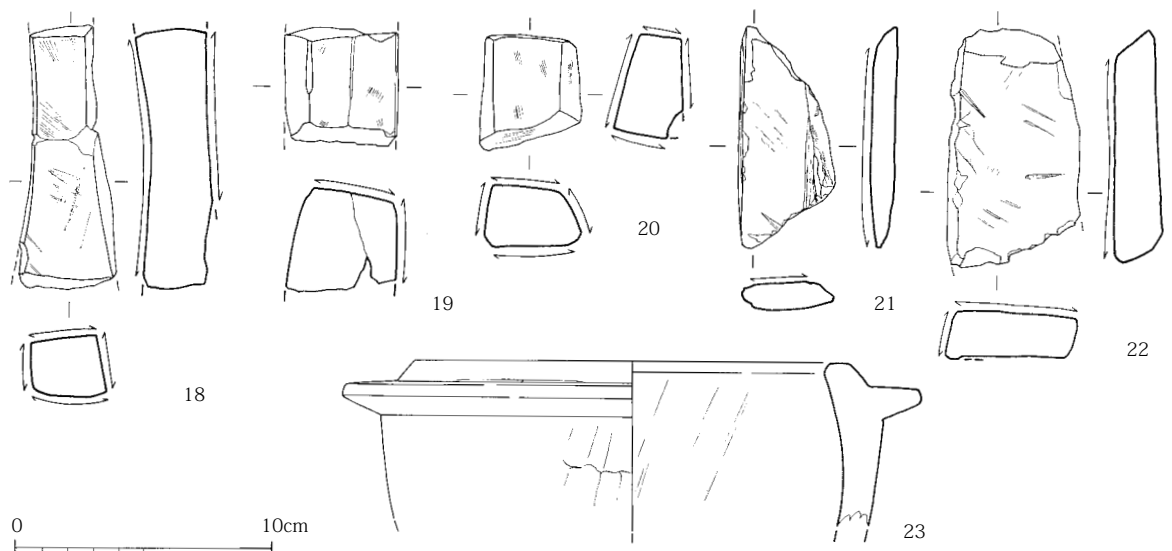
23～29は滑石製の石鍋である。口縁付近である23～26はいずれも鏝が巡るタイプのものである。23は内外面にケズリ痕が残る。口径17.0cmである。29号溝から出土した。24は外面にススが付着している。口径30.2cmである。7号溝から出土した。25は29号溝から出土した。26は



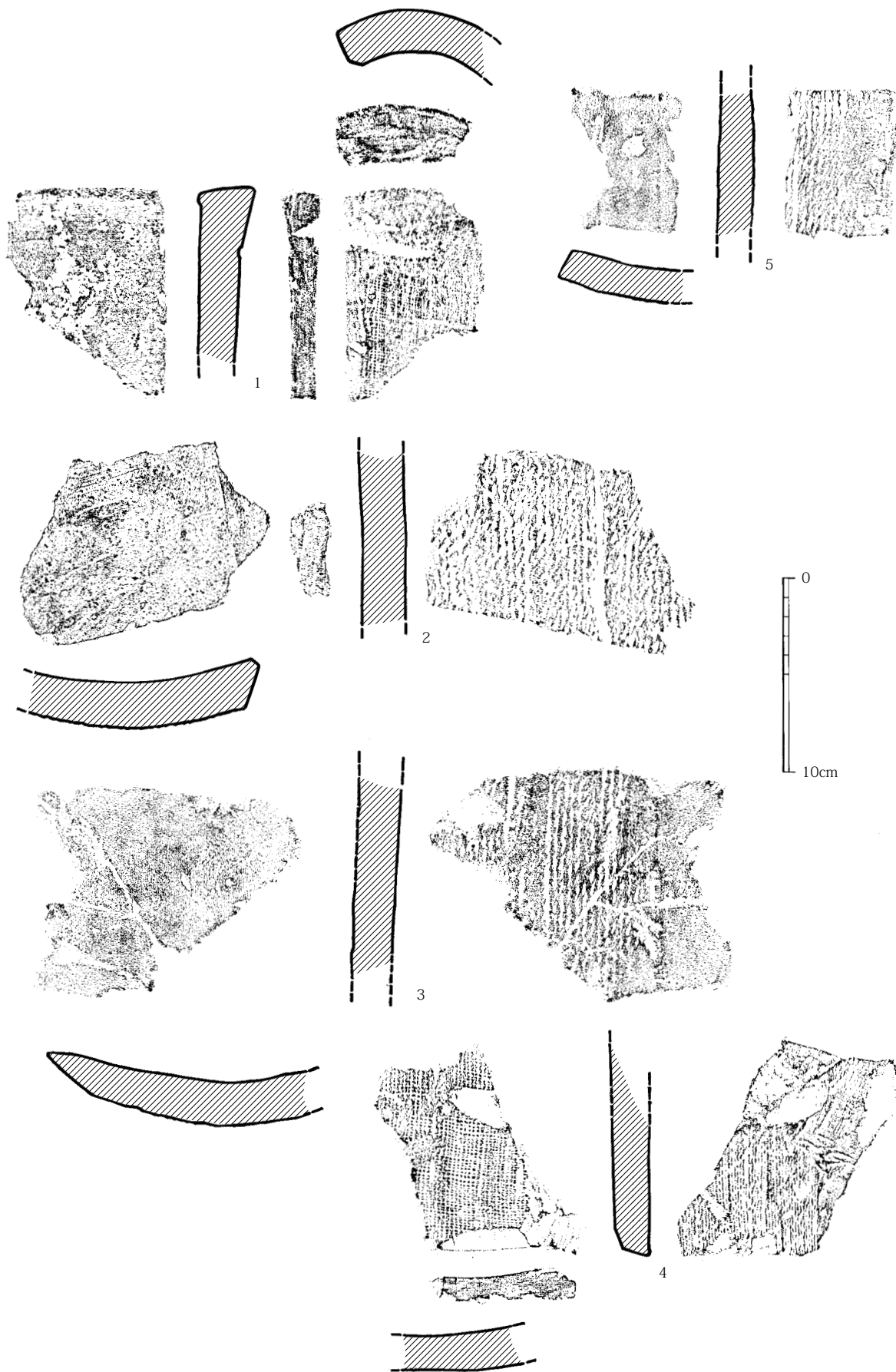
第81図 包含層出土土器実測図⑦ (127は1/6、他は1/3)



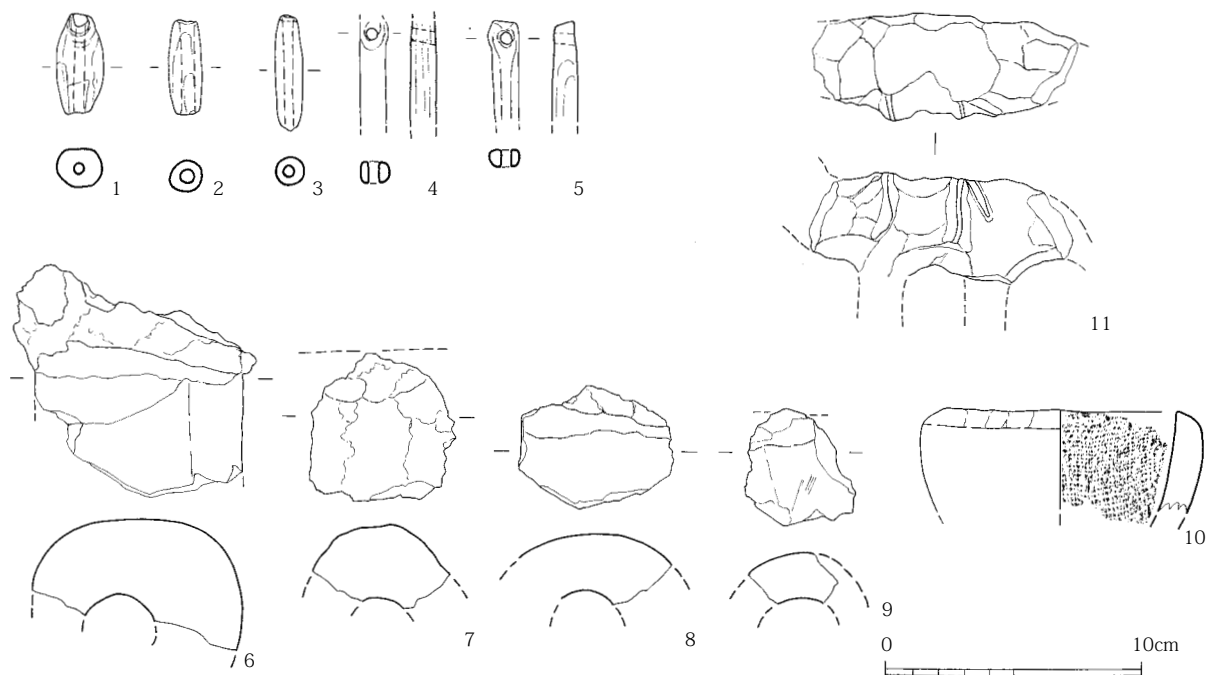
第 82 图 出土石製品実測図① (1/3)



第83図 出土石製品実測図② (30・31は1/6、他は1/3)



第 84 图 出土瓦实测图 (1/3)



第85図 出土土製品実測図 (1/3)

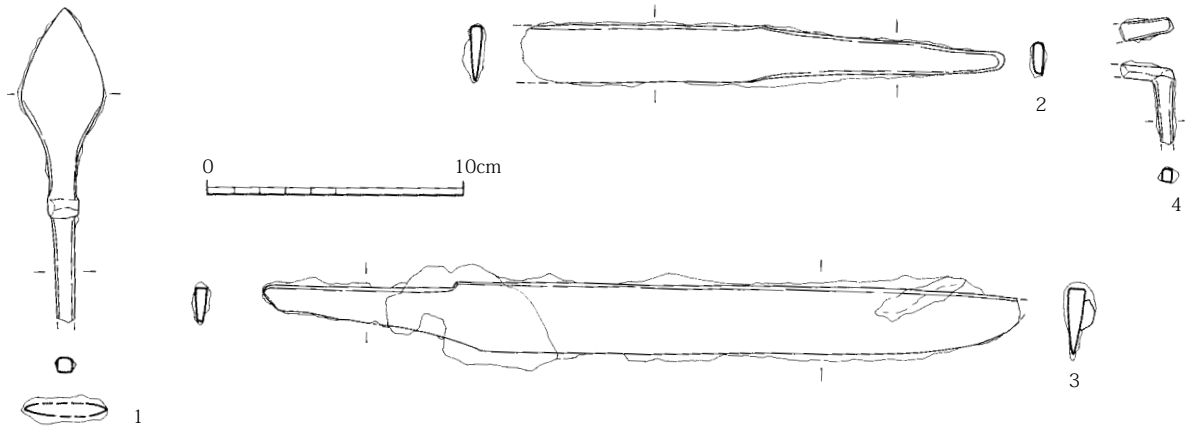
外面にススが付着する。2号井戸から出土した。27は底径14.0cmである。底部にススが付着する。7号溝から出土した。28は外面底部の仕上げがやや粗い。7号溝から出土した。29は3号土坑のNo.6から出土している。30・31は石臼である。凝灰岩製である。30は直径32.5cm、器高12.0cmである。6号土坑から出土した。31は直径30.0cm、高さ9.8cmである。4号井戸から出土した。

瓦 (図版44、第84図、第4表)

1は丸瓦である。外面の調整はナデ、内面は布目である。包含層から出土した。端部は削って仕上げてある。2～5は平瓦である。いずれも外面は縄目、内面は布目である。2は包含層から出土した。3は29号溝から出土した。4は包含層から出土した。5は29号溝から出土した。

土製品 (図版44・45、第85図、第4表)

1～3は円筒状の土錘である。直径1.9cm、長さ3.9cmである。1は7号溝から出土した。2は直径1.6cm、長さ3.6cmである。10号溝から出土した。3は直径1.2cm、長さ4.4cmである。24号土坑から出土した。4・5は端部に穿孔のある土錘である。6～9は鞆の羽口である。6は端部に鉄滓が付着する。直径8.1cmである。7は鉄滓が付着しており、先端に近い部分であろう。直径8.4cmである。14号土坑から出土した。8は直径8.0cmである。10号土坑から出土した。9は鉄滓が付着しており、先端に近い部分であろう。17号竪穴住居跡から出土した。10は製塩土器である。外面はナデ調整、内面には布目が残る。口径11.0cmである。包含層から出土した。11は土師質の土馬である。頭部、脚部、背部、尾部を欠く。背中には鞍の前輪、後輪が表現される。10号溝から出土した。



第 86 図 出土鉄製品実測図 (1/3)

鉄製品 (図版 45、第 86 図、第 4 表)

1 は柳葉形の鉄鍬である。鍬被の部分に段をなす。包含層から出土した。2 は刀子である。関の部分には明確でなく、次第に茎子に向かって細くなる。1 号土坑墓から出土した。3 は刀子である。先端を失う。現存で長さ 29.9cm、幅 2.7cm、厚さ 0.8cm である。背部に関がつく。刃部と茎部の境に大腿骨と思しき人骨が付着する。X 線写真によると目釘が残っている可能性がある。2 号土坑墓 No. 8 の位置から出土した。4 は不明鉄器である。鍛造である。2 号土坑から出土した。

(11) **小結**

今回の調査区では、竪穴住居跡 17 棟、掘立柱建物 2 棟、土坑 41 基、地下式土坑 1 基、井戸 7 基、溝 29 条、土坑墓 2 基を検出している。時期的には古墳時代前期から中世におよぶ。報告した「京都大」墨書土器の他に「〇一石」「急」木簡、木製馬具未成品など重要な発見があったが、保存処理中であるため、次年度以降あらためてまとめることにしたい。

IV おわりに

今年度報告は、遺跡中央の谷北側斜面であるⅢ区の一部のみにとどまり、遺跡の一端を報告したにすぎない。今後国道のほか、東九州道と県道の遺物整理が進めば、広大な調査面積によって非常に多くの遺構・遺物が出土した本遺跡の内容が明らかになるだけでなく、これまで語られてきた古代の京築地域の歴史がより豊かな、充実した内容となることが期待される。Ⅲ-(11)の小結でも先述しているが、遺跡の変遷などの作業は次年度以降の報告書でまとめることとし、今回は現時点における今後の展望を記述することでまとめとしたい。

まず本遺跡においては、大きく分けて弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代後期、古代(7世紀末～8世紀)、中世(12～16世紀)という4時期の遺構が検出されている。

本遺跡の形成は弥生時代後期後半頃で、それ以前の遺構・遺物は発見されていないと思われる。筆者は、弥生時代後期後半頃に長峡川中上流域の複数の遺跡から、海が間近に迫った場所に立地する本遺跡に移動・集住してきたと考えている。その理由としては、弥生時代後期前半、高三瀧式段階になると本地域では瀬戸内系土器の出土が激増し、地域間交流が盛んになったことがこれ

挿図番号	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	法量				材質	登録番号	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
82 図	1	44	Ⅲ-C	土 7	石製品	石庖丁			0.8	36.4	凝灰岩	1325
82 図	2	44	Ⅲ-C	包含層	石製品	石庖丁			0.7	18.1	砂岩	1327
82 図	3	44	Ⅲ-C	包含層	石製品	石庖丁			0.5	7.5	砂岩	
82 図	4		Ⅲ-C	住 14	石製品	石庖丁			0.7	10.4	凝灰岩	1324
82 図	5	44	Ⅲ-C	土 25	石製品	石庖丁再加工品			1.1	34.3	片岩	1326
82 図	6	44	Ⅲ-C	排土中	石製品	勾玉	3.9	2.4	1	11.25	緑色片岩	1319
82 図	7	44	Ⅲ-C	包含層	石製品	紡錘車	4.4	4.4	1.2	33.4	滑石	
82 図	8	44	Ⅲ-C	P34	石製品	紡錘車	3.8	3.8	1.2	28	粘板岩	1329
82 図	9	44	Ⅲ-C	包含層	石製品	打製石鏃	10.8	4.3	1.2	85.3	片岩	1321
82 図	10	44	Ⅲ-C		石製品	磨製石斧	12	4	2.9	192	凝灰岩	1322
82 図	11	44	Ⅲ-C	土 16	石製品	砥石	16.5	11.6	9.4	2002	砂岩	1314
82 図	12	44	Ⅲ-C	土 26	石製品	砥石	23	12.8	6.8	1989	細粒砂岩	1315
82 図	13		Ⅲ-C	包含層	石製品	砥石		4	2.4	65.4	砂岩	1310
82 図	14	44	Ⅲ-C	東端部トレンチ	石製品	砥石		5.2	3.5	160.5	頁岩	1306
82 図	15		Ⅲ-C	井戸 1	石製品	砥石				70.5	砂岩	1304
82 図	16		Ⅲ-C	溝 7	石製品	砥石		2.3	2.5	24.6	砂岩	1305
82 図	17	44	Ⅲ-C	住 2	石製品	砥石	16.5	10.3	2.7	570	砂岩	1313
82 図	18	44	Ⅲ-C	土 23	石製品	砥石				124.3	細粒砂岩	1311
83 図	19		Ⅲ-C	包含層	石製品	砥石		4.5		98.9	砂岩	1312
83 図	20		Ⅲ-C	包含層	石製品	砥石	4.5	4	2.7	58.4	細粒砂岩	1307
83 図	21		Ⅲ-C	土 21	石製品	砥石	8.6	3.8	1.2	43.7	頁岩	1308
83 図	22		Ⅲ-C	包含層	石製品	砥石		5.2	1.9	149.6	頁岩	1309
83 図	23		Ⅲ-C	溝 29	石製品	石鍋	17				滑石	
83 図	24		Ⅲ-C	溝 7	石製品	石鍋	30.2				滑石	1352
83 図	25	44	Ⅲ-C	溝 29	石製品	石鍋					滑石	
83 図	26	44	Ⅲ-C	井戸 2	石製品	石鍋					滑石	1349
83 図	27	44	Ⅲ-C	溝 7	石製品	石鍋	14				滑石	1350
83 図	28	44	Ⅲ-C	溝 7	石製品	石鍋					滑石	1351
83 図	29	44	Ⅲ-C	土 3	石製品	石鍋					滑石	1348
83 図	30	44	Ⅲ-C	土 6	石製品	石臼	32.5		12		凝灰岩	1302
83 図	31	44	Ⅲ-C	井戸 4	石製品	石臼	30		9.8		凝灰岩	1303
84 図	1	44	Ⅲ-C	包含層	土製品	瓦						1340
84 図	2		Ⅲ-C	包含層	土製品	瓦						1338
84 図	3		Ⅲ-C	溝 29	土製品	瓦						32
84 図	4	44	Ⅲ-C	包含層	土製品	瓦						1345
84 図	5		Ⅲ-C	溝 29	土製品	瓦						35
85 図	1	44	Ⅲ-C	溝 7	土製品	土錘	3.8	1.9				1364
85 図	2	44	Ⅲ-C	溝 10	土製品	土錘	3.6	1.2				1363
85 図	3	44	Ⅲ-C	土 24	土製品	土錘	4.5	1.1				1362
85 図	4	44	Ⅲ-C	東端部トレンチ	土製品	土錘						1366
85 図	5	44	Ⅲ-C	東端部トレンチ	土製品	土錘						1365
85 図	6	45	Ⅲ-C		土製品	輪羽口	8.2	8.2				1316
85 図	7	45	Ⅲ-C	土 14	土製品	輪羽口	8.4	8.4				1317
85 図	8	45	Ⅲ-C	土 10	土製品	輪羽口	8	8				1323
85 図	9		Ⅲ-C	住 17	土製品	輪羽口						
85 図	10	44	Ⅲ-C	包含層	土製品	製塩土器	11					1357
85 図	11		Ⅲ-C	溝 10	土製品	土馬						1318
86 図	1		Ⅲ-C	包含層	鉄製品	鉄鏃		3.3	0.6			
86 図	2	45・46	Ⅲ-C	墓 1	鉄製品	刀子		2.3	0.6			
86 図	3	46	Ⅲ-C	墓 2	鉄製品	刀子	29.9	2.7	0.8			
86 図	4		Ⅲ-C	土 2	鉄製品	不明鉄製品			0.6	2.9		

第4表 延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C区出土特殊遺物一覧表

まで先学から指摘されている。また本遺跡Ⅱ区・Ⅳ-B区で瀬戸内系土器が出土していることから、推測ではあるものの、本遺跡はその立地と内容から地域間交流を担うために成立した拠点集落の一つであった可能性を考えておきたい。

古墳時代前期になると、丘陵上の複数の地点で特定方形区画溝、いわゆる方形居館が検出されており、Ⅲ-B区では南側に1ヶ所の陸橋部を持つ23×21mほどの特定方形区画溝を発見している。またⅢ-A区では山陰系二重口縁壺が周溝内で出土した円形周溝を検出している。さらに

IV区から延びる丘陵東先端には前期古墳の可能性のある吉国木実堂古墳が存在する。これらのことから、本遺跡は古墳時代前期には丘陵上～斜面が集落域、丘陵先端部や丘陵頂部は墓域として利用され、集落内部には在地首長の居館や祭祀的空間の役割が指摘されている特定方形区画溝が複数存在することから、本遺跡には当地域を治めた在地首長層が存在した可能性が想定される。なお、この在地首長層は、4世紀末に築造されたとされるビワノクマ古墳の被葬者系列につながる可能性が高い。今後の整理により、特定方形区画溝と竪穴住居跡の変遷などから、当該期の集落内部構造が明らかになることが期待されよう。またⅢ-C区の谷（弥生時代後期後半～古墳時代後期）から、全長4mほどの木製導水施設が発見されている。現在AMS年代測定中であるが、古墳時代前期に属するならば、奈良県纏向遺跡で発見された同様の木製導水施設との関係から、本遺跡の在地首長層と畿内ヤマト政権と繋がりを指摘できることから、その成果に期待したい。

その後、古墳時代中期～後期中頃にかけて竪穴住居数は極めて低調ではあるものの、集落は継続すると思われる。古墳時代後期後半～末になると、丘陵上の至る所に竪穴住居跡が営まれる。これまでに確認されたこの時期に属する竪穴住居跡は600棟以上で、中近世や近現代に造成により削平された竪穴住居跡が少なくないであろうことと、調査区外の広がりも考えると、本遺跡では1,000棟以上の竪穴住居跡が営まれていたことは確実であろう。先述した花粉分析の成果から、京都平野では古墳時代後期に急速に自然林が失われたことが指摘されていることも合わせて考えると、古墳時代後期になると本遺跡周辺の低地の水田開発が一層進んだこと、また筆者の推測ではあるが、『日本書紀』の記事にある草野津は、本遺跡から見える場所にあったと考えており、草野津を運営・経営するため、本遺跡に多くの人が居住したのではないかと思われる。このことは、時期は下るものの、V区で検出した8世紀代の大型掘立柱建物跡群が、海を望む丘陵上の絶好の場所に位置していることもこのことを裏付けていると思われる。この建物を含むV区は今年度に報告予定のため、今後の検討に期待したい。さらに今後報告される数多くの古墳時代後期の竪穴住居跡から、集落の変遷や出土土器の編年、カマドの特徴、竪穴住居跡のサイズなどを検討することで、古墳時代後期の京築地域の標識遺跡として位置付けが期待される。

8世紀になると、先述した大型掘立柱建物跡に加え、波板状凹凸面を持つ道路状遺構を複数敷設し、中央と南の谷部には井戸群が営まれている。当遺跡では8世紀の竪穴住居跡はほとんどなく、一般的な住居は竪穴住居から掘立柱建物に移行していると思われるが、官衙的な役割が想定される大型建物跡を除くと、当該期の掘立柱建物跡はほとんどない。このことは、本遺跡が官衙的性格を強め、一般の集落は別地点に移動したと想定される。この理由は、大型建物と今回報告した「京都大」や、昨年度東九州道の報告書で報告した「京都物太」などの「京都郡大領」に関係する墨書土器、IV-C区の谷から出土した「天平六年（734）」銘の木簡などからも官衙的性格を強めたことが予想され、丘陵上を縦断する整備された道路の存在から、倉庫的な建物は未検出ながら、「草野津」の一部の機能が本遺跡に存在した可能性も少なくないのではないかと筆者は考えている。

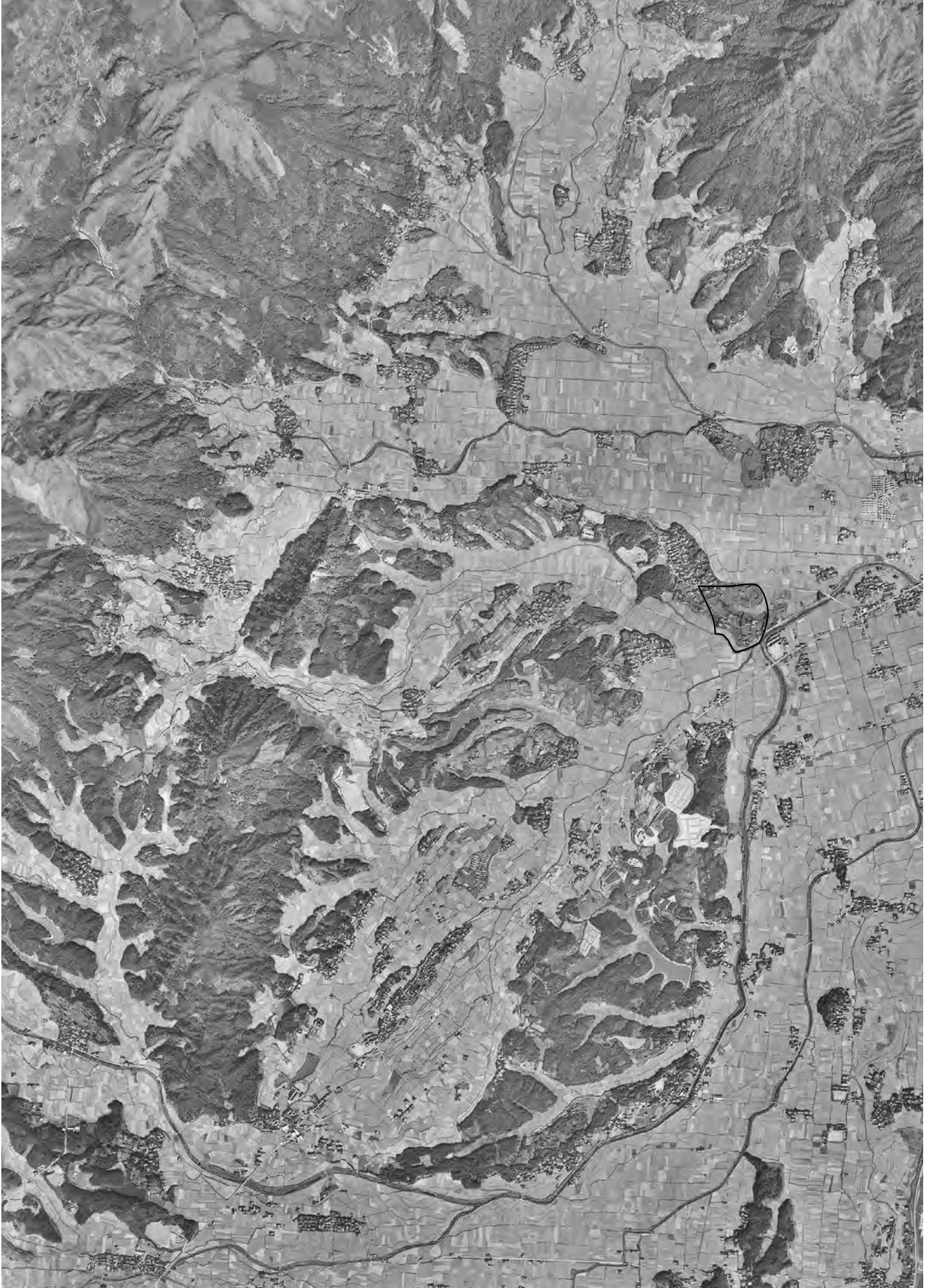
12世紀になると、丘陵上を溝で区画し、掘立柱建物で構成された複数の屋敷地が成立し、15世紀までその屋敷地は丘陵上で少しずつ場所を変えながら継続する。中でも14号溝は障子堀のような溝であり、屋敷地の区画溝の在り方として注目される。

今後の整理により、以上の課題が解明されることを期待したい。

図 版



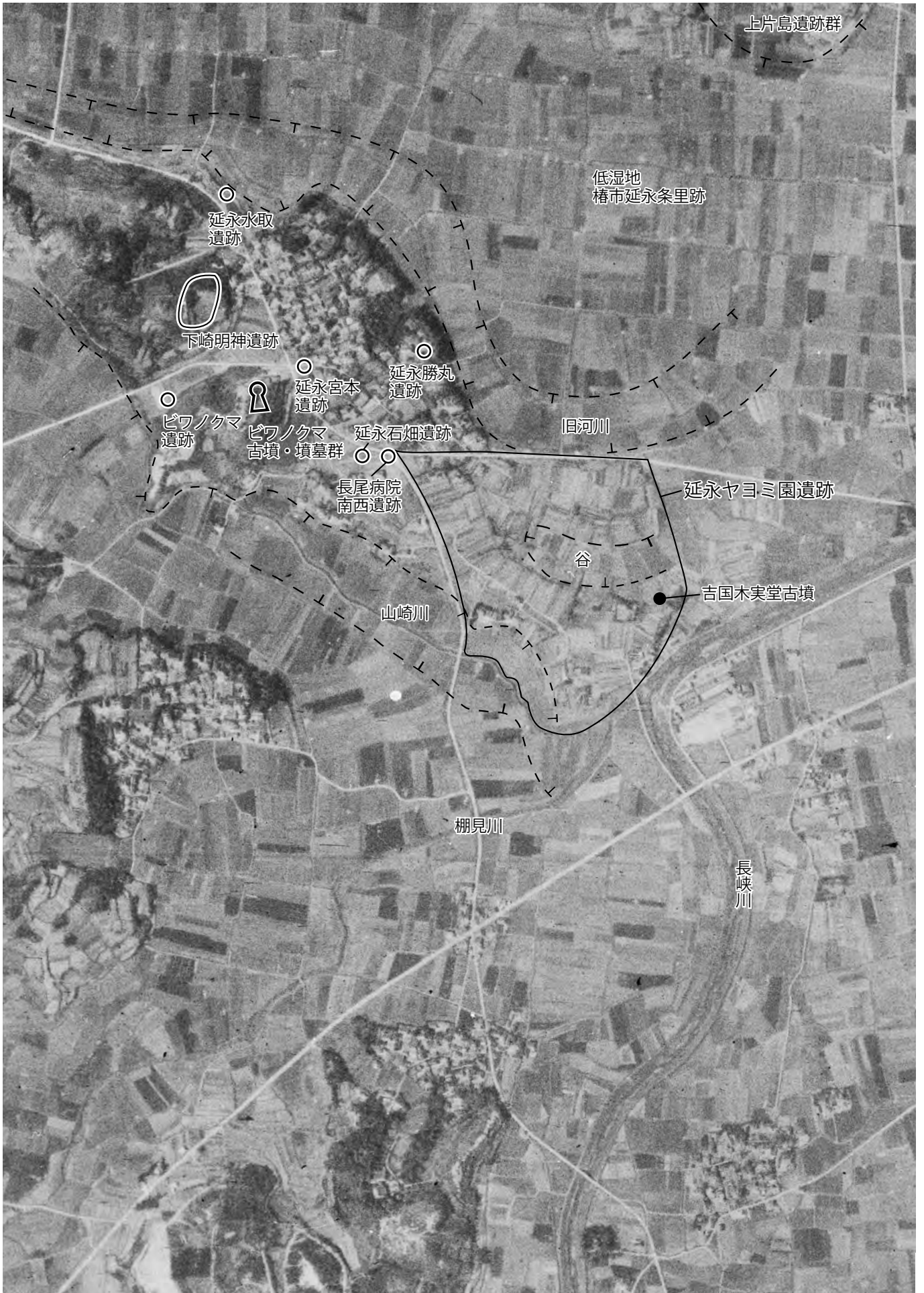
10 水没した発掘現場（Ⅲ－C区）



京都平野付近空中写真（約 1/40,000、昭和 44 年国土地理院撮影、黒枠で囲んだ範囲が延永ヤヨミ園遺跡）



延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真②（約 1/10,000、昭和 22 年米軍撮影）



延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真③ (図版 2 を 2 倍に拡大し、遺跡名を記入、破線は推定約 1/5,000、昭和 22 年米軍撮影)



延永ヤヨミ園遺跡付近空中写真④（約 1/10,000、昭和 36 年国土地理院撮影）



1 延永ヤヨミ園遺跡遠景
(東から)



2 延永ヤヨミ園遺跡遠景
(西から)



1 延永ヤヨミ園遺跡遠景
(北東から)



2 延永ヤヨミ園遺跡遠景
(南西から)



1 延永ヤヨミ園遺跡遠景
(北から)



2 III - C 区北側下段
(空中写真)



1 Ⅲ-C区北侧下段
(空中写真)

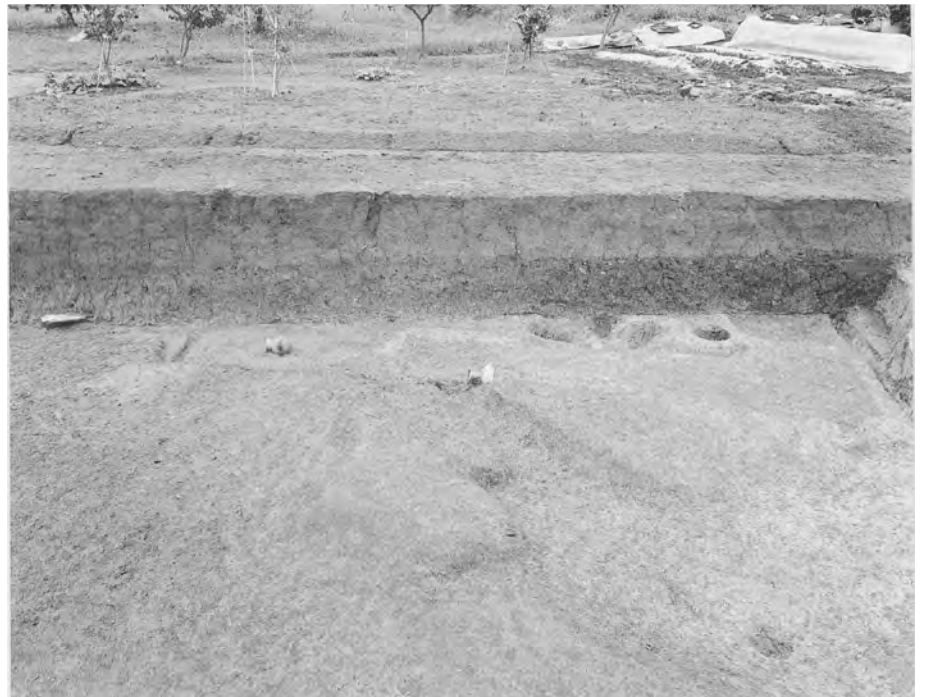


2 Ⅲ-C区南侧
(空中写真)

1 1号竪穴住居跡 (南から)

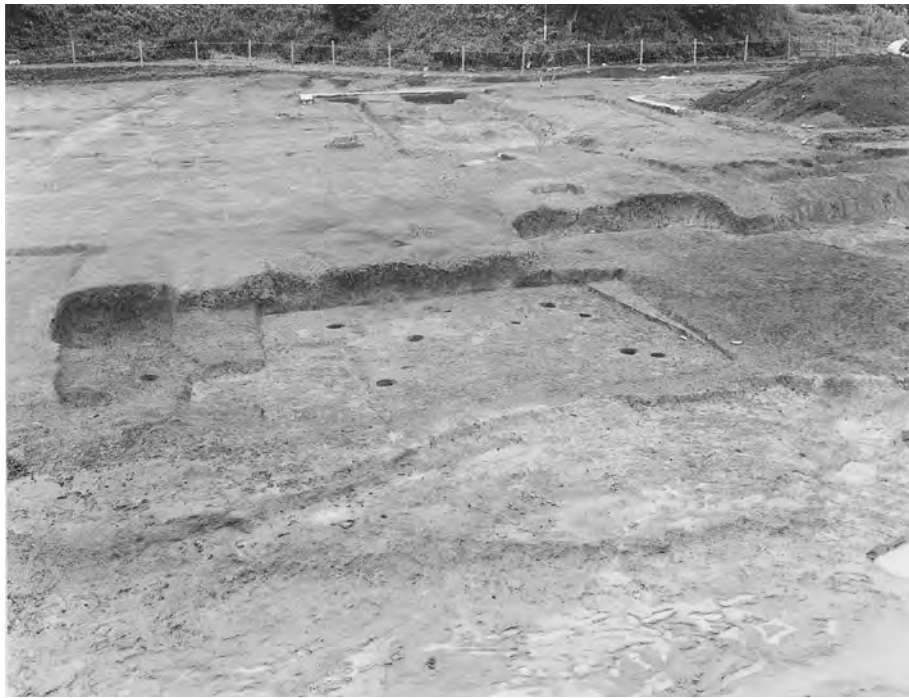


2 1号竪穴住居跡土層
(東から)



3 2号竪穴住居跡 (南から)





1 3・4号竪穴住居跡（南から）



2 5号竪穴住居跡（南から）



3 6号竪穴住居跡（南から）



1 7号竪穴住居跡（南から）



2 14号竪穴住居跡（北から）



3 14号竪穴住居跡土層（南から）



1 14号竪穴住居跡土層（東から）



2 15号竪穴住居跡（北から）



3 16号竪穴住居跡（東から）

1 16号竪穴住居跡カマド
(東から)



2 17号竪穴住居跡 (南から)



3 1号掘立柱建物跡 (北から)





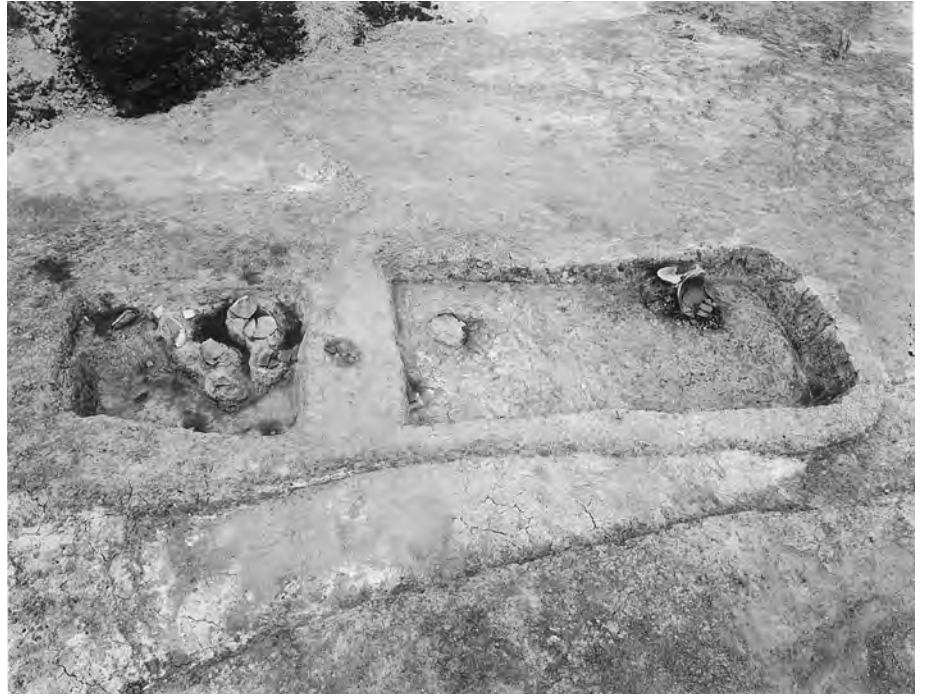
1 2号掘立柱建物跡（南から）



2 1号土坑（南から）



3 2号土坑（南から）



1 3号土坑（東から）



2 4号土坑（南から）



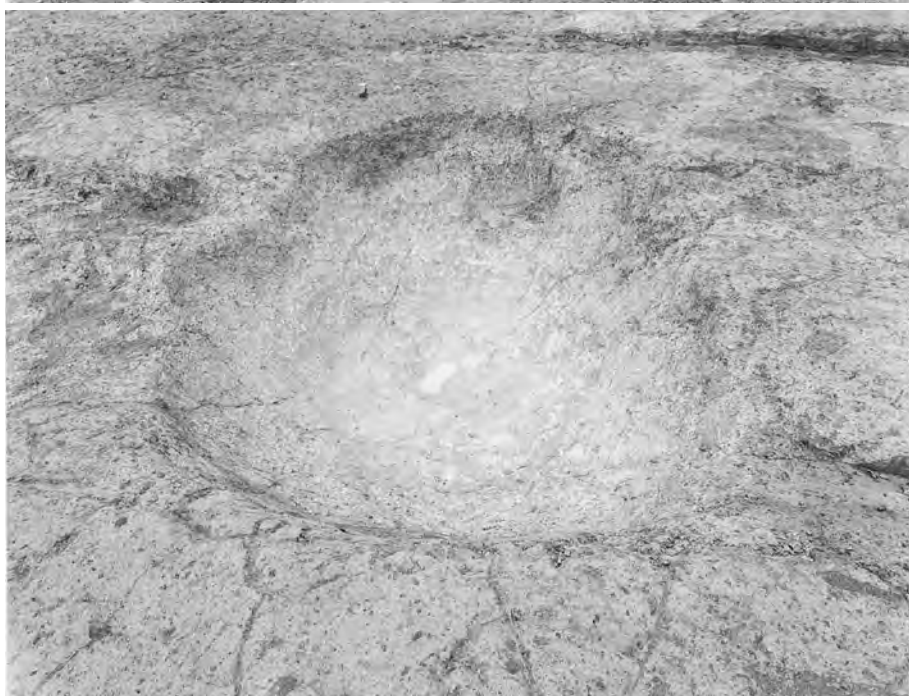
3 5号土坑（西から）



1 6号土坑（南から）



2 7号土坑（南から）



3 8号土坑（東から）

1 10号土坑（南から）



2 11号土坑（北から）



3 12号土坑（南から）





1 12号土坑土層（東から）

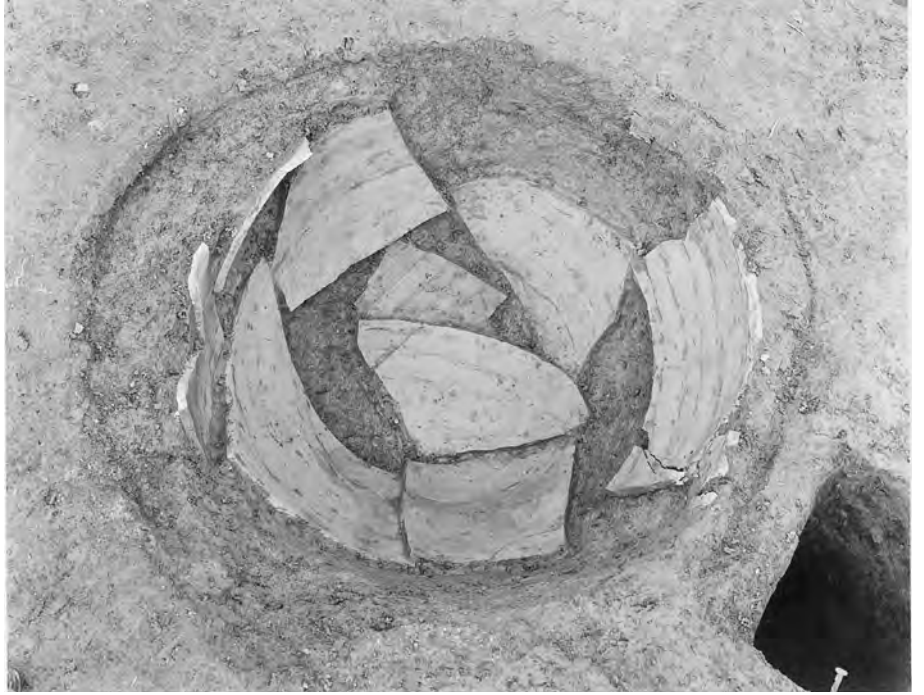


2 13号土坑（北から）



3 14号土坑（北から）

1 15号土坑（東から）

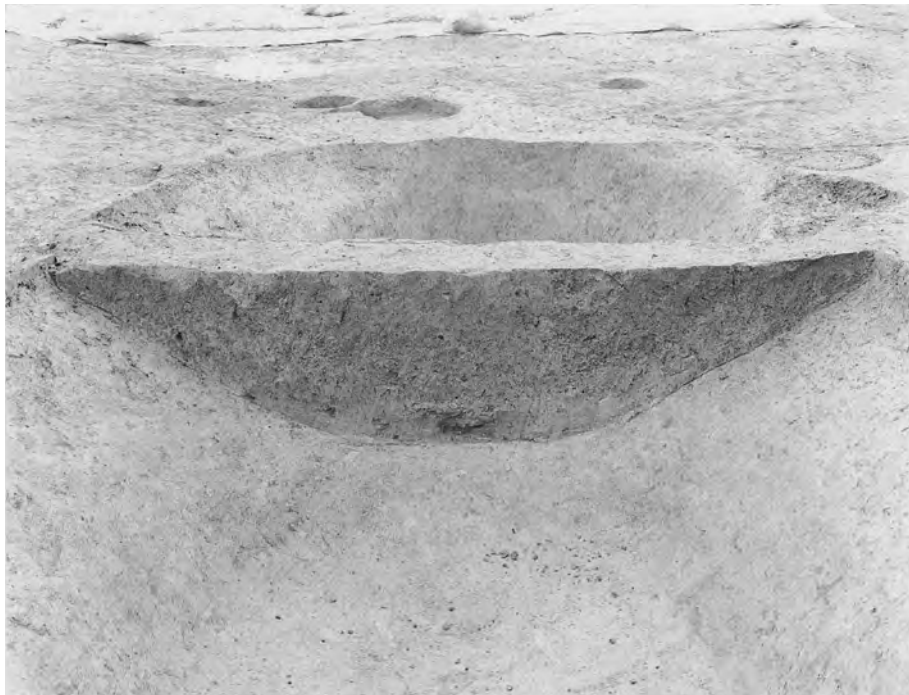


2 16号土坑（西から）



3 17号土坑（西から）





1 17号土坑土層（東から）



2 18号土坑（西から）



3 19号土坑（南から）



1 20号土坑 (西から)



2 22号土坑 (南から)



3 24号土坑 (南から)



1 25号土坑（西から）



2 26号土坑（北から）



3 32号土坑（西から）

1 32号土坑土層（西から）



2 40号土坑（南から）



3 41号土坑（北西から）





1 1号地下式土坑（東から）



2 1号井戸（南から）



3 2号井戸（北から）



1 3号井戸 (西から)



2 4号井戸 (北から)



3 5号井戸 (北から)



1 6号井戸（北から）



2 7号井戸（東から）



3 6号溝土層（南から）



1 7号溝土層（南から）



2 10号溝土層（西から）



3 11号溝土層（西から）



1 14号溝連続土坑検出時(南から)



2 14号溝(北から)



3 14号溝(北から)



1 14号溝連続土坑土層
(南から)



2 20号溝土層 (北から)



3 21・22号溝土層 (北から)



1 23・24号溝土層（北から）



2 29号溝（北西から）



3 29号溝土層（西から）



1 1号土坑墓（東から）



2 2号土坑墓（西から）



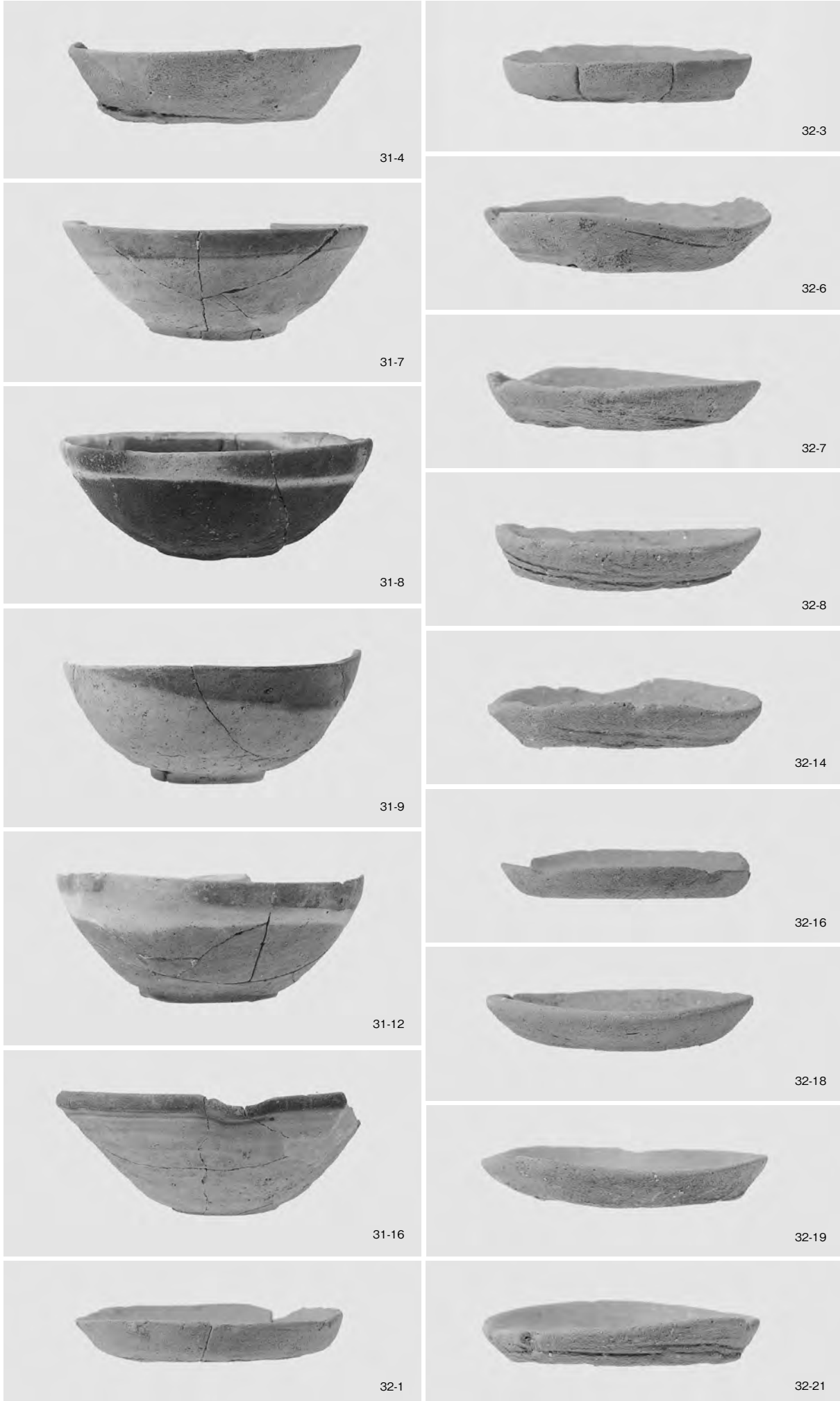
3 Ⅲ-C区北側下段部分
東壁土層（西から）



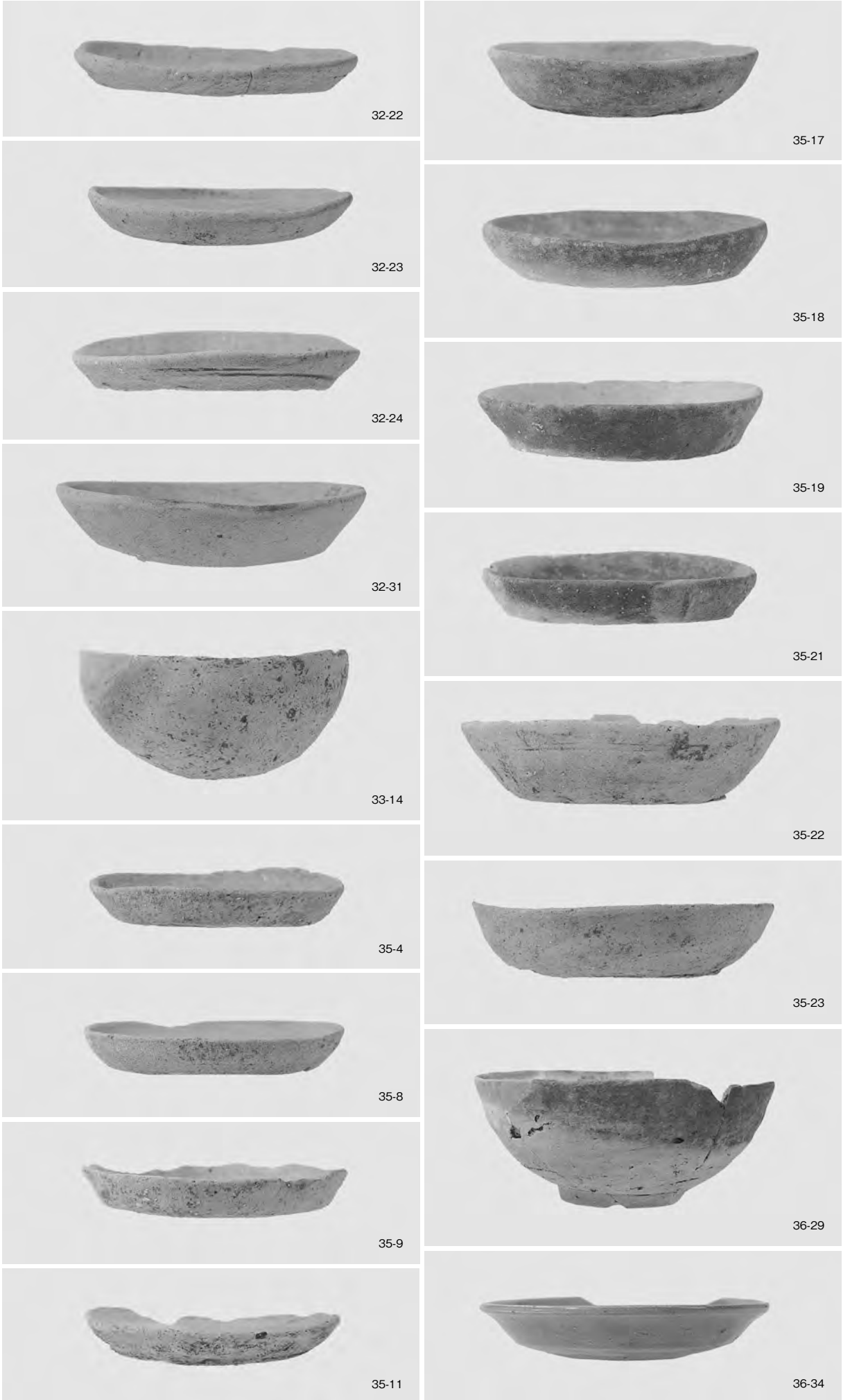
出土遺物① (豎穴住居跡出土)



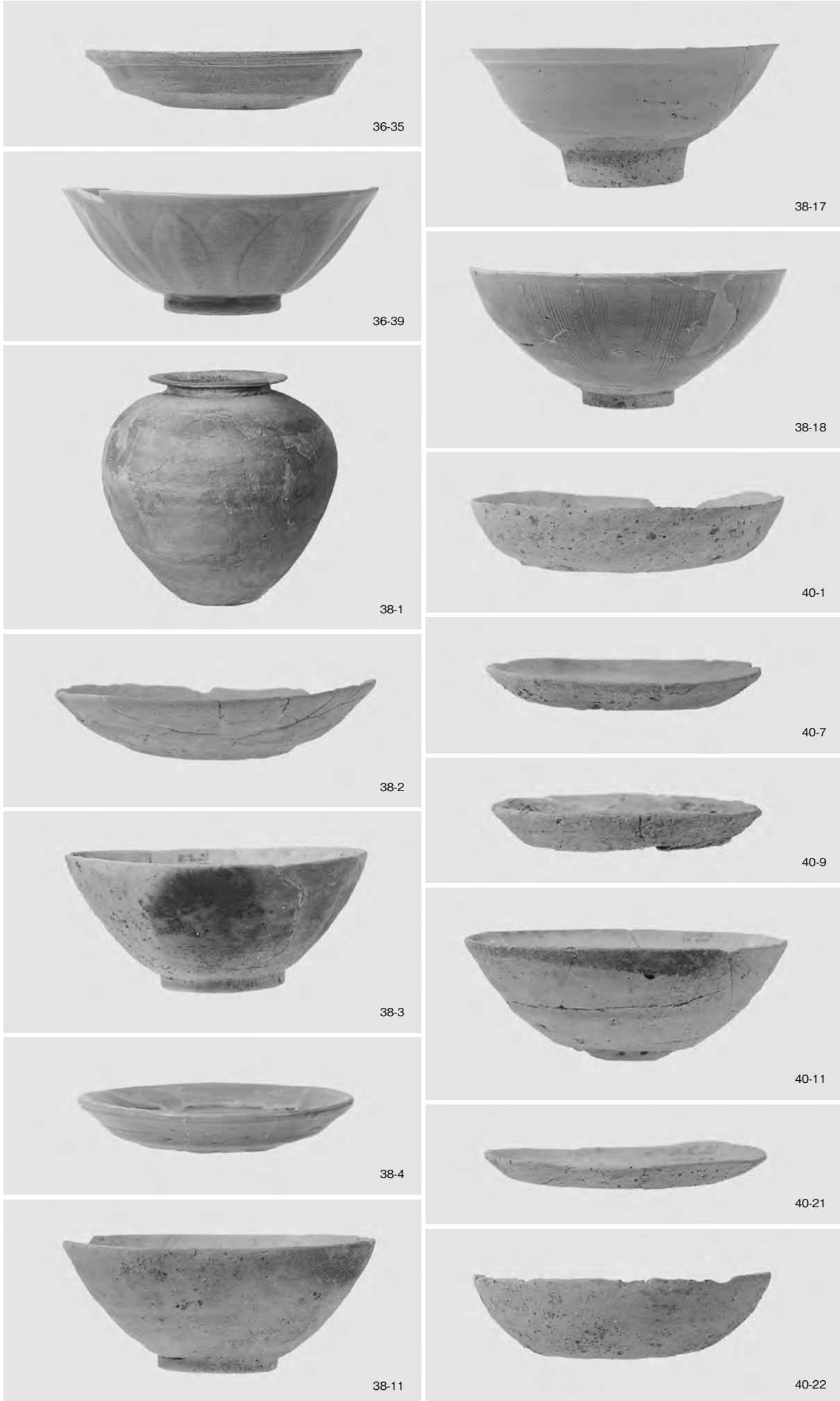
出土遺物②（竪穴住居跡出土）



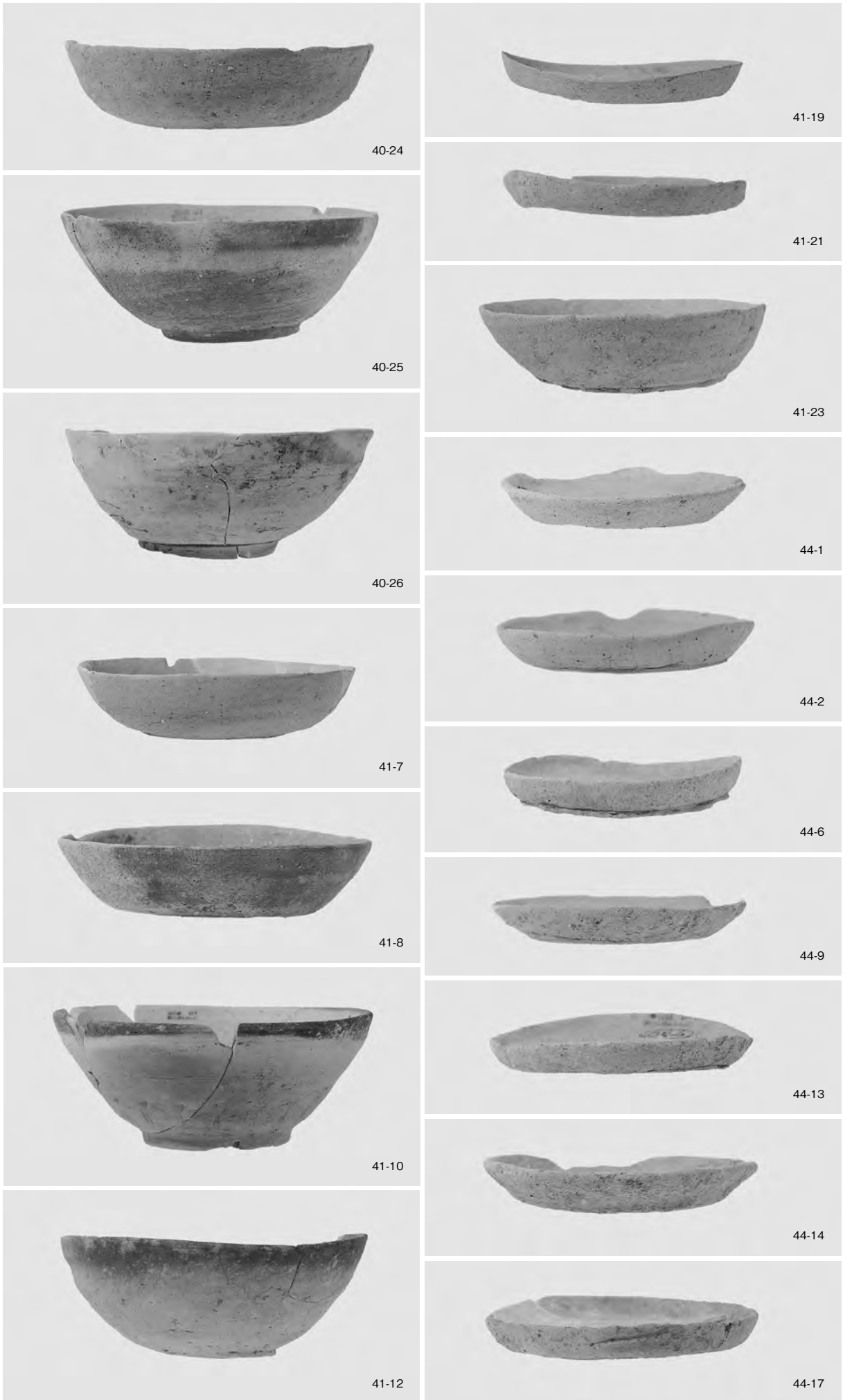
出土遺物③（土坑出土）



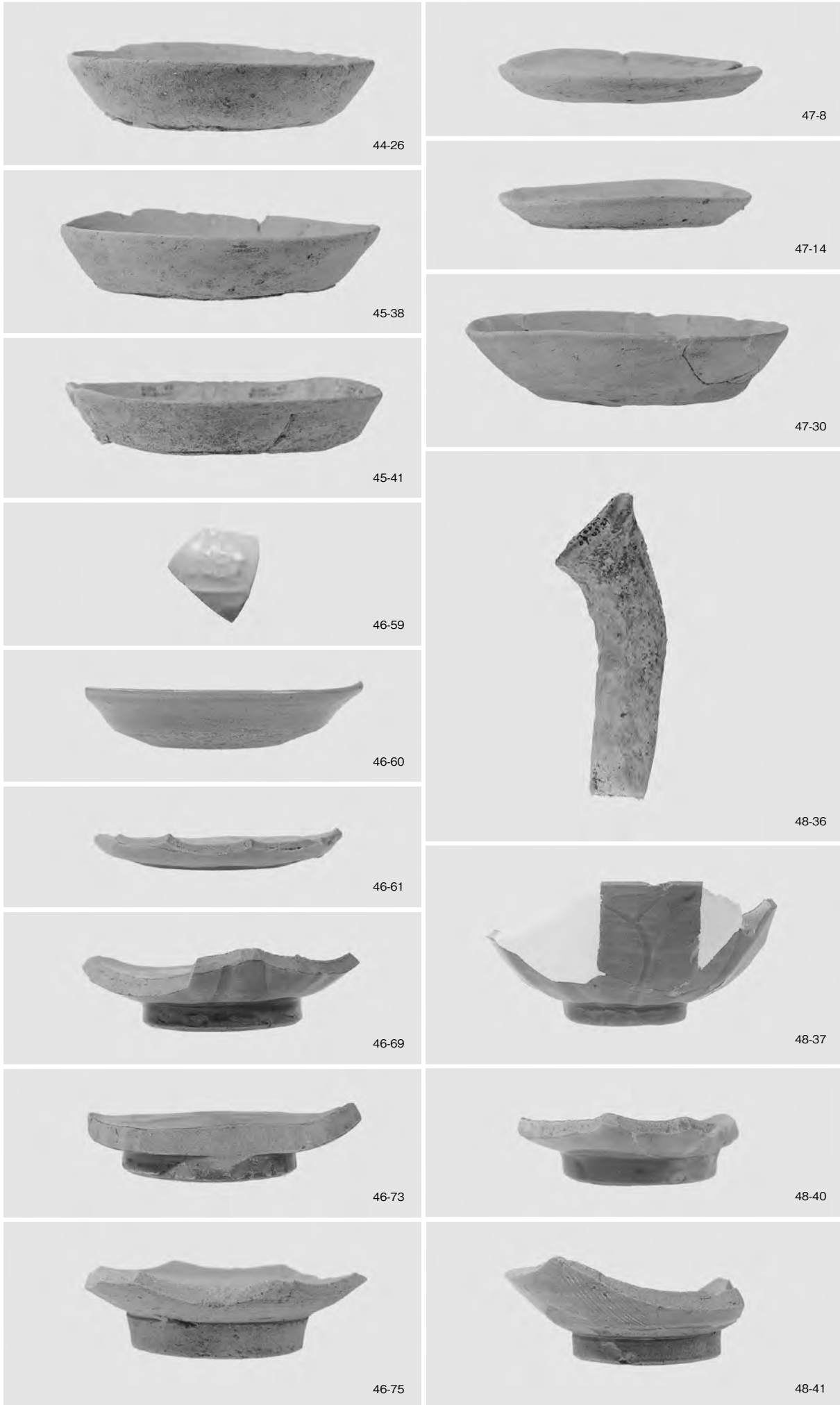
出土遺物④ (土坑出土)



出土遺物⑤（土坑出土）



出土遺物⑥ (土坑出土)



出土遺物⑦ (土坑出土)

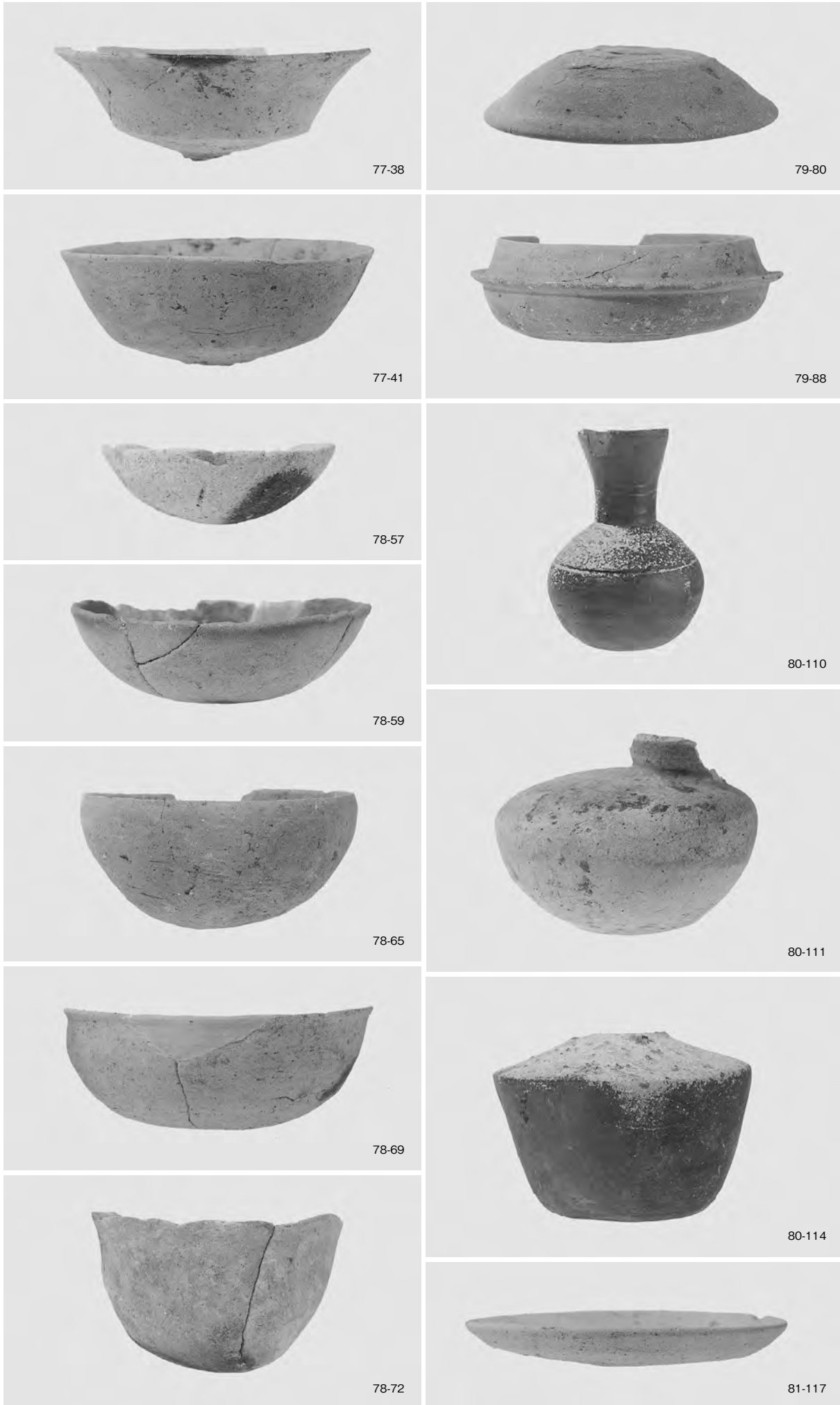


出土遺物⑧ (井戸・溝出土)

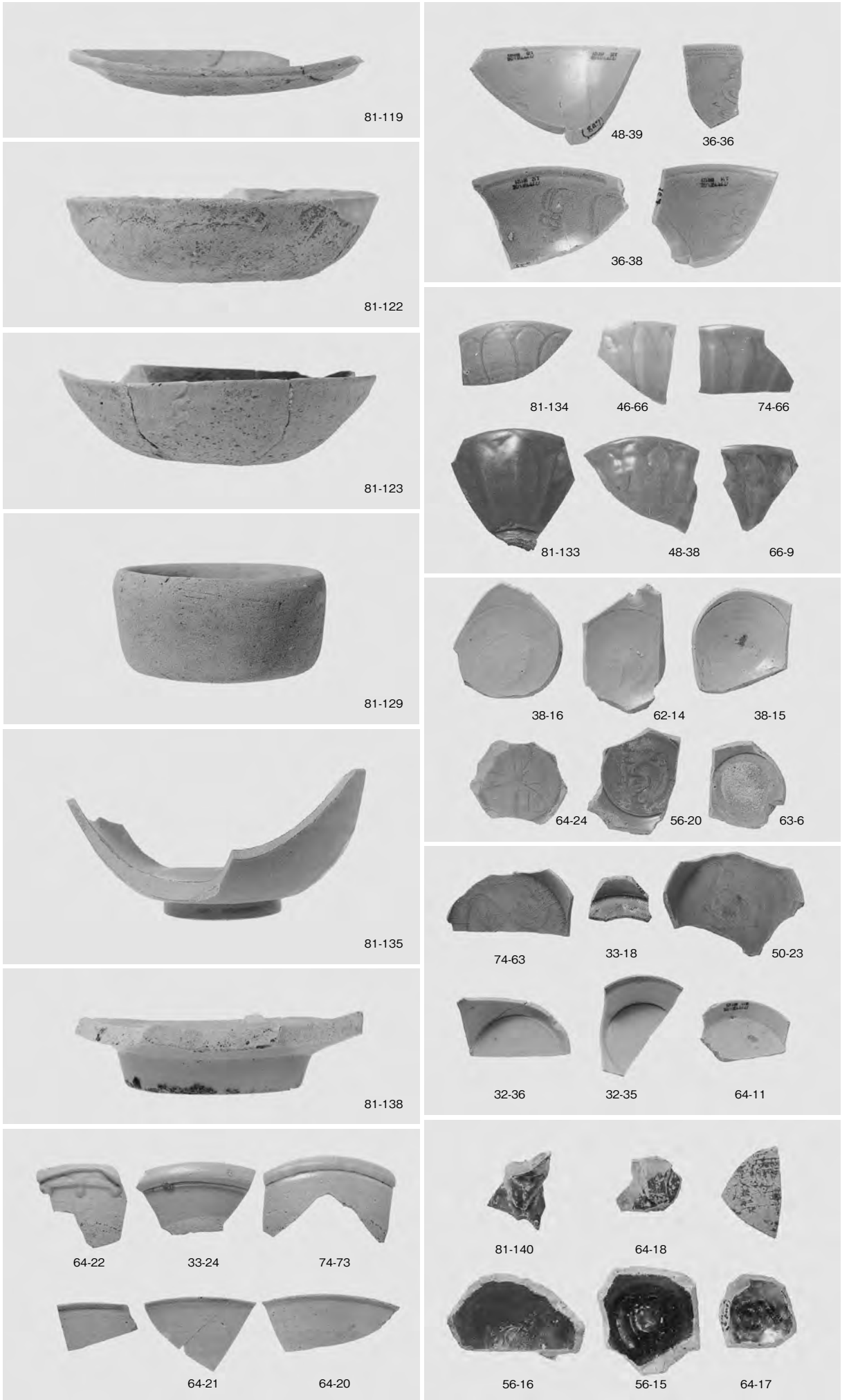




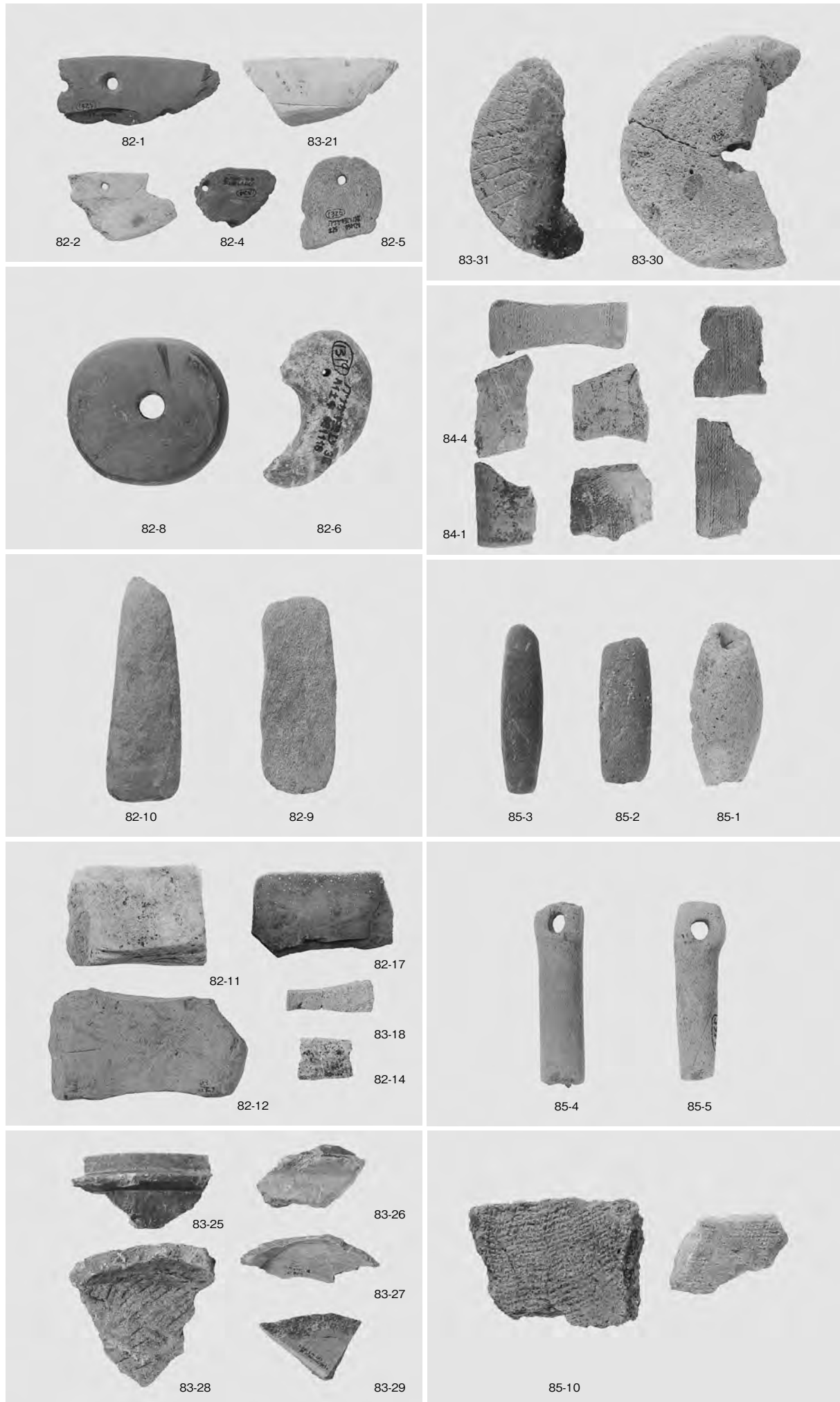
出土遺物⑩ (ピット・包含層出土)



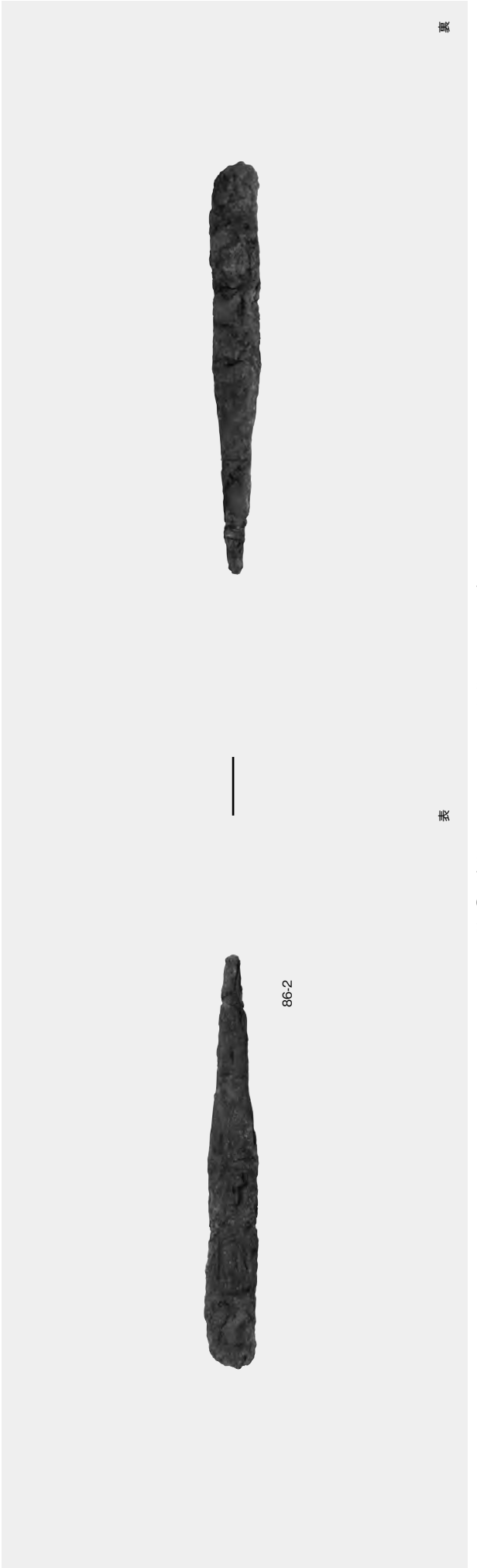
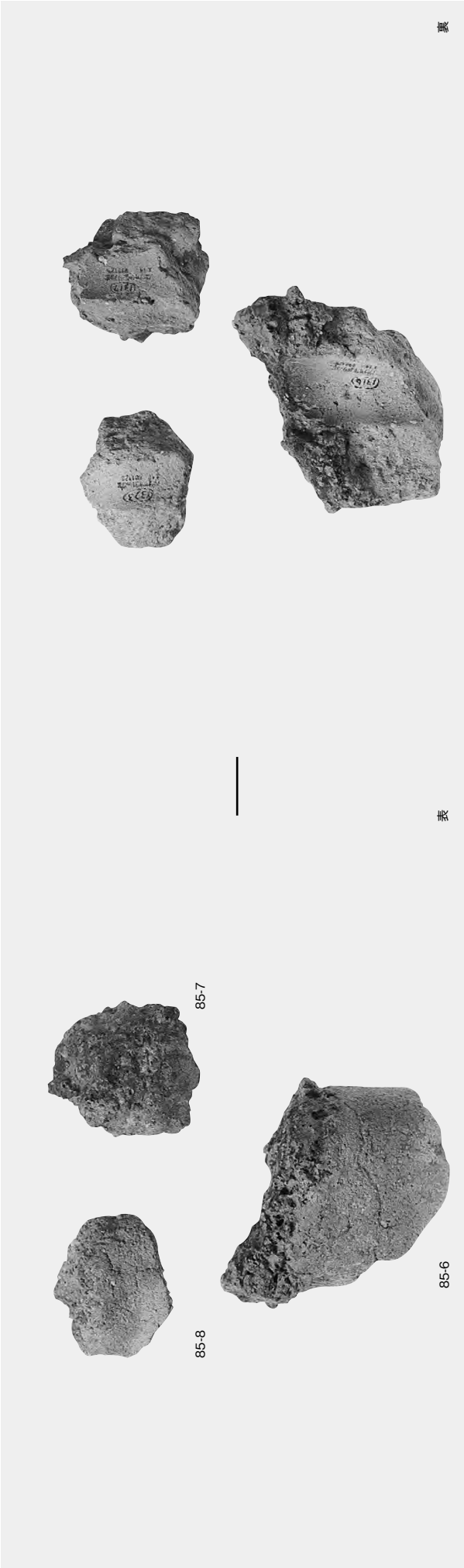
出土遺物⑪ (包含層出土)



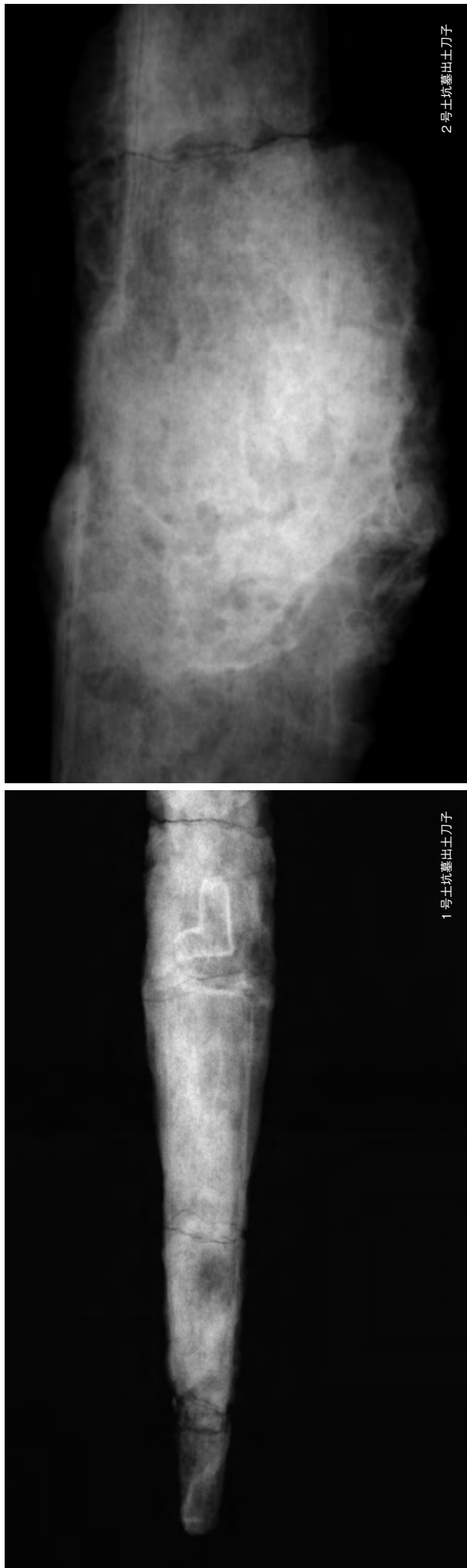
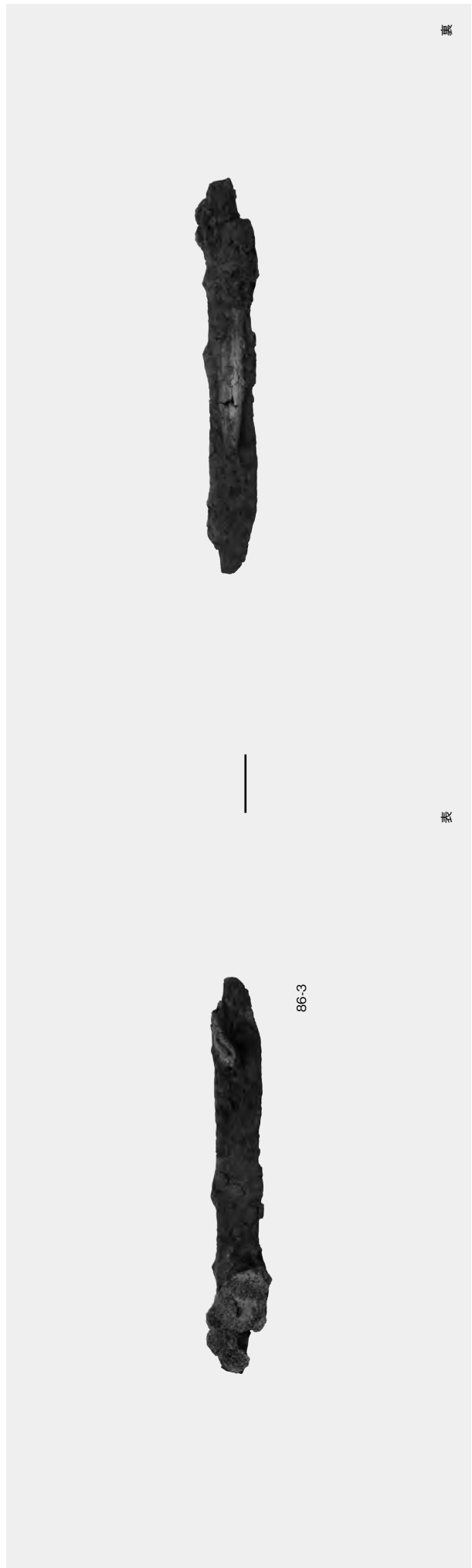
出土遺物⑫ (包含層出土・陶磁器)



出土遺物⑬ (石製品・土製品)



出土遺物⑭ (輔羽口・1号土坑墓出土刀子)



出土遺物⑤ (2号土坑墓出土刀子、1·2号土坑墓出土刀子 X 線写真)

報告書抄録

ふりがな	のぶながやよみそのいせき -さんく いち-							
書名	延永ヤヨミ園遺跡 -Ⅲ区Ⅰ-							
副書名	福岡県行橋市大字吉国・延永所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 1 集							
編著者名	大庭 孝夫 (編集)・進村真之							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒 838 - 0106 福岡県小郡市三沢 5208-3 Tel 0942 - 75 - 9575 FAX 0942 - 75 - 7834 E-mail kyuureki@pref.fukuoka.lg.jp							
発刊年月日	平成 25 (2013) 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぶなが そのいせき 延永ヤヨミ園遺跡	ふくおかけんゆくほし 福岡県行橋市 よしくに のぶなが 吉国・延永	402133	14115010	33° 43' 45"	130° 56' 50"	2009.5.8 ~ 2010.3.27、 2010.1.5 ~ 2010.2.23	約 19,000㎡	国道建設 (一般国道 201 号行橋インター関 連)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
延永ヤヨミ園遺跡 Ⅲ区Ⅰ	集落 墳墓	弥生時代 古墳時代 古代 中世	竪穴住居跡 17 棟、掘 立柱建物跡 2 棟、土坑 41 基、地下式土坑 1 基、井戸 7 基、溝 29 条、 土坑墓 2 基。	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	石製品 瓦 土製品 鉄製品	・ 1 号井戸より「京都大」の墨書土器が出土。 ・ 10 号溝から土師質の土馬が出土。 ・ 14 号溝は障子堀状を呈する。		
要約	今回報告したⅢ-C区では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代 (7世紀末～8世紀)、中世 (12・14世紀) と大きく分けて 4 時期の遺構・遺物が発見された。弥生時代終末～古墳時代初頭と古墳時代後期には、丘陵上かなりの範囲で大規模な集落を形成していたことが判明した。また古代の井戸からは、「京都大」と書かれた墨書土器や「急」の文字を書いた木簡、木製の鞍と壺鐙が出土した。中世の 14 号溝は障子堀であり、屋敷地の区画溝の在り方として注目される。							

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 2

一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第 1 集

延永ヤヨミ園遺跡 - III 区 I -

平成 25 年 3 月 29 日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢 5208 - 3

印刷 久野印刷株式会社
福岡県福岡市博多区奈良町 3 番 1 号